

京都府遺跡調査概報

第 56 冊

1. 神宮谷古墳群
2. 国道478号バイパス関係遺跡
 - (1) 八木嶋遺跡
 - (2) 八木城跡第2次
3. 京都南道路関係遺跡
 - (1) 内里八丁遺跡
 - (2) 荒坂遺跡
 - (3) 新田遺跡
4. 木津地区所在遺跡
 - (1) 西山塚古墳
 - (2) 西山遺跡
 - (3) 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

1 9 9 4

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や研修会を開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成4年度に実施した発掘調査のうち、京都府道路公社、建設省近畿地方建設局、住宅・都市整備公団の各機関の依頼を受けて行った、神宮谷古墳群、国道478号バイパス関係の八木嶋遺跡(平成2年度調査)・八木城跡、京都南道路関係の内里八丁遺跡・荒坂遺跡・新田遺跡、木津地区所在遺跡関係の西山塚古墳・西山遺跡・瓦谷遺跡・瓦谷古墳群に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、綾部市教育委員会、八木町教育委員会、八幡市教育委員会、田辺町教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 神宮谷古墳群 2. 国道478号バイパス関係遺跡 3. 京都南道路関係遺跡
4. 木津地区所在遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 神宮谷古墳群	綾部市別所町神宮谷	平4.10.21～ 平5.3.5	京都府道路 公社	岸岡貴英
2. 国道478号バイパス関係遺跡			建設省近畿 地方建設局	奥村清一郎 柴 暁彦 原田三壽 引原茂治
(1) 八木嶋遺跡	船井郡八木町八木島	平2.4.17～ 平3.3.8		
(2) 八木城跡第2次	船井郡八木町本郷	平4.5.18～ 平5.3.5		
3. 京都南道路関係遺跡			建設省近畿 地方建設局	竹原一彦 筒井崇史 伊賀高弘 筒井崇史 森正哲次
(1) 内里八丁遺跡	八幡市内里日向堂	平4.4.23～ 12.18		
(2) 荒坂遺跡	八幡市美濃山荒坂1・御 毛通9・10・11	平4.10.12～ 平5.2.25		
(3) 新田遺跡	綴喜郡田辺町松井北ヶ市	平4.11.4～ 平5.2.25		
4. 木津地区所在遺跡			住宅・都市 整備公団	石井清司 伊賀高弘 伊賀高弘 有井広幸
(1) 西山塚古墳	相楽郡木津町市坂	平4.4.6～ 8.27		
(2) 西山遺跡	相楽郡木津町市坂	平4.4.7～ 8.27		
(3) 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群	相楽郡木津町市坂	平4.7.1～ 平5.3.5		

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 神宮谷古墳群発掘調査概要-----	1
2. 国道478号バイパス関係遺跡平成2・4年度発掘調査概要-----	21
(1) 八木嶋遺跡-----	22
(2) 八木城跡第2次-----	107
3. 京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要-----	117
(1) 内里八丁遺跡-----	121
(2) 荒坂遺跡-----	144
(3) 新田遺跡-----	160
4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要-----	169
(1) 西山塚古墳-----	171
(2) 西山遺跡-----	188
(3) 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群-----	196

挿 図 目 次

1. 神宮谷古墳群

第1図	調査地周辺主要遺跡分布図	2
第2図	4号墳付近表採の須恵器	3
第3図	調査地位置図	4
第4図	調査前地形測量図	5
第5図	調査後墳丘測量図	6
第6図	土層断面図	7
第7図	石室及び列石実測図	9
第8図	横穴式石室実測図(第1次埋葬施設)	10
第9図	横穴式石室実測図(第2次埋葬施設)	11
第10図	鉄製品出土位置図	12
第11図	鉄製品出土状況図	13
第12図	出土遺物実測図	14
第13図	鉄製品実測図(1) 鉄刀	15
第14図	鉄製品実測図(2)	17
第15図	鉄製品実測図(3)	18
第16図	飾り金具・耳環	19

2. 国道478号バイパス関係遺跡平成4年度発掘調査概要

(1) 八木嶋遺跡

第17図	調査地周辺主要遺跡	23
第18図	調査区配置図	24
第19図	A地区基本層序	26
第20図	A地区遺構配置図	27
第21図	A地区土坑実測図	28
第22図	B地区南壁土層断面図	29
第23図	B地区遺構配置図	30
第24図	掘立柱建物跡S B01実測図	31
第25図	B地区掘立柱建物跡S B02実測図	32
第26図	掘立柱建物跡S B03実測図	33

第27図	B地区掘立柱建物跡 S B05実測図	34
第28図	B地区竪穴式住居跡 S H06実測図	34
第29図	C地区基本層序	35
第30図	C地区遺構配置図	36
第31図	C地区流路跡 S D01実測図	37
第32図	C地区流路跡 S D01及び溝跡断ち割り断面図	38
第33図	C地区流路跡 S D01断面図	38
第34図	C地区流路跡 S D01遺物出土状況図	39
第35図	C地区溝跡 S D01下部構造実測図	40
第36図	D地区北半部遺構配置図	42
第37図	E地区遺構配置図	43
第38図	井戸跡 S E01実測図	45
第39図	E地区掘立柱建物跡実測図(1)	48
第40図	E地区掘立柱建物跡実測図(2)	50
第41図	E地区掘立柱建物跡実測図(3)	51
第42図	E地区掘立柱建物跡(4)・柵跡実測図	53
第43図	E地区土坑 S K45実測図	54
第44図	A地区土坑出土遺物実測図	56
第45図	A地区出土遺物実測図(包含層)	57
第46図	B地区出土遺物実測図(1)	58
第47図	B地区出土遺物実測図(2)	59
第48図	C地区出土遺物実測図(1)	61
第49図	C地区出土遺物実測図(2)	62
第50図	C地区出土遺物実測図(3)	63
第51図	C地区出土遺物実測図(4)	64
第52図	C地区出土遺物実測図(5)	65
第53図	C地区出土遺物実測図(6)	66
第54図	C地区出土遺物実測図(7)	67
第55図	C地区出土遺物実測図(8)	68
第56図	土師器甕分類表	70
第57図	C地区出土遺物実測図(9)	71
第58図	C地区出土遺物実測図(10)	72

第59図	C地区出土遺物実測図(11)	73
第60図	C地区出土遺物実測図(12)	74
第61図	C地区出土遺物実測図(13)	76
第62図	C地区出土遺物実測図(14)	77
第63図	C地区出土遺物実測図(15)	79
第64図	C地区出土遺物実測図(16)	80
第65図	C地区出土遺物実測図(17)	82
第66図	C地区出土遺物実測図(18)	83
第67図	C地区出土遺物実測図(19)	84
第68図	C地区出土遺物実測図(20)	85
第69図	C地区出土遺物実測図(21)	86
第70図	C地区出土遺物実測図(22)	87
第71図	C地区出土遺物実測図(23)	88
第72図	C地区出土遺物実測図(24)	90
第73図	C地区出土遺物実測図(25)	91
第74図	C地区出土遺物実測図(26)	92
第75図	C地区出土遺物実測図(27)	94
第76図	C地区出土遺物実測図(28)	95
第77図	C地区出土遺物実測図(29)	97
第78図	井戸跡S E 01出土遺物実測図	98
第79図	E地区出土遺物実測図(1)	100
第80図	E地区出土遺物実測図(2)	101
第81図	坊田5号墳出土土器	103
(2)八木城跡第2次		
第82図	調査地地形図	108
第83図	第1・第6地点平面図	109
第84図	第7地点平面図	111
第85図	出土遺物実測図	113
3. 京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要		
第86図	調査地周辺遺跡分布図	119
(1)内里八丁遺跡		
第87図	調査区配置図	121

第88図	第1遺構面遺構配置図	123
第89図	第1遺構面検出建物跡平面図	124
第90図	S E 04実測図	125
第91図	S E 03出土遺物実測図	128
第92図	S E 04出土遺物実測図	129
第93図	第2遺構面遺構配置図	130
第94図	第2遺構面検出建物跡平面図	132
第95図	S D 53出土遺物実測図	134
第96図	S X 01・S X 02出土遺物実測図	135
第97図	第2遺構面包含層出土遺物実測図	135
第98図	第3遺構面遺構配置図	137
第99図	S X 04出土遺物実測図	138
第100図	S X 05出土遺物実測図	139
第101図	第3遺構面包含層出土遺物実測図	141

(2) 荒坂遺跡

第102図	荒坂遺跡 周辺地形図	144
第103図	荒坂遺跡 遺構平面図	145
第104図	荒坂遺跡 B地区遺構実測図	147
第105図	荒坂遺跡 A地区遺構実測図	149
第106図	荒坂遺跡 出土遺物実測図(1) 蓋形埴輪	152
第107図	荒坂遺跡 出土遺物実測図(2) 埴輪類	154
第108図	荒坂遺跡 出土遺物実測図(3)	156

(3) 新田遺跡

第109図	新田遺跡 トレンチ配置図	161
第110図	10トレンチ拡張区遺構配置図	163
第111図	S B 01・S A 01平面図	164
第112図	新田遺跡 出土遺物実測図	166

4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要

第113図	調査地位置図	170
-------	--------	-----

(1) 西山塚古墳

第114図	西山塚古墳・西山遺跡 調査区配置図	172
第115図	西山塚古墳 平面図	173

第116図	西山塚古墳	内部主体実測図副葬品配置図	175
第117図	西山塚古墳	墳丘・周溝断面図	177
第118図	西山塚古墳	出土遺物実測図(1) 埴輪類	181
第119図	西山塚古墳	出土遺物実測図(2) 鉄器類	184
第120図	西山塚古墳	出土遺物実測図(3) 壺	186

(2) 西山遺跡

第121図	西山遺跡	遺構実測図(調査区北半)	189
第122図	西山遺跡	S H9201実測図	190
第123図	西山遺跡	S X9206実測図	191
第124図	西山遺跡	出土遺物実測図	192

(3) 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

第125図	瓦谷遺跡	トレンチ配置図	197
第126図	瓦谷遺跡	遺構全体図	199
第127図	瓦谷遺跡	埴輪棺23実測図 出土遺物実測図(1)	204
第128図	瓦谷遺跡	埴輪棺23出土遺物実測図(2)	205
第129図	瓦谷遺跡	埴輪棺24実測図	207
第130図	瓦谷遺跡	埴輪棺24出土遺物実測図	211

付 表 目 次

2. 国道478号バイパス関係遺跡平成4年度発掘調査概要

(1)八木嶋遺跡

付表1	B地区掘立柱建物跡規模一覧表-----	29
付表2	E地区掘立柱建物跡群規模一覧表-----	46
付表3	土錘一覧表-----	81
付表4	墨書土器一覧表-----	93

4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要

(3)瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

付表5	古墳群一覧表-----	198
付表6	埴輪棺一覧表-----	208

図 版 目 次

1. 神宮谷古墳群

- 図版第1 (1) 3号墳調査前遠景(西から) (2) 3号墳調査前近景(南から)
- 図版第2 (1) 神宮谷3号墳全景(北から) (2) 神宮谷3号墳全景(南東から)
- 図版第3 (1) 3号墳石室第二次埋葬施設(北から)
(2) 3号墳石室第二次埋葬施設(南から)
- 図版第4 (1) 3号墳石室第二次東壁(1)(西から)
(2) 3号墳石室第二次東壁(2)(西から)
- 図版第5 (1) 3号墳石室第二次埋葬施設(北から)
(2) 3号墳石室第二次埋葬施設北東隅部(南西から)
- 図版第6 (1) 3号墳石室玄門付近及び羨道部遺物出土状況(北から)
(2) 3号墳石室玄室内袖石付近遺物出土状況(東から)
- 図版第7 (1) 3号墳石室第二次東壁基底石検出状況(北から)
(2) 3号墳石室第二次東壁基底石検出状況(南から)
- 図版第8 (1) 3号墳石室第二次東壁除去後床面検出状況(1)(北から)
(2) 3号墳石室第二次東壁除去後床面検出状況(2)(北から)
- 図版第9 (1) 3号墳石室全景(南から) (2) 3号墳石室全景(北から)
- 図版第10 (1) 3号墳全景及び墓壙検出状況(南から)
(2) 3号墳石室玄室床面検出状況
- 図版第11 出土遺物(1)
- 図版第12 出土遺物(2)
- 図版第13 出土遺物(3)
- 図版第14 出土遺物(4)

2. 国道478号バイパス関係遺跡

(1) 八木嶋遺跡

- 図版第15 (1) 調査地全景(西から) (2) 調査地全景(北西から)
- 図版第16 (1) 調査地(C～E地区)(南から) (2) 調査地(D・E地区)(南から)
- 図版第17 (1) A地区全景(上空から) (2) A地区遺構検出状況(西から)

- 図版第18 (1) A地区土坑3 検出状況(東から) (2) B地区全景(上空から)
- 図版第19 (1) B地区掘立柱建物跡 S B05(東から) (2) C地区全景(上空から)
- 図版第20 (1) C地区溝跡 S D01完掘状況(南東から)
(2) C地区溝跡 S D01断ち割り後(東から)
- 図版第21 (1) C地区作業風景(竹串は杭の痕跡)(南から)
(2) C地区護岸施設 S X02(西から)
- 図版第22 (1) C地区遺物出土状況(南東から) (2) C地区遺物出土状況(南から)
- 図版第23 (1) C地区遺物出土状況(北西から) (2) C地区遺物出土状況(北東から)
- 図版第24 (1) C地区曲柄平鍬出土状況(北東から)
(2) C地区横槌出土状況(南から)
- 図版第25 (1) C地区溝跡 S D01埋土の状況(東から)
(2) C地区溝跡 S D01断ち割り状況(西から)
- 図版第26 (1) C地区溝跡 S D01及び平坦面の下部構造(東から)
(2) C地区平坦面の下部構造(北から)
- 図版第27 (1) C地区溝跡 S D01埋土堆積状況(東から)
(2) C地区溝跡 S D01断ち割り状況(東から)
- 図版第28 (1) C地区下部構造(北から) (2) C地区下部構造(西から)
- 図版第29 (1) C地区平坦面下部構造(南から)
(2) C地区平坦面下部構造(北から)
- 図版第30 (1) C地区平坦面の断ち割り状況(東から)
(2) C地区対岸深掘りの状況(西から)
- 図版第31 (1) E地区南半掘立柱建物跡 S B29検出状況(南から)
(2) E地区掘立柱建物跡 S B27及び S B29検出状況(南から)
- 図版第32 (1) E地区掘立柱建物跡 S B23検出状況(南西から)
(2) E地区掘立柱建物跡 S B23検出状況(西から)
- 図版第33 (1) E地区掘立柱建物跡 S B18柱穴遺物出土状況
(2) E地区掘立柱建物跡 S B23柱穴遺物出土状況
- 図版第34 (1) E地区土坑 S K44検出状況(南から)
(2) E地区土坑 S K44近景(南から)
- 図版第35 出土遺物(1)
- 図版第36 出土遺物(2)
- 図版第37 出土遺物(3)

- 図版第38 出土遺物(4)
- 図版第39 出土遺物(5)
- 図版第40 出土遺物(6)
- 図版第41 出土遺物(7)
- 図版第42 出土遺物(8)
- 図版第43 出土遺物(9)
- 図版第44 出土遺物(10)
- 図版第45 出土遺物(11)
- 図版第46 出土遺物(12)
- 図版第47 出土遺物(13)
- 図版第48 出土遺物(14)

(2)八木城跡第2次

- 図版第49 第6地点(北東から)
- 図版第50 (1)第7地点(北東から) (2)出土遺物

3. 京都南道路関係遺跡

(1)内里八丁遺跡

- 図版第51 (1)第1遺構面全景(南から) (2)S B07・08全景(西から)
- 図版第52 (1)S B13全景(南から) (2)S B14全景(南から)
- 図版第53 (1)S E03断面(西から) (2)S E03土師皿出土状況(西から)
- 図版第54 (1)S E04全景(西から) (2)S E04井戸枿材(北壁)
- 図版第55 S E04北壁立面(南から)
- 図版第56 (1)第2遺構面全景(南から) (2)S B10全景(南から)
- 図版第57 (1)S B15全景(東から) (2)S B15柱穴断面(西から)
- 図版第58 (1)S D53断面(南から) (2)S D53遺物出土状況(南から)
- 図版第59 (1)托形須恵器出土状況(西から) (2)S X04遺物出土状況(北東から)
- 図版第60 内里八丁遺跡主要出土遺物

(2)荒坂遺跡

- 図版第61 (1)調査区遠景(南東から) (2)調査区全景(南西から)
- 図版第62 (1)調査区全景(北から) (2)調査区全景(垂直写真、上が東)
- 図版第63 (1)A地区全景(東から)
(2)S K01・S X02・S K03検出状態(垂直写真、上が北西)
- 図版第64 (1)古墳(S X02)・S B03全景(北東から)

(2)古墳(S X02)・S B03全景(南東から)

図版第65 (1)S B06全景(東北東から、白線の建物跡) (2)a群建物跡全景(北から)

図版第66 (1)古墳(S X02)周溝内蓋形埴輪出土状態(南東から)

(2)弥生期の土坑(S K01)遺物出土状態(南東から)

図版第67 出土遺物

(3)新田遺跡

図版第68 (1)新田遺跡全景(南西から) (2)10トレンチ拡張区全景(北から)

図版第69 (1)S A01・S B01全景(北東から) (2)S B01全景(北東から)

図版第70 (1)15トレンチ全景(北西から) (2)15トレンチ土層断面

4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要

(1)西山塚古墳

図版第71 (1)西山塚古墳内部主体全景(南から)

(2)西山塚古墳内部主体全景(西から)

図版第72 (1)西山塚古墳第1主体棺外革製漆塗盾出土状況(左が北)

(2)西山塚古墳第1主体南副室内遺物出土状況(左が北)

図版第73 (1)西山塚古墳第1主体作業風景(南から)

(2)西山塚古墳第1主体主室北半(枕石)完掘状況(南から)

図版第74 出土遺物(埴輪類・鉄器類)

図版第75 (1)第1主体矢鏃西群(一部) (2)第1主体矢鏃東群(一部)

(2)西山遺跡

図版第76 (1)S B9201全景(南から) (2)S H9202全景(西から)

図版第77 (1)S X9206全景(西から) (2)S B9204全景(北から)

図版第78 出土遺物

(3)瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

図版第79 瓦谷遺跡・瓦谷古墳群全景

図版第80 (1)瓦谷1号墳全景(南から) (2)瓦谷1号墳全景(西から)

図版第81 (1)4号墳全景(西から)

(2)4号墳遺物出土状況(周溝北西部分東から)

図版第82 (1)5号墳全景(北から) (2)6号墳全景(北東から)

図版第83 (1)埴輪棺24検出状況(北から) (2)埴輪棺24棺底出土状況(北から)

図版第84 (1)埴輪棺23出土状況(北から)

(2)S D01断面(調査地南斜面部分東から)

1. 神宮谷古墳群発掘調査概要

1. はじめに

神宮谷古墳群は、京都府綾部市別所町大字神宮谷にある後期古墳群である。この古墳群は、京都府教育委員会が刊行した『京都府遺跡地図』第2分冊によると、2基の古墳^(注1)(1号墳・2号墳)として記載されていた。今回、京都府教育委員会が京都縦貫道の建設に先立ち、古墳群付近の道路建設予定地内を分布調査したところ、新たに2基の古墳状隆起を確認した。その後、京都府道路公社の依頼を受けて、調査地内の2基の古墳状隆起の発掘調査に入ったが、調査地内に新たに1基の古墳状隆起を発見したため、最終的には計3か所の調査を行った。

発掘調査は、平成4年10月21日から平成5年3月5日の間に実施し、平成5年1月12日に現地調査を行い、100余名の参加者を得た。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、調査第2係調査員八木政明、調査第1係調査員岸岡貴英が担当した。本概要報告の執筆は、鉄器類などを河野一隆が、それ以外を岸岡貴英が行った。

発掘調査を進めるに当たり、京都府道路公社、京都府教育委員会、綾部市教育委員会をはじめ、関係諸機関の方々には多くのご指導・ご教示^(注2)いただいた。さらに、調査に参加していただいた方がたからは多くのご協力^(注3)を得た。記して感謝の意を表したい。

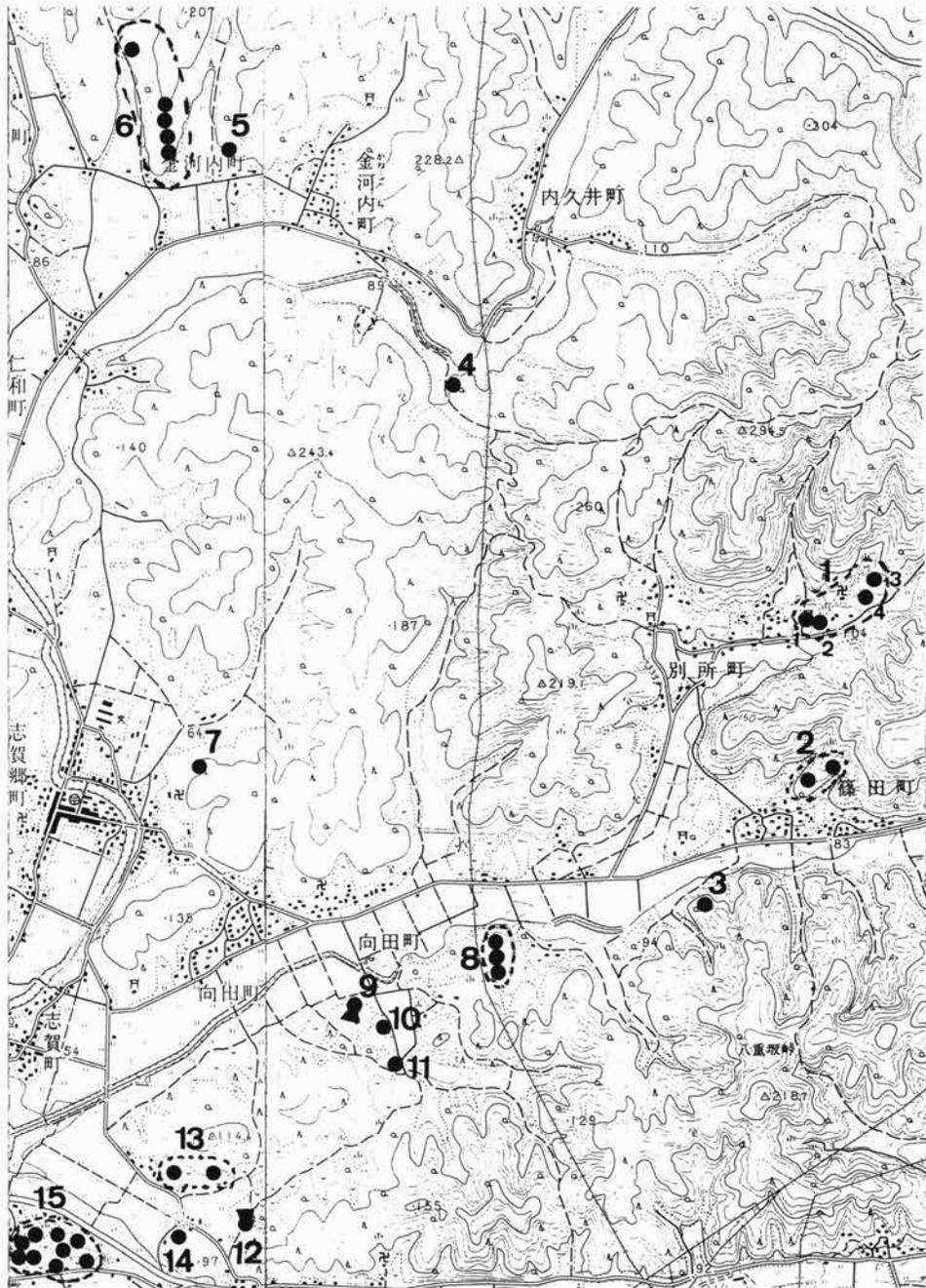
本調査にかかわる経費は、全額、京都府道路公社が負担した。

2. 位置と環境

神宮谷古墳群のある地区は、由良川の支流である犀川の最上流域^(注4)に当たる。この犀川の最上流域は、細長い谷がいくつも枝分かれしつづのびる地形である。今回調査を行った神宮谷古墳群は、この最上流域の北西部にあたる別所地区に所在し、その中の奥谷部の北側低丘陵上に位置する。

犀川の最上流域の遺跡の分布は、段丘上及び低地に、縄文土器・弥生土器・土師器・陶器などの散布地がわずかに存在する。ただ、調査はなされておらず、実態はまったく不明である。丘陵上には、古墳及び山城などが分布調査により確認されている。

このうち、北部～西部の古墳群の分布を、地区ごとに概観する。白道路町地区には、全長約24mの前方後円墳であるニワトリ塚古墳、約9基の群集墳である五反田古墳群、白道



第1図 調査地周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|------------|-----------|------------|-------------|
| 1. 神宮谷古墳群 | 2. 篠田古墳群 | 3. 八重坂古墳群 | 4. ジンド古墳 |
| 5. 八幡古墳 | 6. 山尾古墳群 | 7. 志賀古墳 | 8. 井尻古墳群 |
| 9. 稲荷山古墳 | 10. 小狭間古墳 | 11. 松原古墳 | 12. ニワトリ塚古墳 |
| 13. 白道路古墳群 | 14. 狭間古墳 | 15. 五反田古墳群 | |

路古墳群がある。向田町地区には、全長約30mの前方後円墳である稲荷山古墳、径10～15mの円墳である松原古墳、小狭間古墳がある。このうち、稲荷山古墳と松原古墳は横穴式石室を埋葬施設にもつ。別所町・篠田町地区には、神宮谷古墳群、篠田古墳群、八重坂古墳が存在する。神宮谷古墳群は、4基すべて横穴式石室を埋葬施設とする。志賀郷町・金河内町・内久井町地区にかけては、志賀古墳、山尾古墳、八幡古墳、ジンド古墳などが散在する。このうち、山尾1号墳、八幡古墳、ジンド古墳については、横穴式石室を埋葬施設とする。このように、この地域の古墳については大規模群集墳はなく、独立墳か、多くても10基ほどの古墳群が、各谷に散在する状況にある。

3. 調査の経過

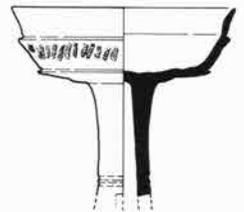
神宮谷古墳群は、犀川最上流域の谷奥部にある。調査地付近の地形は、以前のは場整備事業と森林伐採の事業により大きく改変されており、C地点などはほとんど旧状をとどめていない。A地点は、C地点に比べるとわずかに旧状をとどめているが、この地点は古くから畑の耕作地として利用されていたらしい。外観はわずかに古墳状隆起を認めることができ、付近には大型板状の石が散乱していた。

調査は、当初A地点・B地点の2か所の古墳状隆起の試掘調査を行った。A地点は、当初の予想どおり横穴式石室墳であることが判明した。墳丘は約1/3が消失しており、石室も天井石はすべて取り去られており、平面で見ると羨道部は約1/3しか残存していない。その後、A地点を3号墳と改め、本調査を開始した。

石室主軸ラインの設定は、当初石室のプランを想定できなかったため、墳丘の残存度にあわせて、東西・南北にアゼを設定し、表土掘削を行った。その後、石室のプランがほぼ確定したため、南北主軸ラインを第2次埋葬施設の両側壁の中心から設定し、東西ラインを奥壁と袖石の中心にとり、南北主軸ラインに直交する方向で設定し、石室墳丘の断面観察につとめた。ただ、墳丘の西側部分がほぼ消失しているため、その部分の断面観察はより北側の奥壁付近で行った。

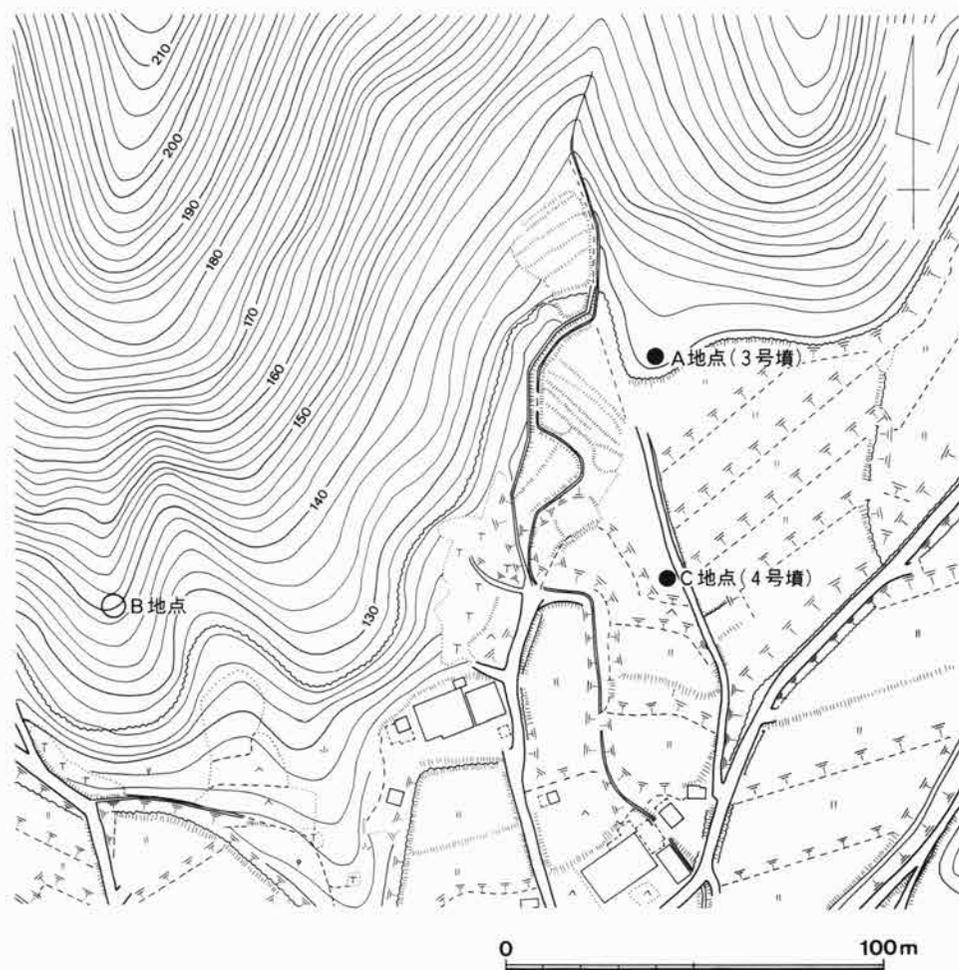
調査は、第2次埋葬施設の検出ののち、東西ラインに添う形で断ち割りを行い、第1次埋葬施設の平面プランの検出につとめた。その後、第2次埋葬施設の遺物の検出→第2次東側壁の除去→第1次埋葬施設の遺物の検出→石室掘形の検出へと調査を進めていった。

B地点は、「T」字状のトレンチを設定し掘削したが、20cm



0 10cm

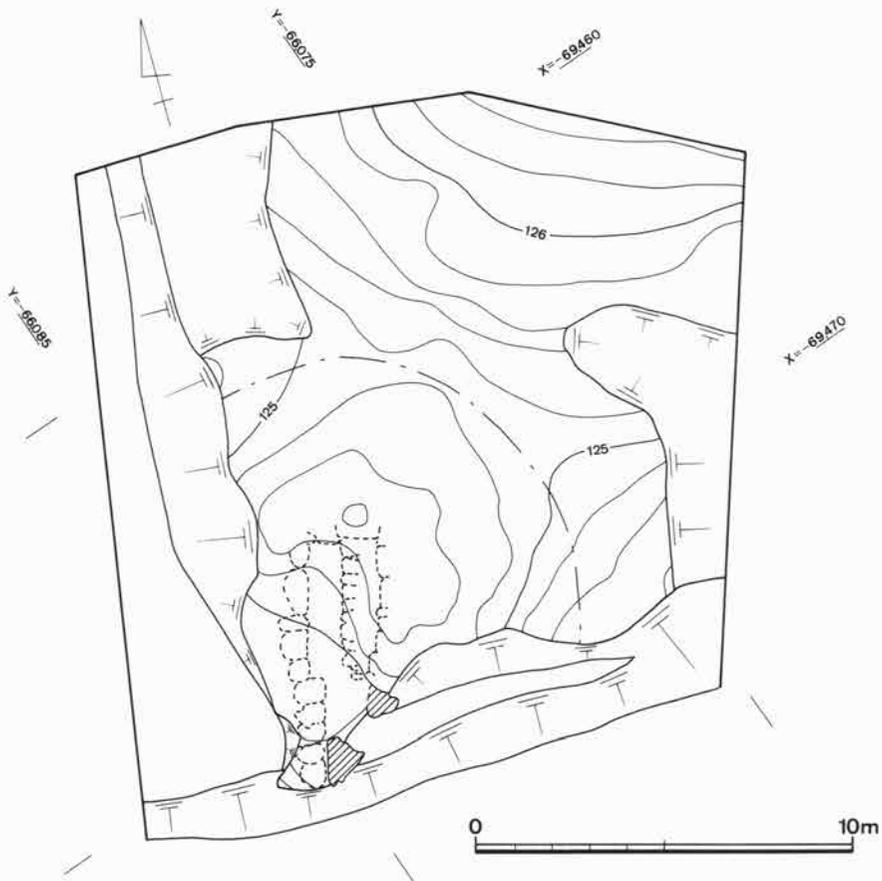
第2図 4号墳付近
表採の須恵器



第3図 調査地位置図

ほどですぐに地山につき当たり、顕著な遺物もなく、自然地形であることが判明した。

ところで、これらの調査中に地元の岩瀬盛雄氏からC地点付近で表採された須恵器をみせていただいた。その後、C地点において横穴式石室と考えられる石材を確認したため、京都府教育委員会、京都府道路公社と協議の上、C地点を4号墳と改め試掘調査を行うことになった。



第4図 調査前地形測量図

4. 調査概要

1. 3号墳

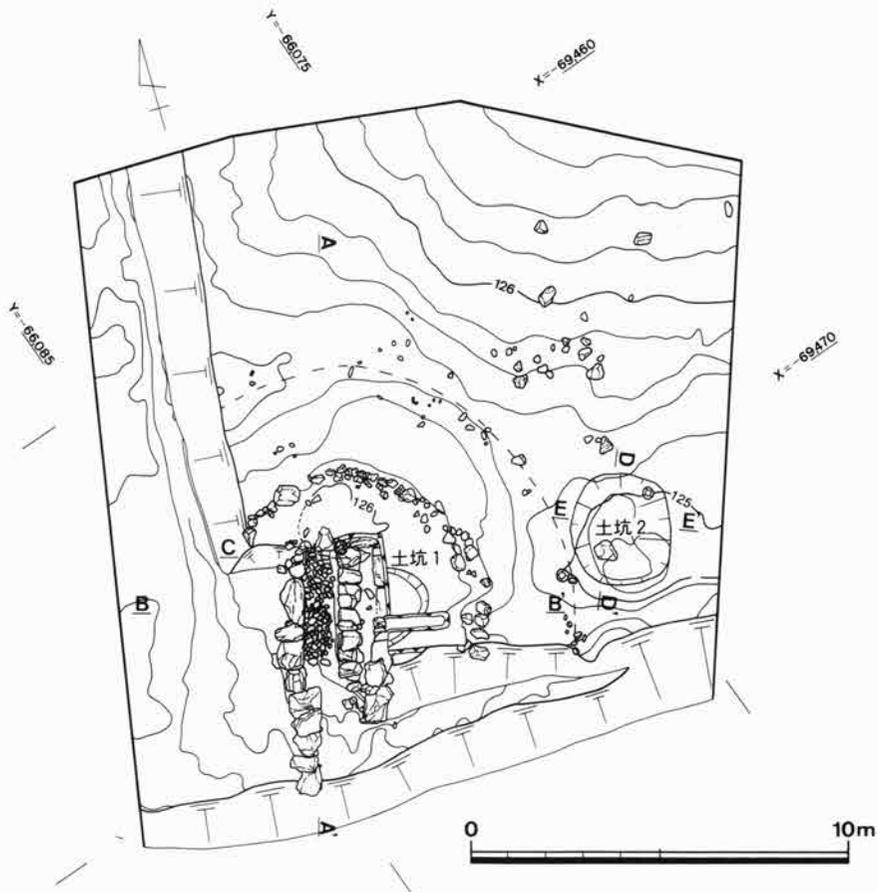
①墳丘

神宮谷3号墳は、南側に向けてのびるゆるやかな尾根状に造られている。墳丘付近は一時畑地として利用されていたらしく、また腐植土中からは中・近世の土器がわずかに出土するため、墳丘周囲の自然地形全体が多少改変されている可能性もある。また、溝や列石といった墳丘と自然地形とを区画する明瞭な遺構を検出しなかったため、明瞭に墳丘裾部を指摘することがむずかしい。ただ、比較的残りのよい墳丘北西部の自然地形と、古墳盛り土との傾斜変換点を墳丘裾部と考えれば、直径約13mほどの円墳と推定される。

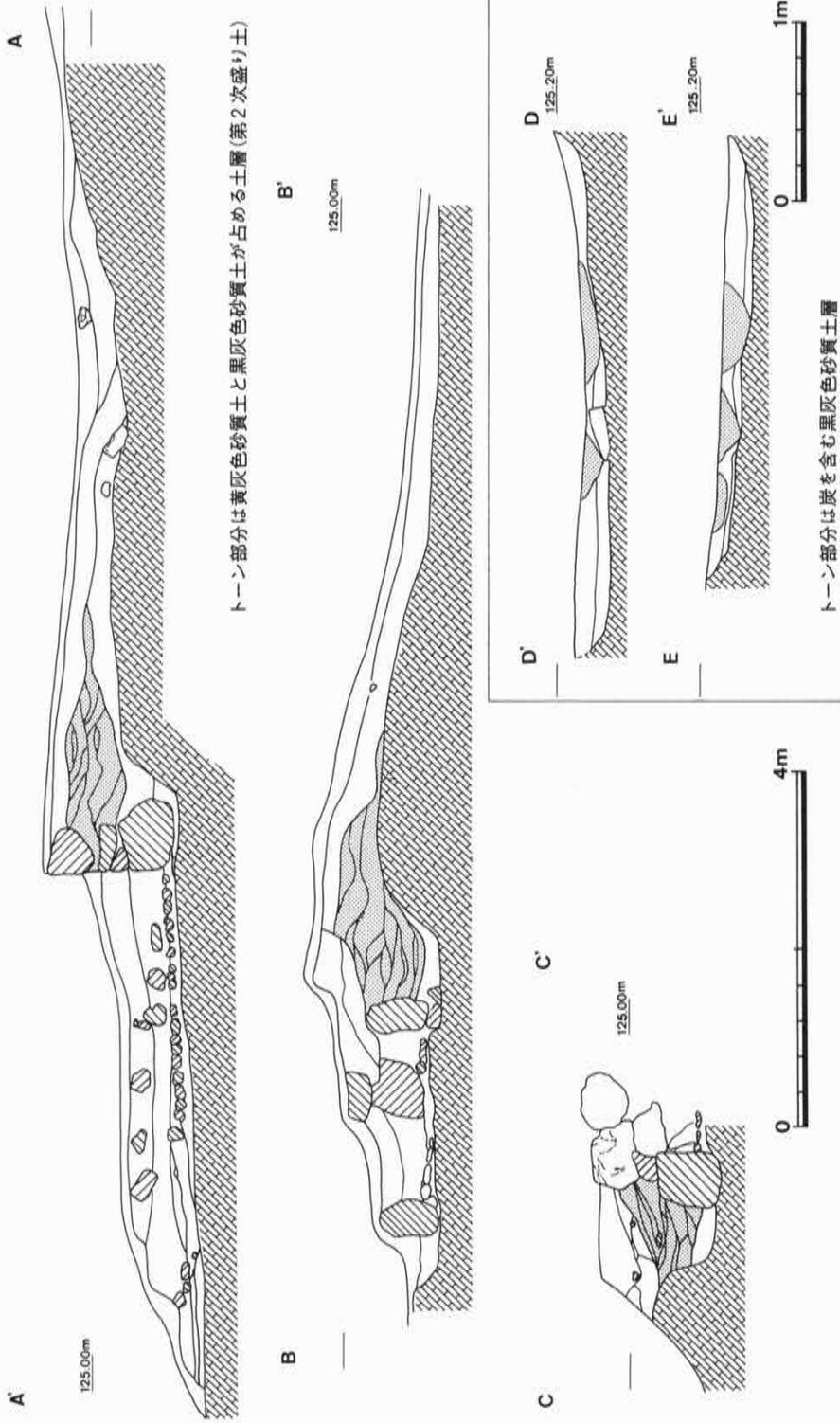
墳丘の築成は、断面観察において旧表土が認められないところから、はじめに地山成形を行ったと考えられる。まず、墳丘部分をほぼ平坦に削り出し、隅丸方形の掘形を穿った

ようである。その後、石室の構築と墳丘の築成を、ほぼ同時に行ったと考えられる。まず、基底石を配置したのち、北側部分を中心に第1次盛り土を行う。次に、2～3段目の石室壁体を構築するにあたって、石室の裏込めを中心に版築状の盛り土を施す。この第2次盛り土の大部分は、黄灰色砂質土と黒灰色砂質土で占められ、盛り土及び石室裏込めを充填する過程での1回の工程単位をある程度想定することができる。最後に、暗黄褐色砂質土を墳丘全体に盛ったと考えられる。さらに、この第3次盛り土上面及び表土直下からは、墳丘上部で円形にめぐる列石を検出した。この列石の中には長径20～50cmに及ぶものがあり、一部2段に組んでいるか所もある。また、墳丘裾部には散発的に拳大から人頭大の石が入ることがあるが、規則的なものではない。

ところで、これら墳丘盛り土中からは、若干の土器が出土している。墳丘頂部の第2次



第5図 調査後墳丘測量図



第6図 土層断面図

盛り土中からは須恵器(第12図1)と土師器(第12図10・11)が、墳丘裾部の第3次盛り土中からは須恵器(第12図2)が出土している。

②土坑

土坑1 墳丘頂部において検出した半円形の土坑である。石室の第1次東壁のほぼ直上に位置する。南北2m×東西1m・深さ40cmを測る。底面は船底状をなし、埋土は2層に分かれる。東西ラインの断面を観察すると、土坑自体は第2次東壁までのびていたことが認められる。

土坑2 墳丘外の西側で検出した楕円形の土坑である。南北2.9m・東西2.7m・深さ16cmを測る。底面はレンズ状をなす。埋土は2～3層に分かれ、上層には比較的多くの炭を含む黒灰色砂質土が広がる。

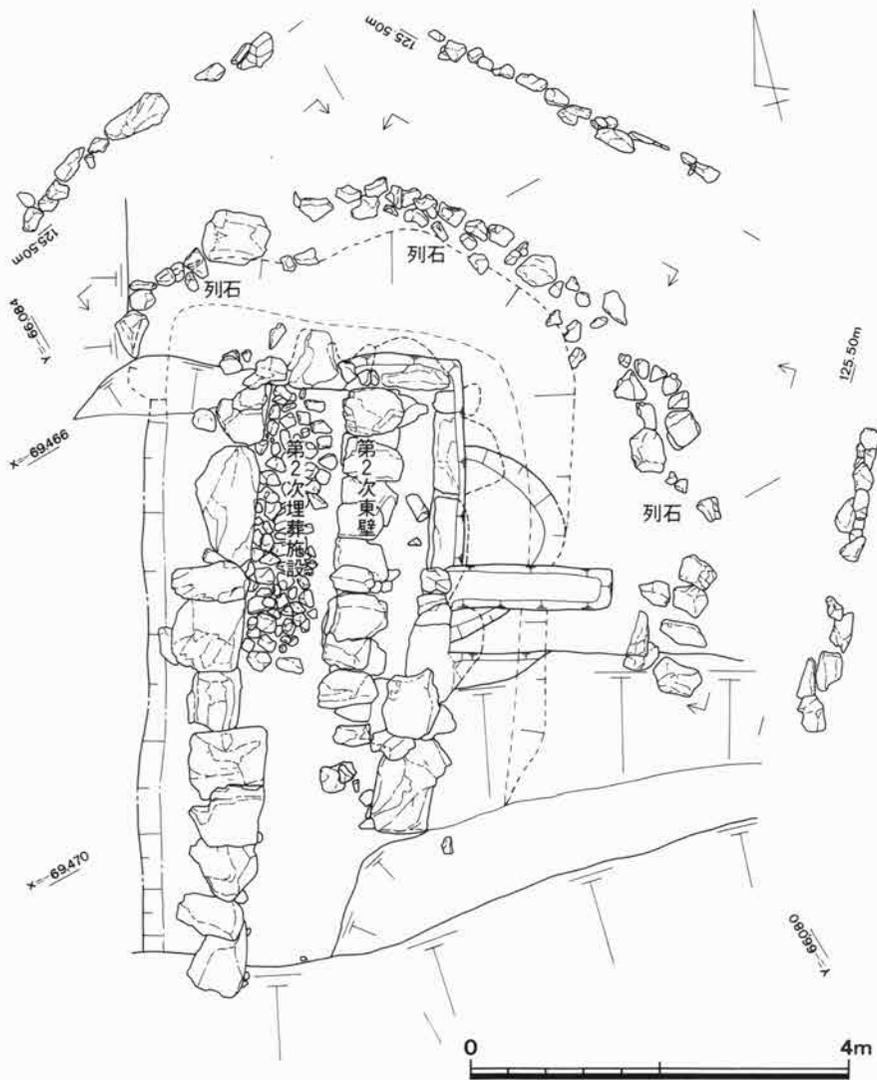
③石室

南南東に開口する両袖式の横穴式石室を内部主体としている。玄室は、長さ3.6m・幅1.8mを測る。玄室比は(玄室長/玄室幅)約2で、床面平面形態は長方形のプランをもつ。羨道部は、わずかに東によって玄室にとりついており、右片袖式の可能性が高い。

石室壁体の構築は、ほぼ持ち送りをせずに行われた。奥壁は、基底石に長径約2mの直方体状の石材を配置し、その上に径50～60cm大の石材を面をそろえて2段に積み上げている。第1次東壁及び西壁の基底石は、長径1m前後の直方体状を呈し、その上に透き間を拳大の石で充填しつつ、2・3段目を積み上げている。羨道部の石材は、袖石を縦置きしている以外はこれらと同様である。

玄室床面で溝と敷石を検出した。溝は、玄室中央部を直線的にのび、長さ約4.7m×幅約0.8m・深さ約10cmを測る。この溝は、敷石下にあって、おそらく排水溝の役割を果たしていたのではないかと考えられる。敷石は、後に第2次東壁が構築されたために、約1/3ほどしか残存していない。石材は、5～20cm大の比較的平坦なものを使用しているようである。

また、玄室内のほぼ中央に第2次東壁を構築することにより、第2次埋葬施設を設けている。この埋葬施設は、長さ3.6m×幅0.8mを測り、玄室比は4.5とかなり細長い平面プランをもつ。床面には列石と敷石が設けられている。敷石は当初の石室のものが、列石は新たに設けられたと考えられる。第2次東壁は、残存長約1mを測り、奥壁の中央から東側の袖石に取り付くように築かれている。この第2次東壁の構築は、まず第2次東壁下の床面の敷石を除去したのち、その部分に粘土質の土を敷き、そのうえに基底石を配置する。基底石は、奥壁から約3mまでは直線的に、袖石付近になるとゆるやかにカーブを描くように配置する。石材の大きさ、形はその配置に見合ったものを使用しているが、相対的に基底石には大きなものを用いる。そのうえに裏込め土を充填しつつ、2～3段に石材を積



第7図 石室及び列石実測図

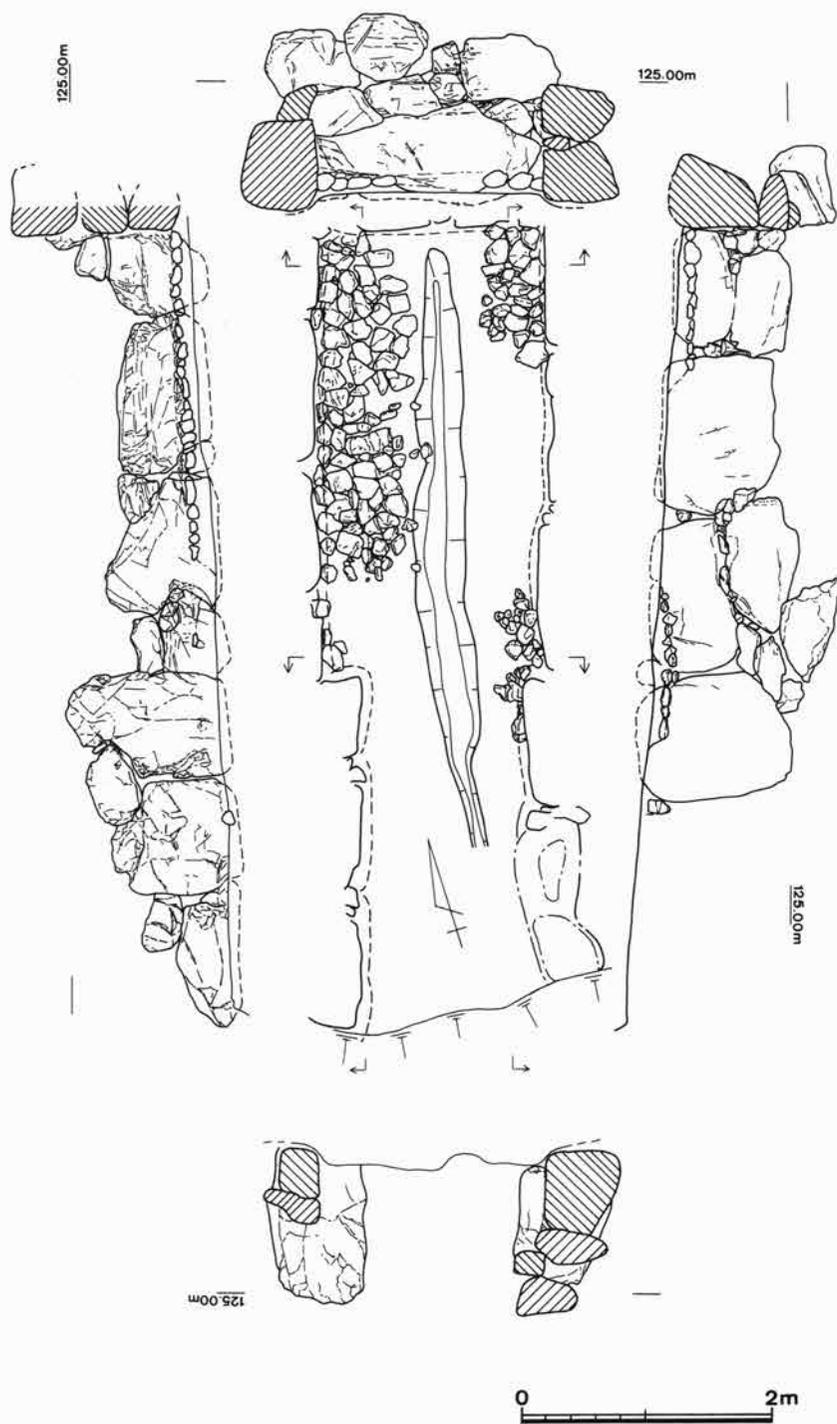
み上げていく。構築された石材は、北側では直方体状のものを横積みし、南側になると不整形なものが多い。

羨道部では玄門付近で5～10cm大の石材を数点確認したが、閉塞石の残りかもしれない。羨道部の地山面は、玄室面より低くゆるやかなスロープとなっており、排水機能は高かったと思われる。

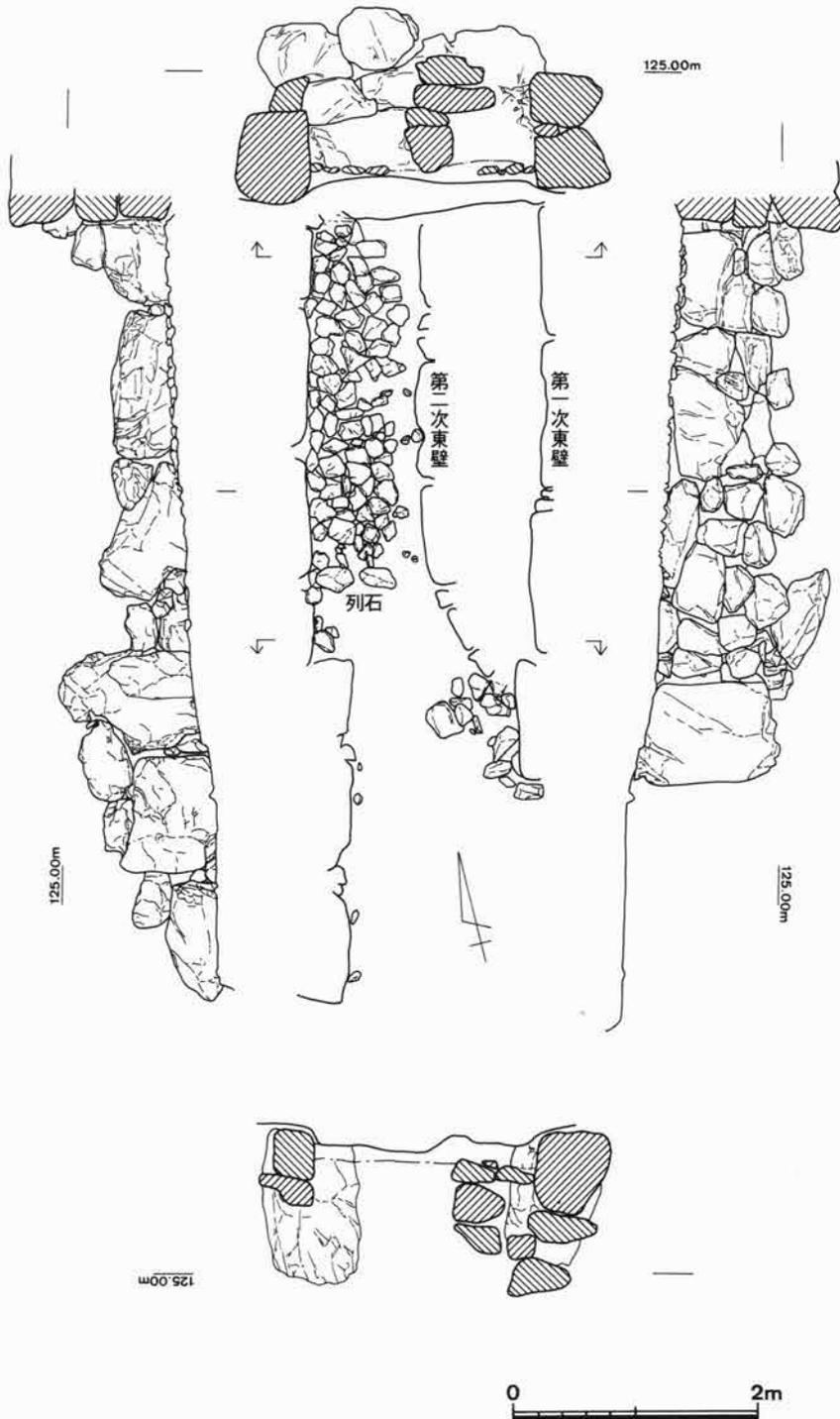
なお、この石室の石材については、すべて付近で採取できる泥岩と判明した。^(注5)

④遺物出土状況

神宮谷3号墳の周辺は、先述したように、後世の削平が大きい。これは横穴式石室内部



第8図 横穴式石室実測図(第1次埋葬施設)



第9図 横穴式石室実測図(第2次埋葬施設)

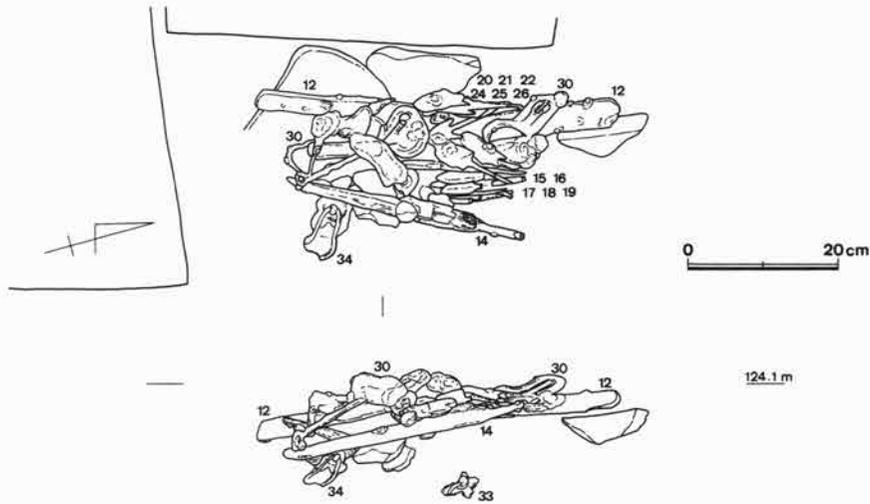


第10図 鉄製品出土位置図

についても同様で、石室壁体などの石材が多く落ち込んでいた。石室内部の埋土は、腐植土層を除き2層に分かれ、ともに石敷のレベルまで多くの石材が入り込んでいた。埋土の下層からは、耳環2点(36・37)と鉄刀1振(13)が、石敷より10~20cm浮いた状態で、しかも落ち込んだ石材の間から出土した。したがって、第2次埋葬施設内の床面の大部分(主に石敷上)は、後世にほとんど攪乱されていた可能性が高い。その中で、土層観察と遺物の出土状況を考えると、玄室内袖石付近と奥壁北東隅部・羨道の西側の床面には、埋葬時の状態が残されていたとみられる。

玄室・羨道の床面・埋土からは、列石と考えられる石材と土器(須恵器・土師器)・鉄器(武器・農工具・馬具)・装身具(耳環)・砥石などの副産品の出土をみた(第10図)。

玄室内袖石付近からは、鉄鏃(15・21~23)、鉄刀(12・14)、馬具(30・32)、砥石が集積された状態で出土した(第11図)。鉄鏃(12~19・21~23)と鉄刀(14)は、南方向に切っ先をそろえて置かれており、加えて馬具(30・32)と鉄刀(12)が出土した。鉄刀(12)は、2つに折損したものを重ねて置いた状態である。これらはほとんどレベル差がない。この下には、わずかなレベル差で馬具(33・34)が検出された。また、須恵器(7)は、西壁にへばりついた状



第11図 鉄製品出土状況図

態で出土した。

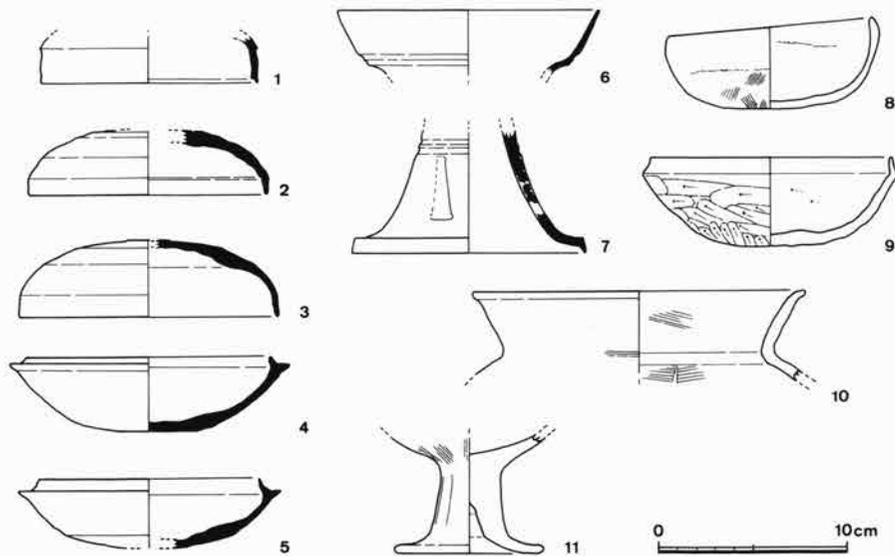
そのほかに、第2次埋葬施設の玄室南側からは鎌(29)・銅製品(35)などが散在して検出された。これらは、鎌(29)が床面から若干浮いた状態で出土したほかは、第2次埋葬施設の床面下で検出された。

第2次東壁の裏側(東側)の床面からは、鉄斧(28)と須恵器(4)が出土した。鉄斧(28)は、床面より若干浮いた状態で、須恵器(4)は残存した石敷の上面から出土した。また、第2次東壁の裏込めの埋土中からは須恵器(6)が出土した。

羨道からは、須恵器(3・5)、土師器(8・9)、鉄鏃(23・27)、馬具(31)などが玄門付近から西壁にかけて散在して検出された。須恵器(3・5)、馬具(31)などの玄門付近の遺物は床面下から検出された。土師器(8・9)、鉄鏃(23・27)などの西壁付近の遺物は、床面上もしくは床面より若干浮いた状態で出土した。

⑤出土遺物

出土遺物には、大別して土器(須恵器・土師器)、鉄器(武器・農工具・馬具)、銅製品(耳環・飾り金具)、石器(砥石)がある。須恵器には杯身・杯蓋・高杯・甕があり、杯身(第12図4)を除き、ほとんど破片である。土師器には杯・甕・高杯が出土している。武器には、鉄鏃と鉄刀があり、鉄鏃は13本以上、鉄刀は3振出土している。農工具には鉄斧1点、鉄鎌1点があり、馬具は1式出土した。銅製品には、耳環と飾り金具がある。



第12図 出土遺物実測図

a. 土器(第12図)

1は、須恵器杯蓋で、口径11.5cm・残存高2.6cmを測る。天井部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ。口縁端部は、鋭い段をなしている。胎土は精良で、黒色粒が目立つ。MT15～TK10に並行すると思われる。2は、須恵器杯蓋で、口径12.6cm・残存高3.5cmを測る。天井部はやや丸い。天井部と口縁部の境には、わずかな屈曲部を持っている。口縁端部は丸い。天井の頂部にわずかなヘラ削りを残している。胎土は普通で、石英・長石・黒色粒が目立つ。色調は、灰白色を呈する。TK43～TK209に並行すると思われる。3は、須恵器杯蓋で、口径13.7cm・残存高4.1cmを測る。天井部はやや丸い。天井部と口縁部の境にわずかな屈曲部を持っている。口縁端部は丸い。天井部にヘラ削りを残している。胎土は精良で、砂粒をわずかに含む。色調は青灰色を呈する。4は、須恵器杯身で、口径12.95cm・残存高4.1cmを測る。比較的深い杯部に、口縁部が短く内傾し立ち上がる。端部はシャープにおさめている。土器の表面は摩擦が激しく、ヘラ削りの範囲は不明である。胎土は普通であるが、1～2mm大の礫を多く含んでいる。焼成は軟で、色調は乳白色である。5は、須恵器杯身で、口径11.7cm・残存高3.7cmを測る。やや浅めの杯部に、口縁部が内傾気味に立ち上がる。口縁端部はシャープにおさめている。底面にはヘラ削りを施す。焼成は堅緻で、胎土は精良である。6は、須恵器甗で、口径13.8cm・残存高3.5cmを測る。大きくラップ状に広がる口縁部を有している。屈曲部には凹線状の凹みを持っている。口縁端部はシャープにおさめている。胎土は密で、焼成は堅緻である。色調は青灰色を呈す

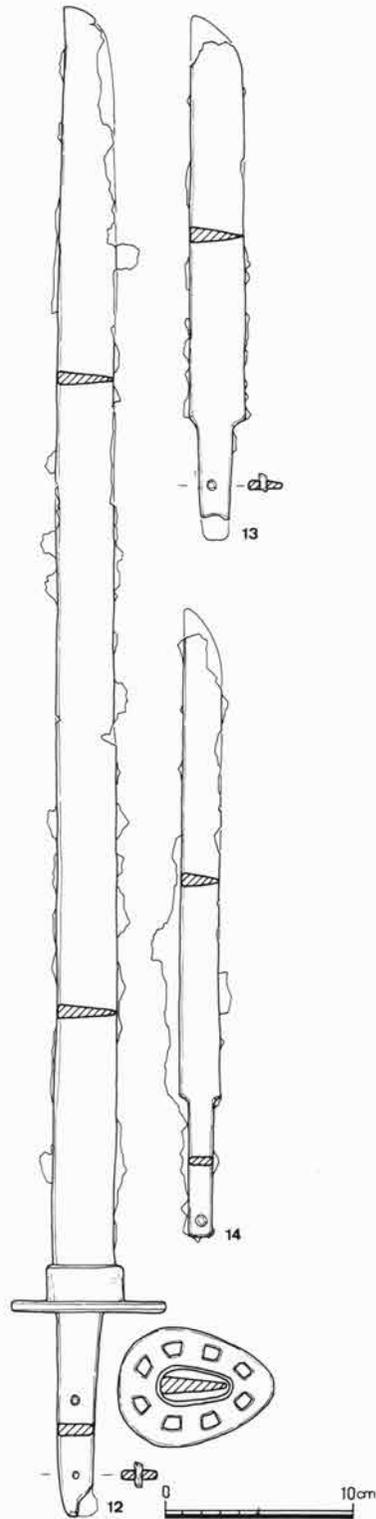
る。7は、須恵器長脚2段の高杯で、脚径12.5cm・残存高6.5cmを測る。下段に長方形の透かしを持っている。脚は、裾部で水平に広がり、端部は明瞭に屈曲しやや外方に下がる。胎土は普通ではあるが、石英、長石、黒色粒が目立っている。色調は、淡青灰色を呈する。8は、土師器杯で、口径10.7cm・器高5.0cmを測る。比較的平坦な底部から内湾する口縁部を持っている。端部は比較的シャープにおさめている。底部に指頭圧痕を残す。胎土はやや荒く、焼成は軟で、色調は淡赤褐色を呈する。9は、土師器杯で、口径12.8cm・器高4.7cmを測る。口縁部は鈍く屈曲しており、端部は丸い。外面にはヘラ削りを施しており、内面に不定方向のナデを施す。胎土は普通である。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈している。10は、土師器甕、口径17.8cm・残存高4.9cmを測る。「く」の字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外反している。内面に横ハケを施す。胎土はやや粗い。焼成は軟で、色調は淡赤褐色を呈する。11は、土師器高杯で、底径8.0cm・残存高6.3cmを測る。脚部は短く開き、端部はややはねあがり気味におさめている。胎土は粗く、石英・長石が目立っている。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。

(岸岡貴英)

b. 鉄製品

神宮谷3号墳出土の金属製品には、武器(刀3点、鉄鏃22点以上)、工具(斧1点、鎌1点、工具柄1点)、馬具(轡1点、壺鍔1組、鞍金具1組)、飾り金具1点、耳環2点がある。

鉄刀(12~14) 12は、身長65cm・身幅3.5cm・茎長14.0cm・茎幅2.0cmを測る両関の鉄刀である。



第13図 鉄製品実測図(1) 鉄刀

茎には2個の目釘孔があり、茎尻に近い孔には鉄製の目釘が遺存する。鞘と柄はわずかであるが木質の痕跡がある。さらに、鉄製鏢と鍬金具が装着されていた。鏢は、長径8.3cm・短径6.5cmを測る卵形で8窓を持つ。側面には銀線が剝離しており、渦文が象嵌されていると判断される。鍬は鏢にあわせた楕円形で、身に密着している。13は、残存長25.3cm・身幅3.0cm・茎幅1.9cmを測る両関の鉄刀である。関部は、斜めに落され、刃部の方が突出が大きい。茎中央に目釘孔1孔を持ち、鉄製目釘1点が遺存する。14は、身の残存長31.4cm・身幅2.2cm・茎長7.4cm・茎幅1.3cmを測る両関の鉄刀である。茎尻付近に1点の目釘孔を持ち、鉄製目釘が遺存している。

鉄鏃(15~26) 長頸鏃16点、平根鏃6点の内、遺存の良好なものを図化した。長頸鏃には柳葉形であるが腸決りの有無がある。平根鏃はすべて腸決りを持つが、重腸決りになっているものもある。23は、短い箆被をもつ形式で例が少ない。

鉄斧(28) 全長13.6cm・刃部長5.1cmを測る鉄斧で完形品である。袋部の合わせ目は、鏹のために明確にはしがたい。

鉄鎌(29) 残存長10.1cm・身幅2.8cmを測り、先端部は欠損する。基部の折り返しはゆるい。

工具柄(17) 先端部が欠損するために、何らかの工具柄であるとは判断できない。残存長8.4cmを測る。柄部には、木質が遺存している。

轡(30) 鉸具造付立開の鏡板を持つ鉄製轡である。銜に引手と鏡板とを結合する。鏡板は断面方形の鉄棒を曲げた0.5cm×0.6cmの楕円形で、鉸具に挟まれる部分は幅12cmと薄い。引手は、単線の「く」の字引手で、全長21.2cmを測る。銜は全長18.3cmである。

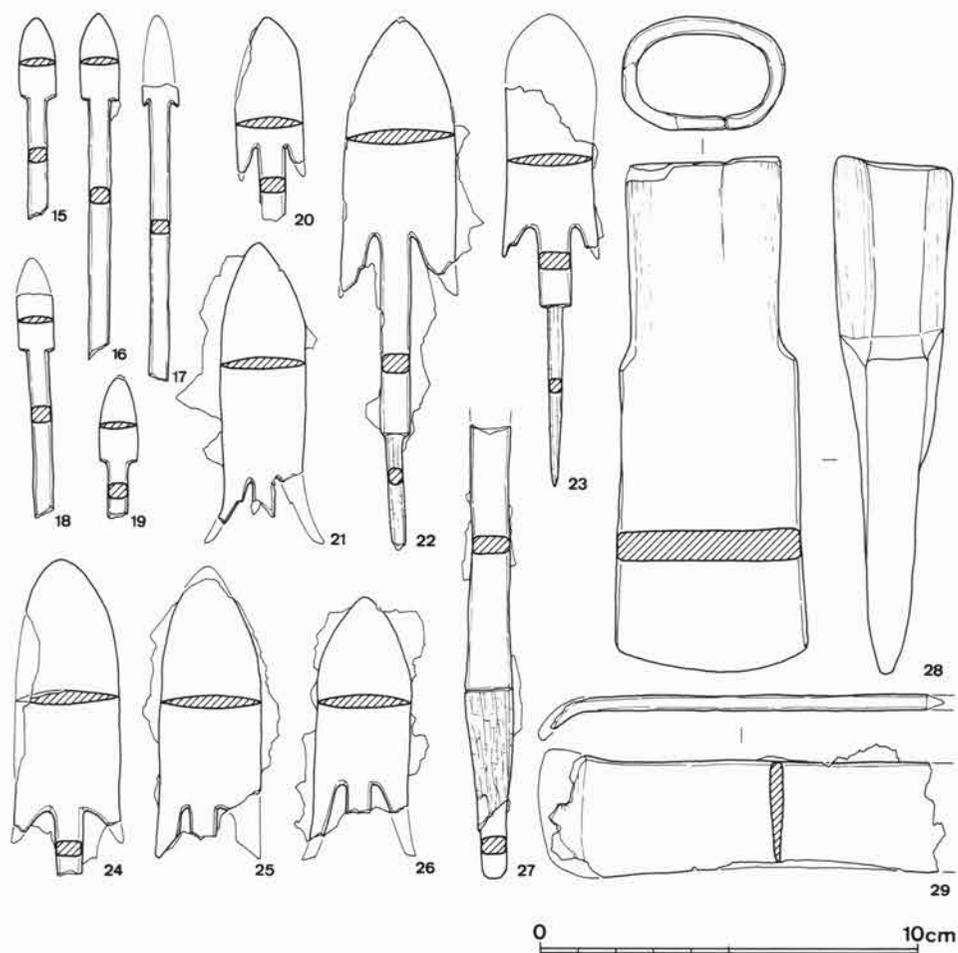
壺鍔(31・32) 1対存在する。鉸具に3連の兵庫鎖で吊舌金具を垂下させるものである。吊舌金具は3鍔に復原される。

鞞(33・34) 2点ある。座金具は6脚のもの、5脚のものがあり、各脚中央に1鍔を持つ。鞞本体は、刺金を持たない凸字形の鉸具を垂下している。

飾り金具(35) 全長3.8cmで8脚をもつ鉄地金銅張金具である。作りは、各脚中央と金具の中心に鉄鍔を打った後で、全体に金銅板を被せる。金銅板は中央が約0.9cm突出する。

耳環(36・37) 銅心金張で大小2点ある。大は径3.3cm、小は径2.6cmを測る。

馬具と飾り金具に関し、若干付言しておく。同型式の轡は、日本海岸では久美浜町湯舟坂2号墳に類例がある。湯舟坂例と比較すると、神宮谷3号墳例は鉸具の刺金が「T」字形なので古い特徴と言える。ただし、両型式は6世紀末からある定度並存したと考えられる。鞞は、不整形であるが、奈良県烏土塚古墳のような花形座金具を模倣したものであろう。このような例は、滋賀県野洲町宮山2号墳にみられる。飾り金具は1点しかないので、



第14図 鉄製品実測図(2)

何に装着されたかは不明である。これと類似した金具は福井県十善の森古墳にあって、鞍の飾り金具と推定されている。形態だけの類似ならば、池山洞古墳群からの採集品の中に金製で8脚の飾り金具の例がある。この金具の機能は、類例の増加をまって判断したい。

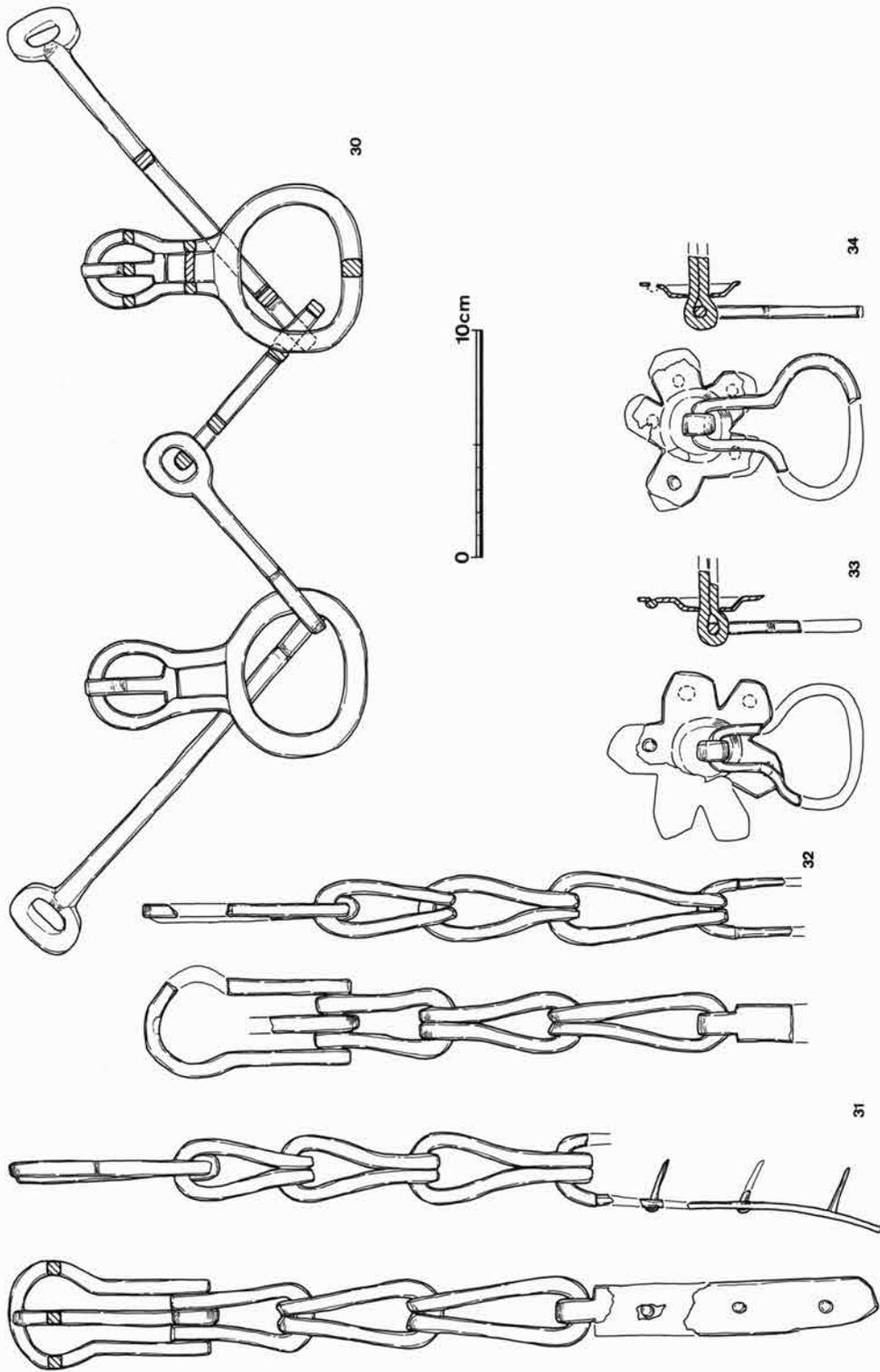
(河野一隆)

c. 石器(砥石)

砥石は全長5.5cmを測る小型柱状のものである(図版第12a)。

II. 4号墳

4号墳は、試掘調査の結果、南方向に開口する横穴式石室墳であることが判明した。墳丘はほとんど消滅しており、石室の石材は一段目が二段目が残存していると思われる。



第15図 鉄製品実測図(3)

5. ま と め

神宮谷3号墳は、墳丘上に列石のめぐる直径約13mの円墳である。埋葬施設は、右片袖傾向の両袖式の横穴式石室である。玄室内には、ほぼ全面に石敷があり、床面下には排水溝が付設されたと考えられる。その後追葬を行う段階に当たり、第2次東壁を構築し、第2次埋葬施設を設けている。

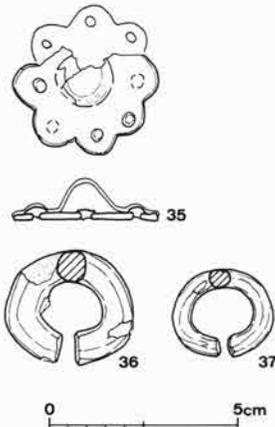
この第2次東壁の構築は、第2次東壁下の石敷をはずし、若干の置き土をした後、行ったと考えられる。第2次東壁の西側は壁面をそろえているが、個々の石材の形は多様である。そのため、その石材自体で3～4段重ねるには不安定であり、裏込め土を入れつつ構築したと考えられる。さ

らに墳丘頂部の土坑1は、玄室の東壁の上に築かれており、これを第2次埋葬施設を構築する際に、設けられたと考えることもできる。

この第2次埋葬施設を構築するに伴い、玄室内床面の1/2以上が破壊され、それに伴う遺物の移動や「かたづけ」といった行為が行われた。つまり、第2次東壁下と玄門付近の東側の遺物は、床面下で検出されたため、第2次東壁下の置き土の中に入り込んだものと考えられる。羨道部西壁付近の遺物や奥壁東北隅の遺物は、床面の破壊をまぬがれたため、原位置を保っていると考えられる。また、玄室内袖石付近には馬具・鉄鎌・鉄刀などが集積されており、いわゆる追葬に伴う「かたづけ」行為の結果であると思われる^(注6)。

次に、この古墳の築造時期及び追葬に伴う第2次埋葬施設の構築時期を考えてみる。石室内から出土した須恵器は、TK43～TK209に併行する時期のものであり、資料の制限からそこに型式差を見い出せない。そのため、当初の石室に追葬があったがどうかは不明である。ただ、床面下及び床面上から出土した土器類、馬具、鉄鎌、鉄刀などは、当初の石室の埋葬に伴うと考えられる。また、第2次埋葬施設の構築時期であるが、確実にその埋葬に伴う遺物がなく、現在のところTK43～TK209以降とせざるをえない^(注7)。ただ、こういった小型のプランの石室については、7世紀前半に盛行すると言われているところから、6世紀末～7世紀前半の時期に構築された可能性が高い。

このような横穴式石室の内側に、2次的な埋葬施設を設けたものとしては、下西代2号墳^(注8)がある。これは両袖式の横穴式石室の玄室中央に、小石室が構築されるもので、小石室の大きさは、全長が2.6m、幅は0.5mで、西壁は3段、東壁は2段、石材は小型ながら本体の横穴式石室と類似した石積みが残っている。この石室も追葬時につくられたと考えら



第16図 飾り金具・耳環

れており、神宮谷3号墳と類似した点もある。このように追葬時に、何らかの埋葬施設を設けているものとしては、近年調査された細谷4号墳にもある。^(注9)

以上、数少ない類例を列記してみたが、横穴式石室の追葬については、まだ問題点が多い。今後の資料の増加を待って、検討を加えてみたいと思う。

(岸岡貴英)

注1 『京都府遺跡地図』第2分冊〔第2版〕 京都府教育委員会 1987

注2 調査にご指導・ご教示いただいた方々(順不同・敬称略)

杉原和雄・山崎信二・近澤豊明・森下 衛

注3 調査参加者(順不同・敬称略)

橋本 稔・白波瀬稔・河北芳野・小林孝枝・河北マサ子・白波瀬とめ・白波瀬よしの・白波瀬正子・岩瀬盛雄・白波瀬繁夫

注4 犀川の最上流域とは、この場合、物部町を除き、志賀町・白道路町より上流の地区を指す。

注5 なお、石室石材の鑑定については、府立綾部高校の小滝先生にご指導いただいた。

注6 この「かたづけ」の行為については、森岡秀人氏の論稿にくわしい(森岡秀人「追葬と棺体配置」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記念考古学論』)。

注7 この地域の6世紀後半～7世紀前半の須恵器については、細谷1号墳や細谷4号墳において一括資料が出土しており、それを参考にした。また、小池 寛氏は細谷1号墳の概報において、陶邑編年TK209・陶邑編年TK217古相の一括土器群を提示されている(「細谷古墳群発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1992)。

注8 「下西代2号墳」現地説明会資料 (財)京都市埋蔵文化財研究所

注9 「細谷古墳群—府営農業基盤整備事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要—」(「埋蔵文化財発掘調査概報(1993)」 京都府教育委員会) 1993

2. 国道478号バイパス関係遺跡 平成2・4年度発掘調査概要

はじめに

国道478号バイパス(京都縦貫自動車道、旧称国道9号バイパス)建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和50年に京都府教育委員会の手によって着手された。以後、継続的に実施されて昭和56年度以降は財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに調査業務が移管されて現在に至っている。平成4年度末現在、総延長約32kmある路線のうち、八木町大字本郷小字小谷地区以南の調査業務を完了し、その成果については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などで逐次公開してきたところである。今回、調査内容を報告するのは、八木嶋遺跡と八木城跡の2遺跡である。

八木嶋遺跡の発掘調査は、平成2年4月17日から平成3年3月8日まで、約8,000㎡を対象として実施した。調査の成果は、「国道9号バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要」で報告済みであるが、整理期間の関係上、遺構を中心とする略報にとどまり、膨大な数量にのぼる出土遺物については、ほとんどふれることができなかった。そこで、今回改めて概要を報告することになった。内容は、前概報を踏襲したが、変更した部分もある。

八木城跡は、丹波守護代内藤氏の居城として知られる京都府内でも有数の中世城郭跡である。今回、ここに報告するのは、平成3年度に実施した試掘調査の結果をもとに、平成4年度に実施した本調査の概要である。調査面積は約4,000㎡、調査期間は平成4年5月18日から平成5年3月5日までをあてた。

上記2件の発掘調査を担当したのは、八木嶋遺跡が当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美、同調査員鶴島(原田)三壽・柴 暁彦、八木城跡が調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同主任調査員引原茂治、同調査員八木政明・柴 暁彦・河野一隆である。

発掘調査は、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施したもので、調査経費は全額同省の負担による。調査を行うにあたって、京都府教育委員会、八木町教育委員会、八木町建設課をはじめとする関係諸機関の協力をえた。また、地元有志の方々及び学生諸氏には、現地での発掘作業及び調査後の整理・概報作成作業に参加協力していただいた。厚く御礼申し上げる次第である。なお、本調査概要の執筆・編集は、奥村清一郎・引原茂治・原田三壽・柴 暁彦が分担し、文責は文末に示した。(奥村清一郎)

(1) 八木嶋遺跡

1. はじめに

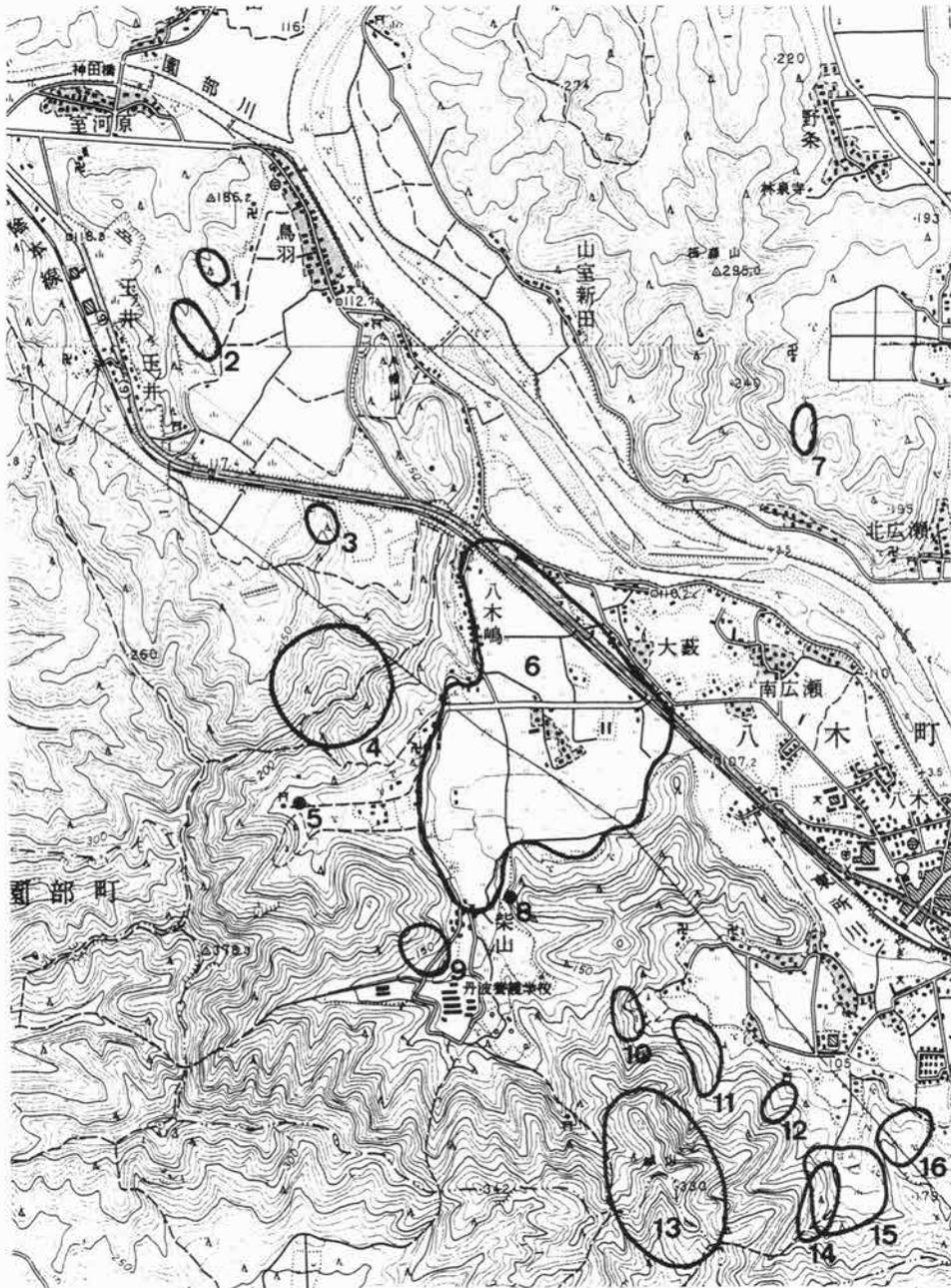
遺跡の位置と環境(第17図) 八木嶋遺跡は、JR山陰線八木駅の北西約1.5kmに位置している。遺跡の立地は大堰川の右岸の低湿地にあたり、遺跡の三方は標高350m前後の山々に囲まれ、これらの山塊から尾根が複雑に派生した、袋谷状の地形を呈した場所に位置している。遺跡の現状は、水田となっている。

現在、『京都府遺跡地図』に登録されている八木町内の遺跡は、この地域での発掘調査が過去にあまり行われていないこともあり、現地地形から確認の容易な古墳の登録が目立っている。しかし、八木嶋遺跡の調査では縄文時代後期の土器片や石器、弥生時代後期の土器や石器などが確認されており、付近にはこの時期の遺跡の存在が考えられる。また、遺物は確認されていないが、調査地の土壌サンプルの花粉分析結果によると、現地表面から約4m下で今から約1万年前の古環境を示すデータが得られている^(注2)。今後、八木町内でもこういった時期の遺構・遺物が確認される可能性がある。

次に、遺跡の周辺に目を向けると、遺跡の南西山裾の柴山集落に5基の古墳から構成される坊田古墳群、森集落に森1・2号墳、八木嶋集落に神田古墳、鳥羽集落に大鳥羽池古墳が所在する^(注3)。これらの古墳のうち坊田1号墳と5号墳は京都府教育委員会によって調査がなされており、1号墳は横穴式石室を内部主体とする方墳、5号墳は内部主体の調査もなされ、墳形は径約16mの円墳であること、出土した須恵器から6世紀末から7世紀前半の時期が与えられることが確認された。また、八木町本郷の小谷集落には17基の古墳からなる小谷古墳群が所在する。この古墳群は、京都府教育委員会が2号墳を、当センターが17号墳の調査を行った^(注5)。これらの古墳の築造時期は、調査事例の蓄積によって6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造されたものと解明されつつある。しかし、八木町では過去の発掘調査件数が少ないため、周辺には未確認の古墳が存在しているものと思われる。

こうした古墳などを築造した母体となったと思われる集落の存在は、今回の八木嶋遺跡の調査以前には未確認であったが、今回の調査によって、大規模な掘立柱建物跡群と低湿地を利用した水利・灌漑施設を持ち合わせた遺構を確認したことは、前に述べた古墳群を築造することが可能な集団の存在を具体的に証明できたものと思われる。

7世紀以降になると、鳥羽集落に所在する現在の鳥羽田神社の北東丘陵斜面において、鳥羽瓦窯が瓦生産の操業を開始しているが、今のところ、具体的な瓦の供給地などは不明



第17図 調査地周辺主要遺跡(1/25,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 鳥羽古墳群 | 2. 鳥羽瓦窯跡 | 3. 沢ノ谷遺跡 | 4. 八木城出城跡 | 5. 神田古墳 |
| 6. 八木嶋遺跡 | 7. 寺内古墳群 | 8. 柴山古墳 | 9. 坊田古墳群 | 10. 堂山窯跡 |
| 11. 古谷窯跡 | 12. 西所古墳群 | 13. 八木城跡 | 14. 内山窯跡 | 15. 小谷古墳群 |
| 16. 内山古墳群 | | | | |



第18図 調査区配置図(1/4,000)

である。

調査の経過 八木嶋遺跡の調査は平成元年度の冬にバイパス路線内に16か所の試掘トレンチを設け、試掘調査を行った。その結果、数地点から古墳時代から鎌倉時代に至る掘立柱建物跡、溝跡などの遺構が確認された。この結果をふまえて、遺構の確認された5地点を中心に、翌2年度に発掘調査を実施した。なお、現地調査の調査期間は以下のとおりである。

平成元年度 12月12日～平成2年3月9日 対象面積約1,500m²

平成2年度 4月17日～平成3年3月8日 対象面積約8,000m²

本調査に当たっては、全調査地の対象面積が広範囲で、地点ごとにそれぞれ離れていたため、遺構密度の高かったB・C・E地区については、調査の進捗状況に従い、空撮図化を行った。調査中、C地区の流路跡からは、多量の須恵器、土師器の土器類、木器類が出土し、また、E地区からは30数棟に及ぶ大型掘立柱建物跡群が確認された。現地

説明会は平成3年2月15日に実施され、地元住民の方がたをはじめとして、多方面からの参加者があった。調査終了後は、当調査研究センターで遺構図や出土遺物の整理作業を行うとともに、遺跡の評価を補強するため、自然科学的分析として、調査中に採取した土壌サンプルの花粉分析を行っただけでなく、C地区から出土した植物遺体(種子)の同定を依頼した。また、同地区から出土した多量の木製品については、京都府立山城郷土資料館に保存処理を委託した。

調査の概要 調査は、はじめ表土及び耕作土を重機で除去し、その後人力による掘削を行った。また、調査地内の割り付けは、バイパスの路線内のA～Eの5地点それぞれに国土地標(第Ⅵ座標系)により、割り付けを行った。

A地区 全調査地で最も東寄りに位置する。遺構はそれほど密集していないが、調査地西隅で土坑3基を確認した。この土坑は、いずれも鎌倉時代のものである。出土遺物は内容、総量ともそれぞれ差があるが、概ね瓦器碗、瓦器皿、青磁碗片などが出土した。また、時期は不明であるが、調査地北側を北西から南東方向に走る、旧河道が見られた。

B地区 A地区の北西に位置する。A地区と関連する遺構は見られない。確認した遺構には、古墳時代と思われる竪穴式住居跡や、掘立柱建物跡、柵列などがある。掘立柱建物跡は直接時期の判明するものは少ないが、出土遺物を見る限り、古墳時代後半～奈良時代のものである。また、掘立柱建物跡のうち1棟は柱穴も小振りで、出土遺物から平安時代のものであると思われる。その他、建物跡としてまとまらないピットが多数存在する。

C地区 バイパス本線部分にあたり、以下に述べるD・E地区と直線上に並ぶ。検出遺構には流路跡、柵状遺構がある。流路跡からは多量の土師器・須恵器・木製品・鉄製品・土錘などの土製品が出土した。中でも、須恵器の杯身・杯蓋には完形もしくは完形に近いものが多数存在した。木製品には使用痕のある製品と、溝内に水漬けにされた状態で見つかった未成品とがある。流路跡から出土した出土遺物は、大きく実用品として使用されたものと、祭祀に使用された模造品とに分けられる。しかし、遺物によっては土器類のように区別が不可能なものもある。また、その他の遺物としてモモ核などの植物遺体や、ウマの骨、歯などの動物遺体といった、自然遺物が出土した。集落の最盛期は、6世紀後半に求めることができるが、奈良時代までは細々と存続していたことがうかがえる。しかし、遺物の総量は多かったものの、この地区の流路跡の周辺では、水田や住居跡などの遺構は確認できなかった。

D地区 C地区及びE地区の中間に位置する調査区で、両調査区との関連をつかむために重要な地区であったが、調査地北半部で所属時期不明の掘立柱建物跡4棟などを確認した。建物跡の規模は貧弱で、およそE地区の建物跡との関連はうかがえない。そのほか、

顕著な遺構・遺物とも確認できなかった。

E地区 調査地の北端に位置する。30数棟の掘立柱建物跡を検出した。この遺跡の主要部分である。建物跡の大半は、大型の柱穴掘形を持つ大型の建物跡である。調査中、南北方向の用水路を挟んで、東側部分を拡張したが、顕著な広がりは見られなかった。建物跡は調査区の南西寄りに集中する傾向が見られる。これらの建物跡の所属時期は、およそ6世紀末～7世紀初頭になるものと思われる。

(柴 暁彦)

2. 層序と検出遺構

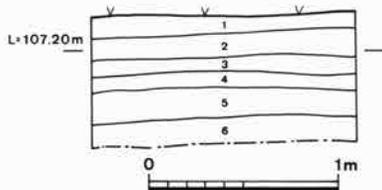
①A地区

層序(第19図) 基本層序は水田工作面から約30cmの床土下で古墳時代以降の遺構面となる。遺構面の土質は黄褐色砂質土である。基本的には遺構面の下層は灰褐色粘砂質土である。他の地区の遺構面の土質は粘質土であるが、A地区は砂質である。

検出遺構(第20図) 直径約180cmを測り、断面が皿状を呈する円形の土坑3基と、ピットを検出した。これらの土坑からは、いずれも瓦器椀、瓦器皿、瓦質の羽釜が出土している。地区の北側では、流路中に径1～3cm大、大きいものでも子どもの拳大の円礫の詰まった旧河川が確認された。遺物は、包含されていなかったため、時期は不明である。以下、概要を述べる。

土坑S K 01(第21図) 長軸約1.9m・短軸約1.2m・深さ約0.3mを測る楕円形の土坑である。土坑の1/3は攪乱されていた。攪乱の影響のためか、この土坑には礫が伴わなかった。出土遺物としては瓦器椀、瓦質羽釜、羽釜の脚部、完形の白磁椀などがある。この土坑は東所川に近接しており、常に水浸かりの状態にあったためか、遺物の残存度は良好であった。

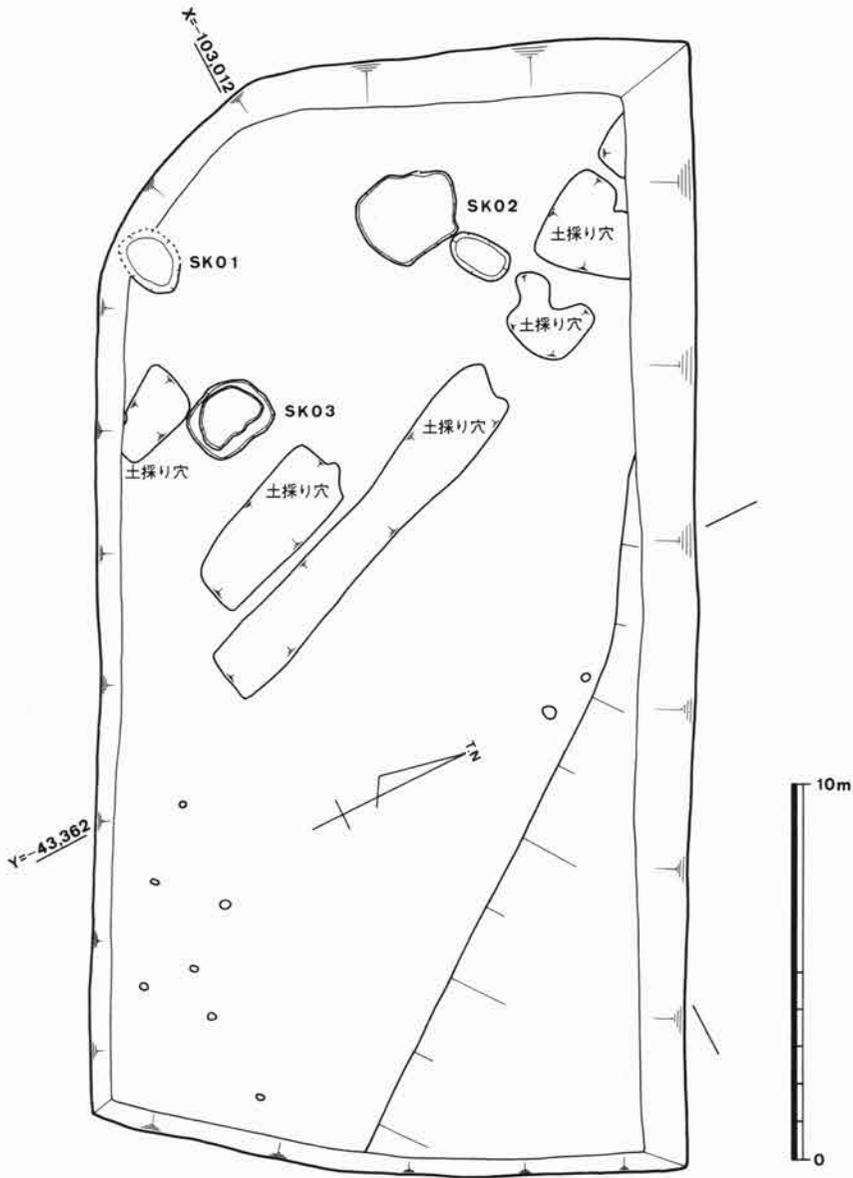
土坑S K 02(第21図) 長軸約2m・短軸約1.9m・深さ約0.3mを測る円形の土坑である。



第19図 A地区基本層序

- | | |
|-----------|-----------|
| 1. 暗灰色粘質土 | 2. 暗褐色砂質土 |
| 3. 黄褐色砂質土 | 4. 黒褐色砂質土 |
| 5. 茶褐色砂質土 | 6. 礫層 |

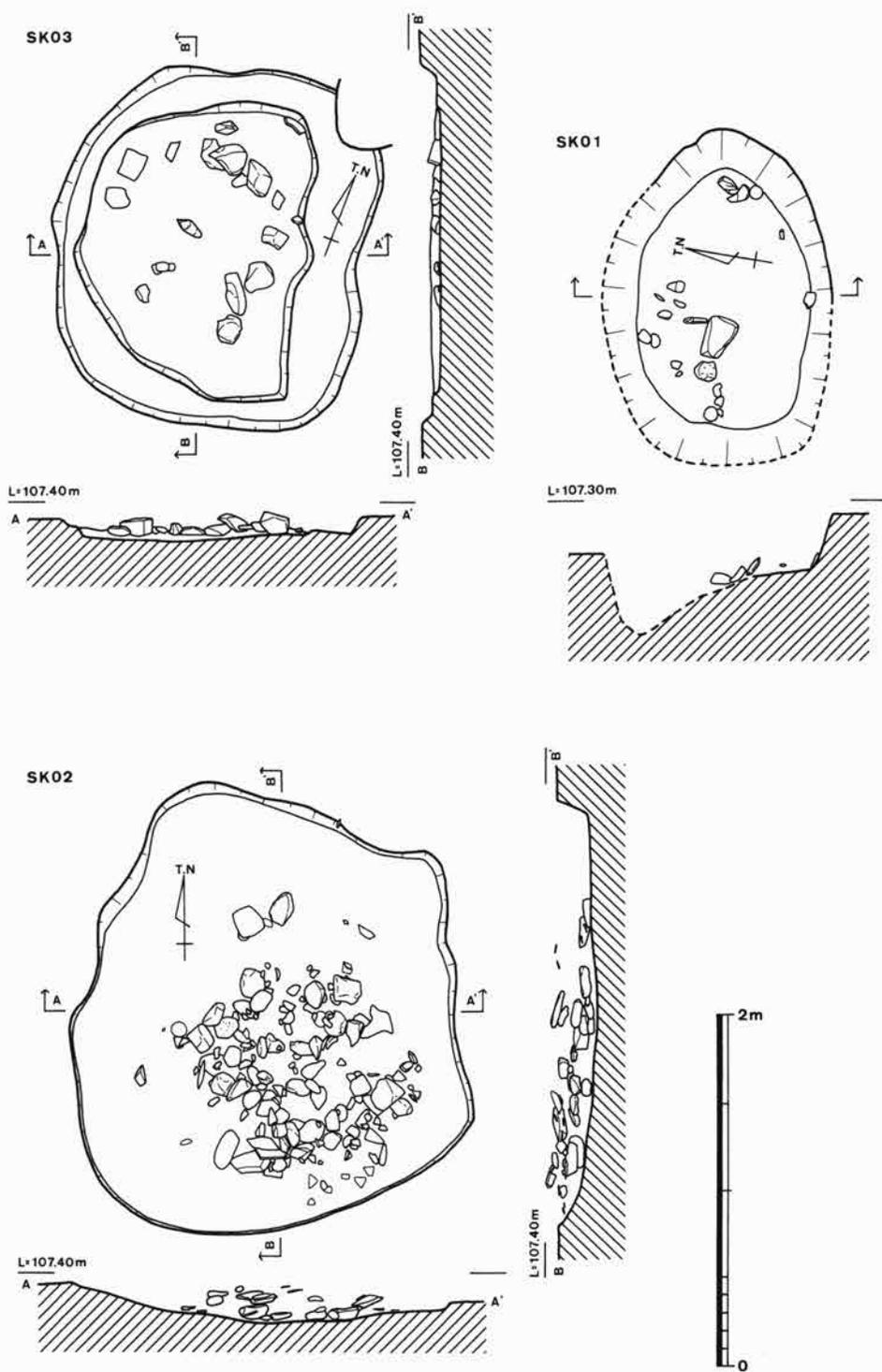
土坑内からは、拳大から子どもの頭大の多量の礫とともに、多くの瓦器椀、瓦器皿、そして、青磁椀、砥石、不明鉄製品が出土した。礫は、土坑内でまとまって検出されたが、特に組まれた形跡は認められなかった。また、出土遺物の瓦器椀及び瓦器皿は器種ごとに重なり合った状況が見られたが、元位置を保っているものは少ないと思われた。礫には、熱を受けているものは見られな



第20図 A地区遺構配置図

った。

土坑SK03(第21図) 長軸約2.1m・短軸2m、深さは最深部で約15cmを測る円形の土坑である。礫及び出土遺物とも比較的少なかった。子どもの頭大の礫は、一見平面的に並べられているようにも思われたが、積極的な根拠はない。出土遺物としては瓦質羽釜の口縁部から鏝にかけての破片や羽釜の足が出土したほかは、顕著なものは見られなかった。



第21図 A地区土坑実測図

②B地区

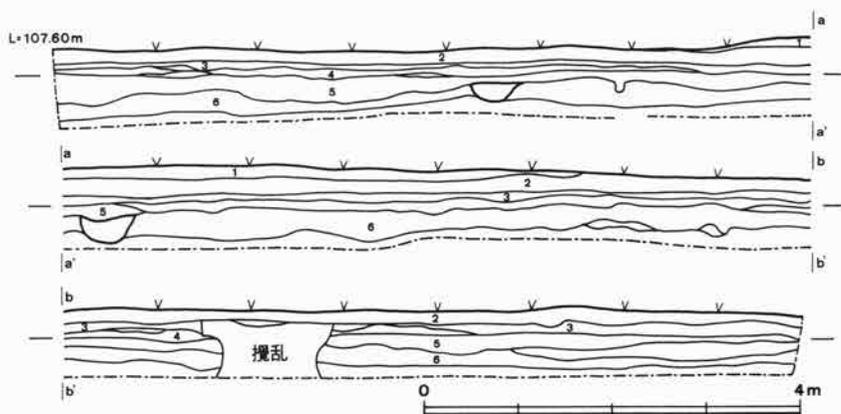
層序(第22図) B地区の土層は表土下、水田耕作土である灰色粘質土、床土の黄褐色粘砂土、明褐色粘砂土、灰褐色粘質土、茶褐色粘質土、茶灰褐色砂質土の順に堆積していた。明褐色粘砂土と灰褐色粘質土中には土器が多数含まれていた。茶褐色砂質土上面が遺構面であった。

掘出遺構(第23図) B地区は遺構精査の結果、遺構の輪郭が不明確であったため、茶灰褐色砂質土上面まで掘削して遺構を検出した。検出した遺構には竪穴式住居跡、また、数時期にまたがる掘立柱建物跡群や柵列、多数のピット群があった。なお、建物跡の主軸方向は下に一覧表として明記した。

掘立柱建物跡S B01(第24図) 桁行5間×梁間3間の南北棟の建物跡である。主軸は、N-17°-Wである。桁行総長約9.2m・梁間総長約5.4mを測る。柱穴の平面形は方形あるいは隅丸方形で、一辺約0.6~1.0mとかなり大型であった。柱痕跡は円形で、径約30cm

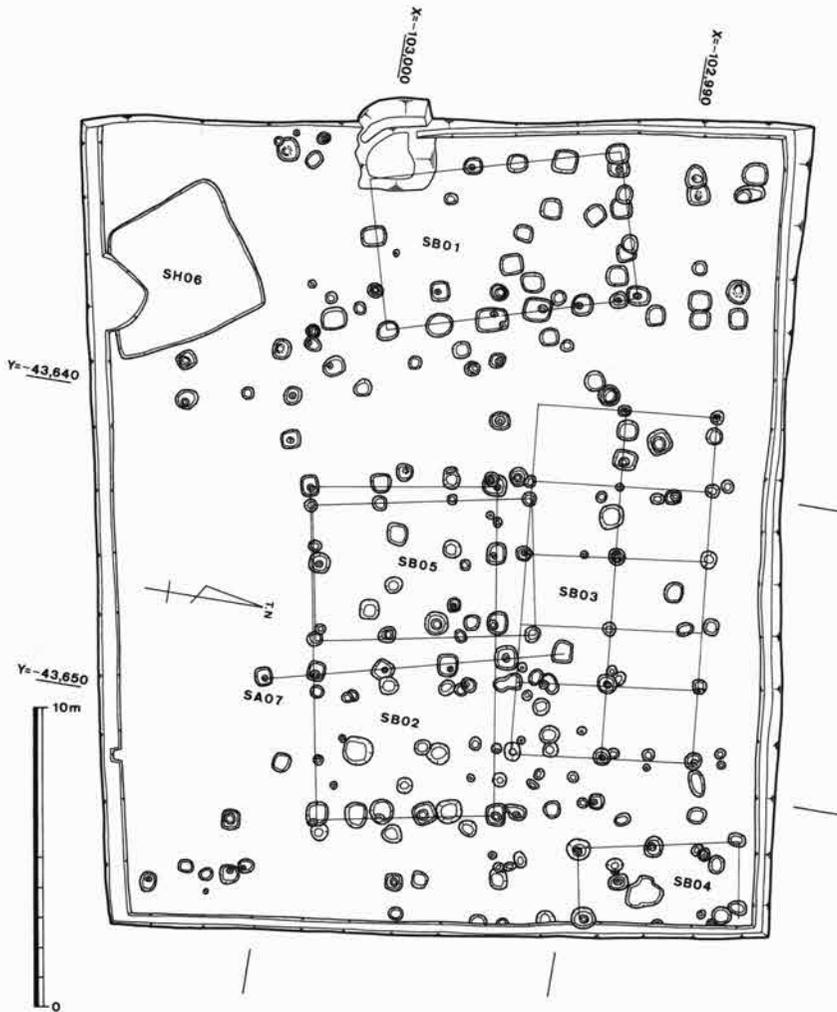
付表1 B地区掘立柱建物跡規模一覧表

建物番号	規模(m×m)		一間の長さ(m)		床面積(m ²)	建物軸方向	柱掘形形状	柱掘形直径(一辺 cm)	深さ(cm)
	東西・桁行	南北・梁間	桁行	梁間					
SB01	3間(4.8)×5間(8.4)		1.6×1.7		40.3	N-17°-W	隅丸方形	50~80(100)	10
SB02	5(11.0)×3(6.0)		2.2×2.0		66	N-10°-W	隅丸方形	30~80	20
SB03	5(11.6)×2(6.1)		2.3×3.1		70.7	N-6°-W	円形	30~60	10~20
SB04	1以上(2.3)×2(5.4)		2.3×2.8		12.4以上	N-12°-W	円形	40~70	
SB05	1(4.5)×3(7.2)		4.5×2.4		32.4	N-10°-W	円形	30~50	10~25
SH06	4.7×5.0		(深さ0.15)						
SA07	5(10)<南北>		2.0<南北>			N-15°-W			



第22図 B地区南壁土層断面図

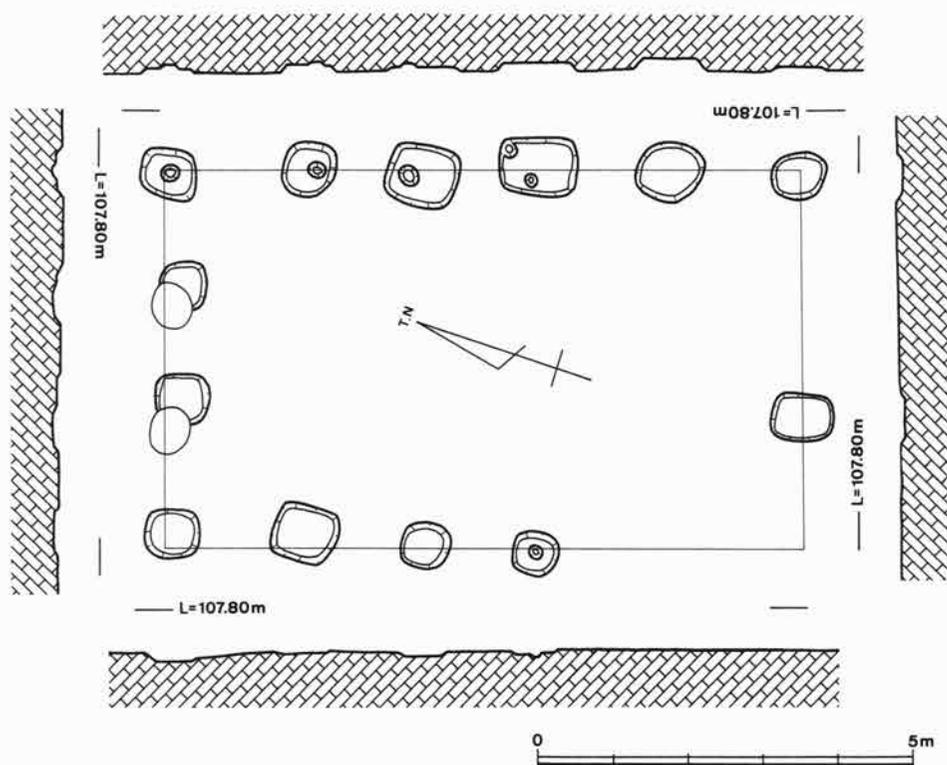
- 1.腐植土
- 2.灰色粘砂
- 3.青褐色粘砂
- 4.灰黄褐色土
- 5.灰茶褐色砂質土
- 6.茶褐色砂質土



第23図 B地区遺構配置図

を測り、深さは約10cmであった。出土遺物は極めて少なく、帰属時期は不明であるが、柱掘形の形状、配列及び規模から、後述するE地区で検出した6世紀末～7世紀前半の掘立柱建物跡に類似しており、この時期の可能性が高いと思われる。

掘立柱建物跡S B02(第25図) 桁行3間×梁間5間の東西棟である。主軸はN-10°-Wである。桁行総長約11.7m・梁間総長約6.8mを測る。柱穴は、方形または隅丸方形を呈しており、径は約50～80cmを測る。また、柱痕跡は円形であり、径約20～30cmを測る。出土遺物には柱穴から8世紀後半頃の須恵器杯身(121)などがある。奈良時代の建物跡と思われる。



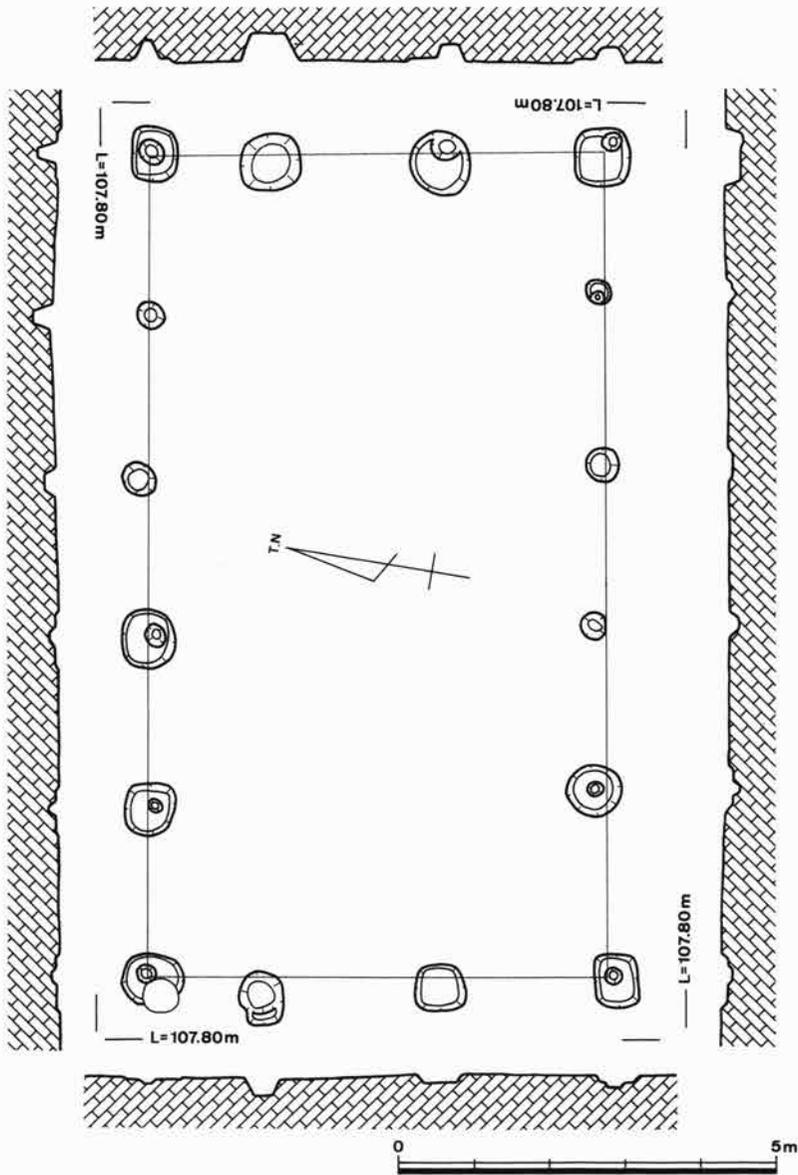
第24図 掘立柱建物跡 S B01実測図

掘立柱建物跡 S B03(第26図) 桁行5間×梁間2間の東西棟である。主軸は、 $N-6^{\circ}-W$ の方位を示す。桁行総長約12.0m・梁間総長約6.5mを測る。柱穴は、径0.3mの円形状を呈する。ピットの出土遺物には、緑釉陶器片が出土しており、9世紀に比定することができる。

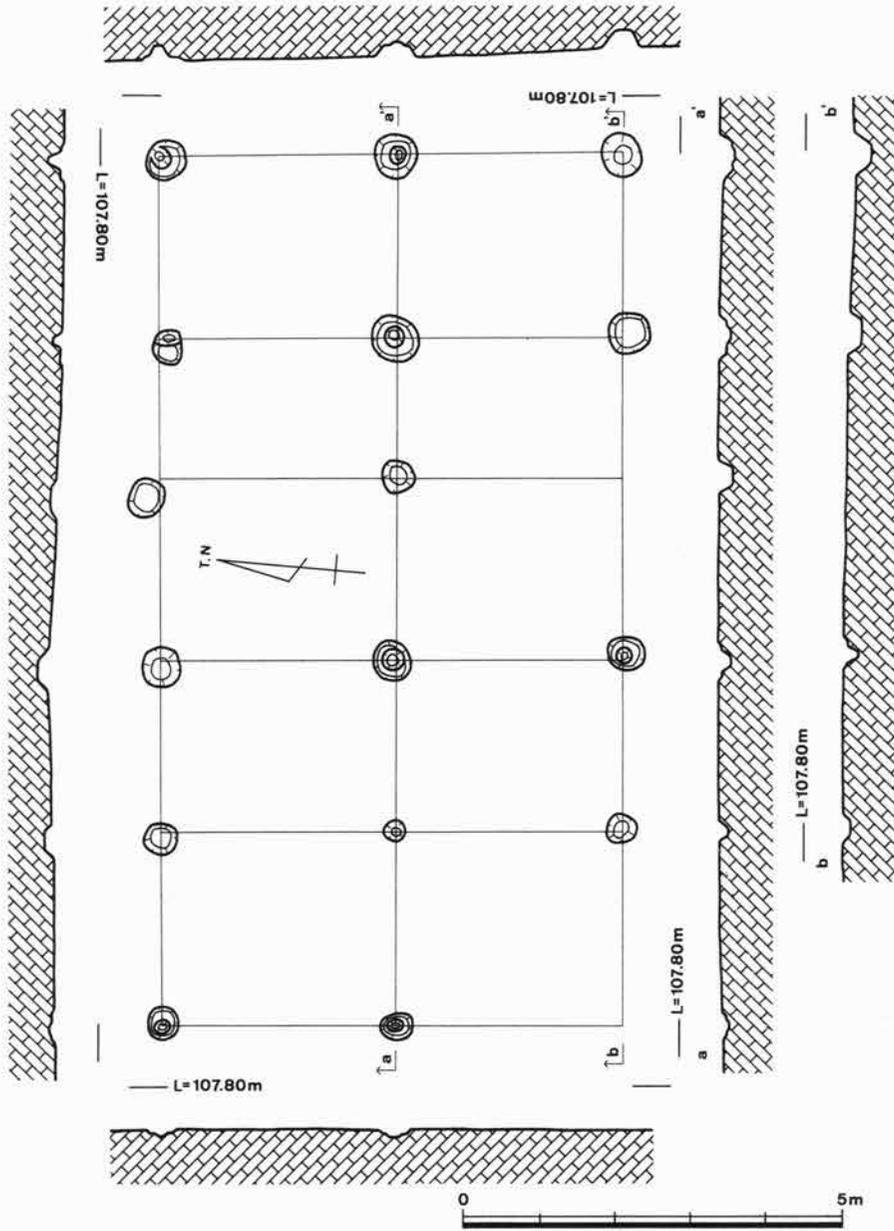
掘立柱建物跡 S B04(第23図) 東西1間分・南北2間を検出した。建物跡は、さらに調査地外東側にのびていた。柱穴は径約0.5~0.7mで、平面形は円形である。柱掘形は、径約20~30cmの円形で、深さ約15cmを測る。建物跡の主軸は、 $N-12^{\circ}-W$ の方位であり、先の掘立柱建物跡(S B02)と建物跡の主軸方位がほぼ一致しているため、同じ時期の可能性がある。

掘立柱建物跡 S B05(第27図) 東西1間×南北3間の南北棟である。主軸は $N-10^{\circ}-W$ である。梁間総長約4.9m・桁行総長約7.7mを測る。柱穴平面が円形で、径約0.4~0.6mを測る。出土遺物から10世紀に比定できる。

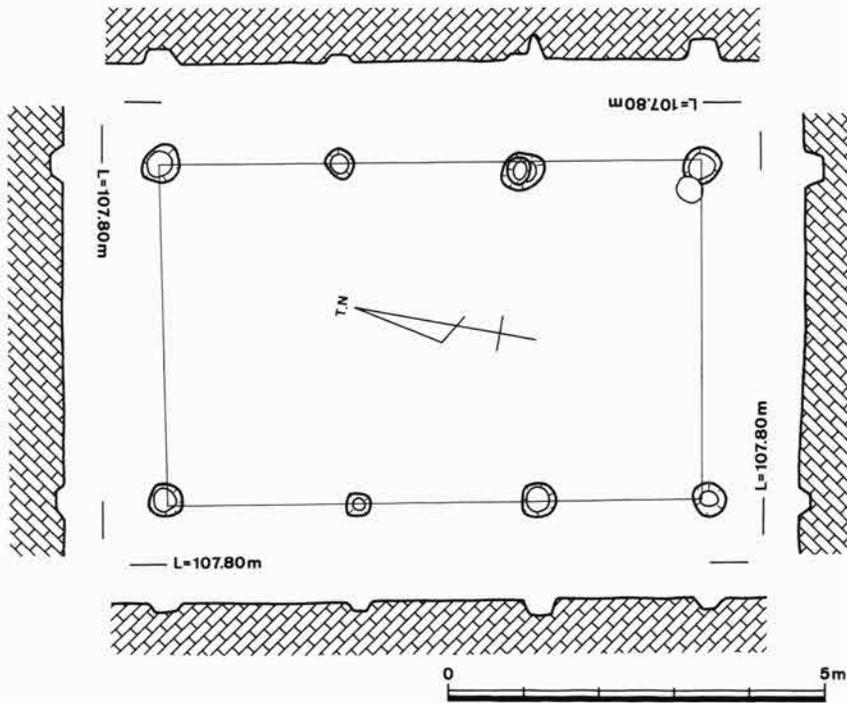
竪穴式住居跡 S H06(第28図) 東西約4.7m・南北約5.0mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約0.15mである。床面の精査を行ったが、柱穴及び周壁溝などの施設は確認



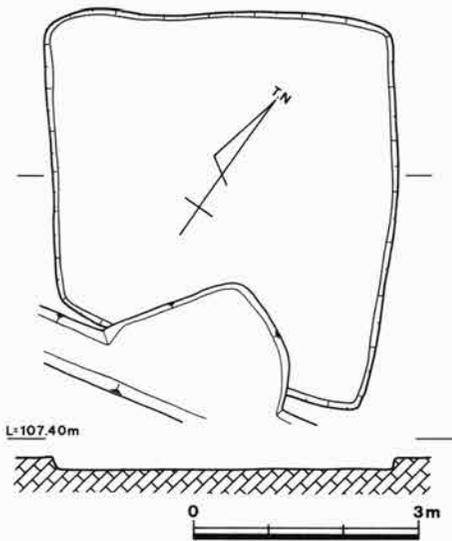
第25図 B地区掘立柱建物跡S B02実測図



第26図 掘立柱建物跡 S B03実測図



第27図 B地区掘立柱建物跡S B05実測図



第28図 B地区竪穴式住居跡S H06実測図

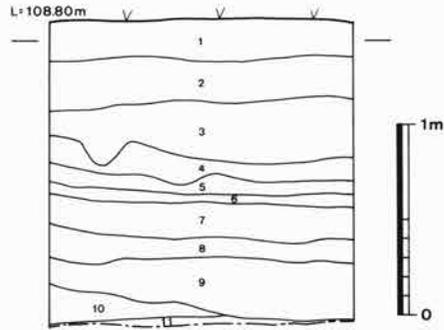
できなかった。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。この遺跡で検出した竪穴式住居跡はE地区に数棟見られるが、いずれも柱穴を確認していない。

柵跡S A07 南北にのびる柵跡である。柱穴6個、5間分を検出した。柱穴の平面形は方形あるいは隅丸方形で、一辺約0.7~0.8mを測る。主軸はN-15°-Wである。柱痕跡は円形で、径約0.1~0.2mを測る。掘立柱建物跡S B01の主軸にほぼ平行しており、両者の関連が考えられる。

③C地区

C地区は柴山集落の谷の末端に位置している。周辺地形は、旧河川の自然堤防の痕跡をとどめており、旧河道に沿った低湿地であったことがうかがわれる。現在もこの地区の周辺は水田となっており、C地区のすぐ南には、現在も灌漑用水として利用されている東所川が東流している。

層序(第29図) C地区の層序は第1層が暗灰褐色粘質土で現在の水田耕作土、2層が床土、8層上面の暗灰褐色粘質土が中世の遺構検出面、9層上面の淡黄灰褐色粘質土が奈良・平安時代の遺構検出面、そして10層上面の灰黄褐色粘質土が古墳時代の遺構検出面である。ほぼ、どの層も水平堆積をしている。



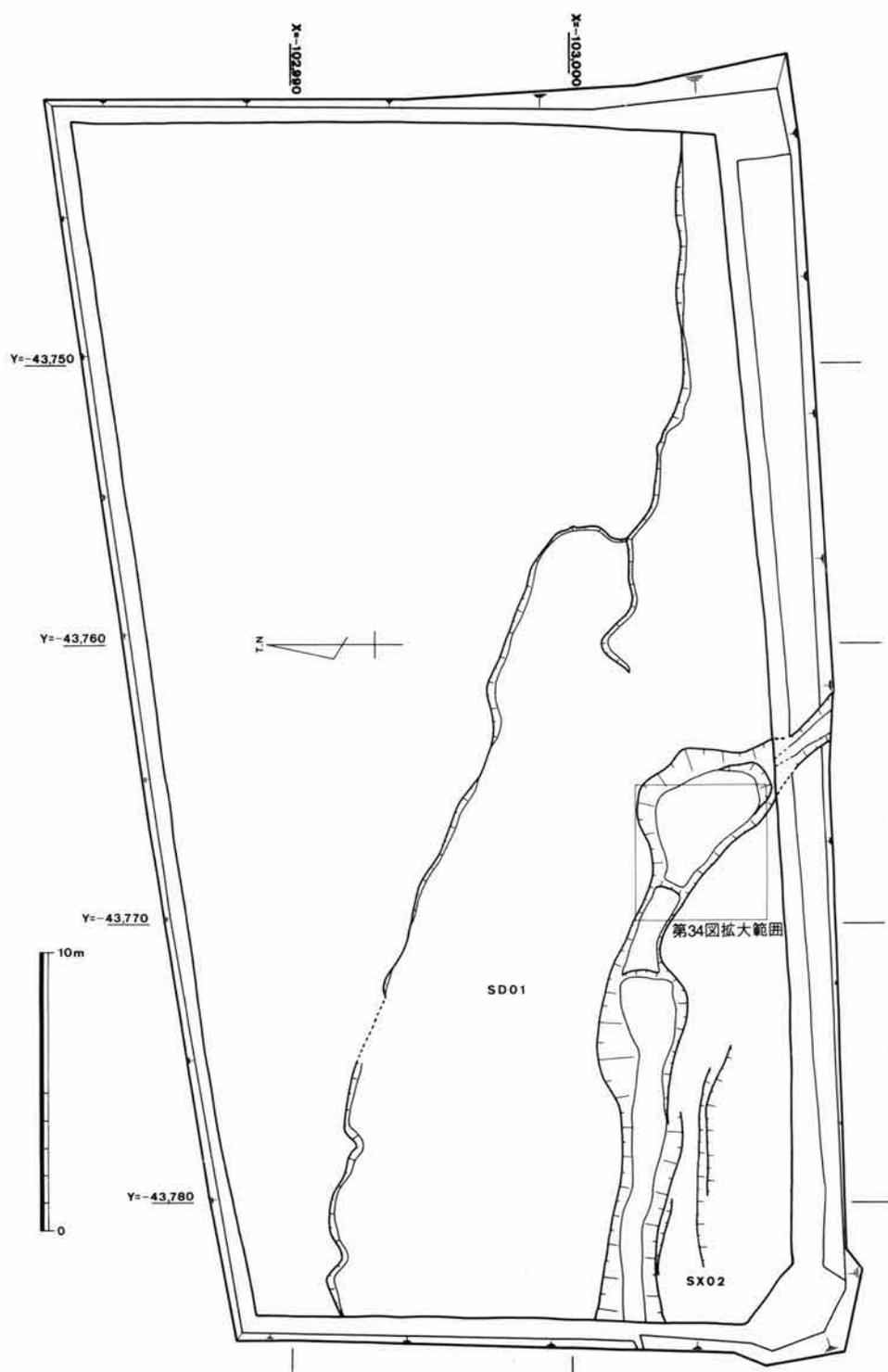
第29図 C地区基本層序

- | | |
|-----------------|-------------|
| 1. 暗灰色粘質土 | 2. 暗灰褐色土 |
| 3. 黄灰褐色土(小礫混じる) | 4. 黄褐色粘質土 |
| 5. 明褐色粘質土 | 6. 黄灰褐色土 |
| 7. 灰褐色粘質土 | 8. 暗灰褐色粘質土 |
| 9. 淡黄灰褐色粘質土 | 10. 灰黄褐色粘質土 |
| 11. 暗灰褐色土 | |

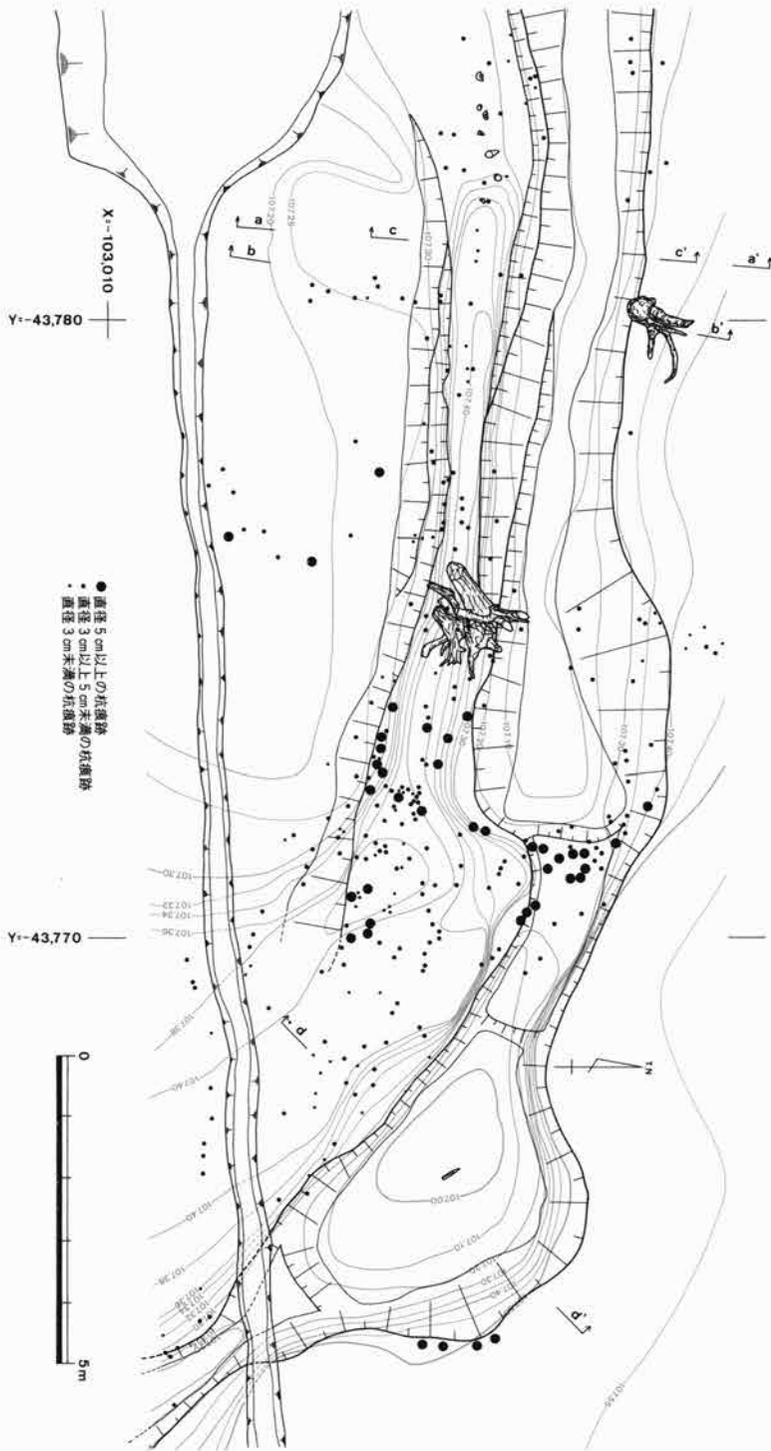
検出遺構(第30図) C地区で検出した遺構には、古墳時代後期を中心とした溝跡や柵跡がある。これらは一連の遺構である。以下、それぞれの遺構の概要を述べる。

流路跡 S D 01 最大幅約2.4m・深さ0.3～0.5m、調査地内での溝の総延長は約24m

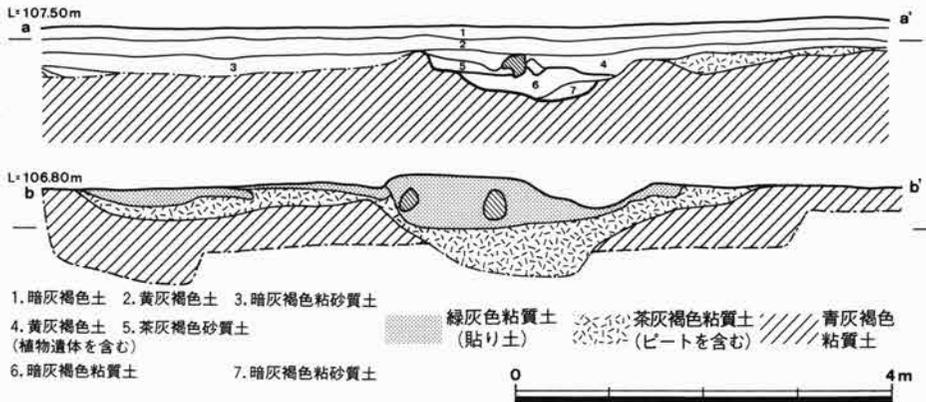
を測る。この流路跡は、河川の主流から集落内に引き込んだ支流部分と思われるが、この流路跡の分岐点及び合流地点は未調査である。流路跡は、調査地内で西から南東方向に曲線を描きながら向きを変えており、水は西側から東側へ向かって流れていたと思われる。流路の形状は、調査地西側上流部分では、流路の斜面にわずかなテラス状の平坦面を持つ、二段の掘り込みとなっていたが、下流部にあたる陸橋部西側の溜まり状部分から東側にかけては、流路の斜面は無段となっていた。流路の断面形は、概ね浅い「U」字形を呈していた。また、この流路には幅が狭く、深さが浅くなった土堤状の高まりがあった。この肩部分には、流路に直交する杭が多数打ち込まれており、流れをせき止める柵になっていたと思われる。一方、この高まりの前後は流路幅が広く、深さもやや深くなり溜まり状を呈し、東側へは、水が高まりをオーバー・フローして流れていたと思われる。また、調査地東側にはもう1か所流路幅の狭まる土堤状高まりが存在した。この部分には調査のため排水用の溝を切ったことや、調査地の南側限界に近かったことで、不明な点もあるが、おそらくこの部分も前述と同様の性格であったと思われる。以上のように、流路の何か所かに柵や土堤状高まりなどの水量調節施設を持たせ、必要に応じて、南側平坦面に導水したもののと思われる。流路の埋土は暗灰褐色土と砂質土の互層であり、ほぼ4層に分層できた。しかし、各層の出土遺物には時期差が認められなかった。遺物は、溜まり部分を中心に、多量の土師器・須恵器などの土器類とともに、加工木材や大小の木の枝などが多数出土した。土器類は、完形品もしくはそれに近いものが多く、大半が土圧でつぶれたかたちで出土した。出土した須恵器の器種には杯身・杯蓋・高杯・壺・甕などがあったが、中でも杯



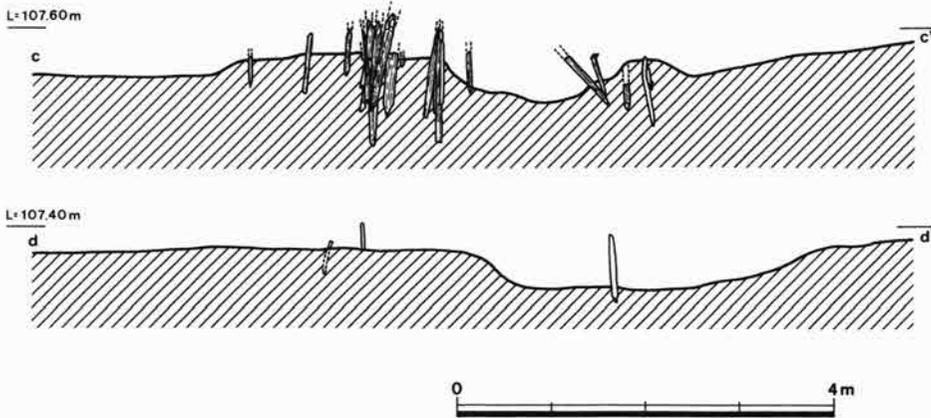
第30図 C地区遺構配置図



第31図 C地区流路跡 S D01実測図



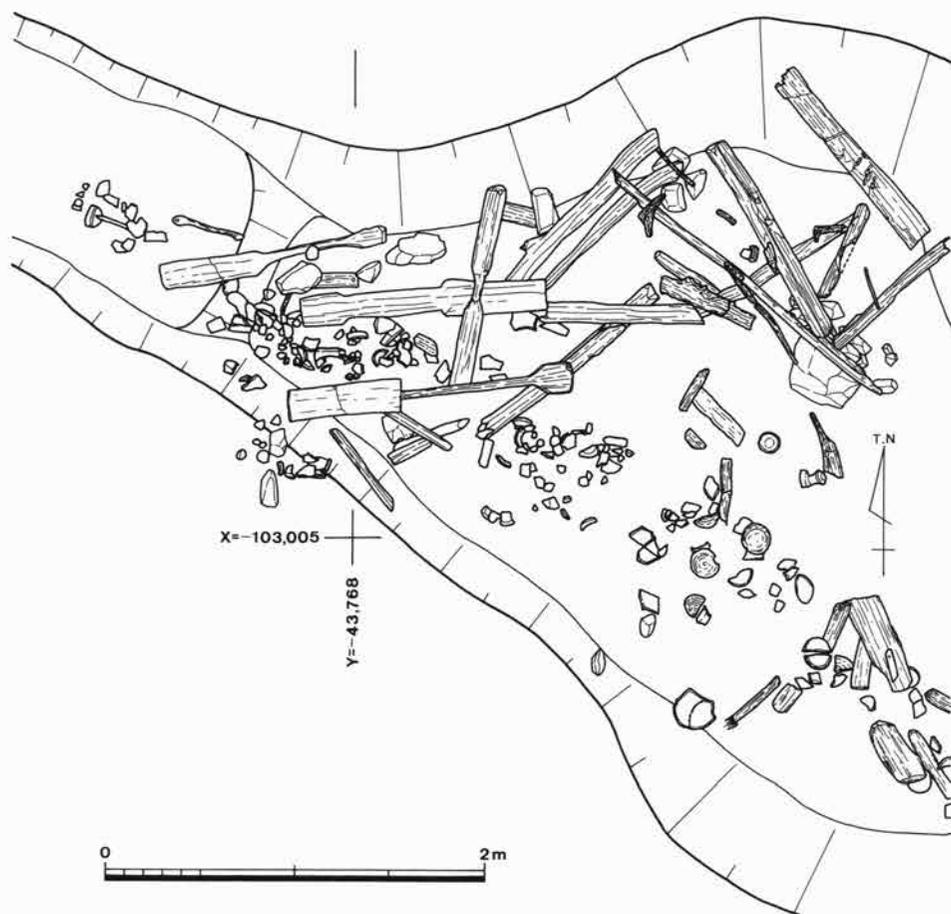
第32図 C地区流路跡S D01及び溝跡断ち割り断面図



第33図 C地区流路跡S D01断面図

身・杯蓋の割合が高かった。一方、土師器の器種は、杯・高杯・壺・甕・甔などであったが、大半は甕であった。また、流路底面では、古墳時代の製塩土器片、砥石が出土した。特に、陸橋状高まり東側の溜まり部分では、土器に混じって、木器未成品(鋤、堅杵)や加工木材(板材、部材)などが出土した。この内、農工具の未成品は、加工途上で、いわゆる水漬けの状態であった。また、自然遺物では、モモ・クルミ・トチなどの堅果類やヒヨウタンの外皮や種子といった植物遺体が出土し、流路の周辺からは馬骨、馬歯などの動物遺体が出土した。また、遺構は未確認であるが、ファイゴの羽口や金属塊や滓といった工房関連遺物の出土もあった。流路の存続時期は、出土遺物から6世紀後半～末葉にかけてであり、流路の大半は6世紀後半の遺物で埋め尽くされていた。このことから、S D01は6世紀末には廃棄されたものと思われる。

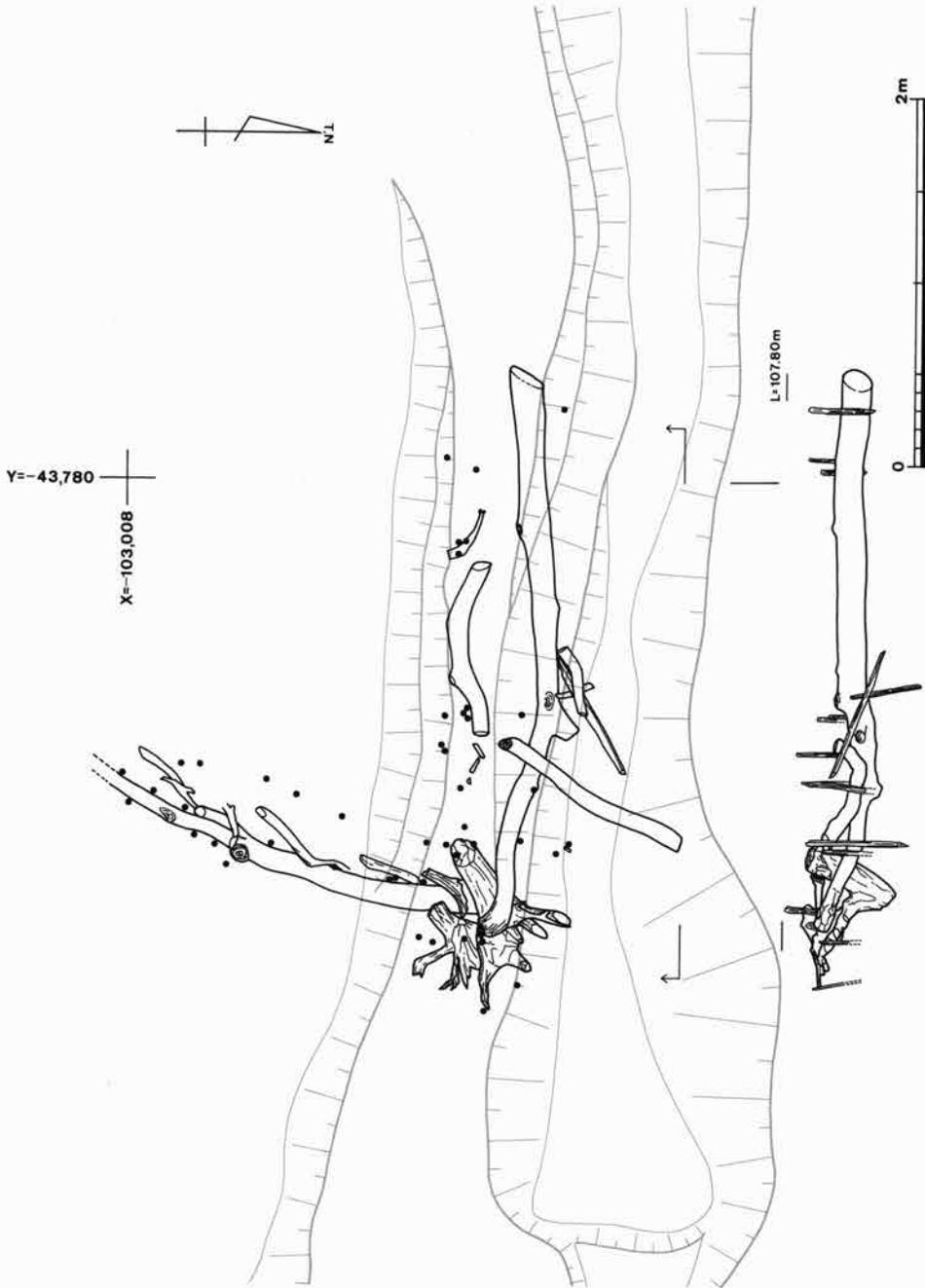
柵跡S X02(第31図) 流路跡S D01の南側の肩部分には、流路に沿って低い土堤状の高まりがあり、この上に大小さまざまな杭や杭の痕跡が多数検出された。また、流路の北



第34図 C地区流路跡S D01遺物出土状況図

側の肩部分及び流路の斜面にも、大小の杭が打ち込まれていた。土堤状部分の幅は、約40～120cm・高さ約10～30cmを測る。土堤状部分の総延長は約10.5mである。調査地西端部分の土堤状の高まりに打ち込まれた杭は、杭の径が10cm前後で、残存する長さは長いもので約120cmを測り、地中に約80cmほど打ち込まれていた(第33図)。この部分の杭は特に太く、他の部分のものと異なる様相を呈しており、流路跡S D01の最も重要な部分にあたり、南側平坦面に導水する水口であったことが予想される。一方、流路の陸橋部分には比較的太さの太い杭が流路に直交して打ち込まれており、この部分でも水をせき止め、南側の平坦面に水を導いたと思われる。そのほか、柵として流路に沿って打ち込まれた杭は、大半が直径約3cmほどの細いもので、杭の近辺には柵に利用したと思われる木の枝や板材、人頭大の角礫などが認められた。おそらく、これらの枝や転用材は杭により固定されていたと思われる。この部分は、流れてきたゴミを受けて平坦面に流す役割を果たしていたと思

われる。以上のことから、この遺構は流路に沿って設けられた護岸施設を兼ねた柵と考えられる。しかし、調査地内では水田畦畔は確認できなかったが、調査地外には水田の存在が想定される。



第35図 C地区溝跡S D01下部構造実測図

流路跡 S D01及び柵 S X02の構築状況(第35図) 流路跡 S D01の構築以前には、自然流路が存在していたことが、流路の断ち割りから明らかになった。S D01の下層には一様にピート層が見られ、S D01構築以前は低湿地の状況を呈していた。流路跡 S D01の構築に当たって、流路部分は旧流路を利用し、流路本体には部分的に木を敷くなどの基礎工事を行い、大半は流路上にそのまま青灰色粘質土を貼っていた。一方、柵 S X02の土堤状の高まりの下部には直径30cmほどの伐採した自然木を流路に平行させて2本横倒しにし、この伐採木を固定するために、両側から挟み込むようにして杭が打たれていた。ほぼ流路に平行する土堤状の高まり部分には直径5cmほどの杭が打ち込まれ、その上に柵が設けられていた。また、流路の南側の平坦面の下部は黒灰色粘質土層の上面に、ヨシなどイネ科植物の茎を同一方向に並べ、その上に横木を渡し固定した、草壁状ものを置き、さらにその上に伐採木を横たえ、この伐採木が移動しないように杭で固定していた(図版第26)。こうした基礎工事により、軟弱な地盤を補強し、安定面を造り、その上から青灰色粘質土を貼っていた(第32図)。

古墳時代以降の流路跡 S D01の再利用の状況 S D01は前述の通り、6世紀末には流路を人為的に埋没させて機能を停止させている。おそらく古墳時代以降、S D01は淀み程度になり、この流路に平行した幅の広い流路が残ったものと思われる。しかし、S D01は流路として安定していたと思われ、流路の肩部分には木の株が残り、樹木が生育していたことがうかがえる。出土遺物は、S D01東側のゆるやかな落ち込みを中心に、8・9世紀の須恵器・製塩土器が出土している。この須恵器の中には墨書土器がある(第75図)。墨書土器はS D01の東側でまとまって出土した。このことから、奈良時代にも流路跡周辺を利用した祭祀が行われていた可能性がある。しかし、祭祀の形態を想定できるこのほかの遺物は見られない。そのほか、黒色土器・瓦器椀・瓦器皿・緑釉陶器・青磁椀など、古代・中世の土器が出土しているが、遺構は確認しておらず、これらの遺物は流路埋没後の包含層遺物と思われる。

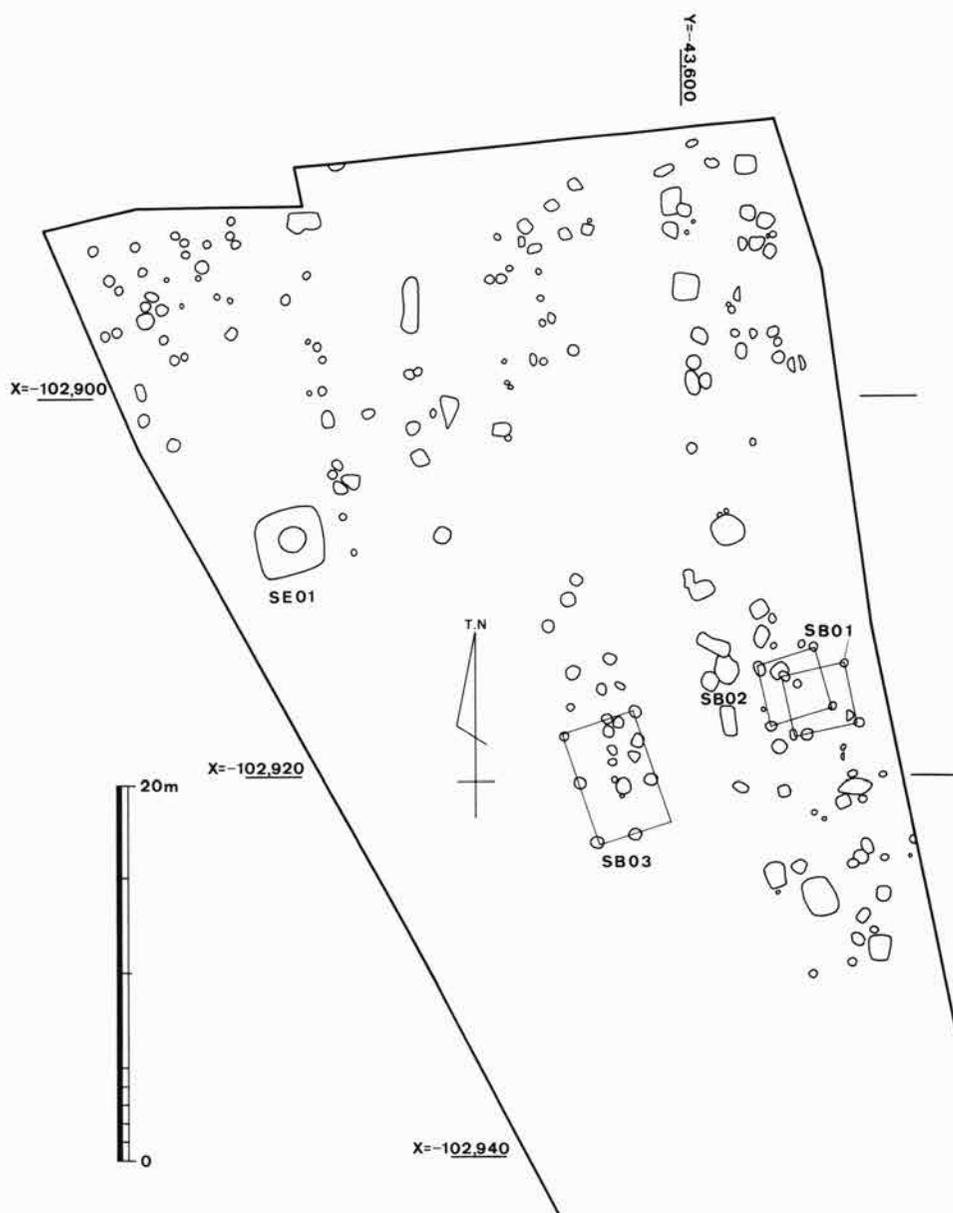
(柴 暁彦)

④D地区

層序 基本的にはC地区と同様の層序で、表土及び黄灰褐色粘質土の床土の下層が青灰色の粘質土であり、古墳時代の遺構面となっていた。

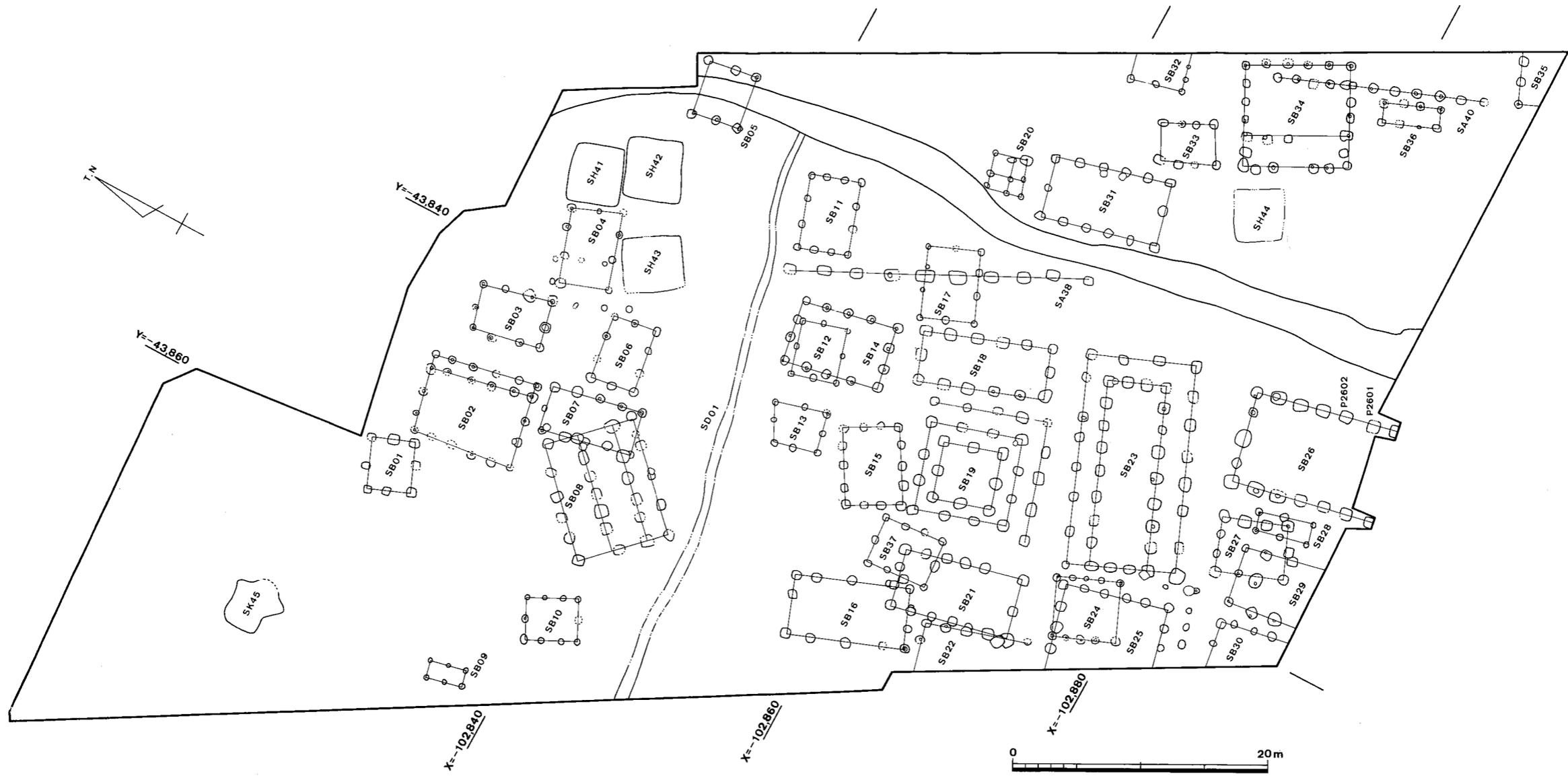
検出遺構(第36図) 調査区中央部で掘立柱建物跡3棟、井戸跡1基などを検出した。掘立柱建物跡の柱穴内や井戸内出土の遺物はないため、遺構の正確な帰属時期は不明である。

掘立柱建物跡 S B01 桁行1間(3.2m)×梁間1間(3.2m)の小さな建物跡である。建物跡の主軸はN-11°-Wである。柱穴の大きさは、直径約30cm・深さ約20cmを測る。



第36図 D地区北半部遺構配置図

掘立柱建物跡 S B02 S B01と同様、桁行1間(3.2m)×梁間1間(3.2m)の小さな建物跡である。建物跡の主軸は、N-16°-Wの方位である。柱穴の大きさは、直径約30cm・深さ約20cmを測る。建物跡の主軸方向もほぼS B01と同じであるため、建て替えの可能性はある。

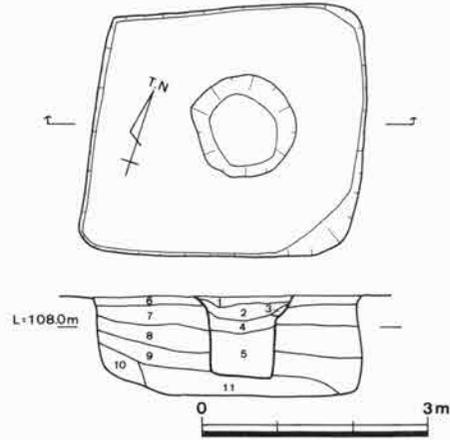


第37图 E地区遺構配置図

掘立柱建物跡 S B03 桁行2間(6 m)

×梁間2間(4 m)の建物跡である。建物跡の主軸はN-19°-Wである。東南隅の柱穴は、暗渠により削平されている。柱穴の大きさは直径約30cm・深さ約20cmを測る。

井戸跡 S E01(第38図) 直径約1.5 m・深さ約2 mの素掘りの井戸で井戸枠はない。井戸の掘形は隅丸方形で、一辺約3 mを測る。井戸内は、ほぼ水平堆積に近い状況で埋没している。井戸内からの出土遺物はないが、検出面では第78図のような須恵器の杯身・杯蓋が3点確認された。検出面ということもあって遺構の帰属時期を示すかどうか慎重を期さねばならないが、この遺物の示す年代が井戸が最終的に廃棄された時期を示すものかもしれない。



第38図 井戸跡 S E01実測図

⑤ E 地区

層序 表土・水田耕作土及び床土を除去すると、古墳時代の遺構面となる。ベースは青灰褐色粘質土であった。

検出遺構 調査面積は、約4,000㎡あり、ここから、掘立柱建物跡、柵列、竪穴式住居跡、溝、土坑などがまとめて確認された。

掘立柱建物跡 S B01 桁行2間(4.2m)×梁間2間(3.5m)を測る。主軸は、N-23°-Wである。柱穴は、方形と円形のものがあり、方形のものは一辺約60cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B02 桁行5間(8.3m)×梁間3間(5.9m)を測り、東側に1間分の廂がつく南北棟の建物跡である。桁と廂の部分の柱穴の位置は対応している。主軸は、N-12°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30~40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B03 桁行3間(5.6m)×梁間2間(3.9m)を測る。主軸は、N-12°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B04 桁行2間(4.0m)×梁間3間(6.2m)を測る東西棟の建物跡である。主軸はN-21°-Eである。柱穴は、やや大きいものと小さいものがあるが、円形で約30~40cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B05 桁行2間(4.4m)×梁間2間(3.9m)を測る建物跡である。桁部分の柱穴は、水路で削平されているが、2間または3間の規模を持つものと考えられる。

付表2 E地区掘立柱建物跡群規模一覧表

*規模の覧の桁行の寸法が二段のものは上段建物のみ、下段、廂部分を含めた寸法を示す。

建物 番号	規模 (m×m) 桁行 梁間	一間(m) 桁行 梁間	床面積 (㎡)	方向	備考	ピットの 形状	直径か 一辺長	深さ
SB01	2(4.2)×2(3.5)	1.7×2.0	14.7	N-23°-W		隅丸方形	60~90	40~60
SB02	5(8.3)×3(5.9) (6.9)×(8.3)	1.7×1.7 1.9×1.9	45.2 総54.3	N-12°-W	廂	円形	60~90	30~60
SB03	3(5.6)×2(3.9)	1.9×2.2	21.8	N-12°-W		円形	50~90	40
SB04	2(4.0)×3(6.2)	4.4×2.0	24.8	N-21°-W		円形	40~90	40
SB05	2(4.4)×2(3.9)	1.7×1.7	17.1	N-8°-W		隅丸方形	60	30~40
SB06	3(5.3)×2(3.5)	1.8×3.6	18.5	N-9°-W		円形	60~80	30~40
SB07	4(7.2)×1(3.6)	1.9×2.8	25.9	N-14°-W		円形	60~90	40~50
SB08	5(9.7)×2(5.7) (9.7)×(7.4)	1.5×1.4	55.2 総71.7	N-45°-W	廂、総柱	隅丸方形	60~100	50
SB09	2(3.0)×1(1.4)	1.5×1.4	4.2	N-14°-W		円形	40~50	
SB10	3(4.1)×2(3.5)	1.7×1.3	14.3	N-27°-W		円形	40~60	30~40
SB11	3(5.9)×3(4.0)	2.0×1.3	23.6	N-19°-W		円形	50~60	30~40
SB12	2(4.4)×2(3.7)	2.2×1.8	16.2	N-15°-W		円形	40~60	10~40
SB13	2(4.3)×2(3.2)	1.9×1.6	12.4	N-15°-W		円形	30~70	40~60
SB14	4(7.8)×3(5.0)	1.7×2.0	39	N-15°-W		円形	60~80	30~60
SB15	4(6.2)×3(4.5)	1.5×1.5	27.9	N-27°-W		円形	60~80	20~60
SB16	4(9.2)×3(4.8)	3.0×1.6	44.1	N-20°-W		隅丸方形	60~80	30~50
SB17	3(5.8)×2(4.3)	1.9×2.1	24.9	N-23°-W		円形	30~50	10~40
SB18	5(10.1)×2(4.0)	2.0×2.0	40.4	N-21°-W		隅丸方形	80~100	30~60
SB19	2(4.7)×2(4.7) (7.4)×(7.1)	2.3×2.3	22.9 総52.5	N-19°-W	廂、塀	隅丸方形	60~100	30~50
SB21	6(9.6)×3(4.9)	1.6×1.6	47	N-13°-W		隅丸方形	60~100	40~50
SB23	8(14.7)×3(4.6)	1.8×1.5	67.6	N-27°-W	廂	隅丸方形	60~110	30~60
SB24	6(8.6)×3(4.8)	1.5×1.1	41.2	N-22°-W		円形	40~70	
SB27	3(5.4)×3(4.4)	1.8×1.4	23.7	N-20°-W		隅丸方形	60~100	30~50
SB28	2(4.3)×1(1.6)	2.1×1.6	6.8	N-14°-W		円形	40~60	40~60
SB29	2以上(4.0以上) ×2(5.1)	1.9×3.6	83.2以上	N-3°-W		隅丸方形	70~140	40~60
SB31	5(9.4)×1(5.0)	1.9×5.0	47	N-15°-W		円形	60~80	
SB33	3(4.4)×1(3.3)	1.4×3.3	14.5	N-26°-W		円形	60~90	30~40
SB34	5(8.3)×4(5.7) (8.2)×(8.3)	1.6×1.4	47.3 総68	N-27°-W	廂	隅丸方形	60~80	30~60
SB36	3(4.4)×1(1.6)	1.5×1.6	7	N-22°-W		隅丸方形	30~70	30~40
SB37	3(5.0)×2(3.8)	1.9×1.7	19	N-5°-W		円形	60~80	10
SA38	9(24.5)	2.6		N-27°-W		隅丸方形	80×70~150×90	

SA40	10(16.2)	1.8		N-19°-W		円形	60~80	30~50
SH41	4.6×4.0		18.4	N-18°-W				
SH42	5.0×4.4		22	N-20°-W				
SH43	4.4×4.8		21.1	N-31°-W				

主軸は、N-8°-Wである。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約30~40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 06 桁行3間(5.3m)×梁間2間(3.5m)を測る東西棟の建物跡である。主軸は、N-9°-Wである。柱穴は、隅丸方形と円形のものがあるが、梁の部分はおおむね隅丸方形で一辺約40cm・深さ約30~40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 07 桁行4間(7.2m)×梁間1間(3.6m)を測る南北棟の建物跡である。主軸は、N-14°-Wである。柱穴は、隅丸方形であるが大きさにややばらつきがあり、一辺約30~50cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 08 桁行5間(9.7m)×梁間2間(5.7m)を測り、東南側に1間の廂がつく建物跡である。廂の部分の柱穴は、建物跡の部分より一回り小ぶりであり、桁と廂の柱穴の位置は必ずしも対応していない。身舎の中心には軒を持たせる柱穴が並んでいることから、建物内部を柱により細かく区切っていたことがわかる。主軸は、N-45°-Eで、掘立柱建物跡の中ではこの建物跡のみかなり主軸がふれている。柱穴は、隅丸方形で一辺約40~60cm・深さ約40~50cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 09 桁行2間(3.0m)×梁間1間(1.4m)を測る南北棟の小ぶりな建物跡である。主軸は、N-14°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 10 桁行3間(4.1m)×梁間2間(3.5m)を測る南北棟の建物跡である。主軸は、N-27°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。

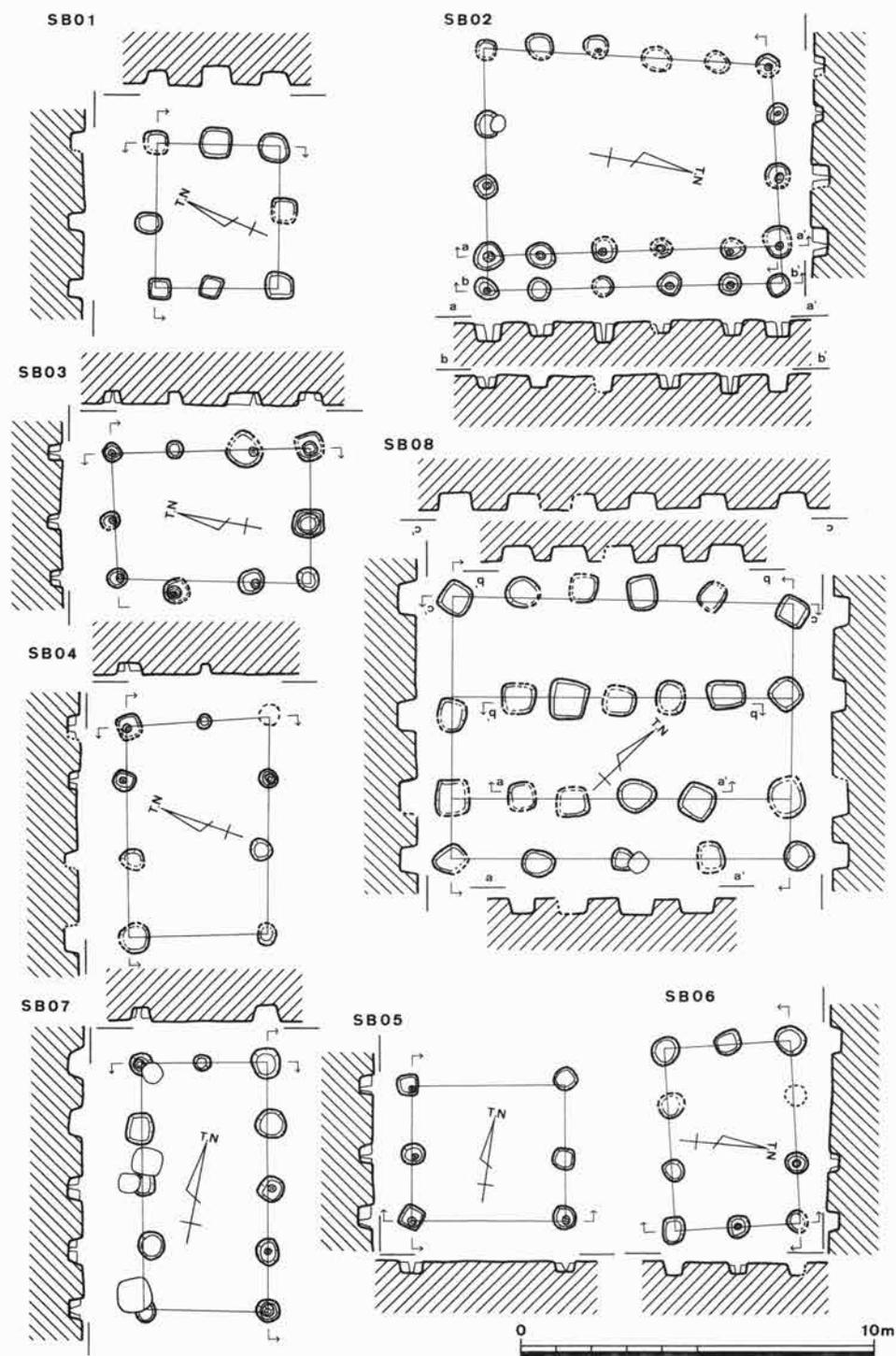
掘立柱建物跡 S B 11 桁行3間(5.9m)×梁間3間(4.0m)を測る東西棟の建物跡である。主軸は、N-19°-Wである。柱穴は、円形で約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 12 桁行2間(4.4m)×梁間2間(3.7m)の建物跡である。主軸は、N-15°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 13 桁行2間(4.3m)×梁間2間(3.2m)の建物跡である。主軸は、N-15°-Wである。柱穴は、円形で約30cm・深さ約30cmを測る。P 1301から須恵器杯身の口縁部片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 14 桁行4間(7.8m)×梁間3間(5.0m)を測る南北棟の建物跡である。主軸は、N-15°-Wである。柱穴は、隅丸方形で一辺約40~50cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 15 桁行4間(6.2m)×梁間3間(4.5m)を測る東西棟の建物跡である。主軸は、N-27°-Wである。柱穴は、隅丸方形で一辺約40~50cm・深さ約40cmを測る。



第39図 E地区掘立柱建物跡実測図(1) 断面図のレベルはすべて109.0mである。

掘立柱建物跡 S B 16 桁行4間(9.2m)×梁間3間(4.8m)を測る南北棟の建物跡である。主軸は、 $N-20^{\circ}-W$ である。柱穴は隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 17 桁行3間(5.8m)×梁間2間(4.3m)を測る東西棟の建物跡である。主軸は、 $N-23^{\circ}-W$ である。柱穴は円形で直径約30~40cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 18 桁行5間(10.1m)×梁間2間(4.0m)を測る南北棟の比較的大きな建物跡である。主軸は、 $N-21^{\circ}-W$ である。柱穴は、整った隅丸方形で外郭線は大体そろい一辺約50~60cm・深さ約50cmを測る。P1801からはほぼ完形の須恵器蓋の口縁部片、P1809からは須恵器杯身・杯蓋の口縁部片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 19 桁行2間(4.7m)×梁間2間(4.7m)を測る身舎に3間×3間の四面廂がつく。東・南側には4間の規模で孫廂が取り付いている。主軸は、 $N-19^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40~50cm・深さ約40cmを測る。P1902と1905から須恵器蓋の口縁部片、P1904からは須恵器杯身の口縁部片が出土した。

掘立柱建物跡 S B 20 桁行2間(3.2m)×梁間2間(2.4m)の建物跡である。主軸は、 $N-29^{\circ}-W$ である。柱穴は、円形で直径約30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 21 桁行6間(9.6m)×梁間3間(4.9m)を測る南北棟の建物跡である。主軸は、 $N-13^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

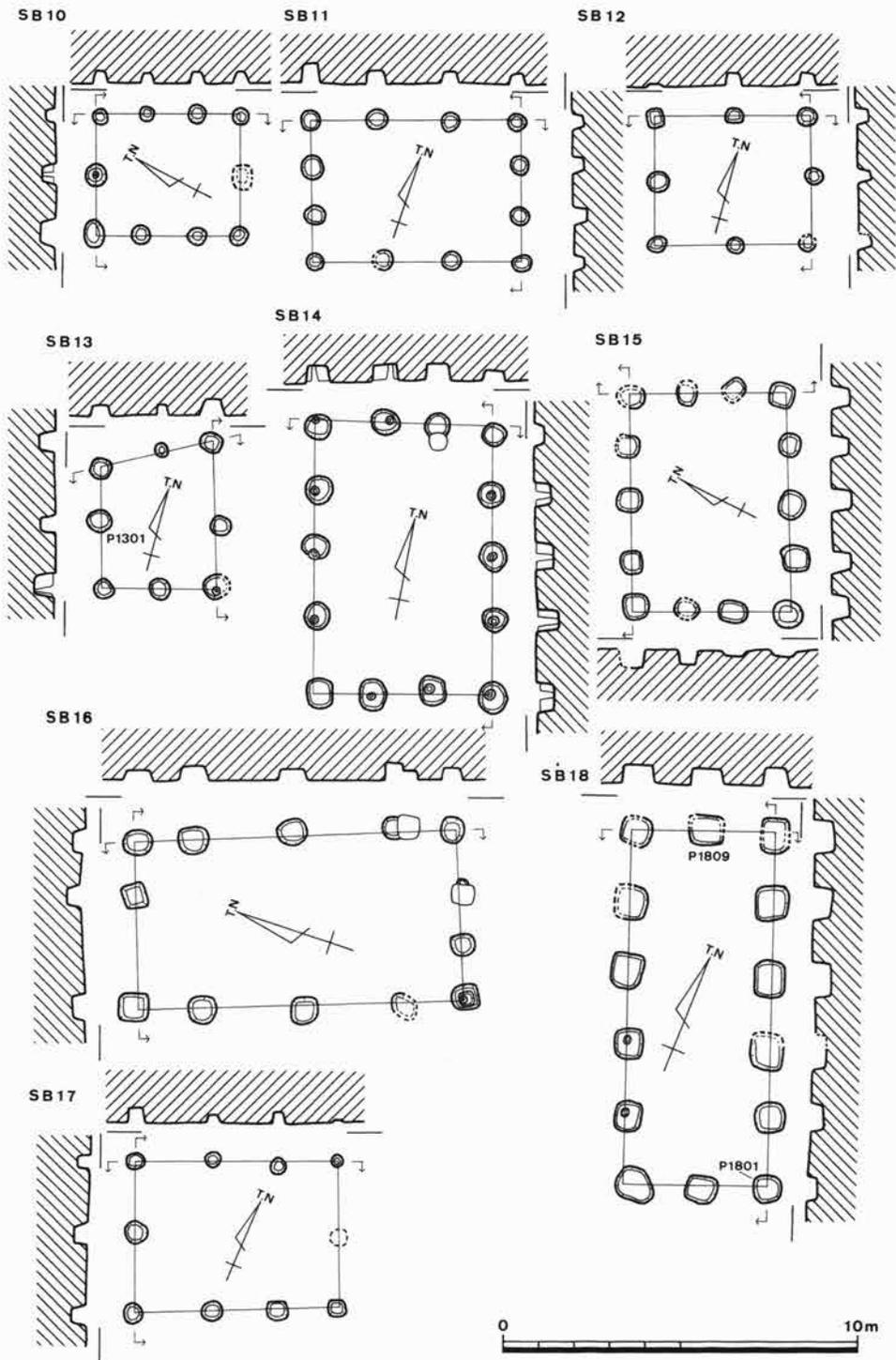
掘立柱建物跡 S B 22 桁行5間(8.0m)×梁間1間(1.6m)以上を測る建物跡である。主軸は、 $N-18^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 23 この建物跡は、掘立柱建物跡の中でも特に大きなもので三面廂を持つ東西棟の建物跡である。身舎は桁行8間(14.7m)×梁間3間(4.6m)、廂は桁行7間(16.5m)×梁間3間(8.3m)を測り、建物跡の面積は140㎡を越える。主軸は、 $N-27^{\circ}-W$ である。この建物跡は、身舎と廂の柱通りがそろっていない。身舎と比べると、廂の方が柱間の間隔があき、特に廂の北辺は柱間の間隔にややばらつきが見られる。

柱掘形の大きさは、方形で一辺約60~80cm・深さ約40~50cmを測る。出土遺物として柱穴P2308から一番多くの遺物が出土しており、杯身・杯蓋が6点まとまって出土した。P2302から完形の須恵器杯身、P2311から須恵器杯蓋の口縁部片も出土している。出土した土器の年代観は一定ではなく混入が考えられるが、おおむね建物跡の時期は6世紀末~7世紀初頭頃と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 24 桁行6間(8.6m)×梁間3間(4.8m)の建物跡である。主軸は、 $N-22^{\circ}-W$ である。柱穴には隅丸方形と円形のものがあるが、円形で直径約30~40cm・深さ約30cmを測る。

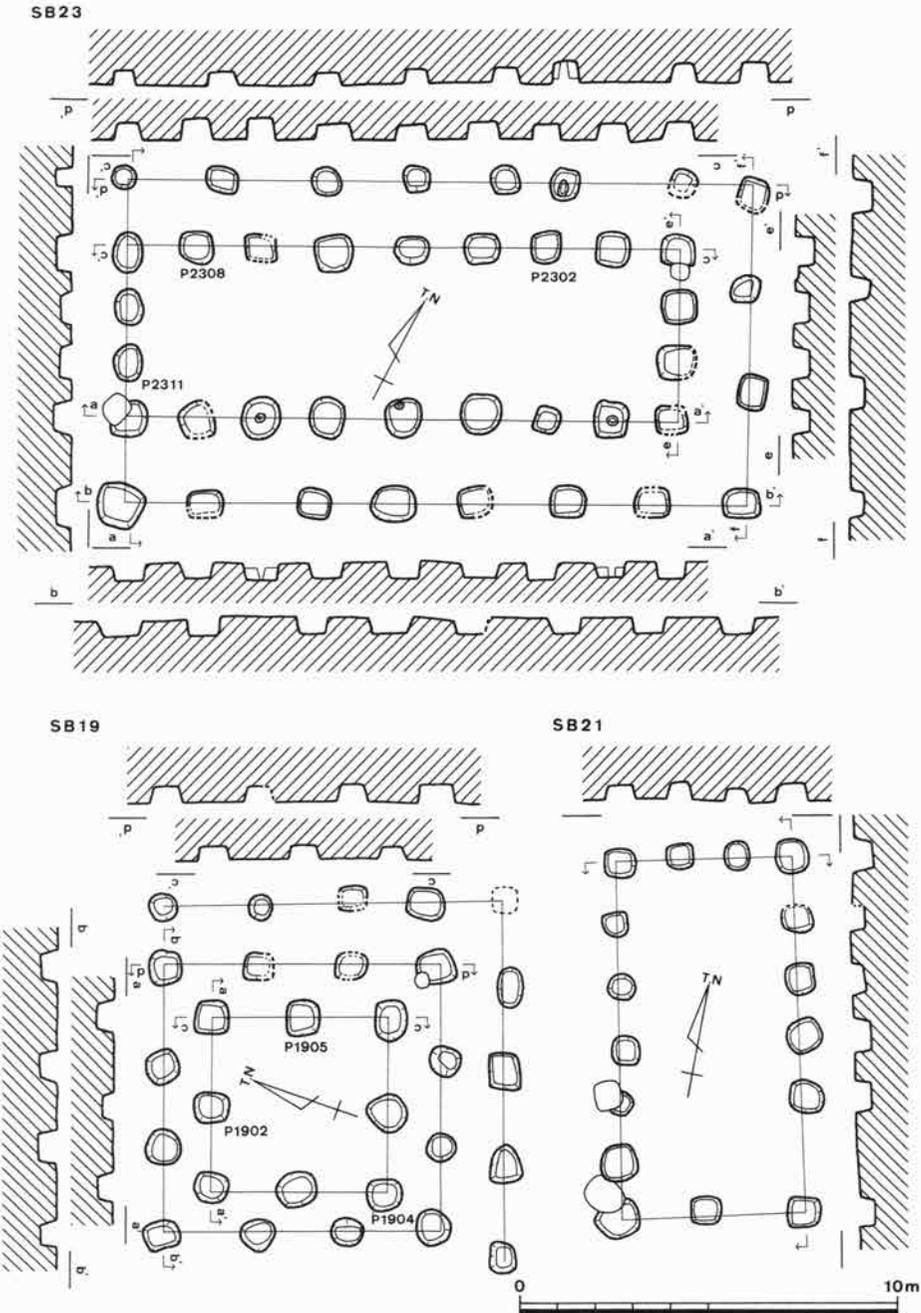
掘立柱建物跡 S B 25 桁行5間(8.3m)×梁間3間(5.6m)以上を測り、調査地西側に



第40图 E地区掘立柱建物跡実測图(2)

向かってのびる建物跡である。主軸は、 $N-16^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40~50cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 26 桁行6間(11.2m)×梁間4間(7.5m)の南北棟の建物跡である。



第41図 E地区掘立柱建物跡実測図(3)

調査地南辺で確認したため、さらに南にのびる可能性がある。主軸は、 $N-12^{\circ}-W$ である。柱穴は隅丸方形で、大きさは一辺約1m・深さ約50~60cmを測る。面積は約85 m^2 であり、掘立柱建物跡23に次いで大きなものである。出土遺物として、P2601とP2602から須恵器杯蓋の口縁部片、P2603から須恵器杯蓋の口縁部片と高杯の脚部片、P2604からは須恵器杯身4点、杯蓋2点、壺の口縁部片1点とまとまって出土している。

掘立柱建物跡 S B 27 桁行3間(5.4m)×梁間3間(4.4m)の建物跡である。主軸は、 $N-20^{\circ}-W$ である。柱穴の大きさも形状もばらばらであるが、東側の桁行は隅丸方形で一辺50~60cm・深さ約50cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 28 桁行2間(4.3m)×梁間1間(1.6m)の小規模な建物跡である。主軸は、 $N-14^{\circ}-W$ である。柱穴の大きさは円形で直径30cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 29 桁行2間(4.0m)以上×梁間2間(5.1m)の建物跡である。主軸は、 $N-3^{\circ}-W$ である。柱穴の大きさも形状もばらばらであるが、隅丸方形のものは一辺40~60cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 30 桁行3間(4.4m)以上×梁間1間(1.6m)以上の建物跡である。主軸は、 $N-10^{\circ}-W$ である。柱穴は隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 31 桁行5間(9.4m)×梁間1間(5.0m)の南北棟の建物跡である。梁間の間隔はつまっており、1.2~1.4mである。主軸は、 $N-15^{\circ}-W$ である。柱穴の大きさは、円形で直径40cm・深さ約30cmを測る。

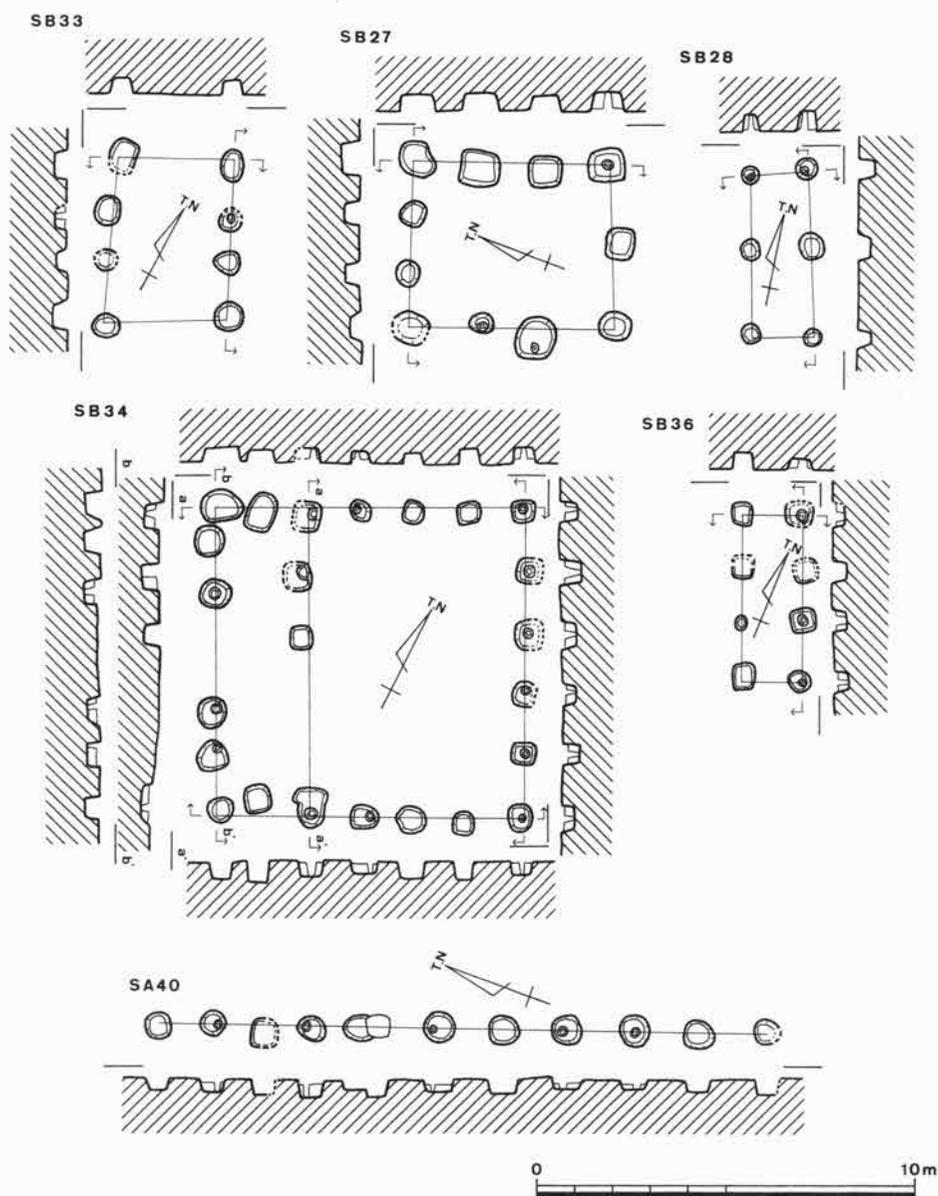
掘立柱建物跡 S B 32 桁行2間(1.6m)以上×梁間2間(3.2m)の建物跡である。主軸は、 $N-15^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 33 やや歪んだ平面形をとるが、規模は桁行3間(4.4m)×梁間1間(3.3m)である。主軸は、 $N-26^{\circ}-W$ である。柱穴は、円形で直径約30~40cm・深さ約30cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 34 身舎の部分は、桁行5間(8.3m)×梁間4間(5.7m)を測り、西側に2間(2.6m)の廂がつく建物跡である。桁と廂の部分の柱穴の位置は、身舎の部分の柱穴が一部攪乱されており、未確認のものもあるが、必ずしも対応していない。主軸は、 $N-27^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 35 調査地南辺で確認したため、建物跡全体の規模は不明であるが、東西2間(5.1m)以上を測る。主軸は、 $N-24^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 36 桁行3間(4.4m)×梁間1間(1.6m)の建物跡である。主軸は、 $N-22^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約40cm・深さ約40cmを測る。



第42図 E地区掘立柱建物跡(4)・柵跡実測図

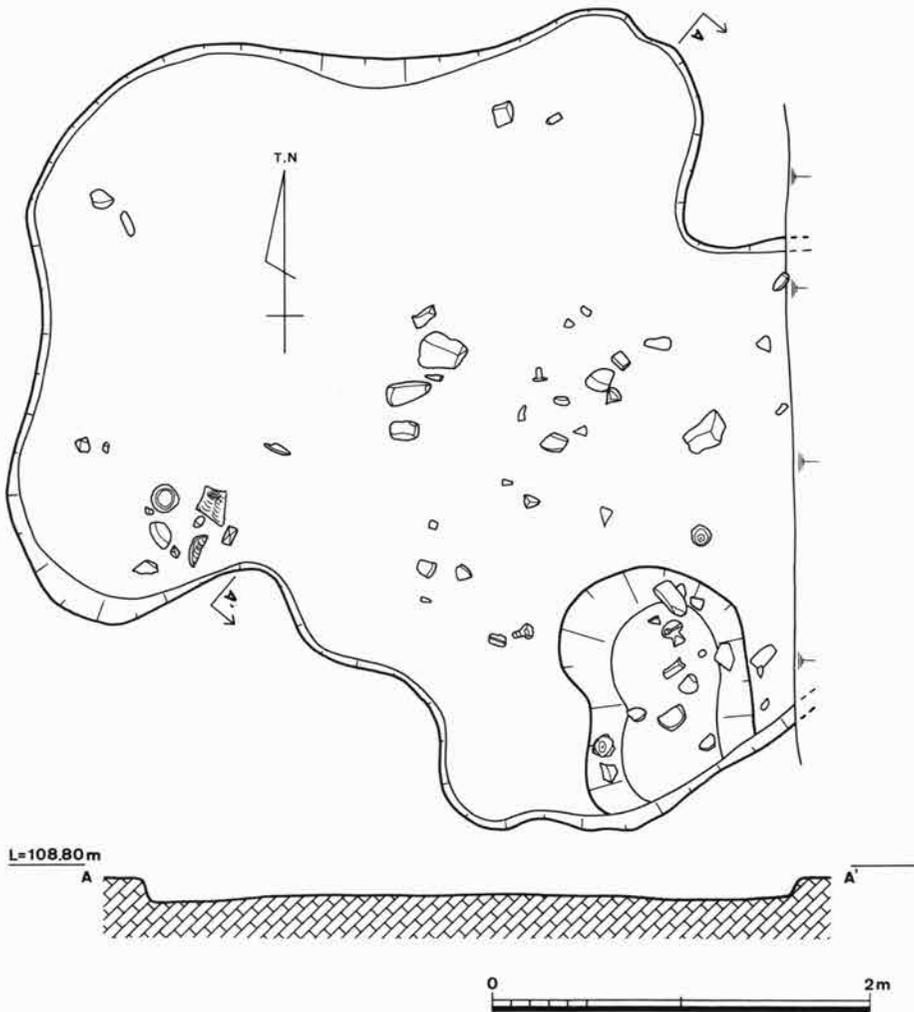
掘立柱建物跡 S B37 桁行3間(5.0m)×梁間2間(3.8m)の建物跡である。主軸は、 $N-5^{\circ}-W$ である。柱穴は、隅丸方形で一辺約30~40cm・深さ約40cmを測る。

柵列 S A38 柱穴の大きさは長方形のものが多く、長辺90cm×短辺70cmと大型で、深さは約60cmを測る。方位は、 $N-27^{\circ}-W$ である。S D01の南側から9間(24.5m)以上の規模で南に向かってのびるが、水路により削平され全体の規模は不明である。

欄列 S A 40 柱穴は円形に近い隅丸方形で、一辺約40cm・深さ約40cmを測る。方位は、 $N-19^{\circ}-W$ である。S B 34と切り合いがあり、南北10間(16.2m)の規模を持つ。

竪穴式住居跡 S H 41 掘立柱建物跡 S H 04の東側で検出した。平面形は隅丸方形で、大きさは一辺4m、深さは約5cmを測る。方位的には掘立柱建物跡と概ね平行している。北辺中央で楕円形に赤褐色土と炭が混じった竈跡と思われる痕跡も確認した。また、南辺中央付近でも同様の赤褐色土と炭が混じった部分を検出した。出土遺物としては土師器の細片を確認したにすぎなかった。

竪穴式住居跡 S H 42 竪穴式住居跡 S H 01の南側に隣接して検出した。S H 01と切り合い関係はない。平面形は隅丸方形で、竪穴式住居跡 S H 01よりやや大きく一辺約5m・



第43図 E地区土坑S K 45実測図

深さは約5cmを測る。出土遺物は、ここでも土師器の細片を確認したにすぎない。

竪穴式住居跡SH43 掘立柱建物跡SB04の南側、竪穴式住居跡SH42の西側で検出した。いずれの遺構とも切り合い関係は持たない。平面形は隅丸方形で、大きさは一辺4m・深さ約5cmを測る。出土遺物としては土師器の細片を確認しただけである。

竪穴式住居跡SH44 掘立柱建物跡SB31の南側、掘立柱建物跡SB34の西側で検出した。竪穴式住居跡ながら、SB34と概ね平行している。平面形は隅丸方形で、大きさは一辺約3m・深さ約5cmを測り、竪穴式住居跡のなかでは一番小さい。出土遺物としては土師器の細片を確認したにすぎない。

土坑SK45 遺構群の一番北側で検出した。平面形は不定形で、大きさは北辺約4m・深さ約10cmと浅い。出土遺物は比較的多く、須恵器の杯身・杯蓋・甕・甔などがあり、注目すべきものとして検出面付近で勾玉も出土している。この遺物は遺構の性格を考えると興味深い。この土坑の周囲には何ら遺構はなく、掘立柱建物跡群の周囲に単独で存在するものとして注目される。

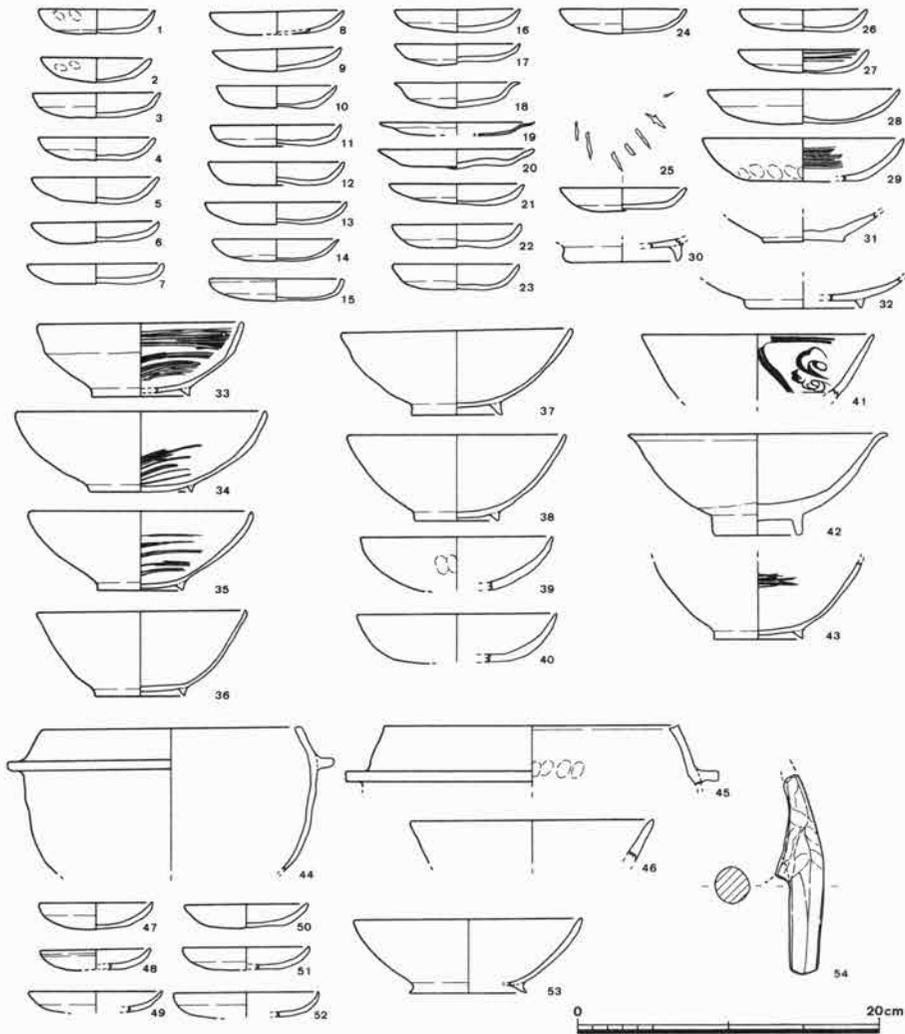
溝跡SD01 掘立柱建物跡SB11～14の北側約2mにあり、東西方向にのびるものである。東端は水路によって切られるが、それ以上東へのびないし、屈曲部も確認されていない。西側は調査地外へのびる。大きさは幅約80cm・深さ約20cmを測る。溝の断面は非常にゆるい「U」字形を描く。この溝の北側には、掘立柱建物跡SB08を除いて柱掘形のやや小さい建物跡群があり、掘立柱建物跡SB11～14もほぼ軸を合わせて並ぶことから、掘立柱建物跡群を区画する溝だと考えられる。溝の中からは、須恵器の甕の口縁部片と、土師器の甕がほぼ完形で確認された。

(原田三壽)

3. 出土遺物

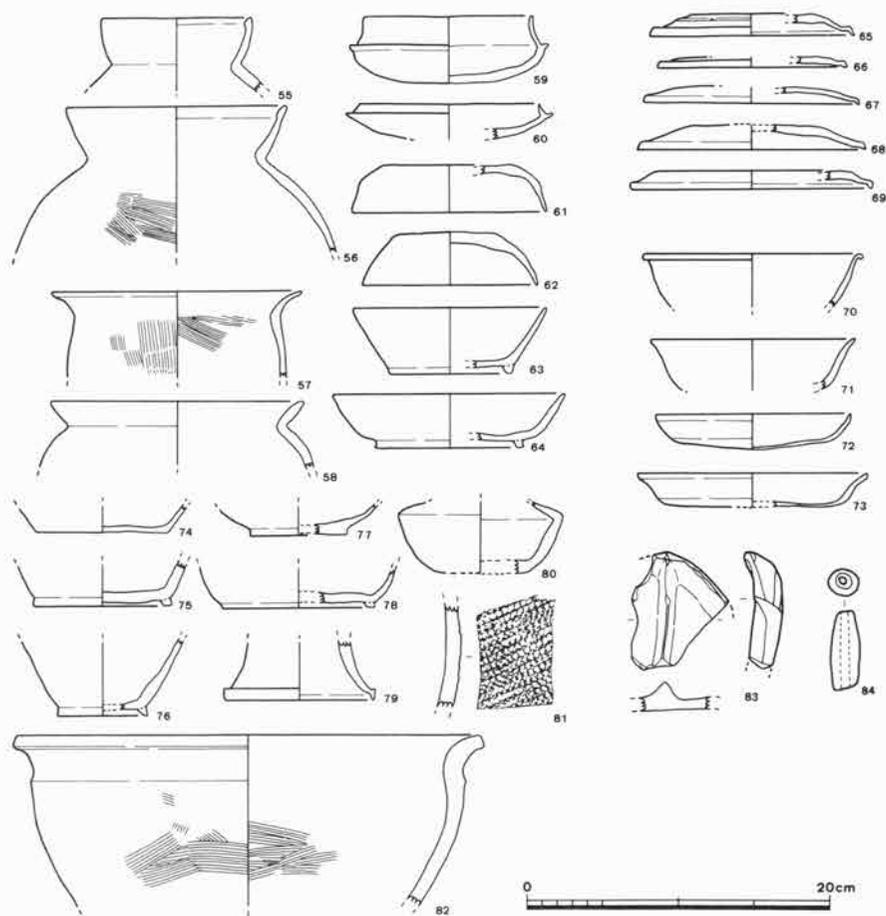
今回出土した遺物は、土器・木器・鉄器・土製品・石製品・ガラス玉・フィゴの羽口・金属塊・獣歯骨・堅果類など多種にわたる。その中で多数を占めるのは土器である。

①A地区出土遺物(第44図) 遺物の大半は、瓦器椀、瓦器皿である。大別して瓦器皿は、口径約4cmのもの(1・3・6・8・17・21・27)と、約5cmのもの(19・20)の2種類がある。前者には、底部からゆるやかに外反しながら端部を尖り気味におさめるもの(1・3・6・7・8・14・16・17)と、丸くおさめるもの(2・4・5・7・21・27)がある。特異なものとして、端部を方形におさめるもの(15)や、口縁部を外反させるもの(18)がある。後者の口径5cmのものは18と同タイプであるが、器高が約1.2cm前後と浅い。瓦器椀には、口径13cm前後のもの(33・36)と、15cm前後のもの(35・37・38)、16cm以上のもの



第44図 A地区土坑出土遺物実測図

(34)がある。器高は7cm前後のもの、7.5cmを超えるものに分類されるが、7.5cmのものが多く。高台は、いずれも断面三角形を呈する貼り付け高台である。高台の断面の形状は、37はしっかりとした作りであるが、33・36・38は高台の高さは約4mmで、高台の作りに簡略化が認められる。さらに、34・35になると、高台は貼り付けているものの、高台と底部で支持するかたちになっている。いずれも樟葉型の瓦器碗と思われる。青磁碗(41)は、口縁部だけの破片であるが、内面に印刻文が施されている。白磁碗(42)は、完形品である。口径17cm・器口6.5cmを測る。底部から内湾しながら斜め上方に立ち上がり、口縁部をさらに外側に屈曲させ端部は尖り気味におさめている。釉調は乳白色を呈し、外面下半部及

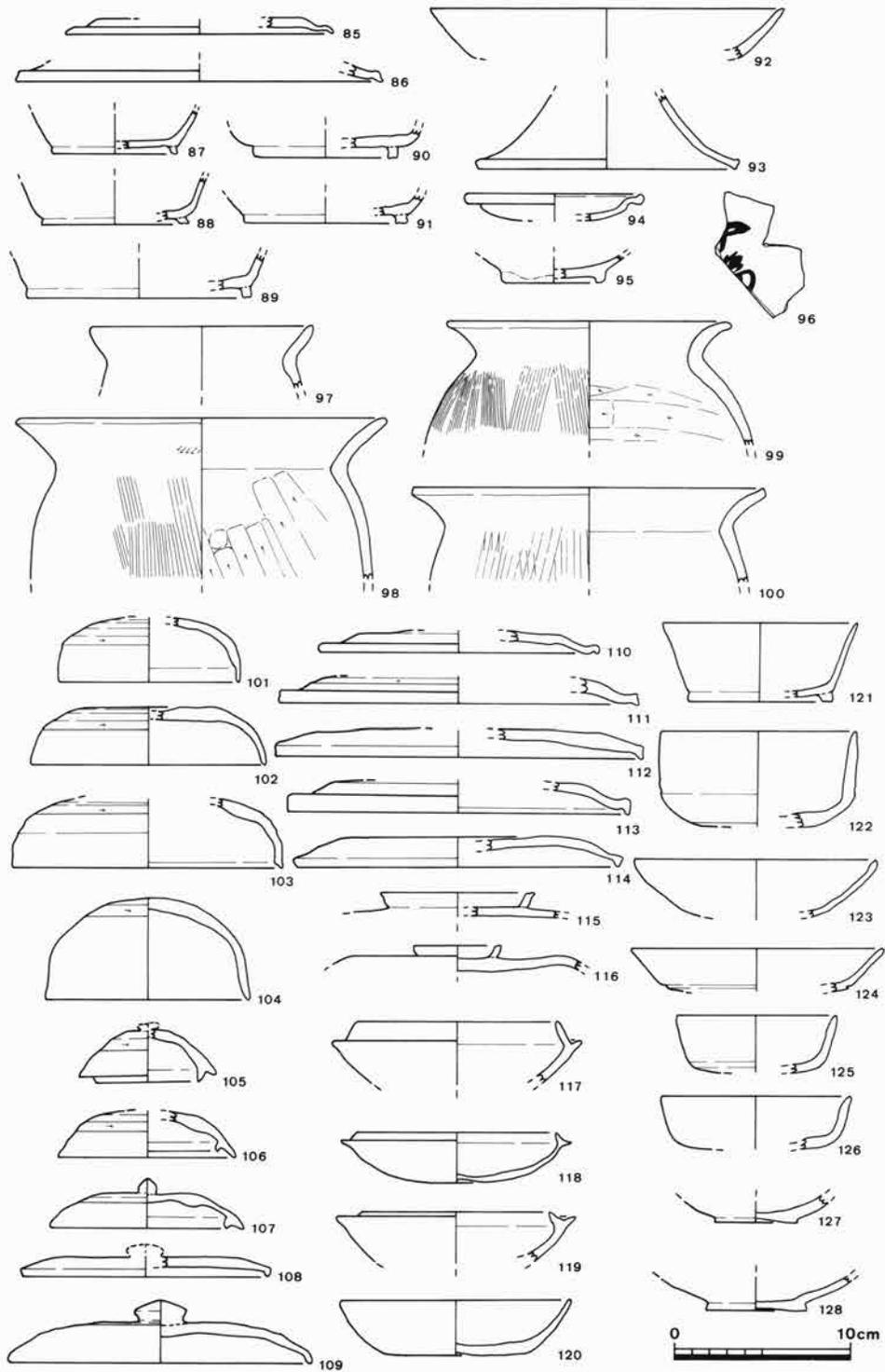


第45図 A地区出土遺物実測図(包含層)

び高台は露胎である。瓦質羽釜(44・45)は、2個体分が出土した。両個体は内外面とも器表面が剝離し、残存は不良である。脚(54)も出土しているが、接合関係は不明である。

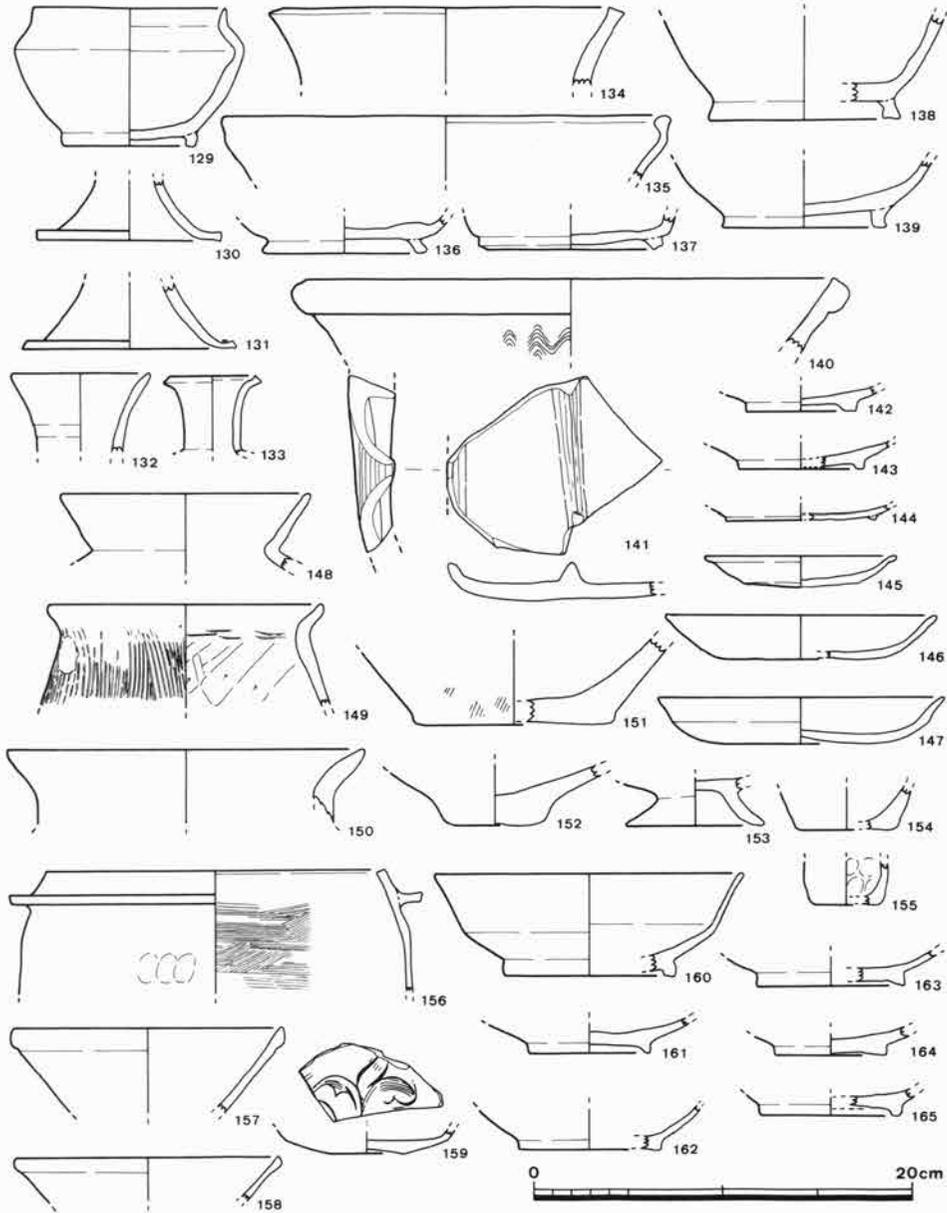
A地区包含層の遺物(第45図) 5～8世紀の土器などが出土した。いずれも破片がほとんどであり、器形全体を知り得る資料は少ない。土師器、須恵器、土製品として土錘がある。器種には甕・杯身・杯蓋・椀・高杯脚部・風字硯などがある。55・56は、布留式土器である。59～61は、杯身・杯蓋であり、6世紀後半の年代が与えられる。大半は、遺構を確認していないが、大部分が8世紀の土器である。

②B地区出土遺物 須恵器・土師器・瓦質羽釜・緑釉陶器・青磁椀などがある。85～100は、遺構に伴って出土した。96は、墨書土器である。底部と思われる外面に「中端」と思われる墨書が見られる。97～100は、土師器の甕口縁部である。98は、直線的な口縁部から頸部で屈曲し、肩の張らない器形を呈する。99は、口縁端部がわずかに外反する。



第46図 B地区出土遺物実測図(1)

体部は丸味を帯びる。98・99とも外面にハケ調整、内面はケズリが入る。101～103・117～119は、須恵器の杯蓋・杯身である。これらは、外面の約1/3にケズリ調整の残る段階のものであり、6世紀後半に比定できる。105～107は、蓋にかえりが逆転したもので、宝珠形などのつまみがつく。これらは、7世紀代のものである。108～116は、かえりがなくなり、端部を内側に屈曲させた蓋である。109以外は破片である。115・116は、断面方形の



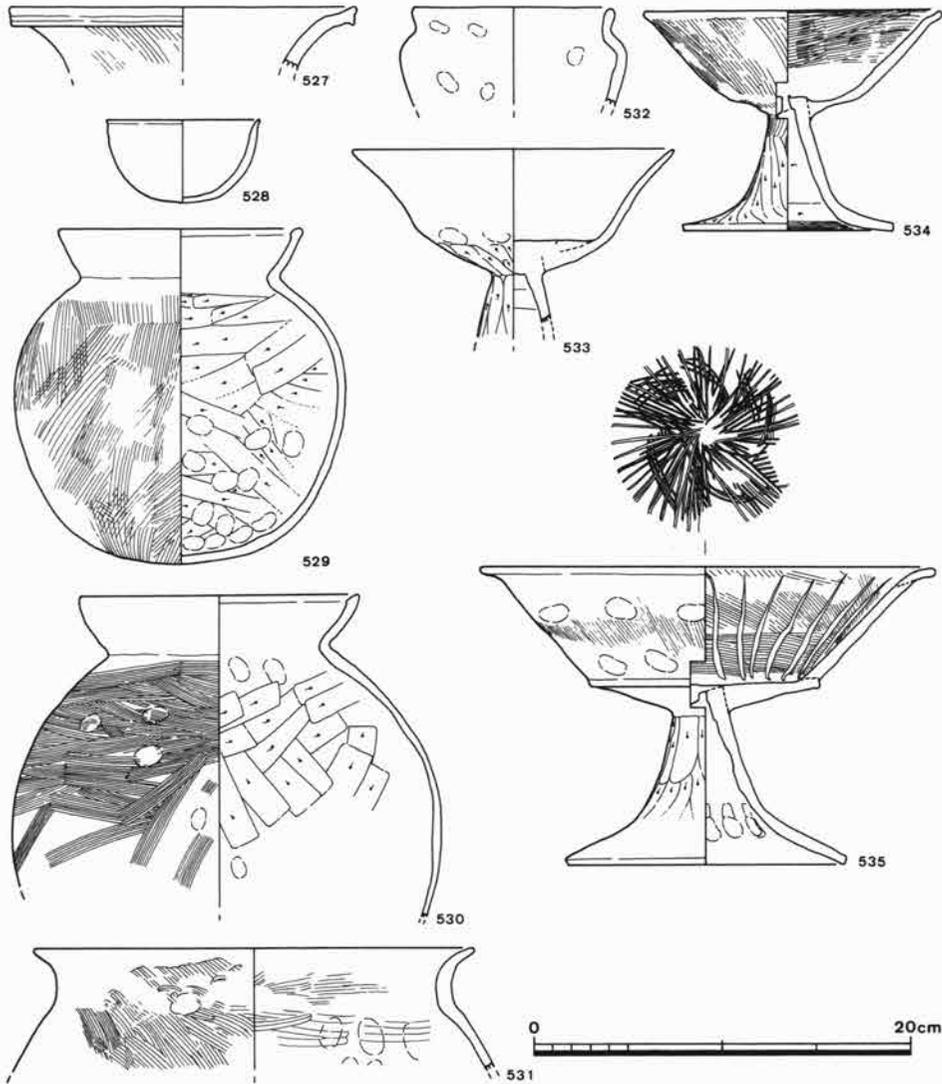
第47図 B地区出土遺物実測図(2)

突帯状のつまみがめぐるものである。127・128は、回転糸切り痕の残る杯である。129は、須恵器の短頸壺である。肩部に最大径を持ち、底部にむかってすぼまる器形を呈する。高台は貼り付け高台である。130・131は、須恵器の高杯脚部である。いずれも破片であり、底部はかなり広がる。133は、長頸壺(瓶子)の口縁部である。141は、二面硯である。155は、手捏ねのミニチュア土器である。156は、瓦質の羽釜である。体部外面には指頭圧痕が残り、内面にはハケ調整が残る。157～159は、白磁椀及び青磁椀である。157・158は、口縁部の破片であり、口縁端部は玉縁状をなす。159は、青磁椀底部破片であり、見込み部分に印刻花文が見られる。底部は露胎である。160～165は、緑釉陶器の椀である。焼成は、161を除いて、いずれも須恵質である。底部の破片が多いが、それぞれ高台部分のかたちの特徴が見られる。160・163・165は貼り付け高台、それ以外は削り出し高台である。162には底部に回転糸切り痕が見られる。

③C地区出土遺物 今回出土した遺物は、土器・木製品・鉄製品・土製品・石器・石製品・玉類・銭貨・フイゴの羽口・鉄滓・獣歯骨・堅果類など多種にわたる。その中で多数を占めるのは土器である。これらの遺物の大半が溝跡S D01から出土した。

a. 古墳時代の遺物

1 中期の土器(第48図) トレンチ南端で確認した、自然流路状遺構の埋土である、暗黒灰色粘質土中に包含されていたC地区S D01下層出土の一括土器である。器種は広口壺、小型椀、短頸壺、甕、高杯がある。527は、広口壺の口縁部の破片である。口縁端部外面に粘土を接ぎ足し肥厚させ、端面に凹線をめぐらせている。口縁部外面はハケ調整である。528は、小型の椀である。粘土紐巻き上げで指頭による整形である。外面は、口縁部をヨコナデしたのち、口縁端部下に凹線を施している。胎土は砂粒を含んでいる。529・530は、布留式甕である。529は、口縁端部内面を肥厚させた布留式土器特有の口縁端部の特徴を示す。外面は不定方向のハケが施される。内面は不定方向のヘラケズリの後、底部は指頭により調整が加えられている。完形品である。533～535は、高杯である。533・534は、杯部に屈曲がなく、椀型を呈するタイプである。533は、脚底部が破損している。杯部と脚部の接合は脚軸部を絞り込んで穴を塞ぎ、軸部上面を粘土で充填し、平滑に仕上げ、杯部を作り足したものと思われる(B手法)。534は、ほぼ完形である。杯部外面は口縁部下をハケ調整している。内面はやや右上がりのハケを施す。脚部外面は軸部から底部方向にヘラケズリが入る。杯部と脚部の接合方法は、脚軸部を絞り込まずに、軸部上面を粘土で充填し、杯部を作り足したと思われる(A手法)。535は、杯部に屈曲を持つタイプである。ほぼ完形である。外面はハケ調整ののち口縁部下をヨコナデしている。口縁端部下には不明瞭であるが、一条の沈線が施されている。内面はハケのちナデ、その後、屈曲部

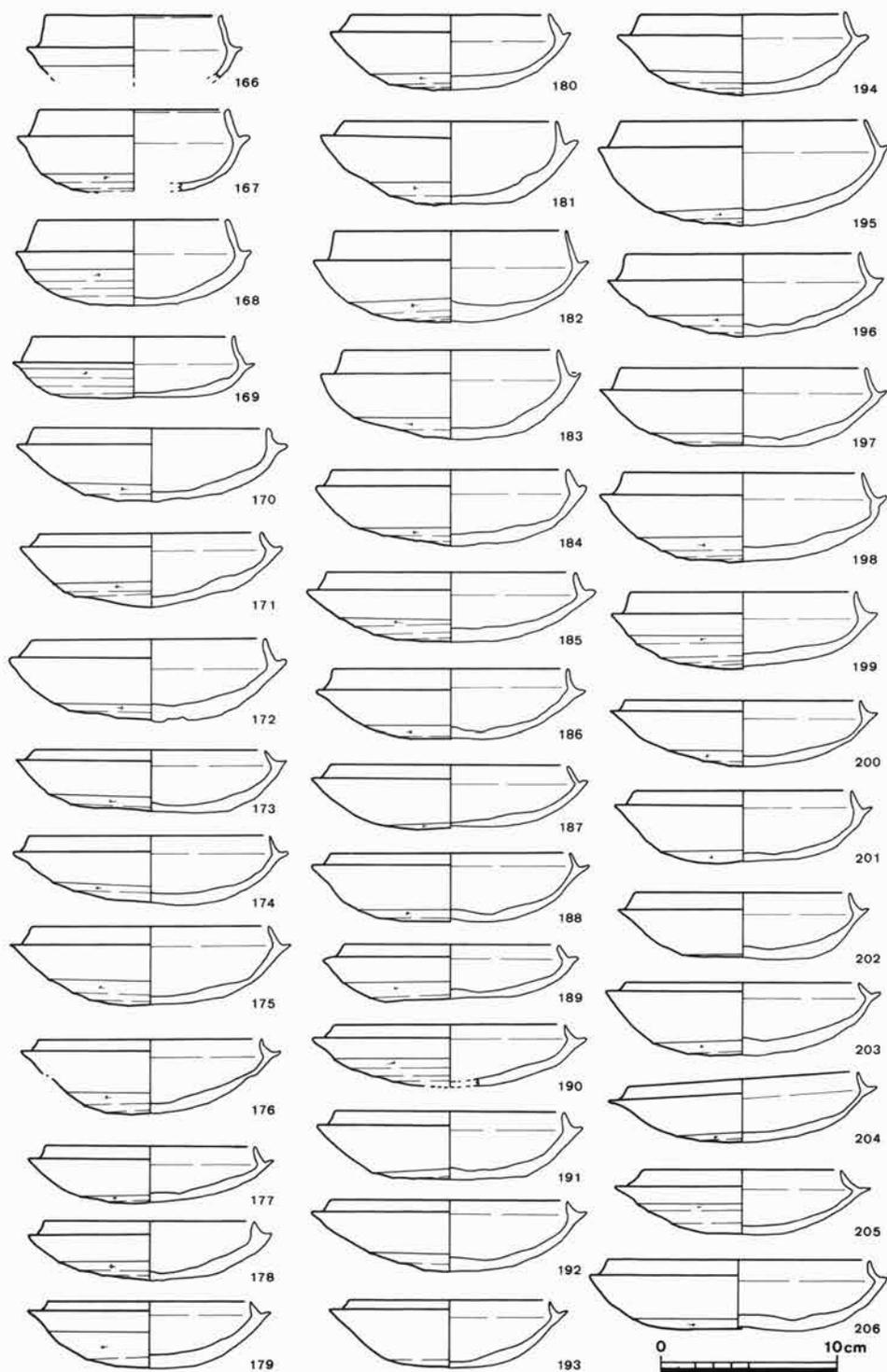


第48図 C地区出土遺物実測図(1)

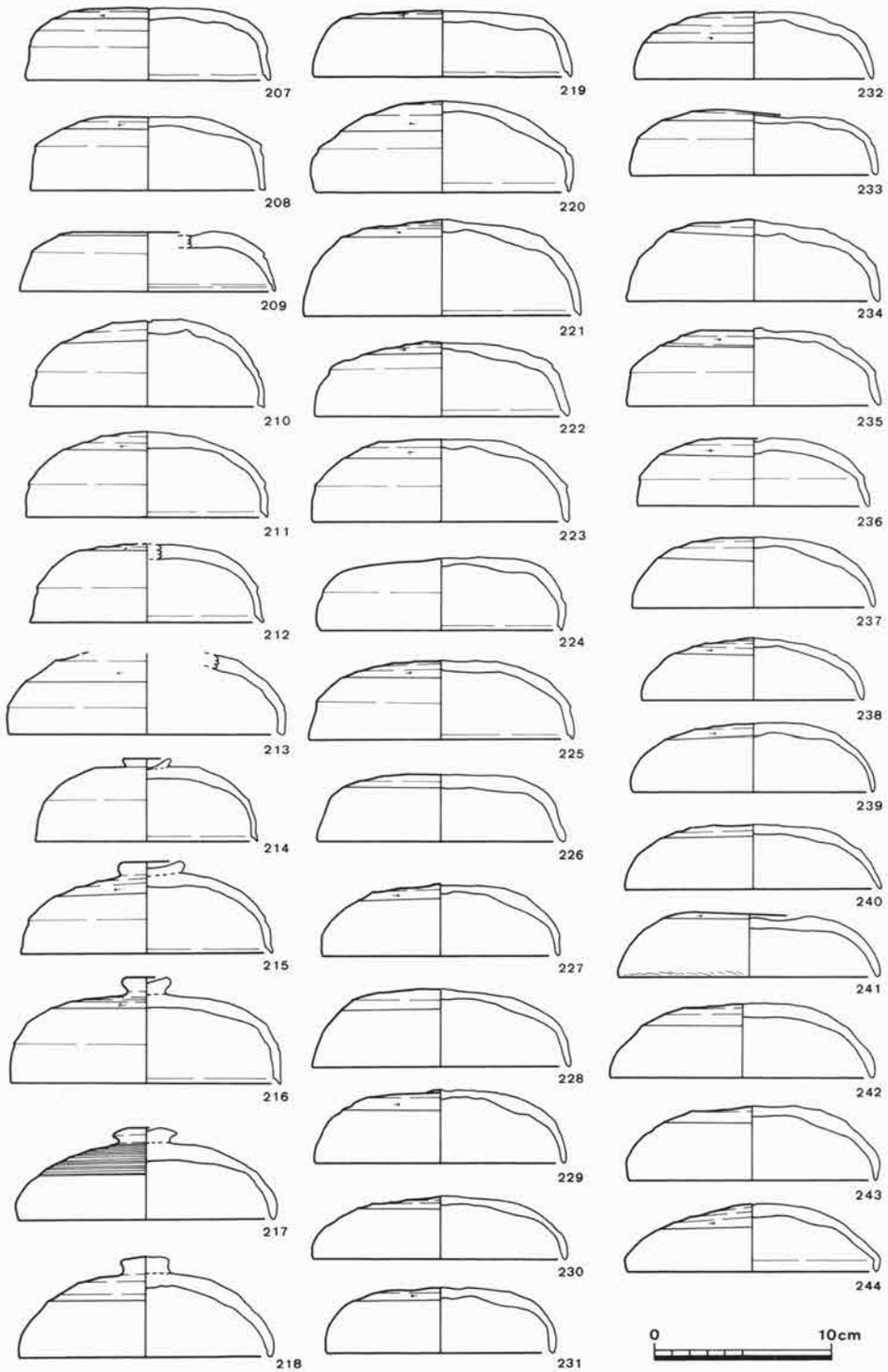
から口縁部に向って放射状にヘラミガキが施される。見込み部分には放射状のヘラミガキの後、時計方向のヘラミガキが施されている。脚部と軸部の接合方法はA手法である。脚部は下から上にヘラケズリが施される。また、脚端部には凹線が施される。ただし、527・528・531・532は、混入の可能性もあり、6世紀に下る可能性が考えられる。

II 後期の土器

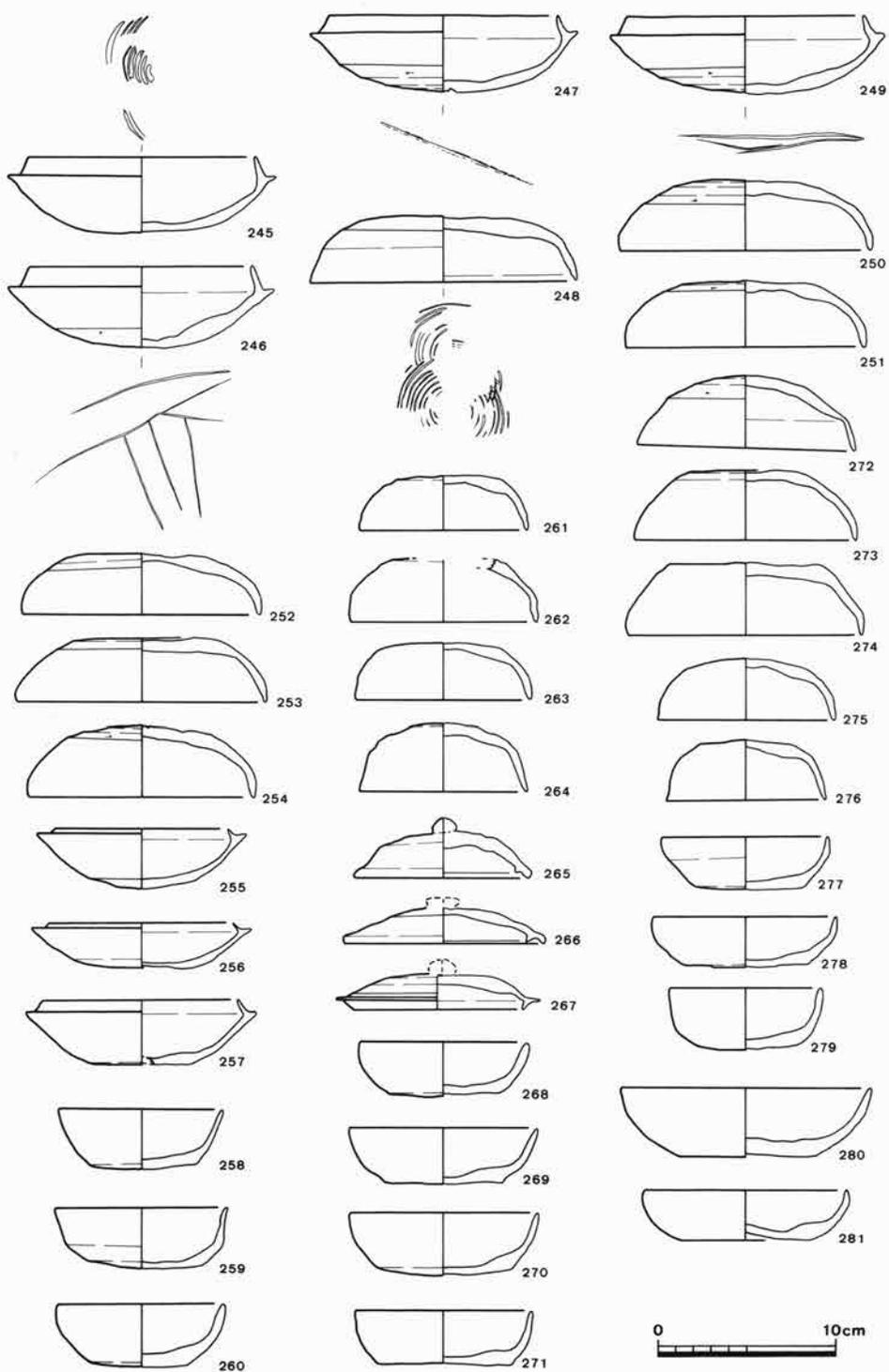
須恵器 器種は、杯身・杯蓋、有蓋高杯蓋、無蓋高杯、甗、椀、長頸壺、短頸壺、提瓶、すり鉢、横瓶、甕などがある。



第49図 C地区出土遺物実測図(2)



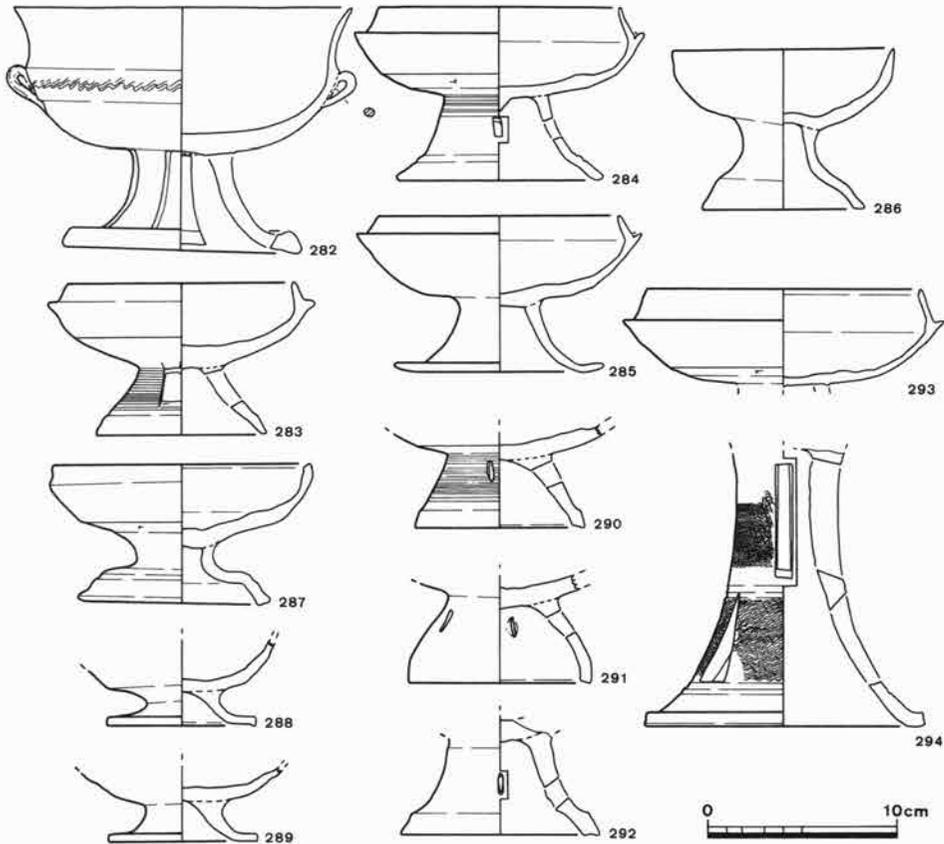
第50図 C地区出土遺物実測図(3)



第51图 C地区出土遗物实测图(4)

杯身(166~206) 166~169は、口径約10~11cm・器高約5cmを測るものである。受け部は長く、内傾しながら立ち上がる。底部のヘラケズリ調整も比較的ていねいになされている。このタイプの杯身は出土総量からすると、少数である。陶邑編年のTK47型式併行と思われる。170~206は、底部外面のケズリ調整も1/3程度に限定される。また、受け部も短くなる。口径は約13cm以上、器高は約4.5~5cm前後のものが多く、最も大型化した段階であり、時期はTK209型式併行にあたる。この段階の資料が最多である。

杯蓋(207~244) 207~209は、天井部と口縁部の境に比較的明確な稜を残している。ヘラケズリ調整の範囲も外面の1/2~2/3に及ぶ。内面はていねいなナデ調整である。214~218は、有蓋高杯の蓋である。つまみは中央部分が凹むもの(214~216)と、断面が扁平な算盤玉状を呈するもの(217)、柱状のもの(218)がある。217は、外面にカキメが施されている。219~244は、口径約13~14cm前後・器高約4~5cm前後のものである。この段階になると、外面のヘラケズリは天井部から約1/3の範囲にとどまる。207~211は陶邑編年のTK47型式、219~244はTK209型式に併行するとと思われる。

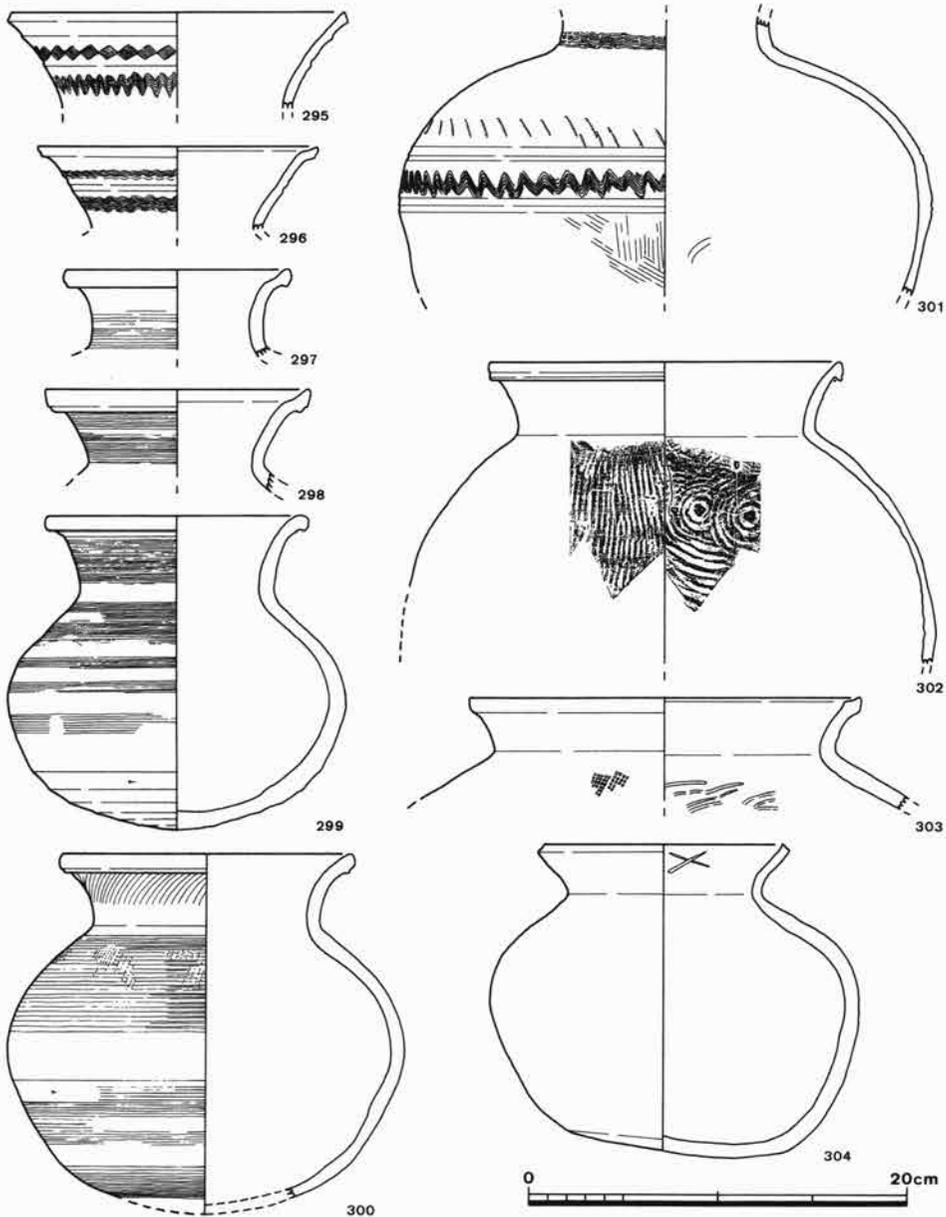


第52図 C地区出土遺物実測図(5)

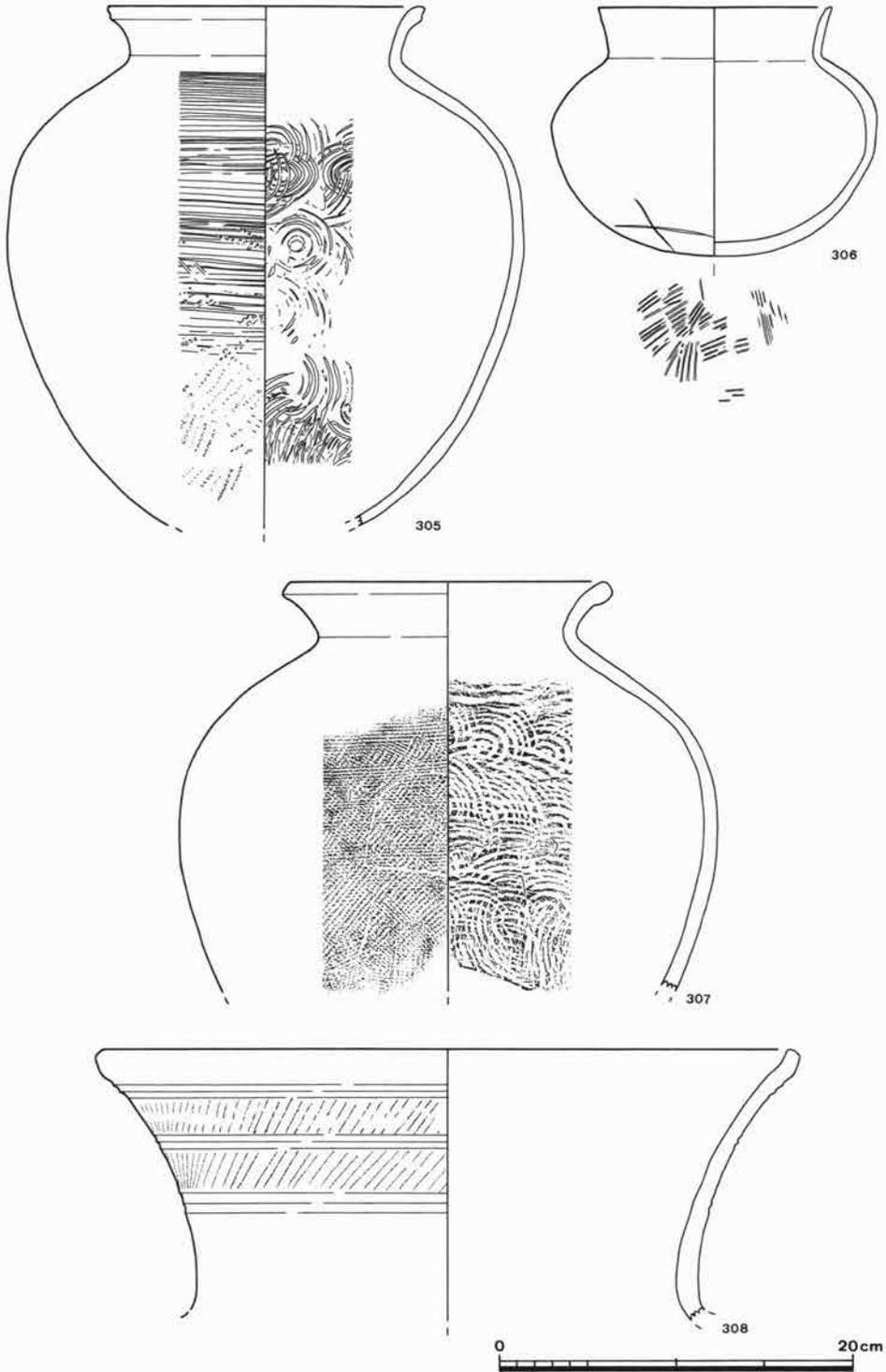
245・248は、内面に同心円状の当て具痕を残すものである。246・247・249は、外面にヘラ記号の刻まれたものである。

254～281は、6世紀末から7世紀初頭にかけての杯身・杯蓋である。265～267は、宝珠つまみを持ち、かえりを有する蓋である。これらはTK217型式段階のものである。

高杯(282～294) 有蓋のもの(283～285・293)と、無蓋のもの(282・287・286)に分類で

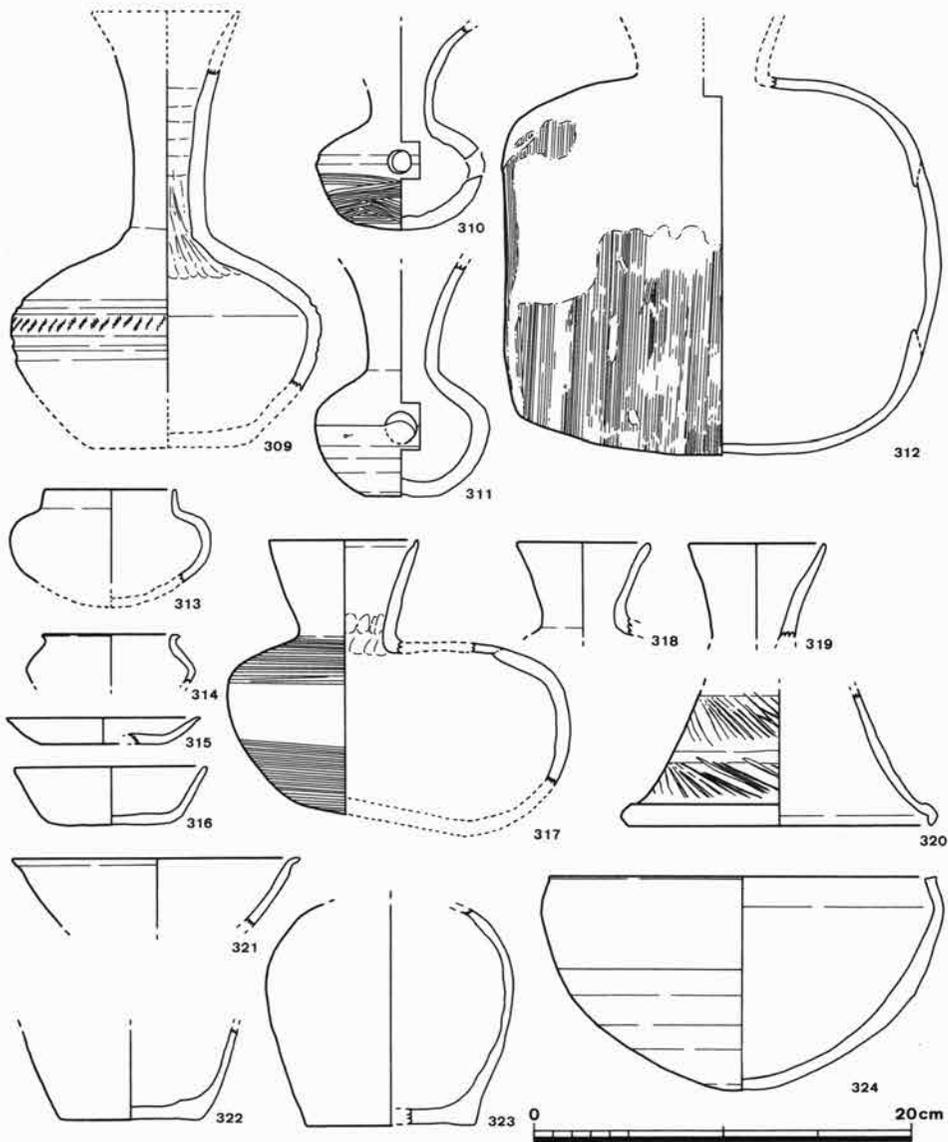


第53図 C地区出土遺物実測図(6)



第54図 C地区出土遺物実測図(7)

きる。また、脚の形状は透かしをもつもの(282~284・290~292・294)と、透かしのないもの(285・286・287~289)に分けられる。透かしは、工具により外面から方形に切り取るもの(282・283)と、工具の先端を外面から内面に突き刺して穿孔したもの(284・290~292)がある。282は、把手付の高杯である。脚の透かしは4方向で方形を呈する。杯部外面には3条の波状文が施された文様帯がある。図示した高杯のなかでは時期的にさかのぼる。287~289は、低脚の高杯である。287は、短い脚から外反したのち、屈曲するものである。288・289は外反し、底部端部に面をもつ。290~292は、透かしの形状は同様である



第55図 C地区出土遺物実測図(8)

が、脚端部の形状は異なる。290は、脚は直線的にのびる。291は、内湾する。292は、外反する。透かしの付く位置は、290・291が貼り付け部近くにあるが、292は脚下半部に位置する。294は、長脚二段の透かしを持つ。上部が方形、下部が三角形透かしである。上下半とも密に波状文が施される。

壺・甕(295～308) 299・300・304は、短頸壺である。301は、壺である。頸部に起伏の少ない波状文、凹線上部に右下がりの刺突列点文、凹線間に起伏のある波状文が施される。306は、広口壺である。底部にタタキ痕、ヘラ記号がある。308は、甕口縁部である。復原口径は39.6cmである。半截竹管状工具による3条の凹線間に右上がりの列点文が施される。

土師器(第57～62図) 土師器には杯・高杯・壺・甕・鍋などの器種がある。

杯 器形から扁平な底部を有するもの(351・359・360・362)と、ポウル状を呈するもの(353～356・363～368)に分類される。口縁端部の形状は、内湾するもの(351～353・356・359・360・364・365・367・368)、斜め上方に立ち上がるもの(354・355・357・361・363・366)、外反するもの(358・362)がある。また、外面の調整技法に着目すると、ハケ目、ナデのものが多く、ヘラケズリ(355)、ミガキのもの(368)が、各1点ある。内面に關しては、ケズリ、ナデ、ミガキがほぼ同数ある。口径は大半の個体が約12cm前後でおさまるが、368のみ口径約14.8cmで、他の個体と比較しても、大型品である。内面は不定方向のヘラミガキののち、見込み部分から放射状に暗文状のミガキが施されている。口縁形態の特異なものとしては、358がある。この個体は口縁部下を強くヨコナデしている。

高杯 大別して長脚のもの(369・370・373～376)と、短脚のもの(371・377～381)に分類される。また、脚部が中空のもの(369・371・373・375～379)と中実のもの(370・374・380・381)、長脚のものには、透かしを持つもの(369)と、持たないもの(370・373・374)がある。脚裾部の形状は端部を面取りし、断面方形におさめるもの(369・373・375・376)、端部を尖り気味におさめ、上方につまみあげるもの(370・377・381)、端部を尖り気味におさめ、真っすぐまたはやや下方に曲がるもの(371・374・378～380)に分類できる。

甕 土師器の甕の分類は、頸部及び口縁端部の形状に注目し、以下の基準で行った。

I 口径18cm以上のもの。

II 口径13cm以上～18cm未満のもの。

III 口径13cm未満のもの。

A類 布留式土器もしくは、この土器の系譜を引くもの。

B類 頸部が「く」字形に強く屈曲し、斜め上方にのびるもの。

C類 頸部の屈曲のゆるやかなもの(外湾するものを含む。)

D類 頸部がやや外反しながら、立ち上がるもの。

器 形							
A	B	C	D	E			
口縁部の断面形態							
1	2	3	4	5	6	7	8

第56図 土師器壺分類表

E類 頸部が短く外湾するもの。

以上のA～E類が大分類であり、B～E類については、さらに細分を行った。

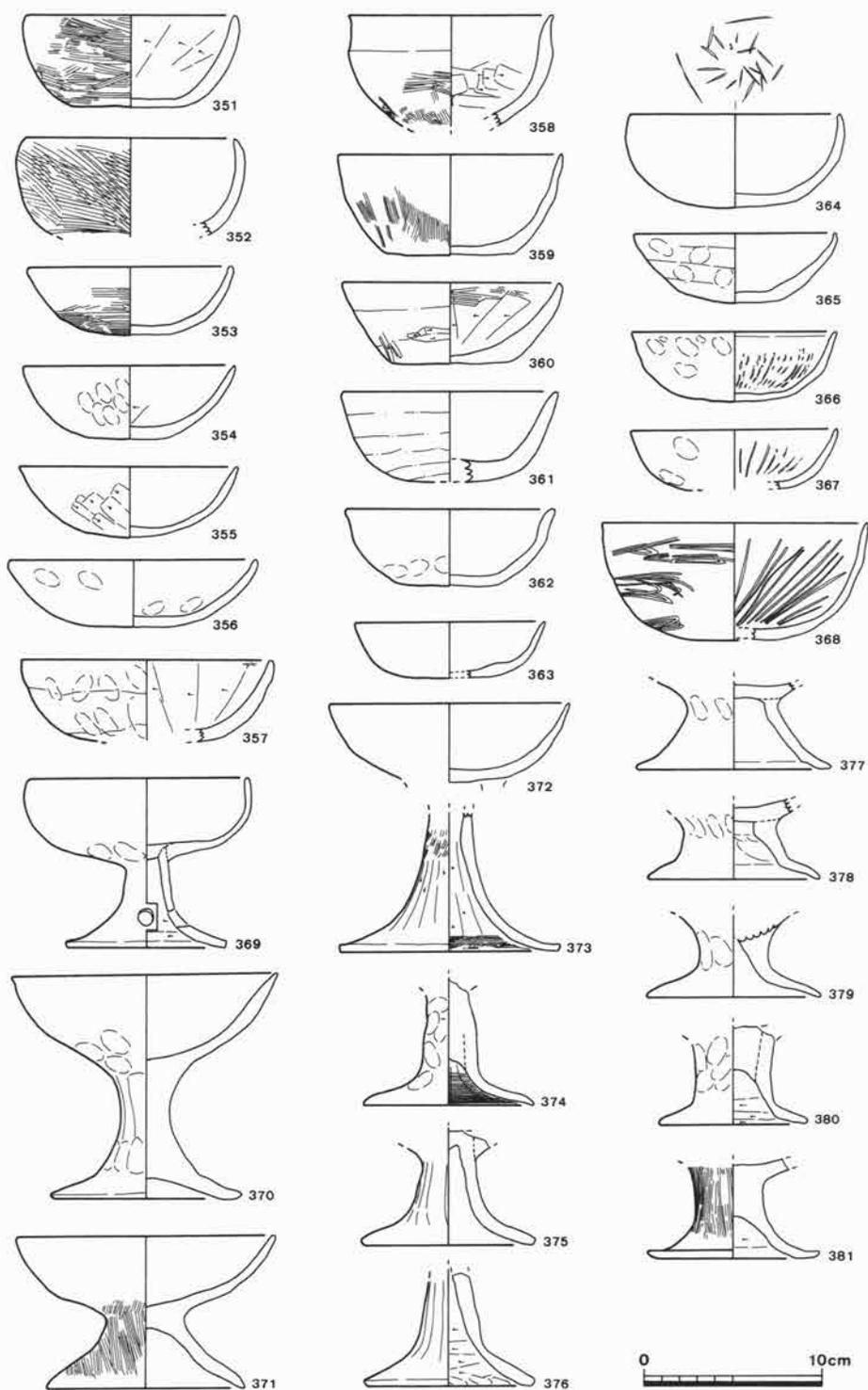
B～E類-1 口縁端部を丸くおさめたもの。

- 2 口縁端部をやや尖り気味におさめるもの。
- 3 口縁部下外面をヨコナデし、わずかに玉縁状を呈するもの。
- 4 口縁端部の断面形が方形を呈するもの。
- 5 口縁端部内面を強くナデ、稜線を持つもの。
- 6 口縁端部下内面にわずかな沈線を持つもの。
- 7 口縁端部下内面を尖らせるもの。
- 8 口縁端部下外面を強くヨコナデし、端部を尖り気味におさめるもの。

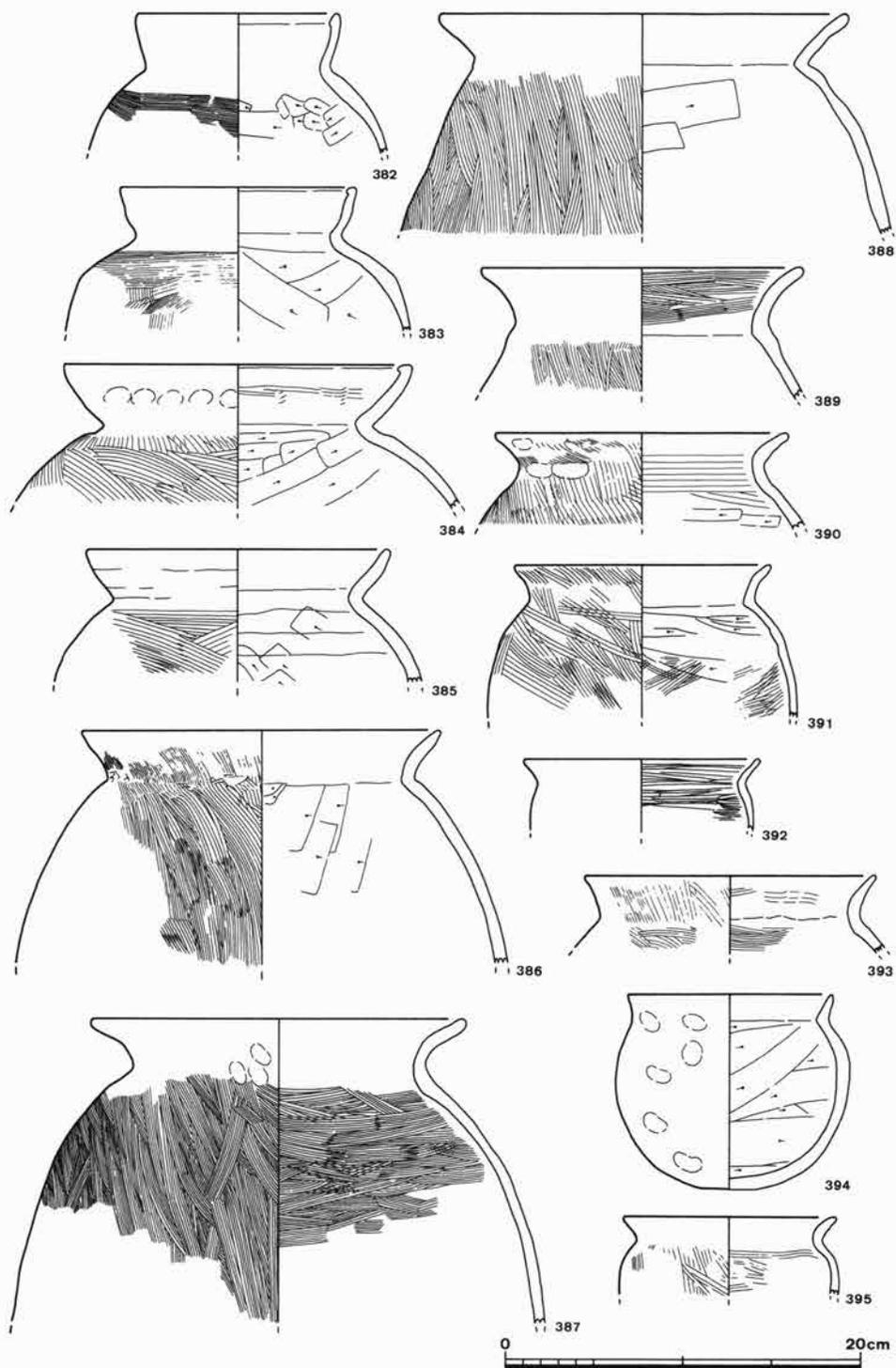
A類(382～385) 382～384は、布留式土器の系譜を引くものである。口縁端部を内側に折り返し、肥厚させ玉縁状を呈する。体部外面の調整は、ハケであり、内面はヘラケズリである。385は、布留式土器特有の口縁端部に肥厚は見られないが、器形及び調整技法に共通点が見られるため、A類におさめた。

B類-1 (I 388・389、II 390・391・406・407・412・418・420・422・424、III 392) 口縁部の破片であり、復原口径であるが、I～IIIの大きさの口径のものが見られる。全体的な傾向として、屈曲部分の内面が尖り、稜を持つものが多い。内面の調整はまちまちであり、一概に述べられないが、外面はどの類のものも概ねハケ調整である。422は、肩のあまり張らない卵形の体部を持つものである。内外面には密にハケが施される。

B類-2 (II 386・393、III 394・395・414・415) 頸部を「く」字形に強く屈曲させ、斜め上方にのびるもので、口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部中程に最大径を持つと思われる。394・395は、小型丸底壺である。394は、頸部は短く屈曲し、屈曲部内面に稜



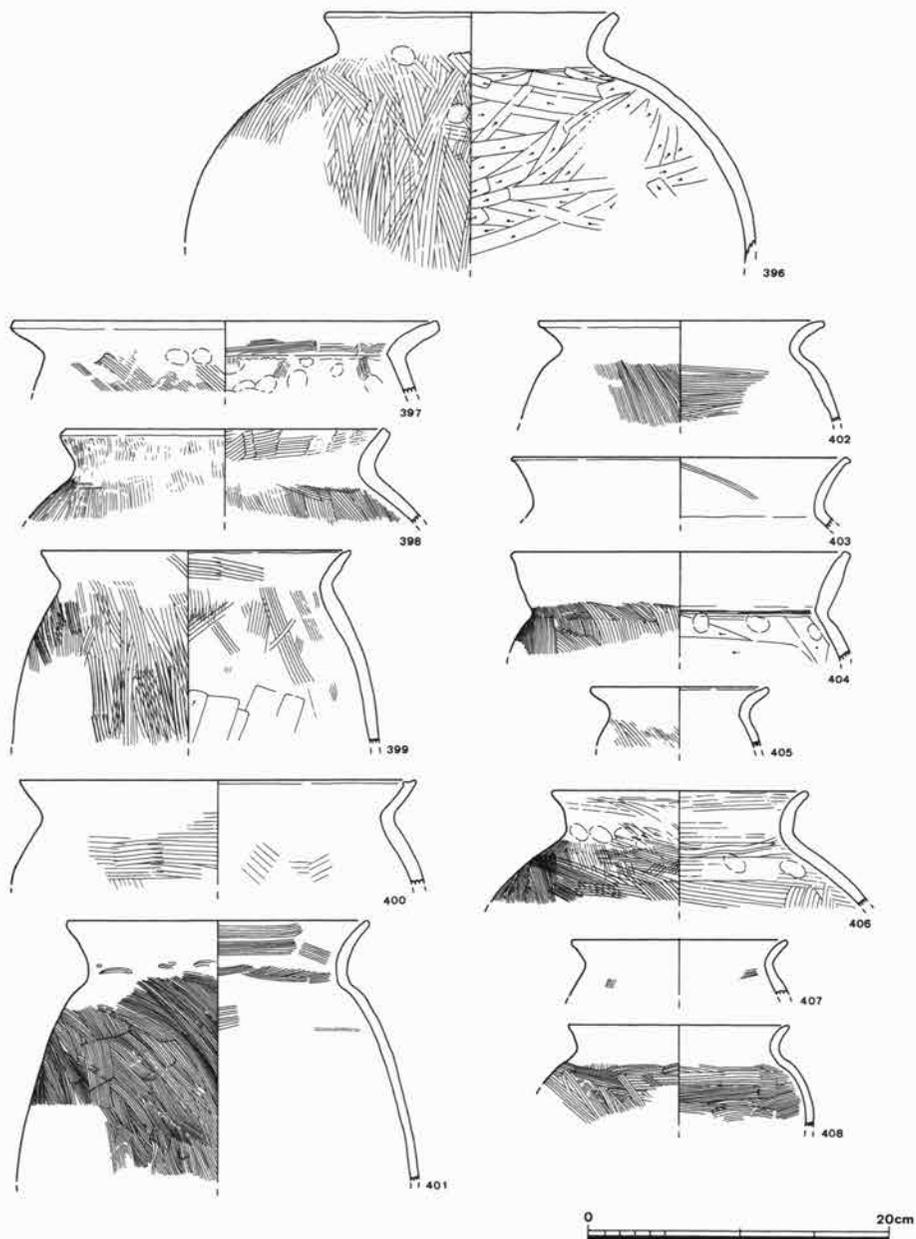
第57図 C地区出土遺物実測図(9)



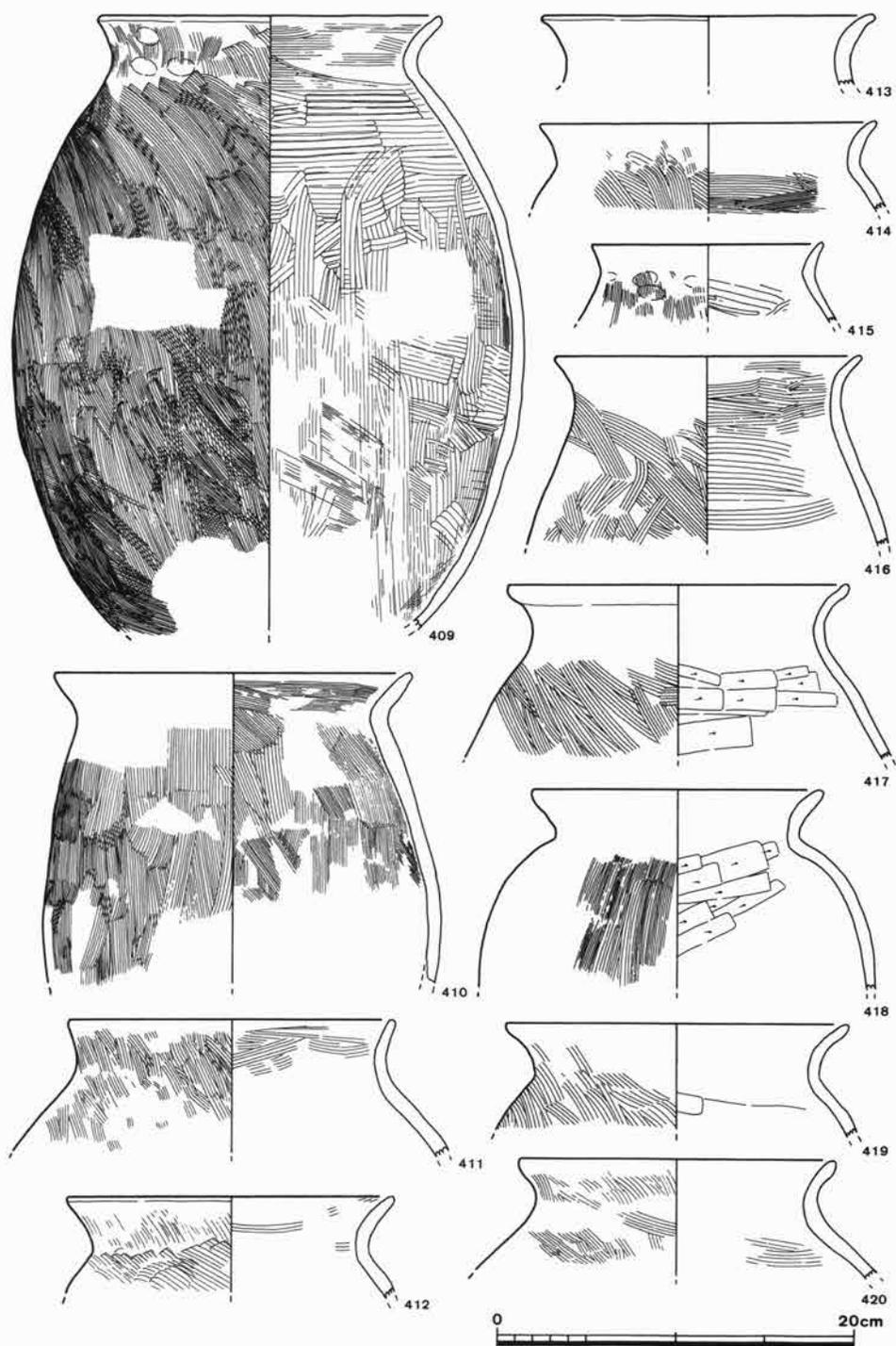
第58図 C地区出土遺物実測図(10)

を持っている。395は、「て」字状の口縁である。414は、口縁部が短く屈曲する。屈曲部内面は尖り気味である。

B類-3(II387) 口縁部下外面をヨコナデシ、わずかに玉縁状を呈する。内外面とも密にハケを施す。



第59図 C地区出土遺物実測図(11)



第60図 C地区出土遺物実測図(12)

B類-4 (I 396・397・398・402・403) 口縁の断面形が方形を呈する。図示したものは、すべて口径が18cm以上ある。396は、肩部の張る器形を呈している。398は、口唇部に沈線が入る。403は、口唇部外面を肥厚させている。

B類-5 (I 400) 口縁部内面を肥厚させ、強くヨコナデし稜線を有する。外面は太い工具によりハケ調整をし、内面はハケのちヨコナデを施している。

B類-6 (I 399・404、Ⅲ405) 口縁端部下内部にわずかな沈線を持つものをまとめた。端部の形状は尖り気味におさめるもの(399)と、丸くおさめるもの(404・405)があり、一様ではない。

B類-7 (I 409・410) 長胴甕で、口縁端部内面を尖らせる。一部ではあるが、口縁部から胴部下半まで残存していた。大型の甕のなかでは残りがよい。内外面ともハケ調整を施しているが、内面は1本の幅が広い工具を使用している。上半部は横方向それ以下は不定方向のハケである。

C類-1 (I 401・419、Ⅱ411・416・430) 頸部の屈曲がゆるやかで、口縁端部を丸くおさめるものである。401は、肩の張らない器形を呈する甕である。口唇部外面に弱い沈線が入る。胎土には砂粒が含まれている。430は、頸部がやや内湾しながら立ち上がり、端部はわずかに外反する。体部は肩が張りだす。内外面は密にハケが施される。

C類-2 (Ⅱ408・413、Ⅲ426~429) C類-2には大型のものは見られない。408は、体部上半に最大径がくるものである。内外面は密にハケが施される。426~429は、小型丸底壺である。この器種の大半がこの分類に該当すると思われる。426は、完形品である。内外面とも密にハケが施される。

C類-3 (Ⅱ417・423・431~433) 口縁部外面が玉縁状を呈するものである。417は、端部外面を約1.2cm幅で肥厚させている。423・431~433は、幅約5~8mmと肥厚はわずかである。432は、屈曲部内面が尖り気味になる。

C類-4 (Ⅱ424・425、Ⅲ434・436・437) 口縁部の断面形が方形を呈するものである。

C類-7 (Ⅱ435) 435は、端部内面が尖り気味になるものである。

D類-1 (Ⅱ438、Ⅲ440) 頸部がやや外反しながら立ち上がるものである。439は、肩の張る器形である。内面のハケ調整は概ね横方向である。

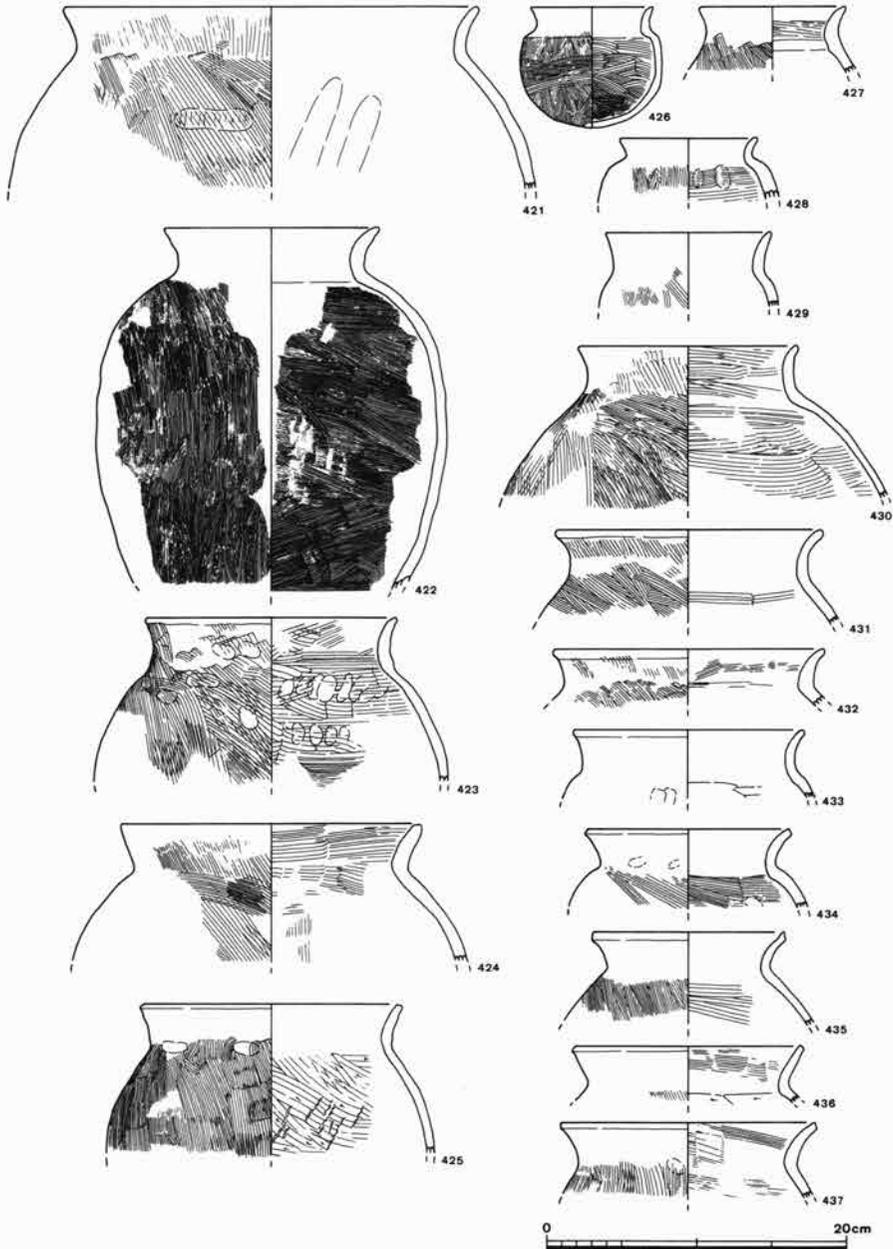
D類-2 (Ⅱ442) 442は、口縁端部を尖り気味におさめる。あまり肩の張らない器形である。

E類-2 (Ⅱ439) 口縁部のみの破片で、明確ではないが、口縁部が短く外反するものである。

E類-4 (Ⅱ441) 口縁部が短く外反し、端部を方形におさめるものである。残存はあ

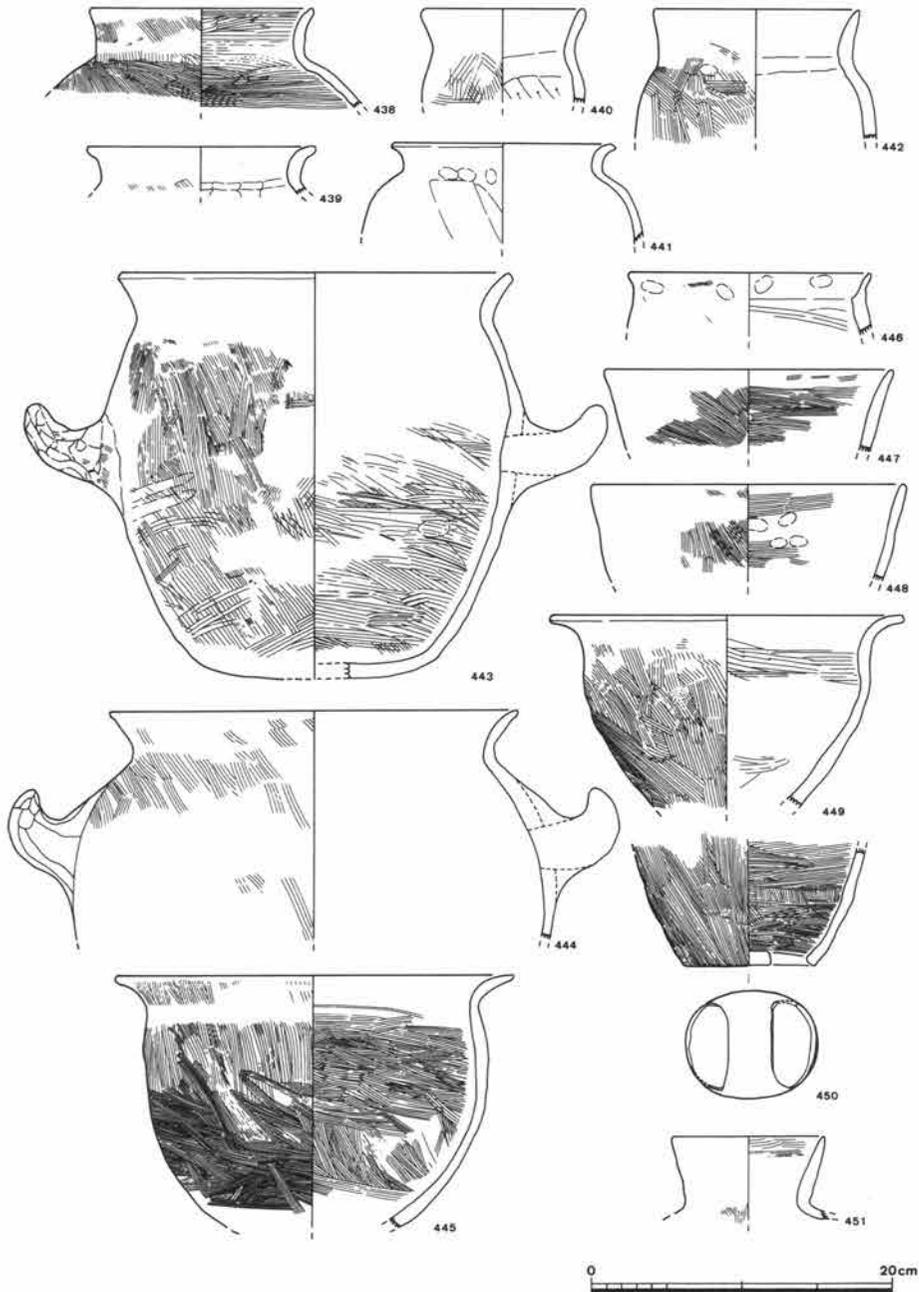
まり良好ではない。

土師器その他の器種(第62図) 把手付甕、鍋、甑などがある。443は、把手付甕である。甕の分類から見ると、C類-2に該当する。把手は牛角状であり、取り付け位置は胴部の最大径にあたる。底部はやや丸味を帯びた平底である。体部内外面ともハケ調整である。



第61図 C地区出土遺物実測図(13)

444は、甕分類のB類-1である。把手は肩部分に取り付く。把手の形状は屈曲が大きく端部は尖り気味である。445は、鍋である。口縁部の形状はB類-1である。内外面とも密にハケ調整が施される。底部は丸底である。446~450は、甌である。但し、446~448に



第62図 C地区出土遺物実測図(14)

関しては口縁部のみであり、そのほかの器種の可能性もある。450は、甑の底部である。出土土器のなかで、甑底部とわかるものは、この個体のみである。2か所の蒸気孔をもつ。体部下半の内外面はハケ調整である。451は、直口壺の口縁部である。

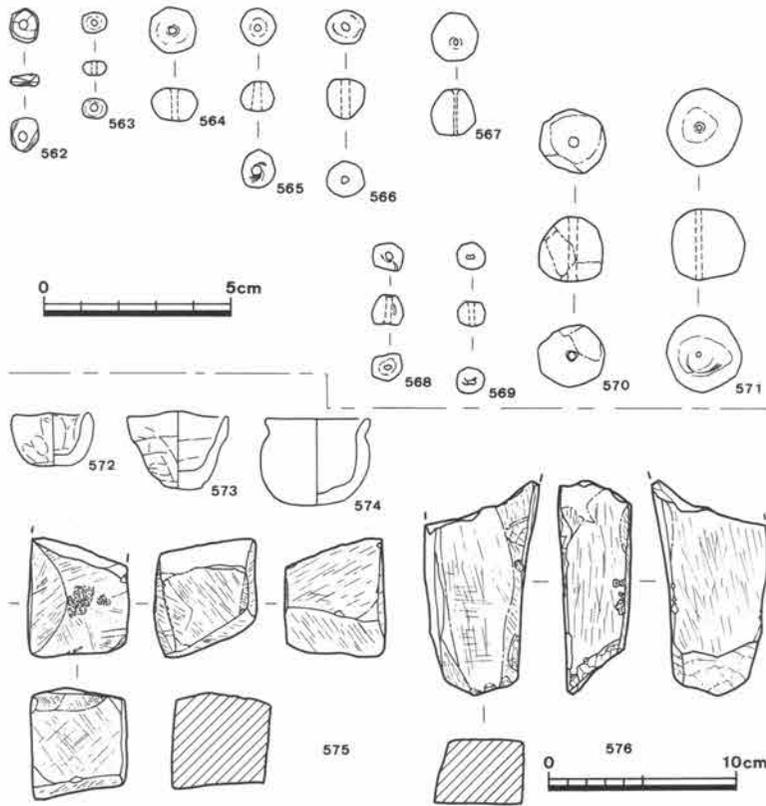
製塩土器(第73図) 古墳時代の製塩土器は、いずれも破片であるが、大別して体部外面に指頭による圧痕の残るものと、タタキ目による調整を持つものとに分類が可能である。なお、452については、図示したもののなかでは時期がさかのぼる可能性がある。底部がわずかに赤変している。脚台Ⅲ式に該当すると思われる。古墳時代の製塩土器はいずれも、丸底Ⅰ式のものである。タタキのあるものかないものの割合は、タタキのあるものはわずかであり、大半がタタキのないものである。453～462・464～466は、外面に顕著な指頭圧痕を残す。453は、底部付近まで残存する個体である。内面はヘラケズリの後、ナデを施している。焼成は良好で堅緻である。また、463・467～474は、外面にタタキを残す。いずれも口縁部及び胴部の破片である。内面は指押さえの後、ナデている。474は、底部付近の破片である。胴部が丸味を帯びる部分までタタキが施されている。底部はあまり良好な資料はないが、丸底である。完形に復原できるものは存在しないが、焼成はすべて良好で、須恵器的な硬質の焼きである。この種の製塩土器は、淡路島の雨流遺跡に類例が見られる^(注7)。製塩土器の編年では、丸底Ⅰ式は古墳時代後期前半に比定できるが、当該期の須恵器はTK47の資料がわずかであるが見られるため、この時期に伴うものと考えられる。しかし、出土した須恵器はTK209段階のものが大半である。製塩土器の出土地を亀岡盆地で見ると、北金岐遺跡C地点溝SD18、千代川遺跡、鹿谷遺跡^(注8)で出土している。製塩土器の特徴は、タタキのあるものと、ないものが出土している点では一致するが、土器の焼成に関しては、3遺跡のいずれも土師質で軟質の焼成であり、八木嶋遺跡のものとは大きく異なる。

Ⅲ玉類・土錘・鉄製品

玉類・ミニチュア土器・砥石(第63図) 562は、滑石製白玉である。平面形は不整形で数か所に加工調整による稜が残る。色調は灰緑色を呈する。563・564は、ガラス小玉である。563の色調は、コバルトブルーを呈する。564は、鉛ガラスと思われ、風化して乳白色を呈している。565～571は、土製丸玉である。法量に長さ約1.7～1.8cm・最大幅1.5～1.7cmのもの、長さ1.2cm・最大幅1.15cmのもの、長さ0.9～1.0cm・最大幅0.85～0.9cmのもの、長さ0.65cm・最大幅0.7cmのもの4種類がある。成形は、特に配慮は見られない。

土錘(第64図) 個体ごとの法量から、重さを基準にA～Eの5種類の分類を行った。以下の数値は平均値である。なお、各個体の法量は一覧表に示した。

A類 長さ3.59cm・最大幅1.08cm・重さ3.57gのもの。



第63図 C地区出土遺物実測図(15)

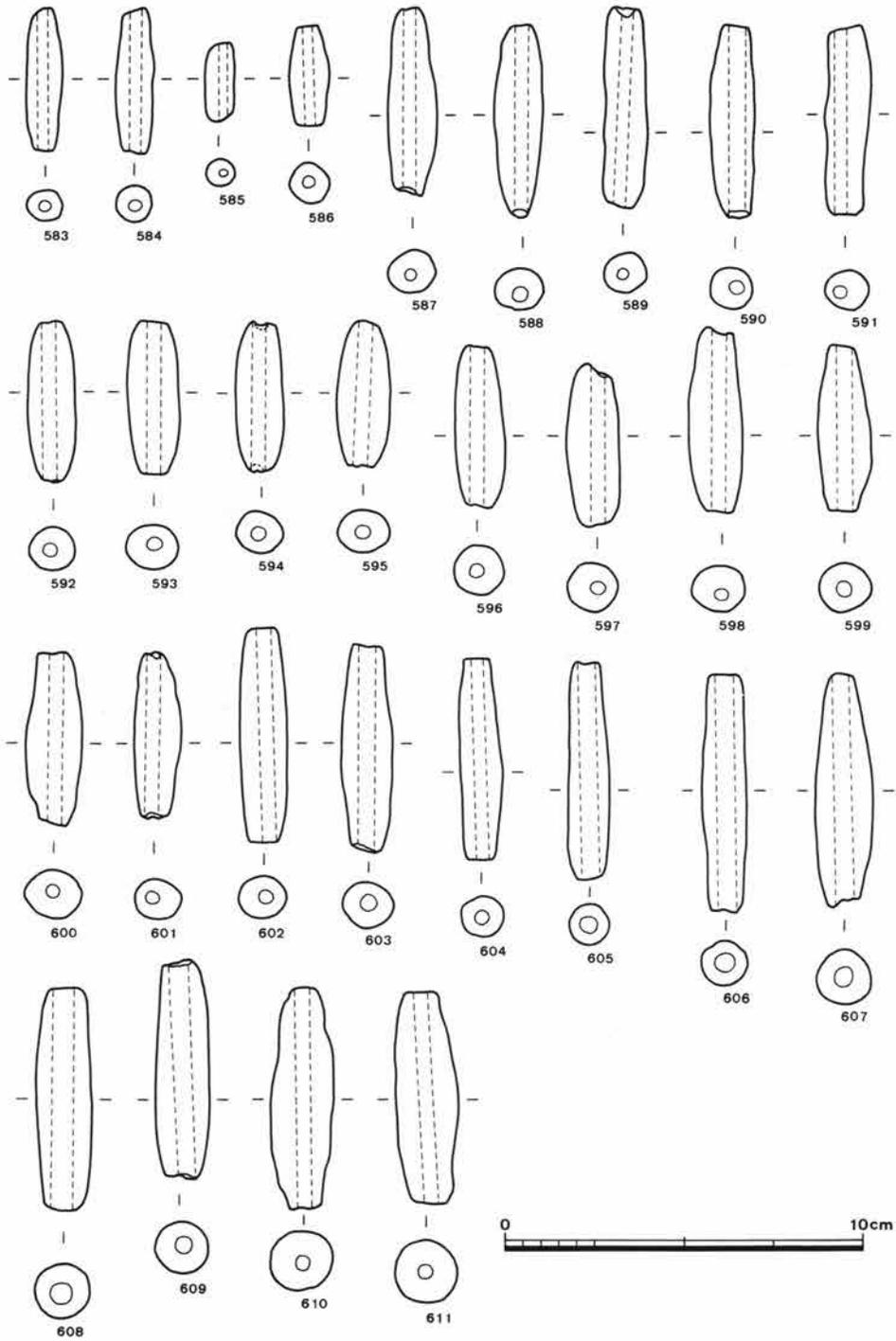
B類 長さ5.12cm・最大幅1.3cm・重さ6.03gのもの。

C類 長さ5.73cm・最大幅1.37cm・重さ7.13gのもの。

D類 長さ4.72cm・最大幅1.53cm・重さ8.26gのもの。

E類 長さ6.13cm・最大幅1.62cm・重さ15.75gのもの。

各個体とも外面の形状観察により、分類が可能であった。資料を掲載した個体は、破片を含めて合計90点である。数値上では、C・D・E類が全体の約72%を占めている。次に、各分類ごとの特徴を述べる。A類は法量が小型のものである。585は、かなり小型であり、実用に適さないミニチュア品と思われる。B類は、外面に顕著に指頭圧痕を残している。D類は、形状がB類と同様、指頭圧痕が残るが、長さが若干長い。最大幅を中心部分に意識しない寸胴形である。B・D類とも焼成方法の相異からか外面が黒色化しているものが多数見られる。C類は、外形が整った紡錘形を呈しており、A～E類の中で最も作りのていねいなものである。E類は、A～D類のいずれかの製作技法により作られているものが存在する。607・608はC類の、610・611はB及びD類の技法によるものである。この類の



第64図 C地区出土遺物実測図(16)

付表3 土錘一覧表(備考欄の番号は実測図の番号を示す)

() は欠損品 △は土を含めた重量である。

A類					B類				
No.	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	備考	No.	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	備考
1	(3.35)	(3.35)	1.05		1	(5.44)	(4.17)	1.30	
2	3.54	4.05	1.00	584、完形	2	7.69	4.86	1.41	
3	3.30	3.95	1.05	583、完形	3	7.70	5.21	1.35	587、完形
4	5.44	3.75	1.17		4	6.45	4.79	1.34	
5	3.08	3.20	1.15		5	7.85	5.37	1.37	588、完形
6	4.89	4.65	1.08	完形	6	6.80	5.55	1.27	589、完形
7	3.87	2.80	1.14	586、完形	7	5.25	4.51	1.31	
8	△4.47	4.28	1.14		8	6.68	5.38	1.23	590、完形
9	(2.31)	(2.20)	1.03		9	(4.85)	(4.46)	1.13	
10	△3.76	3.10	1.10		10	(4.80)	(3.20)	1.31	
11	1.43	2.14	0.85	585、完形	11	(4.91)	(3.96)	1.33	
12	(0.91)	(1.49)	0.95		12	7.13	5.26	1.22	591、完形

C類					D類				
No.	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	備考	No.	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	備考
1	9.62	5.17	1.51	598、完形	1	△9.71	6.20	1.37	
2	△9.58	4.33	1.67		2	(8.39)	5.18	1.34	
3	8.50	4.28	1.43	593、完形	3	9.96	6.07	1.35	602、完形
4	8.05	4.55	1.48	597、完形	4	△8.91	5.61	1.35	
5	△13.73	5.55	1.79		5	△8.83	5.69	1.45	603、完形
6	8.27	4.72	1.57		6	7.96	5.60	1.19	604、完形
7	9.58	4.56	1.49		7	△10.29	5.67	1.38	
8	△12.26	5.53	1.55		8	7.50	5.63	1.28	
9	9.25	4.61	1.44	599、完形	9	10.79	6.75	1.54	
10	9.03	4.53	1.41	596、完形	10	7.47	5.56	1.25	
11	10.53	5.08	1.56		11	8.38	5.71	1.32	
12	7.10	4.08	1.45	595、完形	12	7.45	6.02	1.16	605、完形
13	6.13	4.66	1.30	601、完形	13	△(7.30)	(4.30)	1.40	
14	9.38	4.55	1.58		14	(6.86)	(4.99)	1.37	
15	8.52	5.00	1.47		15	(4.49)	(3.58)	1.21	
16	6.81	4.16	1.31	594、完形	16	(7.01)	(4.92)	1.39	
17	(7.39)	(3.96)	1.50		17	4.28	3.95	1.20	
18	9.82	4.78	1.60	600、完形	18	(4.13)	(3.22)	1.23	砂粒含む
19	(7.90)	3.83	1.58		19	(4.93)	(3.75)	1.23	
20	△7.55	4.66	1.57		20	(3.64)	(2.78)	1.23	
21	17.33	5.82	1.80		21	(2.39)	(2.15)	1.19	
22	△7.58	4.46	1.34	592、完形	22	(2.51)	(3.17)	1.11	
					23	△(2.84)	(2.64)	1.22	
					24	8.59	6.63	1.29	606、完形

E類

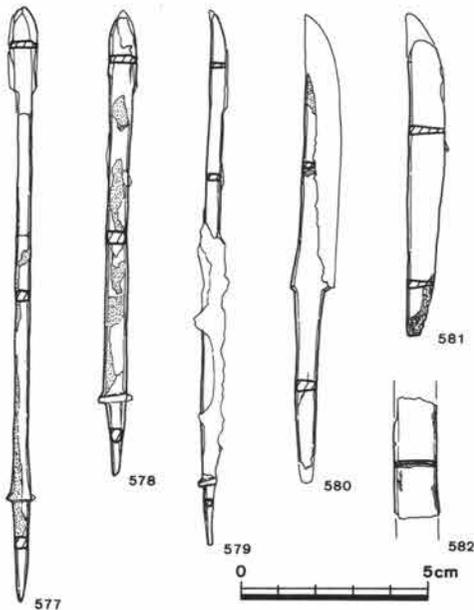
No.	重さ(g)	長さ(cm)	幅(cm)	備考
1	(9.73)	5.55	1.60	
2	(10.15)	(4.58)	1.55	
3	(8.75)	(1.08)	1.50	
4	(3.32)	(2.43)	1.37	
5	15.37	6.28	1.54	608、完形
6	△(11.33)	(4.88)	1.44	
7	13.95	6.16	1.50	609、完形
8	(10.48)	(4.82)	1.75	
9	(6.97)	(3.80)	1.58	
10	(9.75)	(4.10)	1.68	石含む(1.0cm ×0.5cm大)
11	(6.61)	(3.67)	1.73	
12	(6.53)	(3.38)	1.43	
13	(5.39)	(3.03)	1.44	
14	(5.14)	(2.89)	1.45	
15	6.00	(3.18)	1.43	
16	(2.43)	(2.85)	(1.43)	破片
17	16.25	6.22	1.80	610、完形
18	17.07	6.02	1.77	611、完形
19	△(7.89)	(4.05)	1.47	黒色
20	△(5.07)	(2.93)	1.43	黒色
21	13.72	6.57	1.62	607、完形

中には、内外面及び断面も黒色化したものが含まれている。この遺跡は、隣接する5地点にトレンチを設けたが、多量の土錘が出土したのは、C地区の溝跡SD01のみである。しかし、この地点で使用されたか否かは出土状況からは不明である。

鉄製品(第65図) 577~579は、鉄鏃である。577は、柳葉形の鏃である。全長約16.1cm・鏃身部約2.2cm・頸部約11.1cm・茎部約2.8cmを測る。鏃身・頸部は刃部に対して平行に、また、関に近い部分は左側に2次的な力に加えられ変形している。頸部に近い部分は特に負荷がかかったと思われ、亀裂が生じていた(図版第48)。

578は、577と同様の柳葉鏃であるが、頸部は幅広で、長さも短い。全長約12.7cm・鏃身部約2.2cm・頸部約8.4cm・茎部約2.1cmを測る。頸部表面には黒い漆皮膜状のものが付着している。579は、片刃鏃である。全長約14.4cm・鏃身部約2.8cm・頸部約10cm・茎部約1.6cmを測る。鏃身の幅は細身で、鏃身の関もわずかであり、無関に近い。茎部の先端は折れ曲がっている(図版第48)。

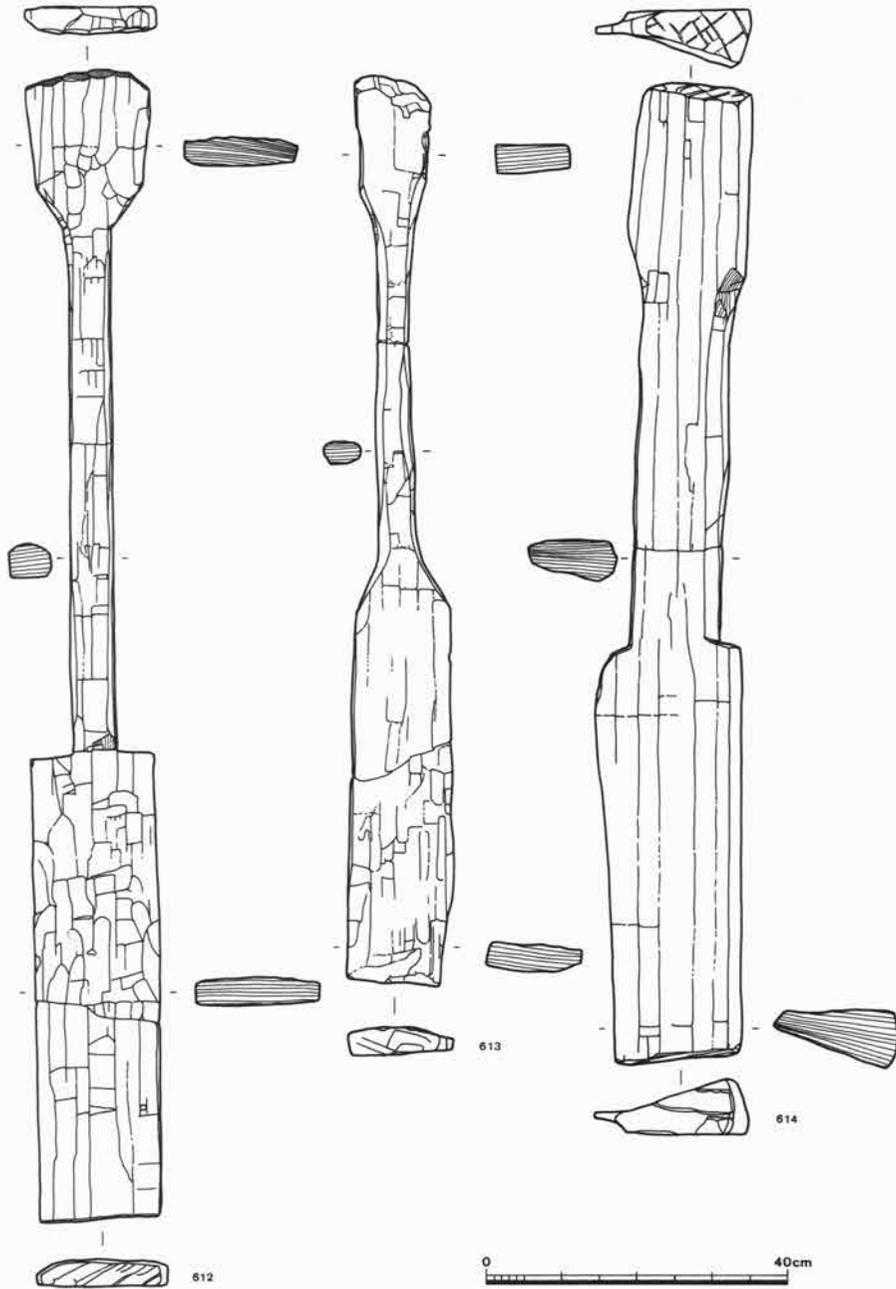
580は、刀子である。全長約10.7cm・刃部約5.7cm・茎部約5cmを測る。刃部はかなり使用され、擦り減っている。581は、刀子と思われる。全長約8cmを測る。しかし、刃部と茎部分の境に関は見られない。



第65図 C地区出土遺物実測図(17)

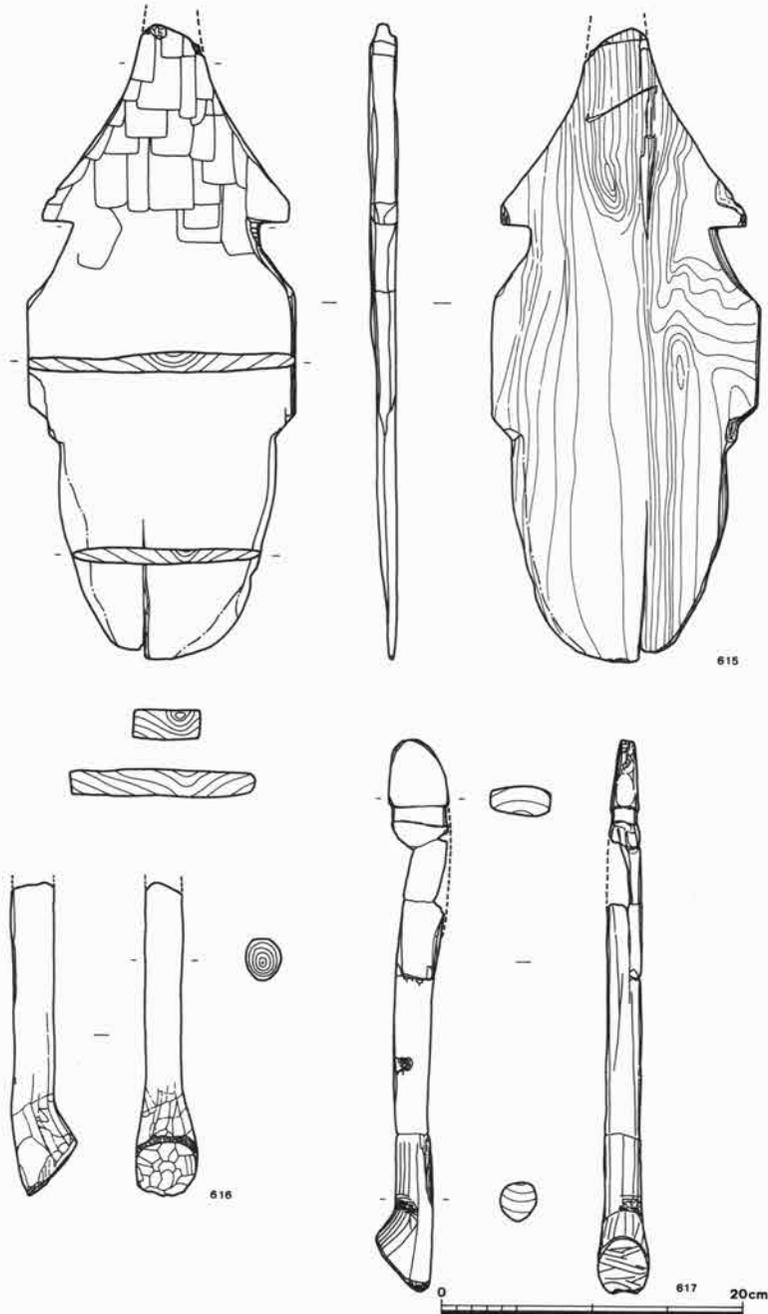
IV木製品(第66~71図) 木製品には農・工具、服飾具、紡織具、祭祀具、雑具、建築部材などがある。^(E9)なお、これらの中には古墳時代以降のものも含まれている。

農・工具(第66~68図) 鋤、ナスビ形木製品、鎌の柄、堅杵などが出土した。一木平鋤



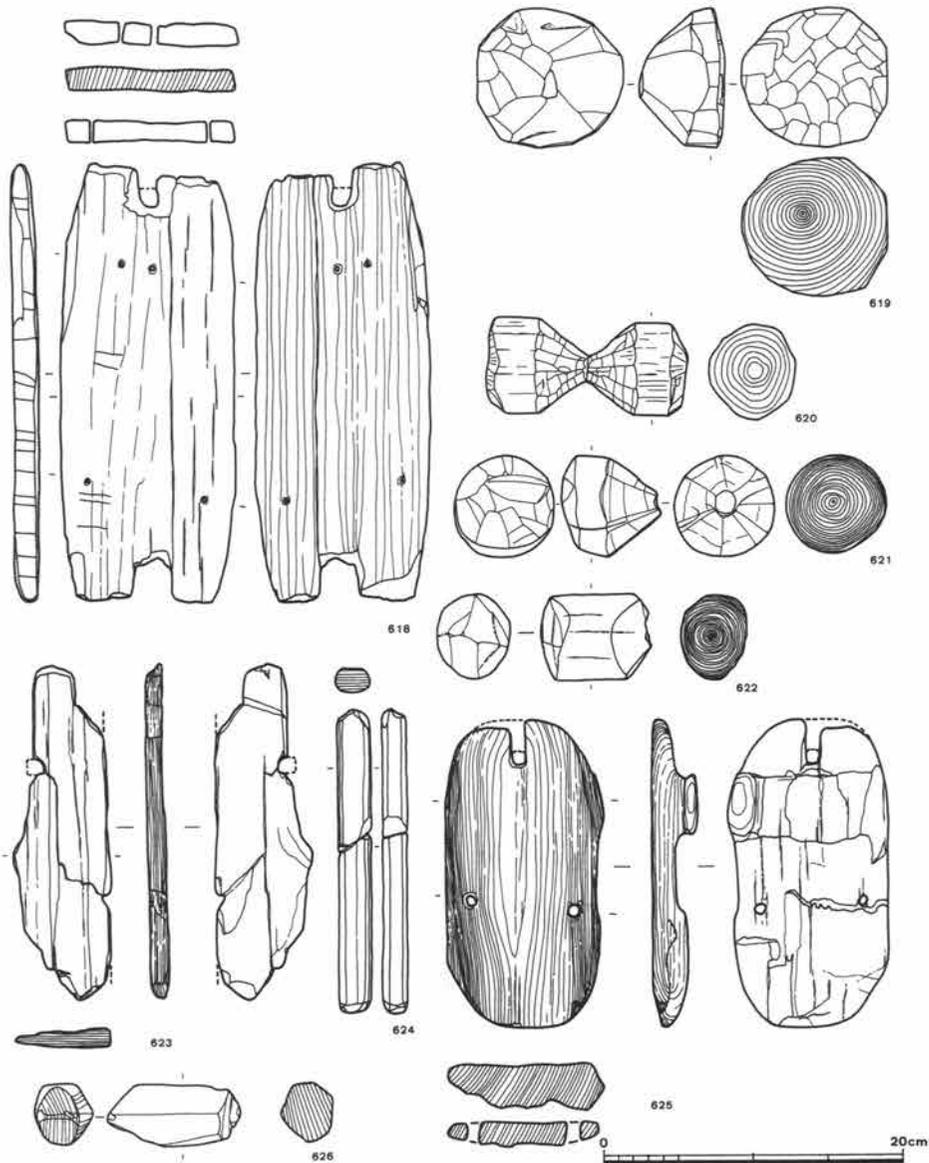
第66図 C地区出土遺物実測図(18)

は3点あり、いずれも未成品と思われるが、612はより製品に近い。把手部分にはまだ穴が開けられていない。身の部分は方形のままで、削り込んで鉄刃装着部を作り出していない。身部分には調整痕が顕著である。木取りは板目材である。613は成形途上であり、614



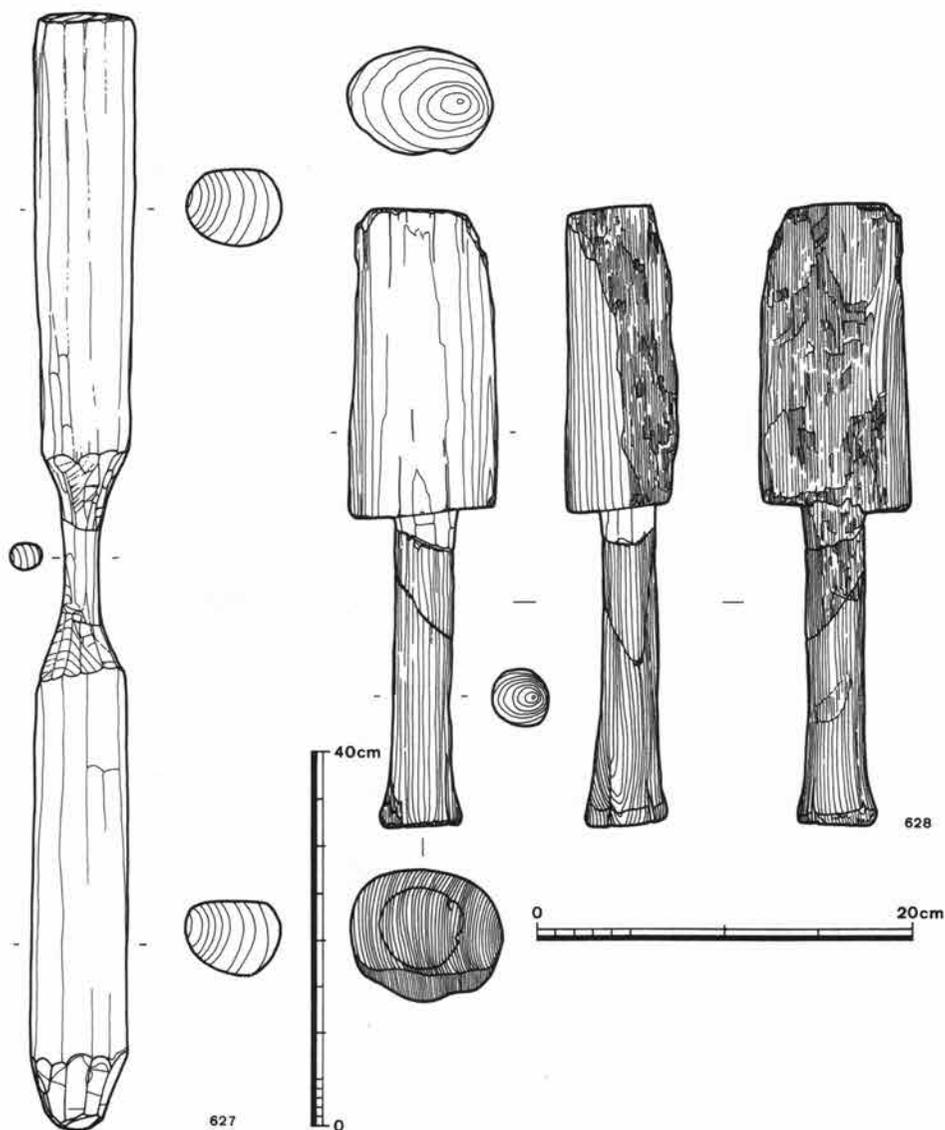
第67図 C地区出土遺物実測図(19)

は把手及び身部分をわずかに削り出した、荒削りの段階である。いずれも木取りは板目材である。615の「ナスビ形木製品」と呼ばれる曲柄平鍬は柄の部分が欠損している。鉄製鋤先を装着する刃部は板状を呈しており、鋤先を装着したと思われる磨滅痕が見られる。木取りは、木材の中心部分を使用した柁目材である。616は、工具の柄である。617は、先端部分に帯状の凹みが見られる。いずれも木の枝部分を巧みに利用している。板目材であ

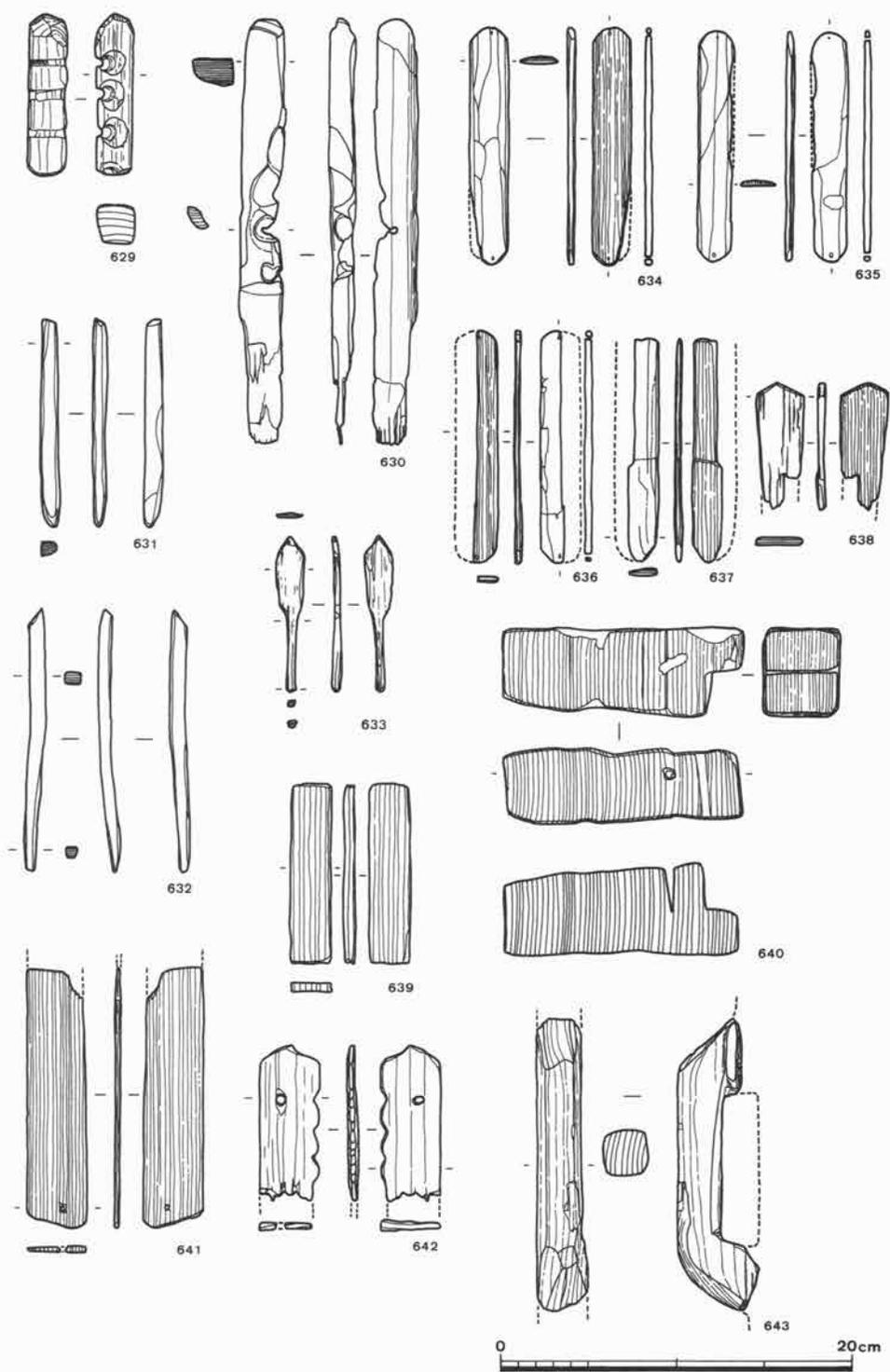


第68図 C地区出土遺物実測図(20)

る。618・645は、田下駄である。足板の前後に各1孔を開け、取り付け孔としている。618は、田下駄の中でも大足と考えられる。上下に切れ込みが見られ、前後2か所に1対の穿孔がある。柁目材である。645は、鼻緒孔3孔のほかに方形の穴が開く。木取りは、柁目材である。619～621は、木錘である。619は、同様の形を呈しているが、他のものと比較して、大型の木材を使用している。外面は放射状にケズリ調整痕が見られる。内面の調整は大きく7方向から行われており、外縁から中心部分に向かってケズリ調整がなされ



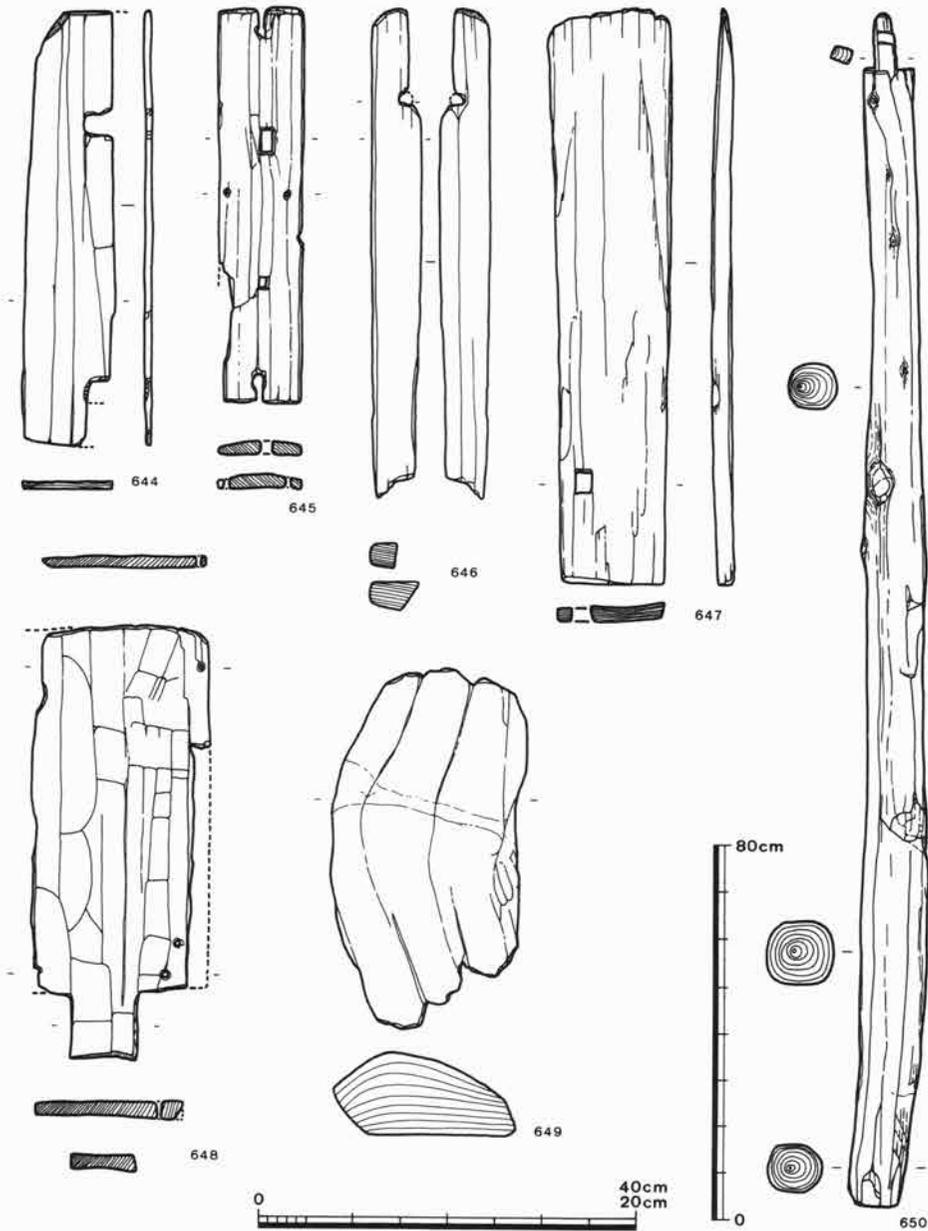
第69図 C地区出土遺物実測図(21)



第70図 C地区出土遺物実測図(22)

ている。620は、接合資料である。619～621のいずれも心持ち材である。627は、堅杵である。下側部分にケズリが入り細くなっている。木取りは柁目材である。丸太を縦に何分割かしたうちの1つである。

服飾具(第68図) 連歯下駄(625)が1点出土している。鼻緒の後壺部分の内側の穿孔が前壺部分に寄っていることから、右足のものと思われる。歯は使用により、かなり磨耗し



第71図 C地区出土遺物実測図(23)

ている。柱目材である。

紡織具(第69図) 628は、横槌である。片側部分に使用による磨耗が認められる。木取りは、心持ち材を使用しているものの、年輪に偏りが見られ、特に木材を厳選したものではない。

祭祀具(第70図) 633は、木鏃である。板材を使用している。鏃身の先端は両端からカットし尖らせている。頸部は、断面が四角形、茎部分の断面は六角形を呈している。木取りは板目材である。木鏃は亀岡市の千代川遺跡でも出土している^(注10)。

雑具(第70図) 火鑽臼、火鑽杵、ヘラ状木製品、把手などがある。629・630は、火鑽臼である。629は、4か所に切り欠きを有する。下端の切り欠きはわずかに凹みを残す程度であり、この部分でカットされ、ケズリ調整がなされている。木取りは柱目材である。630は、下端が欠損している。切り欠きは4か所残存している。631・632は、火鑽杵である。下端部は尖り、炭化している。他の木材と比較して残存が良好であり、木本来の弾力性が残る。634～637は、ヘラ状木製品である。637を除き、両端に小さな穿孔が認められる。断面は一方が丸味を帯びる、蒲鉾状を呈している。木取りは、635が柱目材であるのを除き、634・636・637は板目材である。大きさがほぼそろっていること、出土位置が限定していたことから、本来は一連のものであったと思われる。642は、上端は両側縁からカットされ鈍く尖る。板材の平面には、先端の尖ったものを押しつけて開けたと思われる穿孔が見られる。右側縁には、3か所に間隔の不揃いな、「V」字状の切り欠きがある。木取りは板目材である。これは斎串の可能性もある。643は、把手である。本来は何に付属していたかは不明である。木取りは柱目材である。

建築部材(第71図) 648は、鋤先状の板材で、4か所に穿孔が残っている。その一つには樹皮状のものが残る。木取りは柱目材である。650は、ホゾ材で、全長約253cmを測る。心持ち材を使用する。ホゾ部分はホゾ穴に入れ、楔状のもので固定するための切り欠きが見られる。

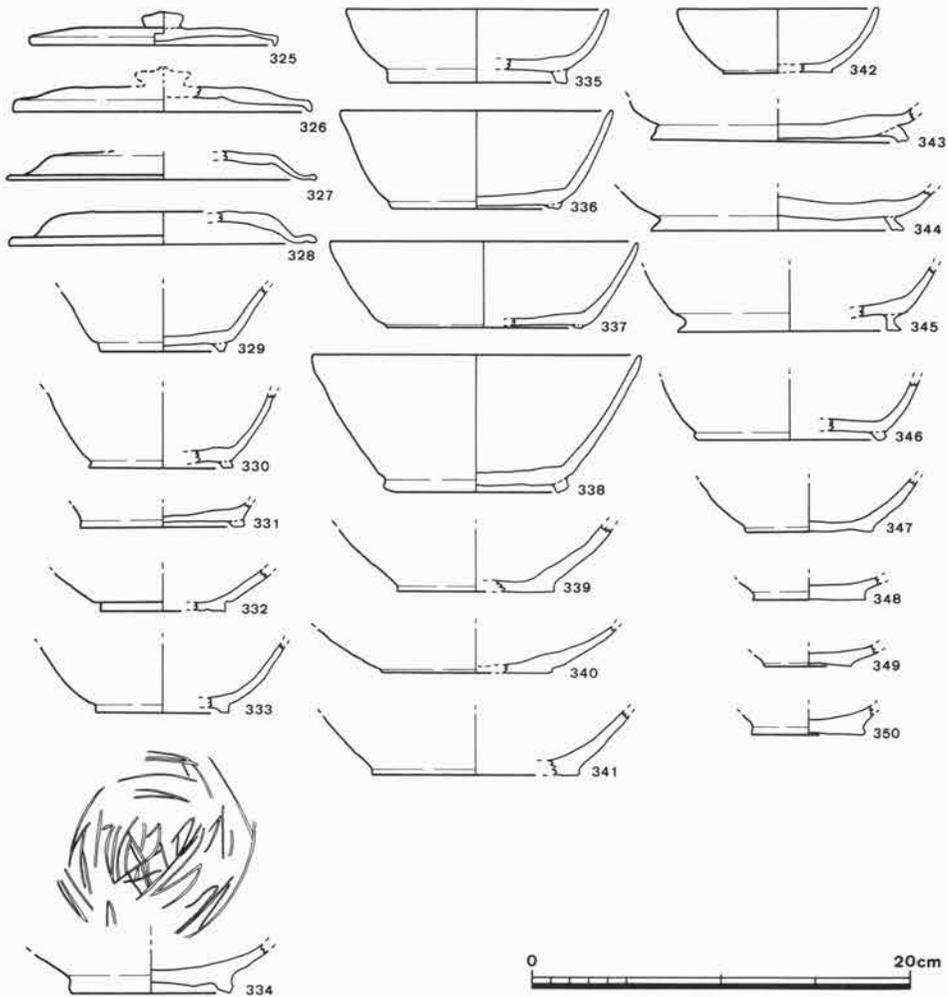
b. 古代の土器

Ⅰ 流路跡S D01埋没段階の須恵器

蓋・杯(第72図) 325～328は、杯蓋である。325は、つまみ付きの杯蓋である。329～350は、杯である。334は、杯底部である。見込み部分にヘラミガキが見られる。篠窠跡産の可能性もある。335は、復原口径14.2cm・器高4cmを測る。底部からやや内湾しながら立ち上がる。336は、口径14.2cm・器高5.3cm・高台径8.6cmを測る。完形である。337は、復原口径16.6cm・器高4.7cmを測る。底部からやや内湾しながら斜め上方に立ち上がる。高台はごく低いものがわずかに付く。338は、口径17.4cm・器高7.4cmを測る。342・348～

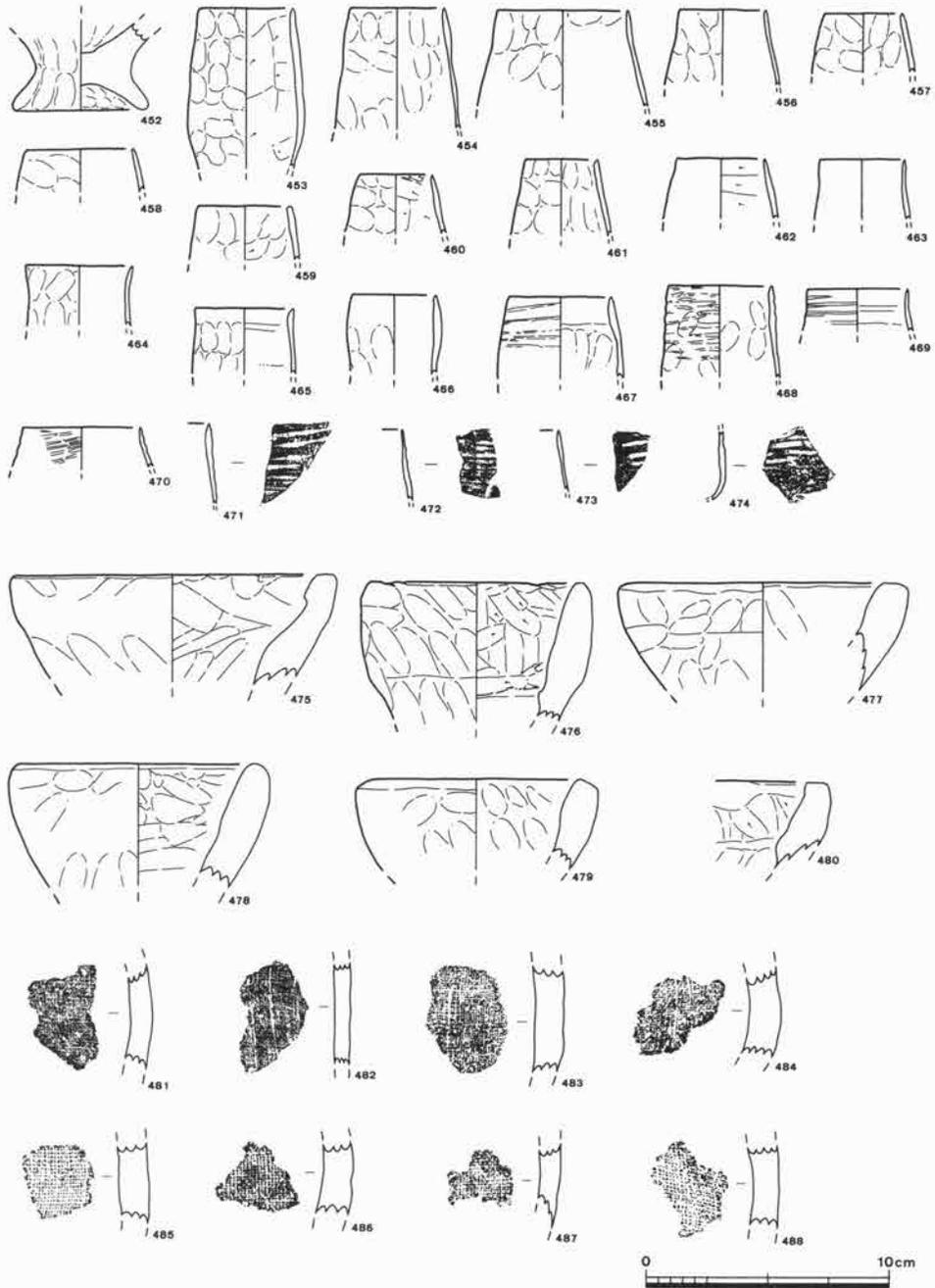
350は、回転糸切りによる底部を持つ、椀及び椀底部である。

その他の器種(第55図) その他の器種には、壺、甕、横瓶、短頸壺、椀、鉄鉢などがある。309は、狭口の長頸壺である。体部が最大径となる部分に凹線を施しており、その2条の凹線間に右上がりの刺突を施している。310・311は、甕である。いずれも頸部から胴部にかけての破片である。310は、体部下半にカキメを施す。311は、体部下半にケズリを施している。312は、横瓶である。左右非対称の体部を有している。体部最大幅は約19cmである。体部は全体にカキメが施される。317～319は、平瓶である。体部上半と下半にカキメが施される。324は、鉄鉢である。復原口径20.8cm・器高11.4cmを測る。全体に焼き歪みが顕著である。

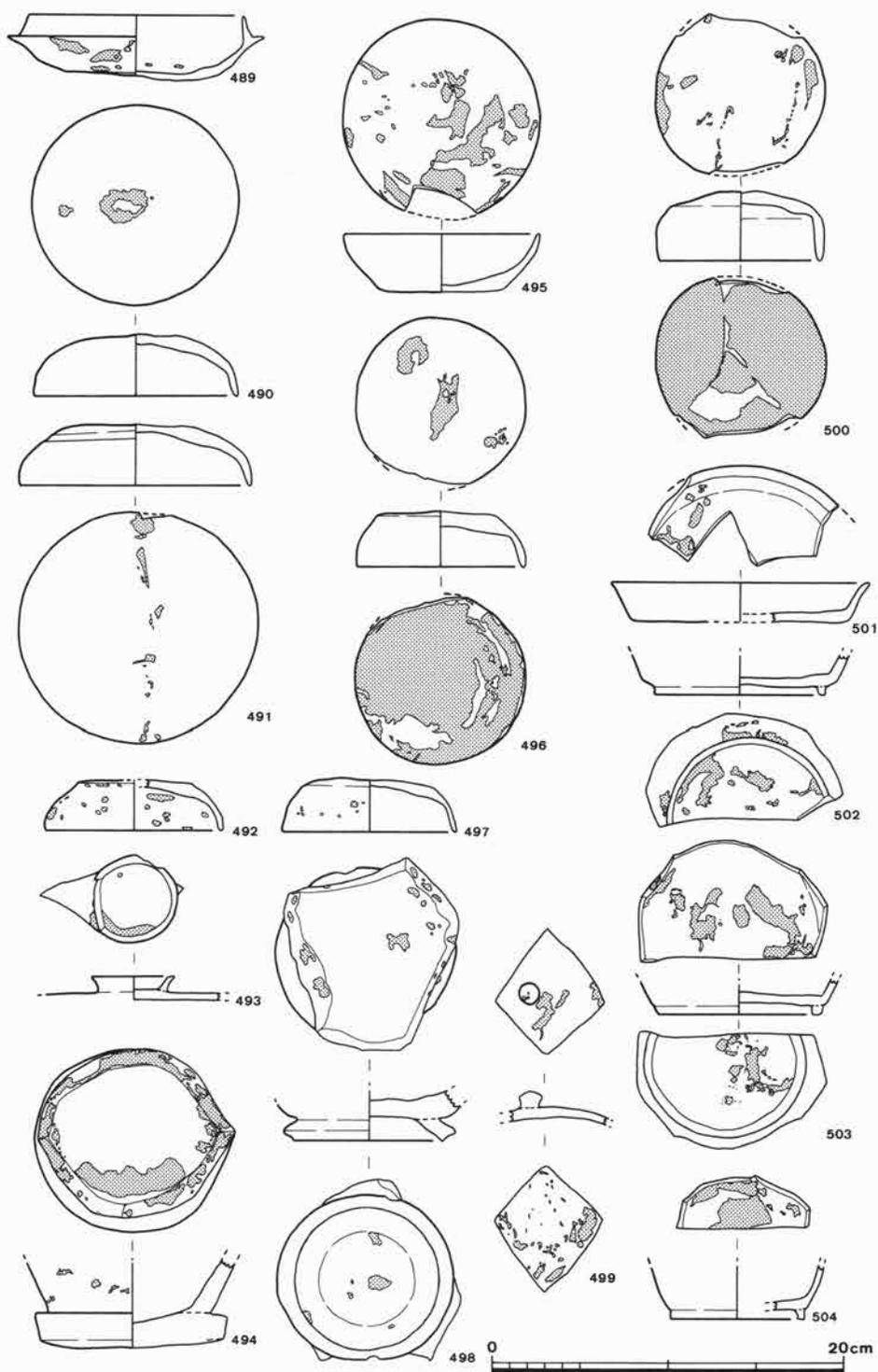


第72図 C地区出土遺物実測図(24)

製塩土器(475~488) 奈良時代の製塩土器である。口縁部及び胴部の破片であり、底部破片は見られなかった。口縁部は内外面に指頭圧痕が顕著に残存する。これは個体の製作



第73図 C地区出土遺物実測図(25)



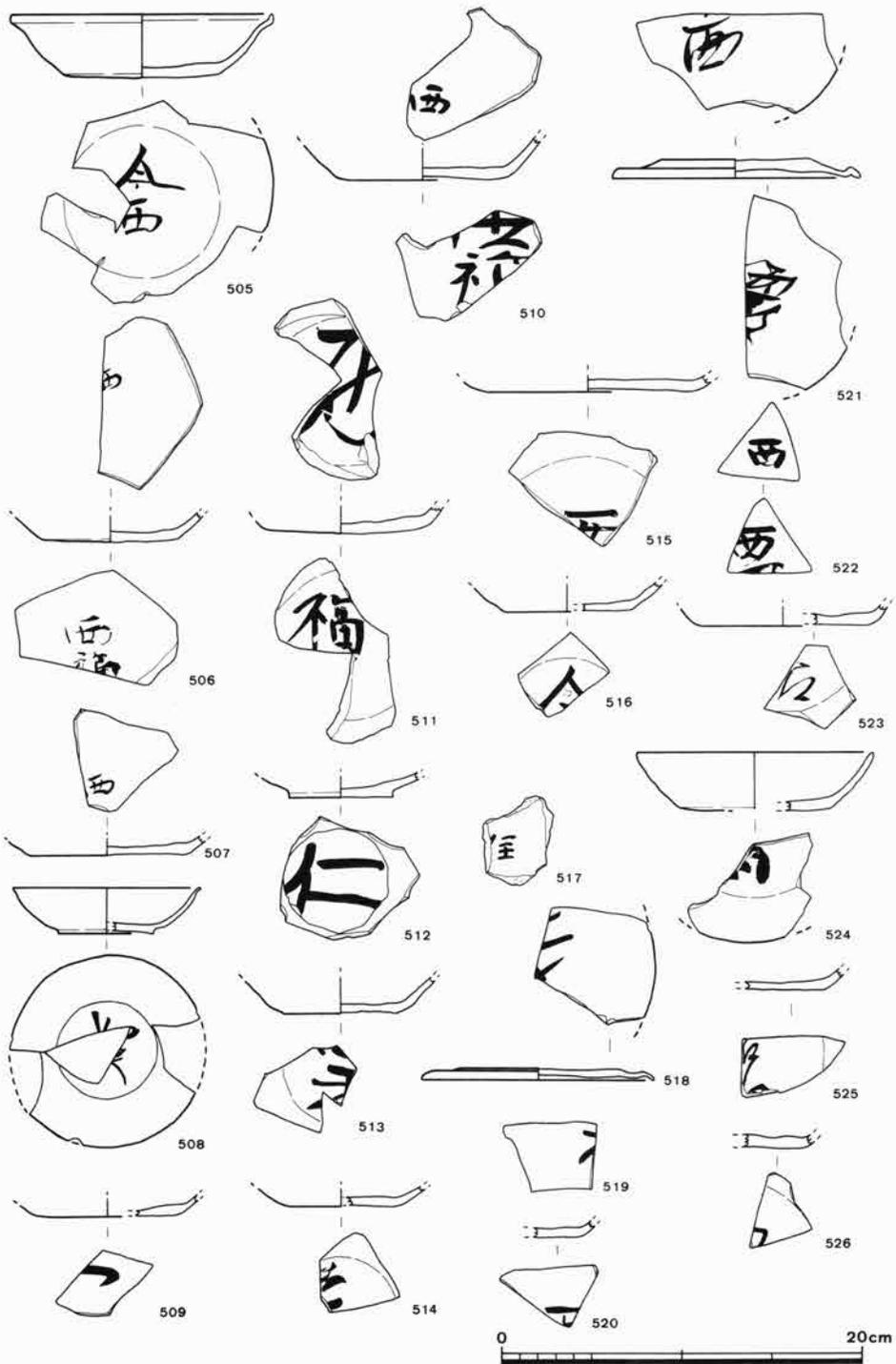
第74図 C地区出土遺物実測図(26)

が輪積みによるものであり、その後指頭によりナデているためである。口縁部の断面形は端面を持ち、方形を呈するもの(475・477・479・480)と、端部を丸くおさめるもの(476・478)が存在する。一方、胴部～底部(481～488)は、内面に布圧痕が見られる。使用された布の、布目圧痕の観察から、少なくとも布には3種類が存在すると思われる。タテ糸×ヨコ糸が1cm²あたり10本×10本のもの、8本×8本のもの、7本×6本のものなどがある。これら奈良時代の製塩土器は紀淡海峡の土器と類似する。^(注11)

漆附着土器(第74図) 漆附着の土器は器種も多種に及ぶ。また、時期幅も6世紀後半～8世紀と広範にわたる。器種は杯蓋、杯身、長頸壺、すり鉢などがある。出土した土器の大半、すなわち、杯蓋・杯身は工房での作業における、小分け用の容器(パレット)として、一方、長頸壺・すり鉢は漆運搬容器として使用されたものである可能性が高い。これらの土器の漆附着部位は内面・外面・内外面・破断面に見られる。489～493・495～497・499～504は、内面・外面・内外面に附着したものであり、494・497は破断面にも漆の附着が見られる。これらの附着部位の差は、先に述べた運搬用と作業用といった目的の相異によるものと思われる。494・498については、漆原液がかなりの粘性を有しており、外容器を意図的に破砕することによって、内容物を掻き出した事実を示したものと見える。これらの漆工房関連遺物の出土は平城京の調査や明日香村に所在する、紀寺跡寺域東南部の調査などで確認されている。^(注12) 当調査研究センターの亀岡市池尻遺跡の発掘調査でも漆工関連遺物が確認されている。^(注13) これらの報告によると、漆運搬容器とされた土器は、狭口の壺の頸部の付け根かあるいは体部肩部分に打撃が加えられ割られているという記述であるが、内容物を掻き出すという目的を考えると、上半部か下半部のいずれかを打ち割る行為が妥当と思われるが、この遺跡のものは、下半部で破砕されており、既報告例とは破砕部位が異なっている。また、この遺跡における漆工房の初現は、489～491の土器については、漆の

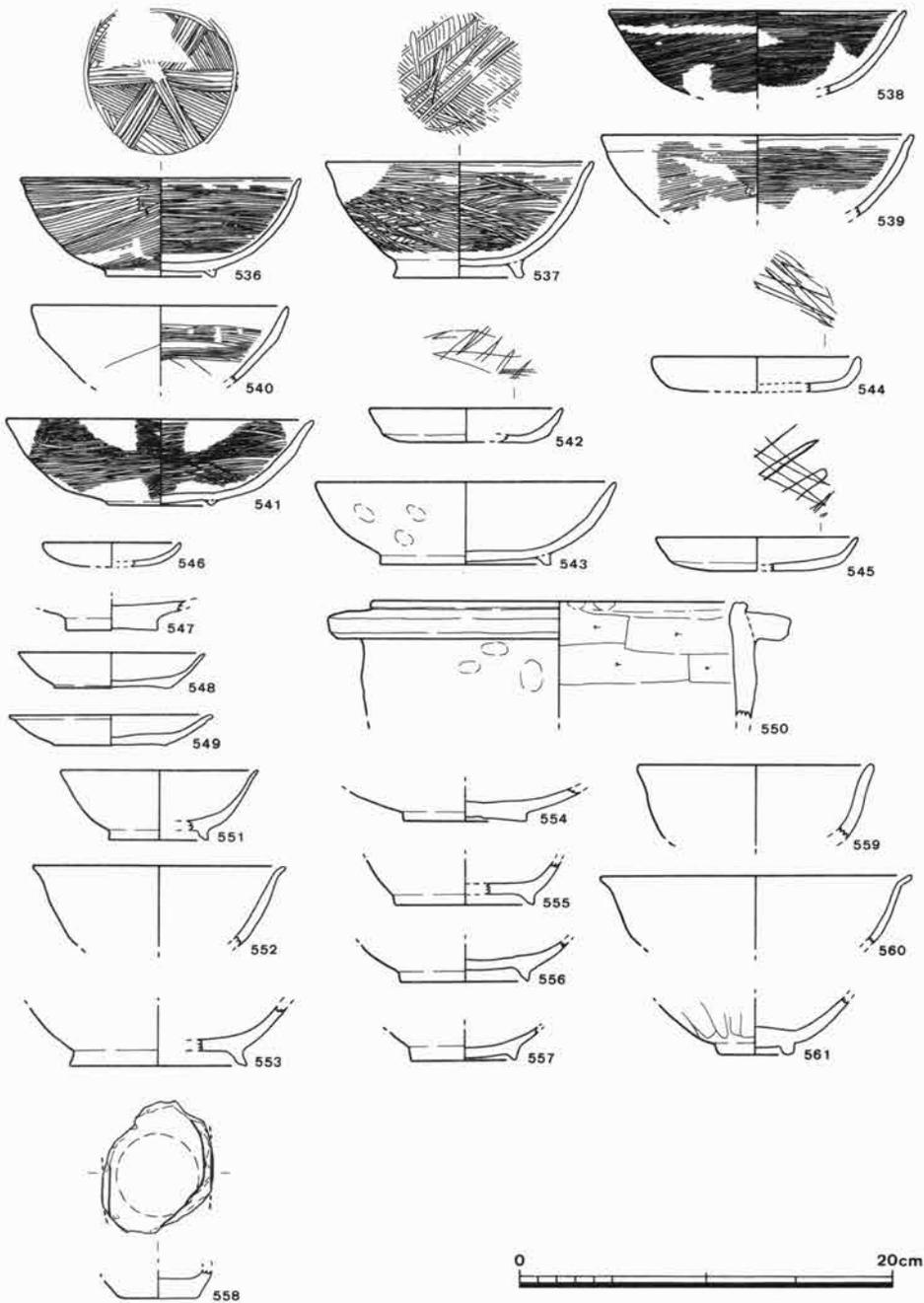
付表4 墨書土器一覧表

番号	器種	内面	外面	備考
505	杯	—	今西	
506	杯	西	西福	
507	杯	西	—	
508	杯	—	不明	
509	杯	—	不明	
510	杯	西	西福	
511	杯	西	福	外面 福□カ
512	杯	—	仁	
513	杯	—	不明	
514	杯	—	不明	
515	杯	—	西	
516	杯	—	今	
517	不明	住カ	—	
518	蓋	—	不明	
519	不明	不明	—	
520	杯	—	西カ	
521	蓋	□西	西□	
522	不明	西	西□	
523	杯	—	不明	
524	杯	—	不明	
525	杯	—	不明	
526	杯	—	不明	



第75図 C地区出土遺物実測図(27)

付着部位も図示した他の資料と比較してわずかであり、積極的な評価に疑問が残るが、少なくとも7世紀には最盛期を迎えていたと思われる。



第76図 C地区出土遺物実測図(28)

墨書土器(第75図) 器種はほぼ杯身・椀と杯蓋に分類される。墨書の施された部位は杯身及び椀は見込み、底部、中には両面に記銘されたもの(507・511・512・520)も存在する。また、杯蓋は、図示したものでは519・521の2点であるが、519は外面、521は両面に墨書が施されている。522は、両面に墨書が見られるが、細片のため、器種は不明である。文字のうち、判読可能のものは「今西」、「西」、「西福」、「福」、「仁」である。各個体の詳細は付表を参照されたい。

黒色土器・緑釉陶器(第76図536～538、551～558) 536～538は、黒色土器である。536は、口径15cm・高さ5.45cmを測る。内外面とも黒色化された、黒色土器A類と呼ばれるものである。内外面とも密にヘラミガキが施される見込み部分には不定方向のヘラミガキの後、放射状に3本のミガキが施される。完形である。537の見込み部分には不定方向のヘラミガキが施される。551～558は、緑釉陶器である。551～557は椀、558は耳杯である。底部は、551・553・555～557が貼り付け高台であり、554は削り出し高台である。558は、赤褐色の軟質の焼きの土器に緑色の鉛釉が施されている。

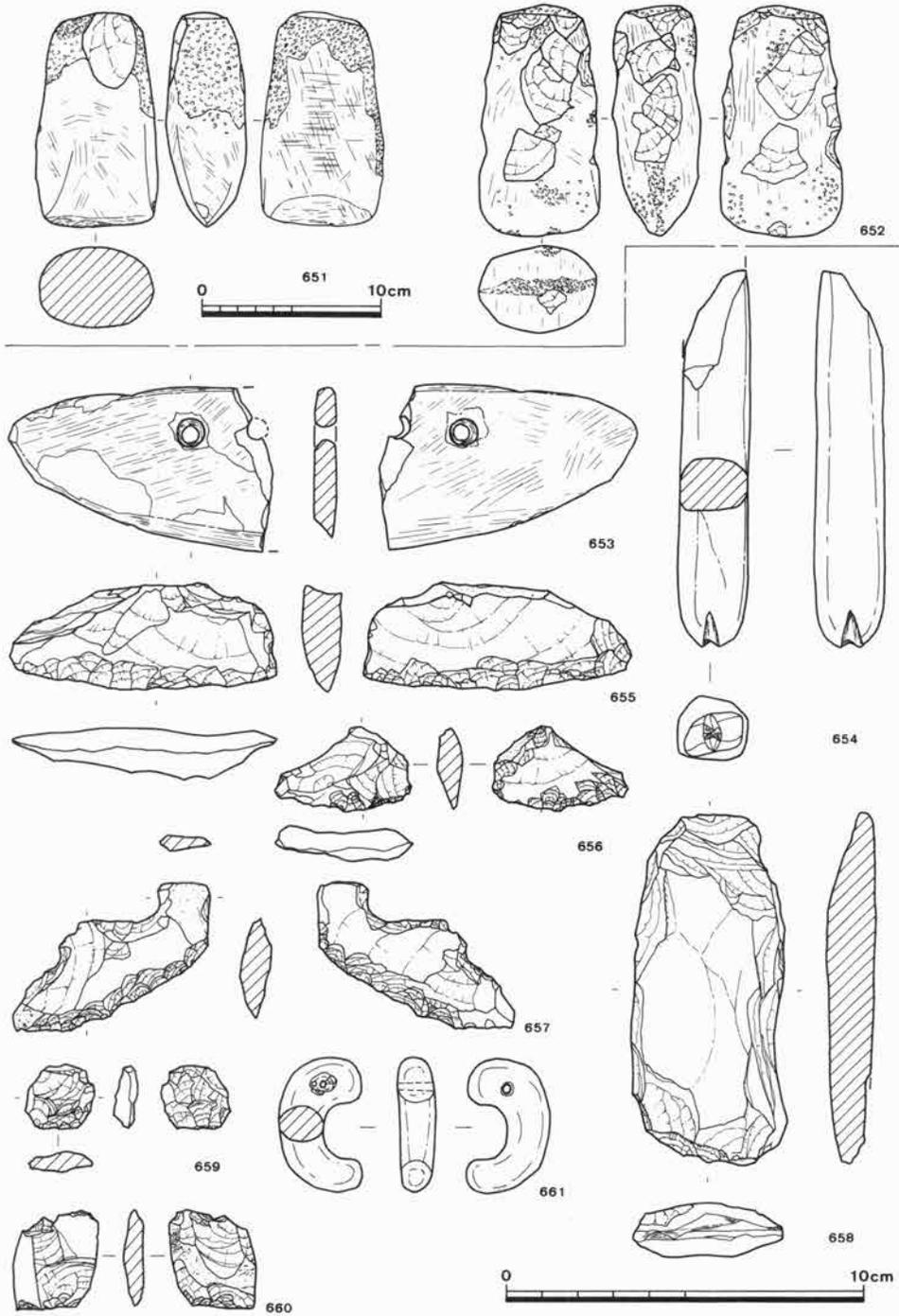
c. 中世の遺物

中世の土器(第76図) 主に瓦器椀・瓦器皿・土師器・羽釜・青磁椀などが出土している。539～543は、瓦器椀である。541は、完形品である。口径16.2cm・器高4.6cm・底径5.4cmを測る。口径のわりに器高の低い器形である。高台は断面三角形の付け高台である。内外面とも密にヘラミガキが施される。559～561は、青磁椀であるいずれも口縁部及び底部の破片である。

d. その他の遺物

銭貨(図版第48) 延喜通寶、乾元大寶の2点が出土した。いずれも皇朝十二銭に含まれている。延喜通寶は皇朝十二銭の11番目に鑄造された銭貨で、初鑄年は907年である。直径は、約1.89cm・厚さ約1.75mmを測る。また、乾元大寶はその12番目にあたり、初鑄年は938年である。直径は約2.01cm・厚さ約1.21mmを測る。鑄上がりは悪く、郭の内側にバリが見られる。

包含層・遺構外出土の石器、勾玉(第77図) 太形蛤刃石斧、石庖丁、切り目石錘、スクレイパー、石匙状石製品、ピエスエスキュー、打製石斧、勾玉などが出土している。651・652は、太形蛤刃石斧である。いずれもC地区の流路跡SD01の構築された貼り土である、青灰色粘土層から出土した。651は、かなりていねいな作りである。刃部は研ぎ分けの稜が明瞭に残る。側縁部を中心に敲打痕が見られる。652は、荒割り段階の剝片の剝離痕が顕著に残る。刃部は使用による刃潰れが見られる。653は、外湾刃を持つ石庖丁である。表面は刃部の研ぎ分けの稜が見られる。穿孔は両面穿孔である。654は、石錘であ



第77図 C地区出土遺物実測図(29)

る。切り目部分には使用による擦痕が認められる。石材は暗緑色のチャートである。655・656は、スクレイパーである。655はサヌカイト製の直刃、656は暗赤色のチャートを使用した曲刃のものである。いずれの個体も刃部は両面加工である。657は、石匙状石器である。石材はサヌカイトである。刃部は両面加工である。つまみ部分は、両面から加工し、抉りが入る。表面の風化が他の個体と比較して著しい。658は、打製石斧である。板状剝離をする粘板岩質の石材である。刃部は使用による擦痕が見られる。659・660は、楔形石器である。659はチャート製、660はサヌカイト製である。661は、瑪瑙製の勾玉である。両端が赤味を帯び、それ以外は乳白色を呈している。作りはていねいで、全体によく研磨されている。

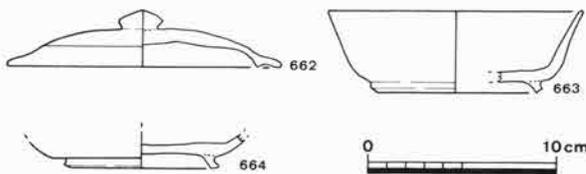
工房関連遺物 (図版第48) 工房関連の遺物としては、金属塊、鉄滓、ファイゴの羽口などがある。このうち、ファイゴの羽口は3個体分以上が出土した。この中で、金属塊は分析の結果、銅を主成分とした合金であることが判明した。蛍光X線分析であり、測定部位により、データに差が見られるが、銅約72%、鉛約17%・ヒ素約8%である。この資料からいえることは、何らかの製品を鑄潰したか、製品をつくる過程にあったものと思われる。重量は約122gあり、小さな製品であれば、十分作る事ができる塊である。この金属の分析結果で、特徴的であるのは、ヒ素の含有率が非常に高いことである。これは国産の銅に見られる特徴で、しかも、古墳時代のものではなく、奈良時代の製品に見られるものようである。^(註1)

自然遺物 流路跡S D01から出土した自然遺物には動物及び植物遺体がある。動物遺体にはウマの歯と中指骨がある。^(註15) いずれも生骨で遺存状態はあまりよくない。部位の判明した個体については比較的残りがよく、破損していたものの、ほぼ全体形が把握できた。一方、植物遺体(種子)にはオニグルミ、コナラ、モモ、サクラ、ヒョウタンなどがある。コナラは穀斗のみが出土している。オニグルミは数個体分、モモ核は総数350点以上が出土している。この中で、オニグルミ、モモは食用とされたものと思われるが、モモ核の数が他の種子を大幅に上回っている。

(柴 暁彦)

④D地区出土遺物(第78図)

D地区から出土した遺物はあまり多くないが、中でも大半は細片化した須恵器・瓦器・土師器である。したがって、ここでは井戸の検出面で出土し



第78図 井戸跡S E01出土遺物実測図

た3点の須恵器をあげる。

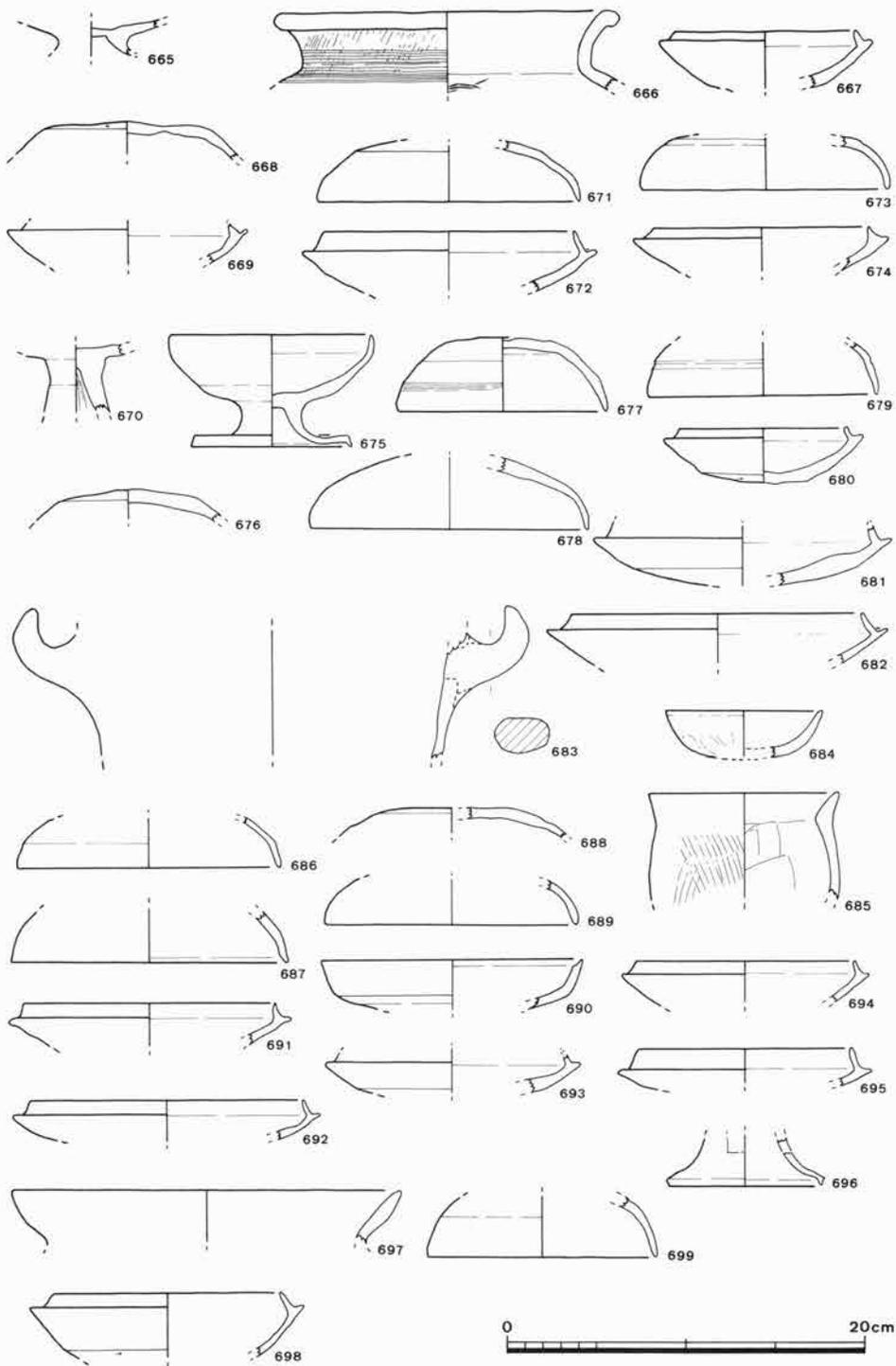
662は、蓋である。宝珠つまみを持ち、天井部からなだらかに下がって口縁部内面にかえりを持つ。口径14.4cm・器高3.1cmを測る。663・664は、杯身である。ともに外方に踏ん張った台形の高台を持つ。663は、底部から斜め上方にまっすぐ立ち上がる口縁部を持っている。口径13.4cm・器高4.5cmを測る。

(原田三壽)

⑤E地区出土遺物(第79図) E地区からの出土遺物は少量であるが、掘立柱建物跡の柱穴から時期を決定できる資料が出土した。671・672は、掘立柱建物跡S B18の出土土器である。杯身1点、杯蓋1点がある。いずれの個体も端部に近い部分の破片であるが、6世紀後半のものと思われる。667～684は、掘立柱建物跡S B23の出土土器である。杯身・杯蓋の完形品各1点、杯蓋2、杯身2、土師器小椀、壺を含む、計10点が出土している。田辺編年の陶器TK209～217型式併行の範疇で把握できる。686～697は、掘立柱建物跡S B26の資料である。杯蓋5点、杯身5点、須恵器高杯脚部、土師器甕口縁がある。いずれも細片である。6世紀末から7世紀初頭のものと思われる。そのほかの図示資料は、各建物跡の柱穴から1点ずつであり、時期的には6世紀末から7世紀初頭で捉えられると思われるが、建物跡の時期を決定するには、根拠に欠ける。

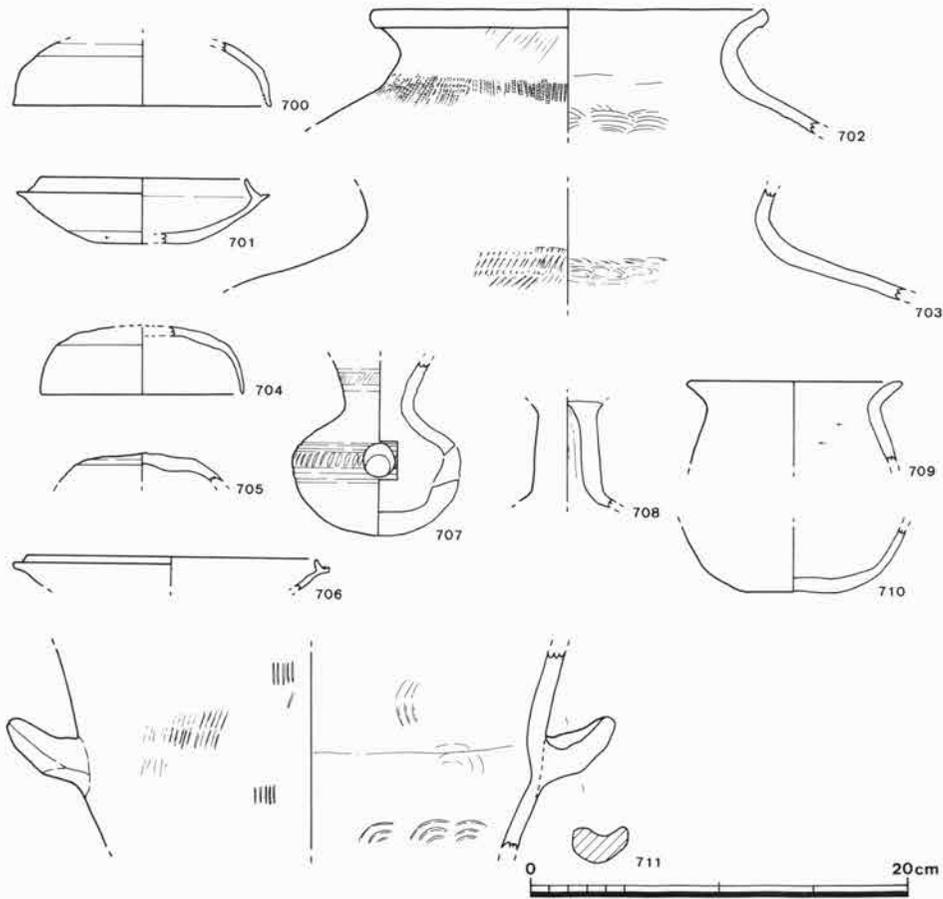
溝跡S D01、土坑S K45出土遺物(第80図) 700～703は、溝跡S D01の出土土器である。須恵器の杯身、杯蓋、甕口縁及び頸部破片がある。704～711は、土坑S K45の出土遺物である。須恵器杯身、杯蓋、甕、土師器高杯脚部、甕、椀、韓式土器と思われる牛角把手の付いた体部破片がある。704・705は、杯蓋である。口縁部及び天井部の破片であり、口径などは明確でない。707は、甕である。体部最大径となる部分に1孔が開く。工具による左下がりの刻みを入れる。その後、文様の上下を半截竹管状の工具でナデている。頸部は櫛状工具による右上がりの刺突ののち、上下に凹線を施している。708は、牛角把手の付いた体部片である。把手の形状は内面を凹ませ、端部を尖り気味にしている。把手の表面は面取りされ、角張っている。体部外面にはタタキ、内面には同心円状の当て具痕がわずかに残る。焼成は甘く、瓦質である。

(柴 暁彦)



第79図 E地区出土遺物実測図(1)

665. S B 06 666. S B 08 667. S B 13 668~670. S B 14 671・672. S B 18 673・674. S B 19
 675. S B 20 676~685. S B 23 686~697. S B 26 698. S B 27 699. S B 34



第80図 E地区出土遺物実測図(2)
700~703. S D01 704~711. S K45

4. まとめ

今回の八木嶋遺跡の調査地点はA～Eの5地区であった。個々の地区について要約する。

A地区

中世墓と考えられる土坑を3基検出した。それぞれ出土遺物に出土量及び遺物の内容に差は見られるものの、規模は同様である。土坑S K01からは多量の瓦器椀、瓦器皿が出土し、砥石、鉄製品なども出土している。ただ、同形同大の瓦器皿が特に多量に出土している点が墓として疑問が残る。しかし、本文中でも触れたが、その他の出土遺物に青磁椀片、砥石、不明鉄製品が出土していること、方形に組まれた状況を呈する、礫の出土が見られたことから瓦器焼成窯ではなく墓壙と考えたい。

B地区

掘立柱建物跡4棟と竪穴式住居跡1棟、柵跡1つを検出した。ピットからの出土遺物がなく、時期が不明であるが、建物跡の主軸方向から2時期に分類できる。1期は、掘立柱建物跡SB01・SB02・SB04である。これらはピットの規模、主軸方向がE地区の掘立柱建物跡と類似しているため、6世紀代に比定できると思われる。2期は、掘立柱建物跡SB03である。1棟のみであるが、ピットから緑釉陶器が出土しているため、10世紀に比定できる。2期の建物跡はピットも小さくなり、中世的な要素が見られる。

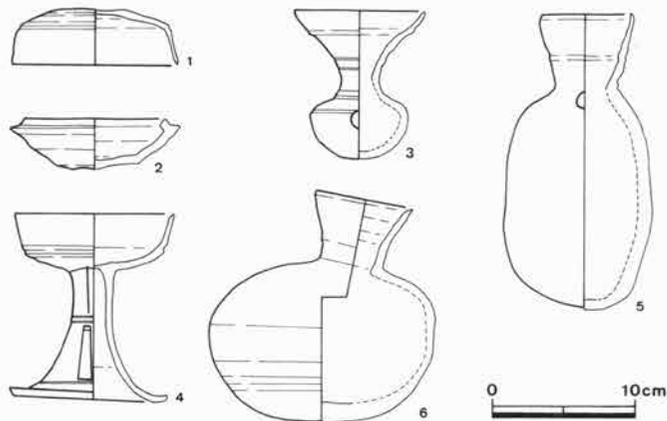
C地区

(1)八木嶋遺跡C地区の流路跡SD01の機能と出土遺物について

C地区で検出した流路跡SD01からは須恵器、土師器などの土器類をはじめとして、玉類、鉄製品、木製品など多種の遺物が出土した。今回出土した遺物から流路跡の利用方法について見てみると、およそ、4つに大別できる。①集落内に導水し、飲料用とした。②灌漑用として河川から支流として引き込んだ。③日常の農耕儀礼を行う場所としての流路、すなわち水辺の祭祀の場として。④集落の移動に伴う流路の廃棄行為としての祭祀が存在していたと思われる。これらを詳細に見ていくと、①は、この流路を構築することによって、河川の本流から水を引き込み、生活に必要な飲料水としていたことが考えられる。SD01の周辺では後世における削平のためか、竪穴式住居跡やその他の遺構は確認できなかった。しかし、この場所での土器、木器のほか、生活痕跡をうかがわせる遺物に、モモの核がある。流路跡周辺から採取し得た種子は約350個を数える。オニグルミなど他の種子の出土量と比較しても圧倒的に多く、おそらくモモは食用とされ、その後、流路に投棄されたものであろう。この遺跡では、直接、河川あるいは流路を利用していたものと思われる。②C地区の付近を流れていたと思われる旧河川(現 東所川)から導水していたものと思われる。この河川は現在でも灌漑用水として利用されている。灌漑に関連する遺構は、SD01とこの流路に付随する柵SX02である。遺構としてかたちをとどめていたのは、流路の肩部分の土堤状の高まりと、この高まりに遺存した杭と杭の痕跡で、これとは別に流路内にも流れに直交するかたちで杭が打ち込まれていたか所があり、土堤状高まりは単なる堤防のような護岸施設ではなく、灌漑用としても利用されていたことは明確である。また、出土遺物のうち、灌漑に関連する遺物を見ると、流路の溜まり状の部分から出土した木製農具類の未成品がある。この鋤などは加工の段階に差が見られるが、これは木材を製品として加工する途中で水漬けにすることによって木材自体を軟らかくし、加工しやすくするための加工の一工程である。一方、農具で使用痕の認められるものは、曲柄平鋤、鎌の柄と思われるもの、田下駄などがある。これらの木製品の出土が当遺跡での水稻耕作

を裏付けている。また、③は、祭祀行為として遺物の供献された状態は捉えられなかったが、これらを出土遺物の中から抽出すると、ミニチュア土器、滑石製白玉、ガラス小玉、土製丸玉、鉄鏃、刀子などとともに、製塩土器片、木製鏃などが挙げられる。この中で滑石製白玉、ガラス小玉、土製丸玉、製塩土器片は流路の下層から出土した。しかし、遺物は流路内では流動的なため、見つかった場所で供献されたとは断定できないが、流路の上層で平面的に見つかった土器類の出土状況とは明らかに異なる。おそらく、ミニチュア土器や玉類を水辺に供献し、自然の恵みに対して祈祷したものと思われる。しかし、この遺跡では③に該当する水霊信仰の祭祀遺物である、玉類や木製模造品の出土はきわめて少ない。その他、時期は不明確な点もあるが、流路及び流路の周辺でウマの生骨や歯が出土した。これらもここに含めてよいものと思われる。④については、多量に出土した土師器及び須恵器がある。この土器類の出土状況は、ほとんど流路を埋めつくした状況を呈していた。この状況は、出原恵三氏の分類によると、Ⅳ類に該当する^(注16)。土器の出土状況はおよそ流路の2か所に集中していた。おそらく水辺での祭祀ののち、流路内へ一括投棄したものと思われる。投棄された時期は、土器編年から見て古墳時代後期であり、これをもって流路の廃絶と考える。しかし、流路の機能を停止した古墳時代後期以降、奈良時代でもSD01の周辺では引き続き祭祀行為が行われていたことが、墨書土器の出土から明らかである。また、SD01構築以前の布留式段階でも、流路の肩と思われる場所からの甕・高杯などの出土があり、出土遺物とその出土状況から、祭祀行為が行われていた可能性がある。一方、視野を広げて、遺跡の周辺環境に目を向けると、遺跡の南側に神奈備山を思わせる山が遺跡前面に派生していることから、この場所で山を対象とした祭祀が行われていた可能性を考える必要もある。遺跡の立地では、同様の状況が京都府福知山市の石本遺跡でうかがうことができる^(注17)。この遺

跡は時期的にも八木嶋遺跡と併行する。しかし、八木嶋遺跡の南側の丘陵の麓にはこの集落の墓域と考えられる坊田古墳群が存在していることで、背後の丘陵との関連が考えられる以外、直接要因は不明である。



第81図 坊田5号墳出土土器(注4より一部修正、トレース)

(2)古墳時代以降の祭祀について

古墳時代の流路が廃絶した奈良時代において、流路跡の近辺で祭祀が行われていたと思われる。それを端的に示すものは、墨書土器と製塩土器である。C地区でこの時期における遺構は確認できなかったが、これらの遺物が出土したことから、わずかに残った浅瀬を水辺の祭祀の場所として利用していたと思われる。墨書の内容は「今西」及び「西福」と「西」の字を多用する傾向が見られる。しかし、付近には字切図を見ても該当する小字名は見当たらないため、地名を表現したものではないと思われる。遺物量は古墳時代と比較しても非常に少なく、その他の祭祀遺物も出土しなかったため、どのような祭祀形態をとっていたのかこれだけでは判断しがたい。

D・E地区

E地区で検出した遺構はたいへん多く、掘立柱建物跡37棟を始め、土坑、溝などがあるが、それらは大きく見ると位置的に一定の傾向が認められる。建物跡は、E地区全体に万遍なく分布するといったものではなく、この地区の中をおおよそ3つのブロックに分けることができる。

まず1つめは、SB23を中心にしたまとまりである(1ブロック)。次は、SB02・08を中心にしたものである(2ブロック)。この2つのブロックは、溝SD01によって区切られている。この溝をまたぐ建物跡は確認されておらず、比較的小規模な溝ではあるが、建物跡群を区画する溝と考えられ、そういった意味でもこの溝の持つ意味は大きいものがある。もう一つは、SB34を中心としたものである(3ブロック)。3ブロックと2ブロックの間は、調査前は水田の境界でもあり、その間を水路が流れていた。この水路は、現在のもので遺構ではないにもかかわらず、この水路をまたぐものはSB05ただ1つであり、特に1ブロックではこの水路周辺に建物跡はもちろんのこと柱穴すらほとんどない。したがって、現代のものであるにもかかわらず、この場所には古墳時代から両ブロックを区画するような遺構が存在した可能性も考えられる。このことは、溝SD39が^(注18)この水路を越えてのびず、屈曲しないことも傍証とできよう。次に、検出した建物跡の特徴についてみる。

SB23は、三面廂をもつ東西棟の大きな建物跡である。先の概報では、身舎の西辺の柱穴のつまり具合や建物全体の構造を考えて、四面廂としたが^(注19)、四面廂ではなく、やはり三面廂と考える。建物の東辺をわざわざ細かく区切るその構造は、その使用方法をも推定させる興味深いものである。一方、このSB23は、やや主軸の角度が異なるが、SB18と隣接しており、その距離からも並立していた可能性がある。そのSB18の東側にある柵列SA38は、位置的に見てもSB14をも含めたこれらの数棟の建物に関連するものであろう。

SB19は、2間×2間の宝形造りである。身舎の建物は構造的にはクラ的なものである

が、廂を持ち、さらに東南部の柱列は、孫廂の可能性もある。ただし、身舎と廂の柱筋は合致しないため、構造的に日常の使用には不向きなものとなっている。

S B08は、遺構のところでもふれたが、軒を支える柱が身舎の柱筋と合うように立てられていることから、建物内部は細かく区切られていたと思われる。したがって、建物の用途としてはかなり特殊で、居住に適したものでなかったことがわかる。また、この建物跡のみ唯一主軸方向がS D01より北側の遺構群の中では他と異なって大きく振れている。

合計38棟の建物跡は、位置的に3ブロックに分類したが、時期的には柱穴出土遺物から明確に群として分類するにはいたっていない。主軸方向から見ると、S B23を中心とする時期は、比較的規模の大きなものが多く、位置も溝と柵列の中に限られる。次に、S B02を中心とするグループは、溝と柵列を越えて拡散する傾向にある。規模としては2間×2間、または2間×3間と規模の小さなものが多く、用途としては倉庫などが考えられよう。

柵列S A38は南北にのびるが、北側はちょうどS D01のところで途切れている。両者は直角には交わらないが、溝を越えて柵列が北にのびないことから、ともに関連があり、建物跡群を区切るものであったと考えてよい。また、柵列の南部は現行の水路によって削られているが、そのまますすぐのびて調査地南辺まで続くものでもない。柵列S A38の大きな特徴は、柱穴が長方形ということである。柱穴の形状に注目すると、すぐ隣のS B18も38ほど一辺の長さに違いはないが長方形である。主軸は、S A38が 26° 、S B18が 20° と軸がやや振れている。S A38と主軸方向が全く同じものはS B10であるが、溝S D01を越えた他のブロックとなってしまふ。おなじ3ブロック内で、主軸方向の違いが 5° 未満のものを拾いだすと、S B15・16・17・23・24となる。したがって、数値だけでは必ずしもどれに付随するかは明らかにはしづらいが、いずれにしても、建物群を区切る溝であろう。

次に、同じ柵列のS A40であるが、S B31に付属するようにも思われるが、やや距離も離れているし、主軸方向が 23° であるのに対し、S B31は 16° と 7° のずれがあることから、ただちにこの建物跡に付属するものとは決められないだろう。一方、同じ柵列のS A38は 26° と両方の柵列の角度の差はわずか 3° で、角度的には同時期の可能性もある。S A38は、柵列の西側に展開する建物跡群を区画するものであるのに対し、S A40の西側には主軸を同じくするような建物跡は認められない。そこで東側に注目すると、地形は調査地東方へ約50mほど微高地が続き、そこから先は旧河道に相当すると考えられる約1.5mほど急激な段差が認められる。したがって、東方の微高地には同様な掘立柱建物跡が続く可能性があることから、S A40はあるいは東方に展開する建物群を区切るものとも考えられよう。

また、D地区とE地区の関係であるが、両地区の間には幅約2mの里道が通っている。この里道をはさんだD地区にもE地区と同様、大きさもほぼ同じ柱穴がD地区北辺にも続

くが、それも北辺に限られている。

調査区にとらわれず、D・E地区の遺構を全体的に見ていくと、掘立柱建物跡群の北側にやや離れて土坑が1基、南側には井戸跡が1基確認されている。土坑からは比較的多くの遺物が出土したが、時期的には柱穴内より出土した遺物の年代と同じである。南側の井戸では内部から遺物は出土していないが、検出面からは須恵器が数点出土した。この遺物が井戸に伴うかどうかは出土状況からは断定しえないが、建物跡群の北側の土坑は、集落構造及びその祭祀を考えるうえで非常に興味深い。

竪穴式住居跡は、多くの柱穴と同一面で検出した。出土遺物が土師器の細片に限られ、時期を明らかにしうるものはないが、掘立柱建物跡との切り合い関係はないことからほぼ同時期のものと考えられよう。

E地区で確認した建物跡の時期及び検出した柱穴は大変多いが、出土した遺物から見ると6世紀後半から7世紀初頭にかけてのものに限られ、柱穴内より他の時期の遺物は混入と考えられる少量のもの以外出土していない。

ここで、この建物跡を造営した人々の墓地を考えてみよう。八木嶋遺跡の周辺をながめると、冒頭でも触れたが、この遺跡の南方に位置する坊田古墳群に注目する必要がある。この古墳群の中の1基である5号墳は調査がなされているが、そこから出土した土器はTK209に併行する時期のものであり、時期的にはE地区の掘立柱建物跡から出土した土器の年代観とほぼ一致している。これをもとに、おおむねこの坊田古墳群の造営された時期は6世紀末から7世紀初頭前後にかけてのものということが想定できる。

坊田古墳の中でも一番大きなものは1号墳である。この古墳は、一辺18m・高さ4mの方墳である。内部主体は、両袖式の横穴式石室で、玄室は、長さ4.8m×幅2.3m×高さ2mを測る。玄室の面積は約11㎡と周辺に分布するこの時期の古墳と比べても大きなものである。いわゆる南丹波の後期古墳全体を眺めても、概要がおおむね判明している古墳群の中で同時期に属するものに八木町の小谷古墳群、亀岡市の小金岐古墳群をはじめとしていくつもあるが、中でもこの時期のもので1号墳に匹敵する大きさの古墳は存在しない。

坊田1号墳の時期を判定する確証はないが、古墳時代後期末、古墳の規模が縮小していく時代の趨勢の中で坊田1号墳の規模は傑出しているといえる。その古墳の規模とSB23を中心とする建物跡は、ただちには結びつけられないが、両者の規模は他の遺跡例を考慮に入れ、今後の検討に貴重な資料を提供するものである。遺跡の立地から考えると、この古墳及び建物の造営者は八木町域のみならず、大堰川の水運と関わりの深い南丹地域の首長クラスと考えることができよう。

(柴 暁彦・原田三壽)

(2) ^{YAGI ZYO}八木城跡第2次

1. 調査の経過

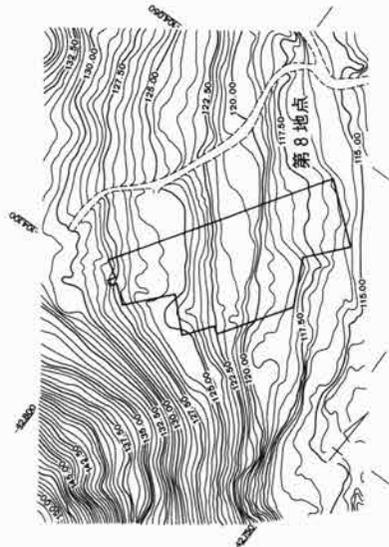
八木城跡は、京都府船井郡八木町と亀岡市の境の城山に位置する山城跡である。室町時代の丹波守護代内藤氏の居城として、京都府の中世山城跡の中でも著名な城跡である。また、キリシタン武将内藤ジョアンゆかりの城跡としても知られている。標高約330mの山頂に主郭を置き、派生する尾根などに曲輪などを配して、全山を要塞化した大規模な山城跡である。今回の調査地は、城山の北東麓部分である。前年度の工事用道路部分の試掘調査(第1次調査)で八木城跡に関係すると考えられる遺構・遺物を検出しており、今回は道路建設予定地全体にわたって試掘調査及び本調査を実施した。

調査は、平成4年5月18日から着手し、遺構・遺物が残存している可能性が高い8地点について実施した。地元調整の関係から、まず調査範囲の南西部にあたる第8地点から試掘を始め、以後、第7・第5・第3・第4・第6地点の順に試掘を行った。その結果、第3・第6・第7・第8地点について本調査が必要となり、順次拡張調査を行った。なお、第3地点については、調査計画や工事計画の関係から、次年度に本調査を実施することになった。また、前年度の試掘調査の結果から本調査・追加調査が必要と考えられた第1・第2地点についても調査を行った。平成5年3月5日に調査を終了した。この間、平成4年10月29日に現地説明会を開催した。

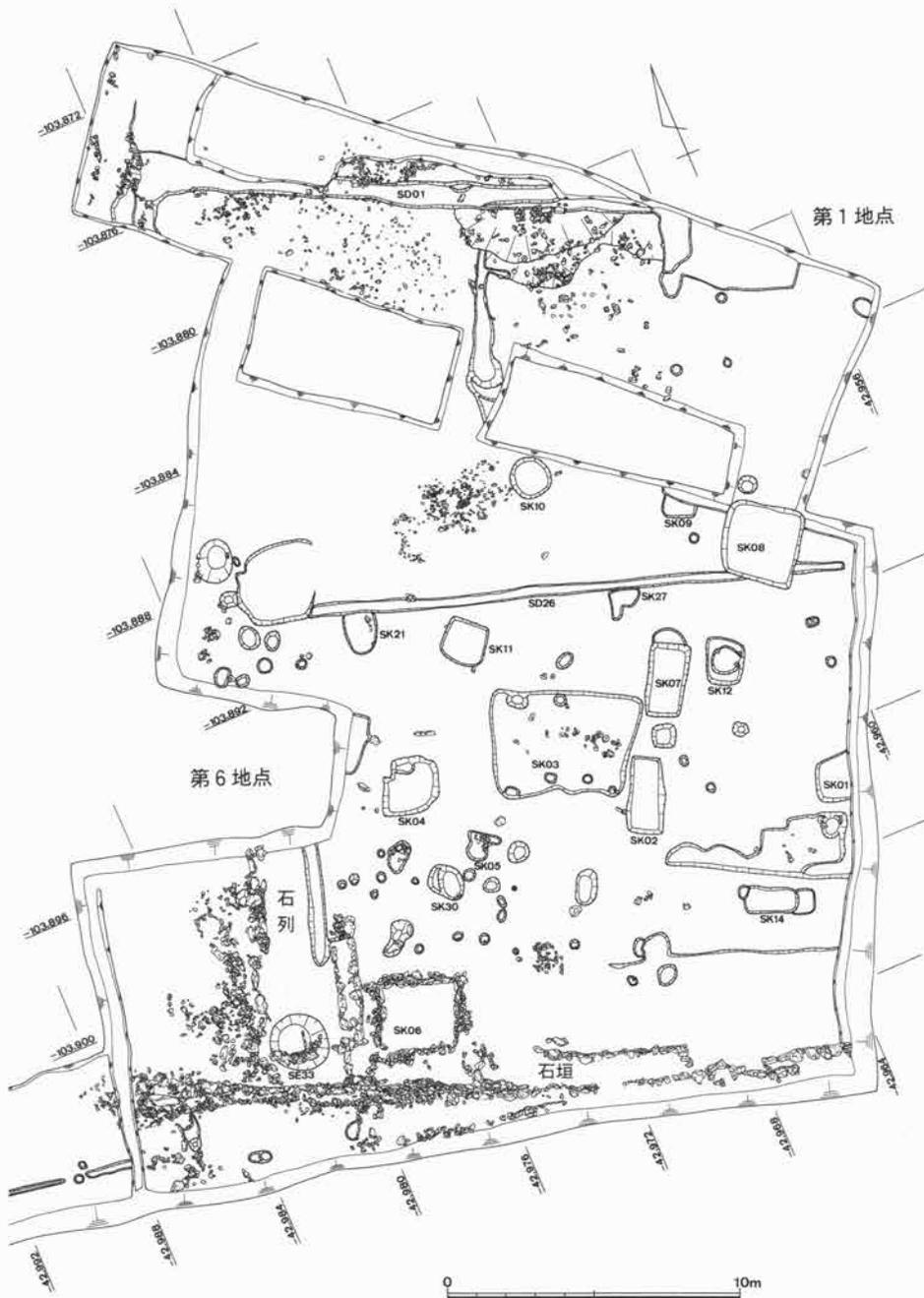
なお、上記のとおり、八木城跡の調査は平成5年度にも実施する予定であり、それをもって八木城跡北東麓部分の調査は完了する。一連の調査であり、内容的には関連するところがあると考えられるので、まとまった概要報告は次年度に行い、今回は調査内容を略述するにとどめる。

2. 調査の内容

第1地点 絵図に「天神口」と記され、一説では大手口と言われている部分にあたり、前年度の試掘調査で石積遺構や地山削り出しの階段状遺構などを検出した。今回は、その試掘トレンチの西側に一部重なるように調査区を設定した。この調査区からは、南東から北西に向かってのびる溝状遺構SD01を検出した。SD01は、幅約80cm・深さ約30cmを測り、その北西端部は、ほぼ直角に屈曲する。埋土から、16世紀後半頃のものと考えられる土師器皿などが出土した。この溝状遺構は、後述する第6地点で検出した屋敷地跡の北側



第82図 調査地形図



第83図 第1・第6地点平面図

を限るものとも考えられる。

第2地点 前年度の試掘調査で13世紀頃の石敷遺構を検出した部分に隣接する地点である。今回の追加調査では、幅約40cm・深さ約20cmの溝状遺構を検出したのみである。

第3地点 調査範囲北西側の小尾根の先端部に位置する。人工的に造成されたと考えられる階段状の地形がみられる。この地点では、小規模な石垣状遺構や井戸とみられる遺構などを検出し、石臼状石製品や16世紀頃的美濃瀬戸系陶器などが出土した。この地点の本調査は次年度に実施する。

なお、この地点には、平安時代の須恵器窯である古谷窯跡が想定されており、その確認もあわせて行ったが、関係する遺構・遺物は存在しなかった。

第4・第5地点 第1地点・第6地点の西側に隣接する広い緩傾斜地である。集石遺構・部分的な石列・溝状遺構などを検出し、15・16世紀頃の遺物が出土したが、断片的であり明確な遺構は残存していなかった。後世の開墾などで削平されたものと考えられる。

第6地点 第1地点の南側に隣接する緩傾斜地である。「天神口」の正面にあたる。ここでは、南側と西側から石垣や塀の基礎と考えられる石積みを検出した。南側の石垣は、4回もしくは5回の造替がなされている。

調査地南西隅部からは、円形石組井戸S E33や方形石組遺構S K06を検出した。S E33は、深さ約80cmで、石組はほとんど崩れている。底部には丸太材が直交して置かれており、その上に石を積上げている。この丸太材は、元は「井」の字形に置かれて、胴木になっていたものと考えられる。S K06は、約2.4m×1.8m・深さ約1mで、南側の石組がかなり崩れている。池もしくは水を溜める施設と考えられる。

調査地中央やや東寄りの部分から、2基の長方形土坑S K02・S K07を検出した。S K02は、約2.4m×1m・深さ約60cmである。S K07は、約2.5m×1.2m・深さ約90cmである。埋土中には人頭大前後の石が多数含まれており、元は石組であった可能性もある。これらの土坑はその形状などから、地下式貯蔵穴と考えられる。

この調査地では、礎石状の石も検出しているが、建物として復原できるものはない。しかし、以上のような状況から、この部分は屋敷地跡と考えられる。この調査地からは、16世紀頃の土師器皿や美濃瀬戸系陶器・中国製磁器などが出土した。

第7地点 第6地点の南東側に張り出した尾根の先端部に位置する。「天神口」を見下ろす位置にある。ここでは、尾根の背や腹を岩盤まで削り出して造成した段々状の平坦地を検出した。今回調査した最上部の平坦地の曲輪1では礎石状の石を検出しており、何らかの建物があったと考えられる。また、この曲輪の斜面部では石垣の一部を検出した。位置的にみて、隅櫓の土台とも考えられる。調査地東側では、尾根の腹を大規模に削り出し



第84図 第7地点平面図

て造成した広い平坦地を検出した。斜面側には「コ」の字状に排水溝をめぐらす。西隅部には、宝篋印塔の基礎を転用した礎石が残っており、建物があったと考えられる。

この調査地からは、16世紀頃の土師器皿や中国製磁器などのほか、「梅田社」の刻銘がある鰐口と考えられる銅製品の破片が出土した。

第8地点 今回の調査範囲の南西端部にあたる。ここでは、小さい谷を埋めて段々状に造成した狭い平坦地を検出したが、建物跡などは確認できなかった。16世紀頃の土師器皿が多数出土した。

3. 出土遺物

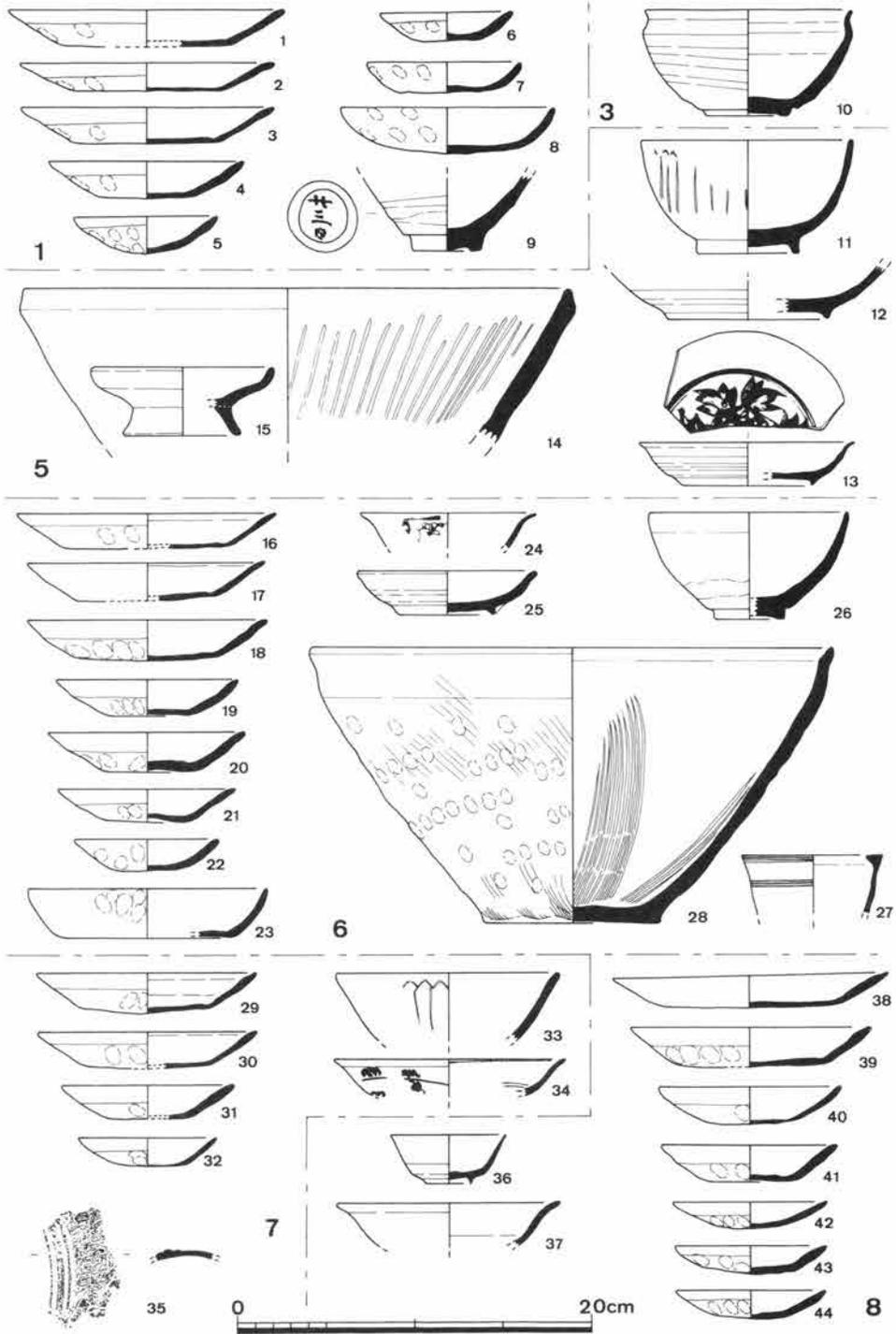
今回の調査では多数の遺物が出土したが、その多くは土師器皿である。ほぼ16世紀を中心とするものである。

1～9は、第1地点出土のものである。土師器皿1～6は、平坦な底部から口縁部がほぼ直線的に立ち上がる。内面の底部と口縁部の境がややくぼむ。土師器皿7・8は、口縁部が丸く立ち上がる。胎土はやや粗い。椀9は、美濃瀬戸系の天目椀で、外面腰部以下は露胎である。高台内に朱漆で「廿三日」と書かれている。以上の遺物は、すべて溝状遺構SD01出土である。椀10は、美濃瀬戸系の天目椀で、外面腰部以下は露胎である。第3地点出土である。

11～15は、第5地点出土のものである。椀11は、美濃瀬戸系の灰釉椀で、中国製の退化した蓮弁文をもつ青磁椀を模したものである。皿12は、美濃瀬戸系の灰釉皿である。皿13は、中国製の青花磁器で、口縁端部が外反する。播鉢14は、丹波産で、内面は一本引きの播目をもつ。土師器15は、台付の皿である。

16～27は、第6地点出土のものである。土師器皿16～22は、平坦な底部から口縁部がほぼ直線的に立ち上がるもので、内面の底部と口縁部の境がややくぼむ。これらのうち、19・22は土坑SK02から、21は土坑SK07から出土した。土師器皿23は、口縁部が丸く立ち上がり、胎土はやや粗い。皿24は、中国製の青花磁器で、口縁端部は外反する。皿25は、美濃瀬戸系の灰釉皿である。椀26は、美濃瀬戸系の天目椀で、外面腰部以下は露胎である。香炉27は、美濃瀬戸系の灰釉で、残存している限りでは内面にも施釉する。播鉢28は、瓦質で、内面に櫛引きの播目をもつ。

29～35は、第7地点出土のものである。土師器皿29～32は、平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がるもので、内面の底部と口縁部の境がややくぼむ。椀33は、中国製の退化した蓮弁文をもつ青磁椀である。皿34は、中国製の青花磁器で、口縁端部が外反する。35は、鰐口の破片と考えられる銅製品で、「梅田社」の刻銘がある。



第85図 出土遺物実測図

36～44は、第8地点出土である。椀36は、小形の中国製白磁で、見込みは蛇の目状に釉をはぎとる。皿37は、中国製の白磁で、口縁端部は外反する。土師器皿38～44は、平坦な底部から口縁部が直線的に立ち上がるもので、内面の底部と口縁部の境がややくぼむ。

4. 小 結

今回の調査成果の一つは、これまで想定はされていたもののあまり注目されることの少なかった城下の状況を、部分的ではあるが確認できたことである。第1・第6地点は、一説に大手口といわれている「天神口」の正面にあたり、八木城の重要な入り口の一つとみられる。この地点で検出した屋敷地跡は、そのような位置的なことを考慮すると、八木城に係わるかなりの有力者の武家屋敷地とも考えられる。また、そこを見下ろす第7地点の曲輪群は、この口を守る最先端の防御拠点と考えられ、その重要性がさらに実感される。冒頭に記述したように、八木城跡は、京都府の山城跡の中でもよく知られている城跡であるが、その実態は不明な点が多い。また、城主の内藤氏にしても、その一族がキリスト教と係わりがあったため、のちのきびしい禁教令のなかで後難を避けるため、故意に記録が書き換えられたり抹殺されたりしており、ほとんどが不明である。今回、その八木城の一部を調査し、その一端にややせまりはしたが、新たに考えなければならない問題点もでてきているのが実情である。内藤氏の八木城だけでなく、内藤氏以後の八木城についても問題点は多い。詳細は今後に期したい。

(引原茂治)

注1 調査参加者(敬称略)

明田安男・石橋愛子・伊豆田順彦・今西敬子・宇都宮理子・大槻益子・岡本竜之・岡本美和子・荻野富紗子・柏尾依子・川勝 修・黒田美代子・後藤尚規・小槻小福・小森雅夫・小森ゆく子・斉藤澄代・佐々木理・芝 敦子・白井貴広・瀬川良三・谷口明子・竹上てる・竹上美代子・田中寛治・田中佐知子・田村末雄・土井正文・友井章之・長田康平・中西 宏・中村美鈴・西村香代子・橋本 稔・畑 誠治・疋田季美枝・広瀬伊太郎・広瀬恵美子・広瀬恵子・広瀬彦一・広瀬弘治・広瀬作二・広瀬忠一・広瀬辰次・広瀬義夫・広瀬八重子・広瀬恭伸・広瀬洋子・広瀬こと・広瀬美也子・広瀬フジ子・広瀬友次・広瀬伝治・藤崎高志・藤田博明・堀 源一・堀 智行・堀はるの・牧野當子・松岡稔春・松下道子・松本末野・松本芳雄・三沢繁忠・見須俊介・宮崎紗知子・村上典子・森 直樹・森本大樹・八木妙子・八木菊枝・山中道代・山本和之介・山田きん子・湯浅義雄・吉谷美佐子・福島 勝・八木やす子・八木知子・八木春代・吉原淑子・上西ミサヲ・法貴浩治・西田笑子・片山八重子・波部京子・吉岡嘉代子・福島鈴代・波部幸子・八木英子・福嶋佳子・八木美鈴・大内清美・岡本弥生・平野すまへ・藤田喜美子

・湯浅彰郎・高木沢也・柳川和也・寺内寿明・青地久志・小松佳彦・大窪淳司・坂本真弓・横山成巳・岡野由美・吉田 清・木村隆之・岡本明子・佐々木直・高田真由美・関口睦美

- 注2 鈴木 茂「八木嶋遺跡の花粉化石」 株式会社パレオ・ラボ 1992
- 注3 平成5年度に当該地の調査を行った結果、古墳ではないことが判明した。
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター中間報告資料「沢ノ谷遺跡」1993
- 注4 堤圭三郎「坊田5号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979
坊田古墳群に向かう道の両側には、庭石に使うため古墳の石室に使用されていたと思われる石材が集められている。したがって、本来は5基ではなく、おそらく倍近い数からなる古墳群だったと考えられる。
- 注5 奥村清一郎・野島 永「小谷17号墳」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注6 「有熊遺跡第1・2次発掘調査概報」(『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第3冊 立命館大学文学部) 1991
- 注7 長谷川 眞ほか「雨流遺跡」(『淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書』IV 兵庫県教育委員会) 1990
- 注8 水谷壽克・石井清司ほか「北金岐遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
奥村清一郎ほか「千代川遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
奥村清一郎・野島 永「鹿谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注9 木器の名称は「木器集成図録」(奈良国立文化財研究所)に準じた。
- 注10 注8「千代川遺跡」と同じ。
- 注11 龍谷大学 岡崎晋明氏にご教示を得た。
- 注12 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 「平城京右京八条一条十三・十四坪 発掘調査報告」(『奈良国立文化財研究所学報』第46冊 奈良国立文化財研究所) 1989
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「紀寺跡寺域東南部の調査(1987-1次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』18 奈良国立文化財研究所) 1988
- 注13 田代 弘「池尻遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注14 金属塊の分析は奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏による。
- 注15 獣骨の鑑定は調査参加者としてお世話になった、瀬川良三氏(瀬川動物病院)にお願いした。
- 注16 出原恵三「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」(『考古学研究』144 第36巻 第4号 考古学研究会) 1990
出原氏のいうIV類とは、「一定の空間から須恵器・土師器の壺・甕・杯・高杯等が密集して数

多く出土する形態である。手捏土器や石製模造品等の祭祀遺物を伴う場合もあるが、その量は少ない。…」状況をいう。

注17 辻本和美ほか「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注18 高橋誠一氏の御教示による。

注19 鶴島三壽「国道9号バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

参考文献

堤圭三郎「坊田5号墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』 京都府教育委員会) 1979

「古道」第2巻第1号 京都学園大学考古学研究会 1978

追記 今年度調査がなされた、八木町本郷地区に所在する八木城跡の第3地区下層より須恵器の窯跡が1基確認された。この窯跡で焼成された須恵器の時期は、田辺編年のTK43及び209段階併行である。これは八木嶋遺跡で多量に出土した須恵器の時期と一致する。立地的にも八木嶋遺跡と山を挟んだ南東側にあり、比較的至近距離である。このため、この窯で焼成された製品が、当遺跡に供給された可能性が考えられる。詳細については今後の検討課題である。

3. 京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要

はじめに

京都南道路関係遺跡の発掘調査は、一般国道1号バイパスの建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施したものである。国道1号バイパスは、京都盆地と大阪平野にかけて淀川沿いに広がる京阪地域を通り、京都都市圏(京都市伏見区)と大阪都市圏(門真市)を結ぶ総延長約30kmの幹線道路である。また、路線帯内には、京都側の京滋バイパスと大阪側の近畿自動車道を結ぶ第二京阪道路も同時に建設され、京阪間の広域幹線ネットワークが形成されることになる。京都府域約8.8km間(京都南道路)のうち、八幡市の木津川左岸から綴喜郡田辺町の府境までの約5.5km間の路線帯内での発掘調査を昭和63年度から行っており、その成果はこれまでに当調査研究センターが刊行している『京都府遺跡調査概報』で随時報告している^(注1)。

今年度に発掘調査を実施したのは、内里八丁遺跡B地区(継続調査)・荒坂遺跡・新田遺跡の3か所である。内里八丁遺跡は、八幡市内里小字八丁・日向堂に所在する。内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度の試掘調査に始まり、遺構の検出をみた遺跡の南部地区(A地区)で平成元年度から本格的な調査を開始している。

内里八丁遺跡は、木津川左岸沖積地に存在する埋没自然堤防上に営まれた、弥生時代後期～鎌倉時代の複合遺跡であることが、これまでの調査成果によって明らかとなった。今年度の調査は、試掘調査段階で多量の出土遺物をみたB地区の調査であり、多くの遺構・遺物の検出が予想された。内里八丁遺跡の調査は、平成4年4月23日から同年12月18日の期間で、B地区約2,500m²を対象として実施した。

荒坂遺跡は、男山丘陵の南に連なる美濃山丘陵上に位置し、八幡市美濃山小字荒坂・御毛通に所在する。過去の分布調査によって土器片が採集されたことから、尾根頂部の約1,000m²が遺跡として周知されていた。荒坂遺跡の調査は、平成4年10月12日から平成5年2月25日まで実施した。調査は、遺跡範囲を当初から面的に掘削したが、予想外に遺構の検出をみたことから、最終調査面積は2,700m²となった。

新田遺跡は、八幡市内里と綴喜郡田辺町松井にまたがる木津川左岸沖積地及び大谷川扇状地に立地している。新田遺跡の調査は、過去に八幡市域においては場整備事業に伴う調査が行われた^(注2)ほか、京都南道路関連でも平成元年度に八幡市域で試掘調査を実施している。

今回の調査地は、田辺町域が対象となり、遺構・遺物の分布状況確認のため試掘調査(約3,500m²)を実施した。試掘調査の結果、一部試掘トレンチから遺構・遺物の検出をみたことから、関係機関と協議を行い、3か所で拡張調査を実施した。新田遺跡の調査は、平成4年11月4日から平成5年2月25日まで行い、最終調査面積は4,600m²となった。

調査は、調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員森正哲次・竹原一彦・伊賀高弘・筒井崇史が担当し、多くの調査補助員・整理員(注3)の協力を得た。調査に際しては、八幡市教育委員会・田辺町教育委員会・京都府教育委員会・京都府山城教育局などの諸機関から多大な協力をいただいた。

なお、調査にかかる経費は、建設省近畿地方建設局が負担した。本概要は、各遺跡の担当者のほか、花園大学卒業生平松久和が執筆し、文末に名を記した。

(竹原一彦)

位置と環境

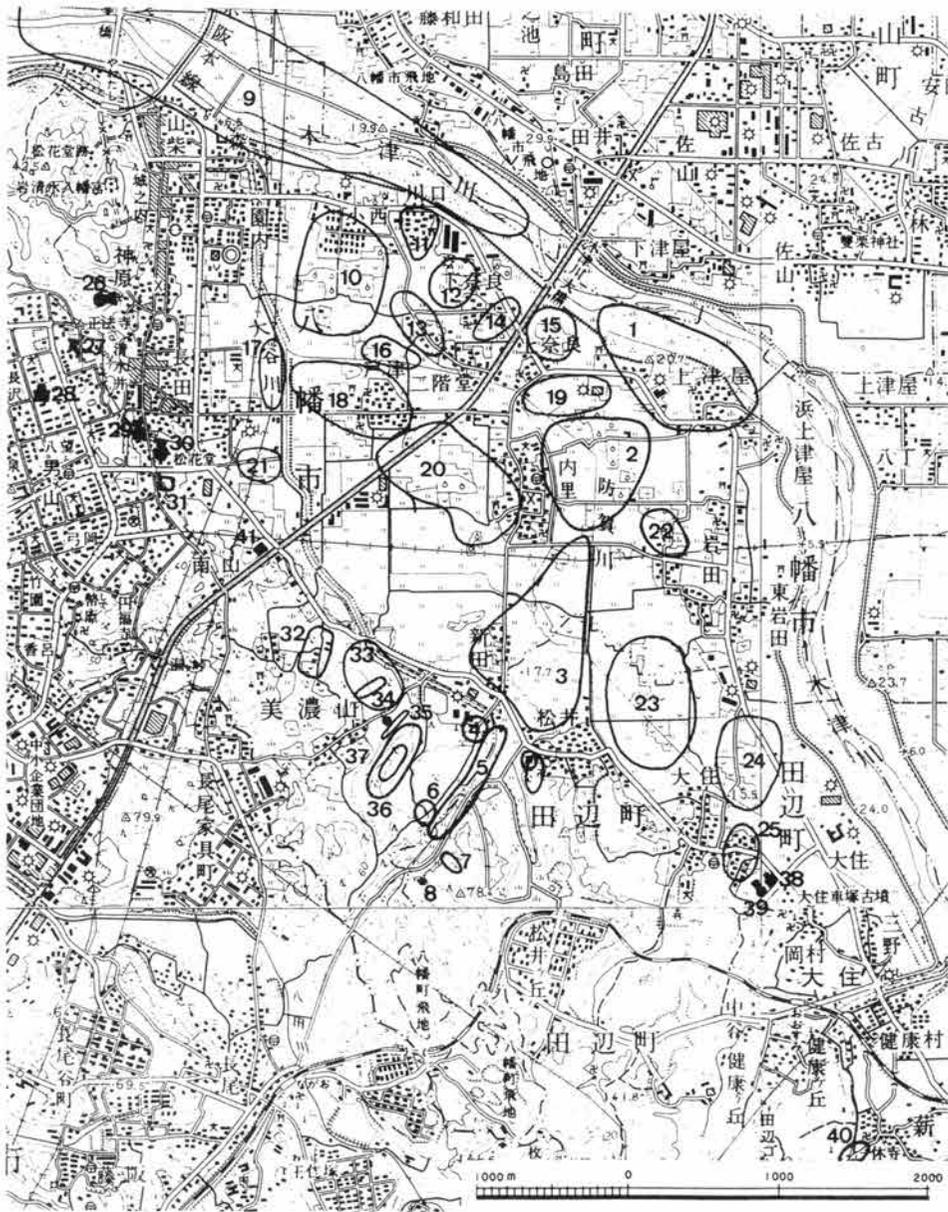
今年度に調査を実施した八幡市と綴喜郡田辺町は、京都府南部を北流する木津川の西岸に位置する。また、八幡市の北側では京都盆地を形成する木津川・宇治川・桂川の主要三河川が合流して淀川となる。八幡・田辺地域は、地形的には西側の甘南備丘陵・男山丘陵からなる丘陵部と、東側の木津川によって形成された沖積平野部に分けられる。

この地域は、かつて京都盆地中央に存在した巨椋池と主要三河川で形成される水上交通網や、木津川西岸を南北に縦走する古山陰道などの陸上交通路の存在から、大和と近江・丹波・摂津などの諸地域を結ぶ役割を担ってきたと考えられる。このように調査地周辺は、古代から交通の要衝として重視されてきたと考えられる。

次に、調査地周辺の歴史的環境について概観していくことにする。

旧石器・縄文時代の遺跡は少なく、八幡市荒坂遺跡でナイフ形石器が採集されているほか、隣接地の大阪府枚方市楠葉東遺跡で有舌尖頭器・ナイフ形石器が出土している。また、八幡市金右衛門垣内遺跡では縄文時代後期の石錘が報告されている。

弥生時代前期の遺跡は八幡市域では知られていないが、田辺町域では近年、宮ノ下遺跡が発見された。中期になると、主な遺跡として八幡市金右衛門垣内遺跡・井の元遺跡、田辺町狼谷遺跡などがある。井の元遺跡では甕棺墓が確認されている。後期になると遺跡数が増加する。平野部においては、八幡市木津川河床遺跡で竪穴式住居跡などが、また、同内里八丁遺跡で水田跡や方形周溝墓などが検出されている。一方、丘陵部では、八幡市幣原遺跡・中ノ山遺跡・南山遺跡などで竪穴式住居跡が検出されている。これらは、いわゆ



第86図 調査地周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|---------------|--------------|------------|------------|------------|
| 1. 上津屋遺跡 | 2. 内里八丁遺跡 | 3. 新田遺跡 | 4. 女谷横穴群 | 5. 荒坂横穴群 |
| 6. 荒坂遺跡 | 7. 口仲谷古墳群 | 8. 松井古墳状隆起 | 9. 木津川河床遺跡 | 10. 川口扇遺跡 |
| 11. 川口環濠集落 | 12. 下奈良遺跡 | 13. 今里遺跡 | 14. 出垣内遺跡 | 15. 上奈良北遺跡 |
| 16. 奥戸津遺跡 | 17. 舞台遺跡 | 18. 戸津遺跡 | 19. 上奈良遺跡 | 20. 内里五丁遺跡 |
| 21. 一ノ坪遺跡 | 22. 西岩田遺跡 | 23. 魚田遺跡 | 24. 散布地 | 25. 東林遺跡 |
| 26. 石不動古墳 | 27. 式部谷遺跡 | 28. 茶白山古墳 | 29. 西車塚古墳 | 30. 東車塚古墳 |
| 31. 志水廃寺 | 32. 金右衛門垣内遺跡 | 33. 狐谷遺跡 | 34. 狐谷横穴群 | 35. 美濃山横穴群 |
| 36. 美濃山廃寺下層遺跡 | 37. 美濃山廃寺 | 38. 大住車塚古墳 | 39. 大住南塚古墳 | 40. 堀切横穴群 |
| 41. ヒル塚古墳 | | | | |

る高地性集落と呼ばれるものである。また、八幡市式部谷遺跡では銅鐸が発見されている。田辺町でも、20棟以上の竪穴式住居跡が検出された高地性集落である天神山遺跡をはじめ、狼谷遺跡・興戸遺跡などの散布地が知られている。

古墳時代になると、八幡・田辺地域では、丘陵上やその縁辺部に相次いで古墳が築造される。特に前期後半には、八幡市石不動古墳・茶臼山古墳・西車塚古墳・東車塚古墳、田辺町大住車塚古墳・大住南塚古墳の6基の前方後円(方)墳が相次いで築造される。中でも茶臼山古墳は、九州の阿蘇石で作られた船形石棺を持ち注目される。これらの古墳の造営母体となるべき集落については、十分に明らかにされていないが、平野部に所在する八幡市木津川河床遺跡・内里八丁遺跡、田辺町大切遺跡・興戸遺跡などで、古墳時代前期の遺構・遺物が検出されており、その様相が明らかになりつつある。

中期になると、前方後円(方)墳は築造されなくなり、大型の古墳としては、円墳である八幡市美濃山王塚古墳が営まれる程度である。中期の集落遺跡としては、八幡市新田遺跡で竪穴式住居跡1棟が確認されているにすぎない。後期になると、この地域では大型の古墳は築造されなくなり、横穴を主体とする墳墓が造営される。これらは、八幡市南部から田辺町北部にかけて集中し、八幡市域では狐谷横穴群・美濃山横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群が、田辺町域では松井横穴群が知られる。これらは、美濃山・大住地域周辺に移住させられた畿内隼人の居住圏に一致し、横穴群と隼人との関連が考えられている。

飛鳥・奈良時代になると、仏教伝来による寺院建立が盛んとなり、八幡市西山廃寺・美濃山廃寺・志水廃寺、田辺町興戸廃寺などが確認されている。また、四天王寺創建時の瓦を焼いた八幡市平野山瓦窯跡をはじめ、志水窯跡や田辺町松井窯跡なども知られる。しかし、この時期の集落遺跡については不明な点が多く、わずかに八幡市内里八丁遺跡でこの時期の掘立柱建物跡などが検出されているにすぎない。

平安時代以降には、石清水八幡宮が創建され(860年)、以後平安・中世を通じて、多数の荘園を所有する第一級の神社としての地位を確立した。またこのころ、平野部では「条里地割」の整備が進み、今日でも水田の畦畔や小字名にその痕跡をみることができる。

以上、調査地周辺地域の環境について略述してきたが、これまでの調査の多くは丘陵周辺に限られ、平野部での調査は、近年ようやく増えてきた。特に、古墳を築造した集団やその生産基盤に関する問題、古代における交通の要衝としての八幡・田辺地域の位置づけなどを明らかにするに当たって、今後の平野部での調査に期待される。

(平松久和)

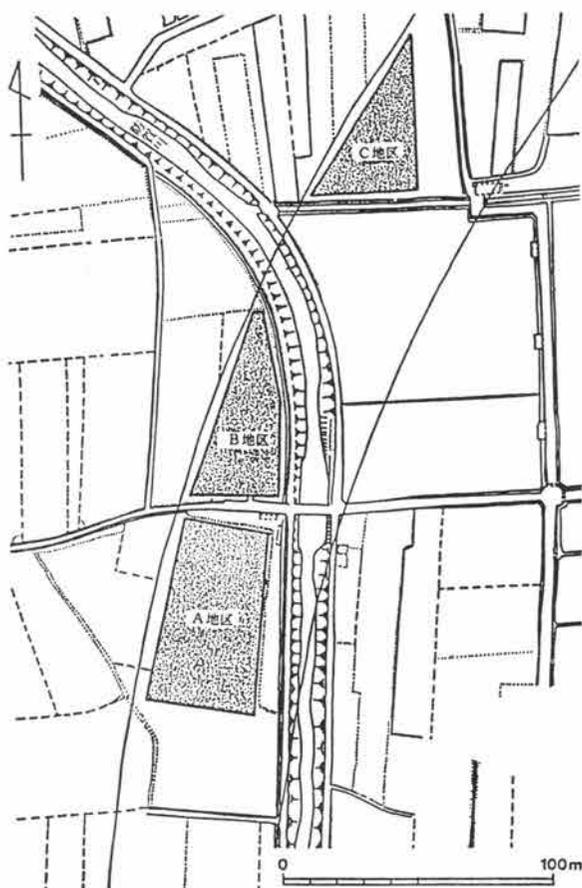
UCHISATO HACCHO
 (1) 内里八丁遺跡

1. はじめに

内里八丁遺跡の調査は、昭和63年度に行われた試掘調査をもって第1次調査とする。第1次調査では、調査地全般にわたって砂質土層・シルト層・粗砂層の堆積を確認しており、木津川の旧河道に相当する。出土遺物は中・近世のものに限られ、量も少ない。

平成元年度は、当初、前年度調査地の北側隣接地の試掘調査から開始し、南半部で前年度同様、砂質土層・シルト層・粗砂層の堆積を確認した。しかし、調査地の東隣りを北流する防賀川がその流れを北西に転じる調査地北半部で遺構・遺物が検出されたため、面的な本調査に切り替えることとなった。本調査にあたっては調査対象地を農道と防賀川によってA・B・Cの3地区に分け、南部のA地区から調査を開始した。A地区の調査は平成3年度まで行い、最終的に4遺構面を確認した(第2～4次調査)。その概略は以下のとおりである。

第1遺構面では、掘立柱建物跡5棟・竪穴式住居跡1基・井戸1基などを検出し、飛鳥時代後半から奈良時代に属する須恵器・土師器が多数出土した。第2遺構面では、古墳時代初頭の方形周溝墓1基、古墳時代前期の溝跡などを検出し、一括性の高い布留式土器群などが出土した。また包含層中から鶏形土製品が



第87図 調査区配置図

出土した。第3・4遺構面では、それぞれ68枚と20枚の小区画水田跡を検出した。両水田跡を覆っていた洪水砂中から畿内第V様式に属する土器が出土しており、前者は後期末、後者は後期後半に位置づけられる。両水田とも大規模な洪水にみまわれた結果、水田が放棄されたと考えられる。なお、水田の形成時期は中期までさかのほらないと考えられる。

A地区の調査終了後、B地区の調査を開始した。B地区は、A地区の北側、条りに伴うと思われる農道を挟んで位置する。平成元年度試掘調査で遺物が集中して出土したことから、遺跡の中心部に位置すると判断した。平成3年度は、第1遺構面で近世の溝跡3条と中世の掘立柱建物跡1棟を検出した。出土遺物には瓦器椀・土師皿・陶磁器などがある(第4次調査)。平成4年度は、内里八丁遺跡の第5次調査に当たり、B地区の継続調査である。

2. 調査の概要

A. 第1遺構面(平安時代・中世)

第1遺構面は、地表下約30cmで検出した。昨年度に、近世の溝跡(SD41、SD42、SD43)と中世の掘立柱建物跡(SB06)を検出しているが、今年度、新たに掘立柱建物跡4棟、井戸跡4基などを検出した。遺物としては黒色土器・瓦器椀・土師皿などが出土しており、特に井戸跡から良好な資料が出土している。

①検出遺構

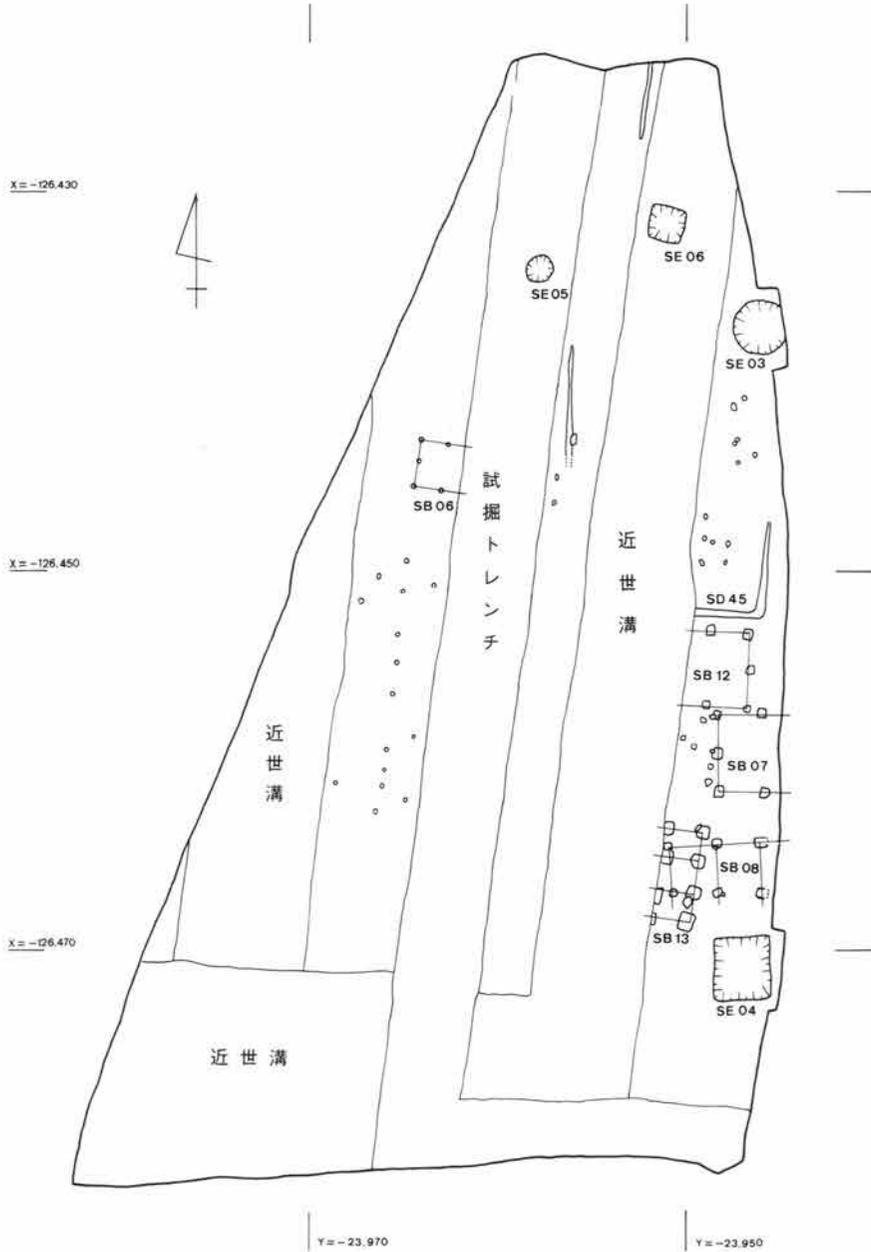
掘立柱建物跡SB07 調査区東半部で検出した東西棟と推定される建物跡である。南北2間(約4.2m)・東西1間(約2.5m)を検出したが、建物跡の東半部は調査区外にのびる。柱穴掘形は、一辺が40~60cmの方形に近い平面形である。柱痕は、南側柱列で確認した。柱間寸法は、南北約2.1m・東西約2.5mを測る。柱穴内から黒色土器椀片や土師皿片などが出土している。建物跡の方位はN2°Wを測る。

掘立柱建物跡SB08 SB07の南側で検出した南北1間(約2.6m)・東西2間(約4.6m)の建物跡であるが、柱穴の配置から少なくとも2間四方の総柱の建物跡と推定される。柱穴掘形は、一辺40~50cmの方形に近い平面形で、深さは約15cmを測る。柱痕は、検出した6個のうち4個の柱穴で確認した。柱間寸法は、南北約2.6m・東西約2.3mを測る。遺物は、各柱穴から少量出土している。建物跡の方位はN1°Wを測る。

掘立柱建物跡SB12 SB07の北西側に隣接して検出した東西棟と推定される建物跡である。建物跡の西半部を近世溝SD43によって削平されているので、南北2間(約4.5m)・東西1間(2.1m)分を検出したのみである。柱穴掘形は、一辺40~50cmの方形に近い平面形で、深さは45cm前後を測る。柱痕は、北側柱列で2個検出した。柱間寸法は、南北約2.2m・東西約2.1mを測る。遺物は、須恵器片や土師器片などが出土している。建物跡

の方位は $N4^{\circ}E$ を測る。

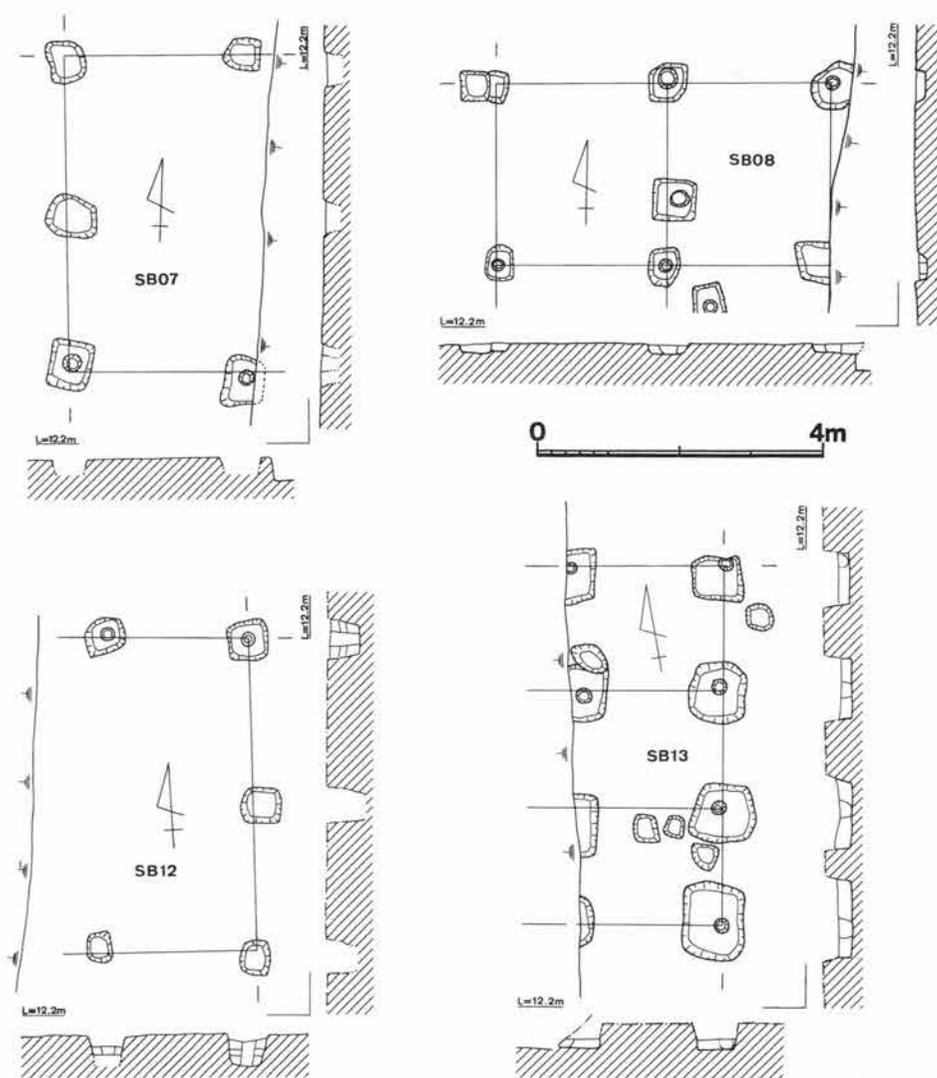
掘立柱建物跡SB13 SB08の西側で検出した3間四方と推定される総柱の建物跡である。SB12同様、建物跡の西半部を近世溝SD43によって削平されており、南北3間(約5.1m)・東西1間(約2.2m)分を検出したにとどまる。柱穴掘形は、一辺80cm前後の方



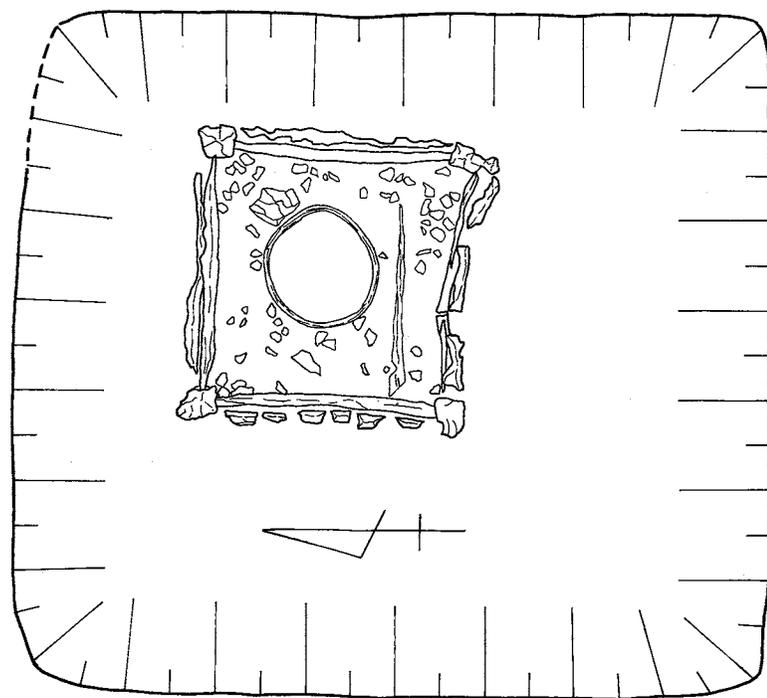
第88図 第1遺構面遺構配置図

形に近い平面形で、深さは約35cmを測る。柱痕は直径20cm前後で、溝S D43に削平されていた2個を除く6個の柱穴で確認した。柱間寸法は、南北約1.7m、東西約1.9ないし2.1mを測る。建物跡の方位はN10°Eである。

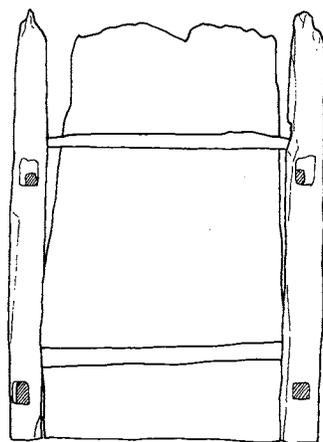
井戸S E 03 調査区北東部で検出した直径約2.8mのほぼ円形を呈する素掘りの井戸跡である。遺物は、瓦器椀・墨書土器・土師皿などが出土している。土師皿は、見込み中央に穿孔するものがみられる。遺物の出土状況から数回にわたって投棄された後、一度に埋められたと考えられ、井戸を放棄する際の祭祀との関わりが注目される。また、井戸内からは布留式併行期の高杯などが出土しており、井戸の掘削時に古墳時代前期の包含層を切



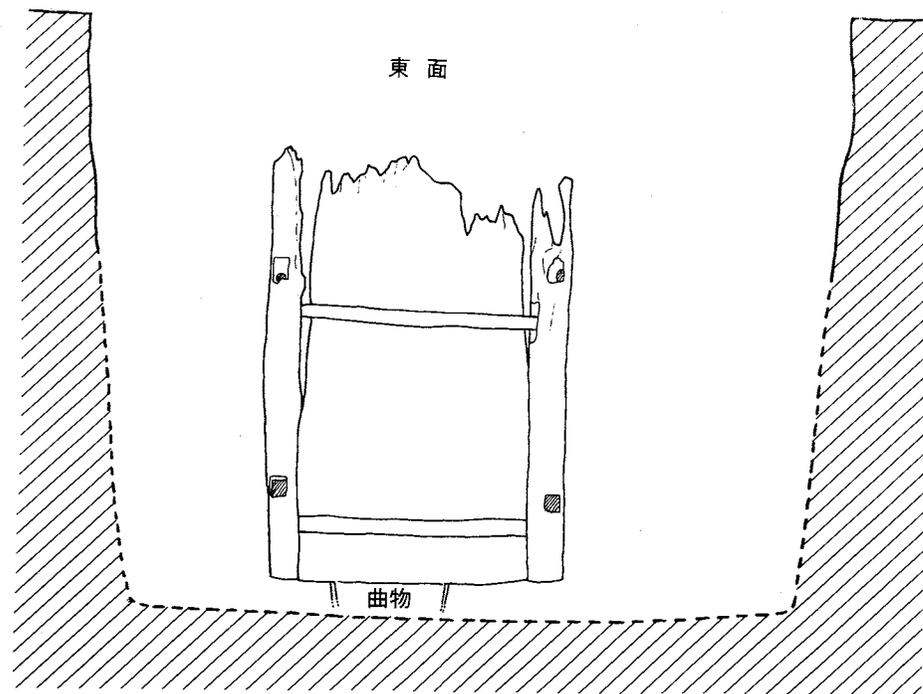
第89図 第1遺構面検出建物跡平面図



北面

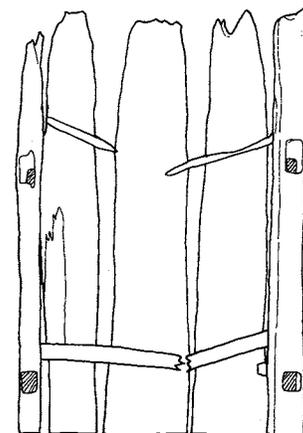


東面

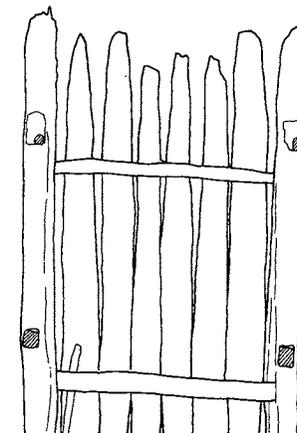


曲物

南面



西面



L=12.0m

L=10.0m

第90图 SE04实测图

り込んでいると考えられる。

井戸 S E 04 調査区南東部で検出した木枠組みの井戸跡である。井戸の掘形は、方形で一辺約3.2m・深さ約2.6mを測る。井戸枠の遺存状態は非常によく、その構造を詳しく知ることができる。井戸枠は方形に組み、各面がほぼ東西南北を指向するように配置されている。井戸枠は、四隅に一辺16cmないし21cmの角柱、または対辺約20cmの八角柱を立て、各面は厚さ10cm前後の板材を使用している。各面の板材は縦位置に組み、各々に上下2か所の横棧が設けられている。基底部には胴木がみられないが、各部材の下端レベルはほぼ一定である。各面とも板材は約2.0m残存しており、北面と東面には幅約1.0mの板材を使用している。また、南面は幅約0.3mの板材3枚を、西面は幅約0.15mの板材6枚をそれぞれ使用している。このように、井戸の枠材として八角柱や幅約1.0mの一枚板が使用されていることから、これらの部材が、建物の建築部材から転用されたものとする。井戸の底には、径数cmの小礫を敷きつめ、中央に径50cm前後の曲物を据えている。

遺物は、井戸枠内から黒色土器碗・緑釉皿・横櫛などが、また掘形から土馬・墨書土器などが出土している。

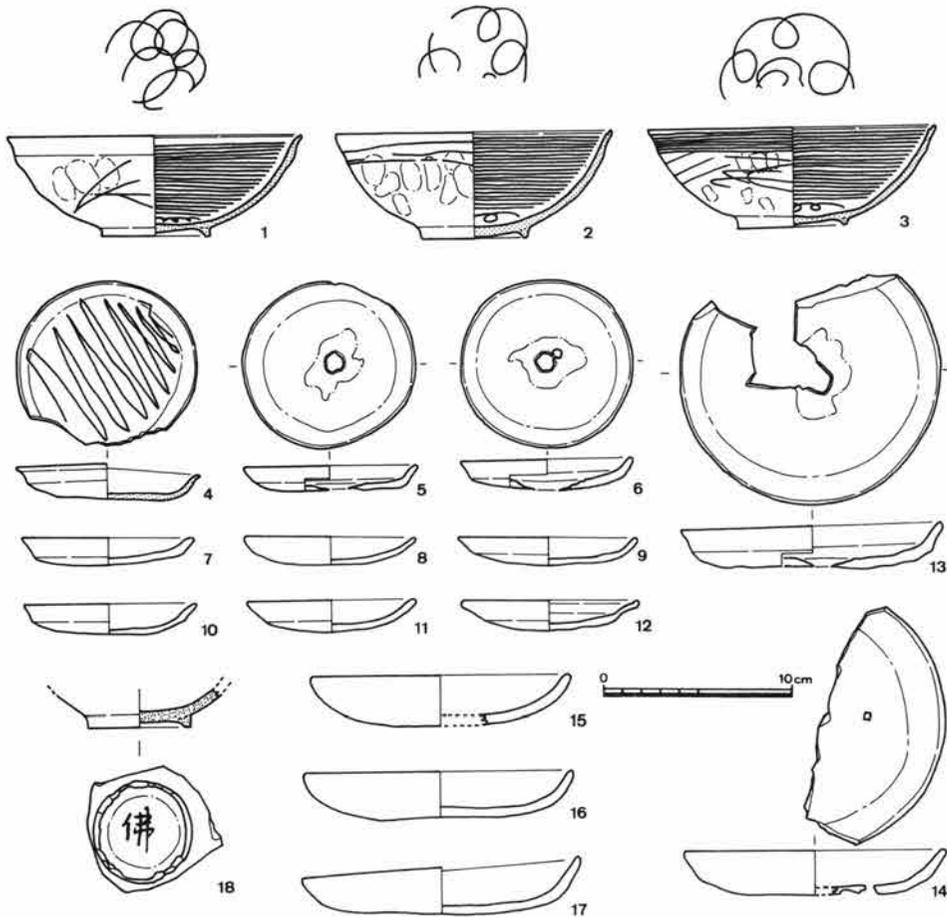
井戸 S E 05 調査区北半部中央付近で検出した直径約1.4mの不整形な円形を呈する素掘りの井戸である。すでに試掘トレンチによって上半部を削平されている。瓦器碗片などが出土している。

井戸 S E 06 S E 05の東、やや北よりに位置する一辺約1.7ないし1.9mのややいびつな方形を呈する素掘りの井戸である。近世溝 S D 43の最下層の堆積土を除去後に確認した。S E 05同様、瓦器碗片などが出土している。

溝 S D 45 S B 12の北側に位置し、調査区東端で北に折れる「L」字形の溝である。全長約8.0m・幅30～40cm・深さ10～20cmを測る。土師器片などが少量出土する。S B 12と方位をそろえており、これに伴う区画溝と考える。

②出土遺物

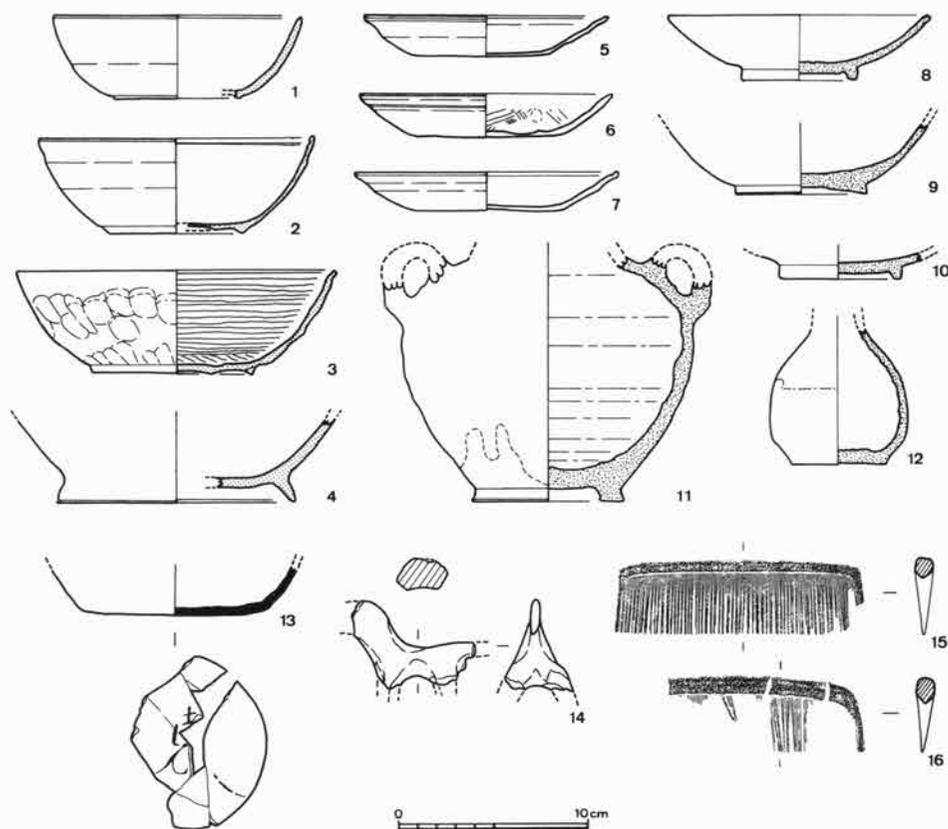
S E 03出土遺物(第91図) 遺物は、いずれも井戸本体から出土している。1～3は、瓦器碗である。口径14.8～15.7cm・器高5.3～5.6cmを測る。外面には内型成形時のユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面には細かなミガキを施し、見込みには連結輪状暗文がみられる。4は、瓦器皿である。口径9.6cm・器高2.0cmを測り、見込みには平行線暗文を施している。5～17は、土師皿である。口径の違いから小皿(5～12)と、大皿(13～17)の2種に分けられる。小皿は、口径8.2～9.5cm・器高1.6cm前後を測り、多数出土した。その一部には見込み中央に焼成後、穿孔を行っている。底部は未調整、口縁はヨコナデで仕上げる。大皿は口径14.0～14.8cm・器高2.3～2.5cmを測り、小皿同様、焼成後に穿孔するもの



第91図 SE03出土遺物実測図

がみられる。また、焼成前に釘のようなもので穿孔したと思われるものもある(14)。18は、底部外面に「佛」と墨書された山茶碗である。底部外面には明瞭な糸切り痕跡が残り、高台を張り付ける。これらの遺物は12世紀後半ごろに位置づけられる。

SE04出土遺物(第92図) 1～4は、黒色土器碗である。口径13.2～17.0cm・器高4.4～5.4cmを測る。1～3は、断面三角形を呈する小さな張り付け高台を有する。3は、外面をユビオサエの後ケズリ調整を施す。また、見込み部分と底部外面にそれぞれ「十」字形を2つ組み合わせたヘラ記号を持つ。4は、「ハ」字形に開くしっかりした高台を持つ。5～7は、土師皿である。口径13.0～14.0cm・器高2.2cm前後を測る。比較的薄手で造りもていねいである。5・7は、口縁端部をややつまみ上げる。8～10は、緑釉陶器である。8は、口径14.0cm・底径6.2cm・器高3.5cmを測る皿である。見込み部分に蛇の目軸はぎ痕



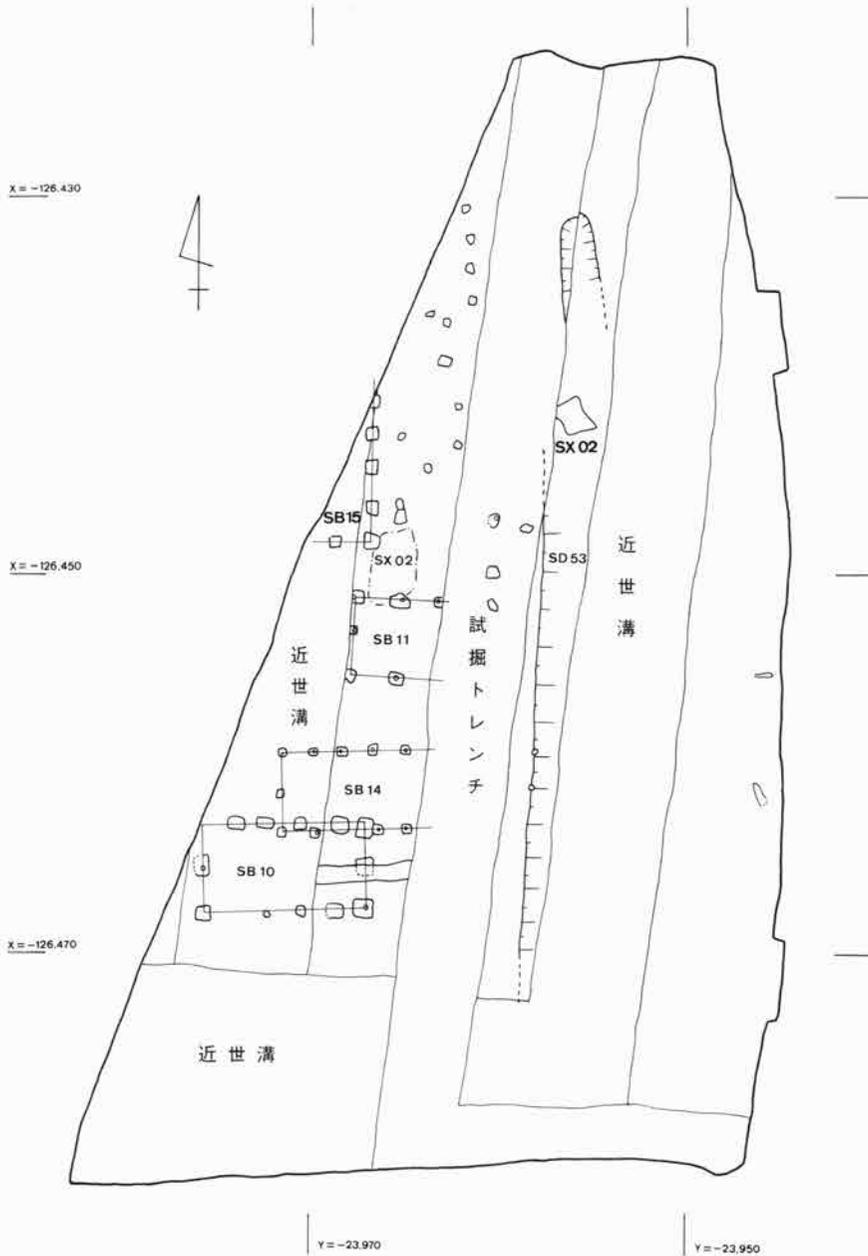
第92図 SE04出土遺物実測図

がある。9は、底径7.0cm・残存高3.8cmを測り、8・10に比べやや深めで碗状を呈する。また、底部は中央がややくぼむ平底である。10は、底径6.6cm・残存高1.5cmを測る。8同様、皿と考えられる。11・12は、灰釉陶器である。11は、耳の一部と頸部よりも上を失う二耳壺で、体部最大径15.5cm・残存高13.0cmを測る。体部外面下半をケズリで、また中位よりも上半をナデで仕上げた後、施釉する。12は、底径5.0cm・残存高7.3cmを測る壺である。体部外面上半部のみ施釉する。13は、焼き上がりがやや甘い須恵器杯身で、底部外面に墨書する。底径9.8cm・残存高2.5cmを測る。外面の墨書を判読するのは困難である。14は、残存長6.4cm・残存高4.7cmを測る土馬で、頭部・脚・尻尾の各部を失っている。以上の遺物のうち、1～12は井戸本体から出土し、13・14は掘形内からの出土である。

15・16は、井戸の底から出土した横櫛である。15は、肩部が角張るもので、幅13.1cm・高さ4.0cmを測る。ほぼ完存する。16は、肩部にやや丸みを持つもので、残存幅10.5cm・高さ4.0cmを測る。また、図示した以外にも3点の出土を確認している。なお、樹種については未同定である。以上の出土遺物は、10世紀中ごろに位置づけられる。

B. 第2遺構面(飛鳥・奈良時代)

第2遺構面は、第1遺構面下約20cmにあり、掘立柱建物跡4棟、溝跡、土器溜まりなどを検出した。溝跡や土器溜まりからは飛鳥時代後半を中心とする須恵器・土師器が多数出土し、良好な資料を得ることができた。



第93図 第2遺構面遺構配置図

①検出遺構

掘立柱建物跡 S B10 調査区西半部で検出した東西棟の建物跡で、今回の調査で唯一、全体の規模を知ることができた。建物跡の規模は、南北2間(約4.7m)・東西5間(約8.6m)を測る。柱穴掘形は、方形または長方形に近い平面形で、一辺約0.8~1.2m・深さ約45~50cmを測る。建物跡の西半部は、近世溝 S D42によって削平されており、柱穴を溝底でかろうじて検出した。柱痕は、直径30cm前後を測るが、良好な状態で確認できたのは、近世溝 S D42に削平されていない東側の4個だけである。柱間寸法は、南北柱列で約2.2mを測るが、東西柱列はかなり不ぞろいで、約1.4~2.0mを測る。柱穴内から、土器片が出土している。建物跡の方位はN2°Wである。

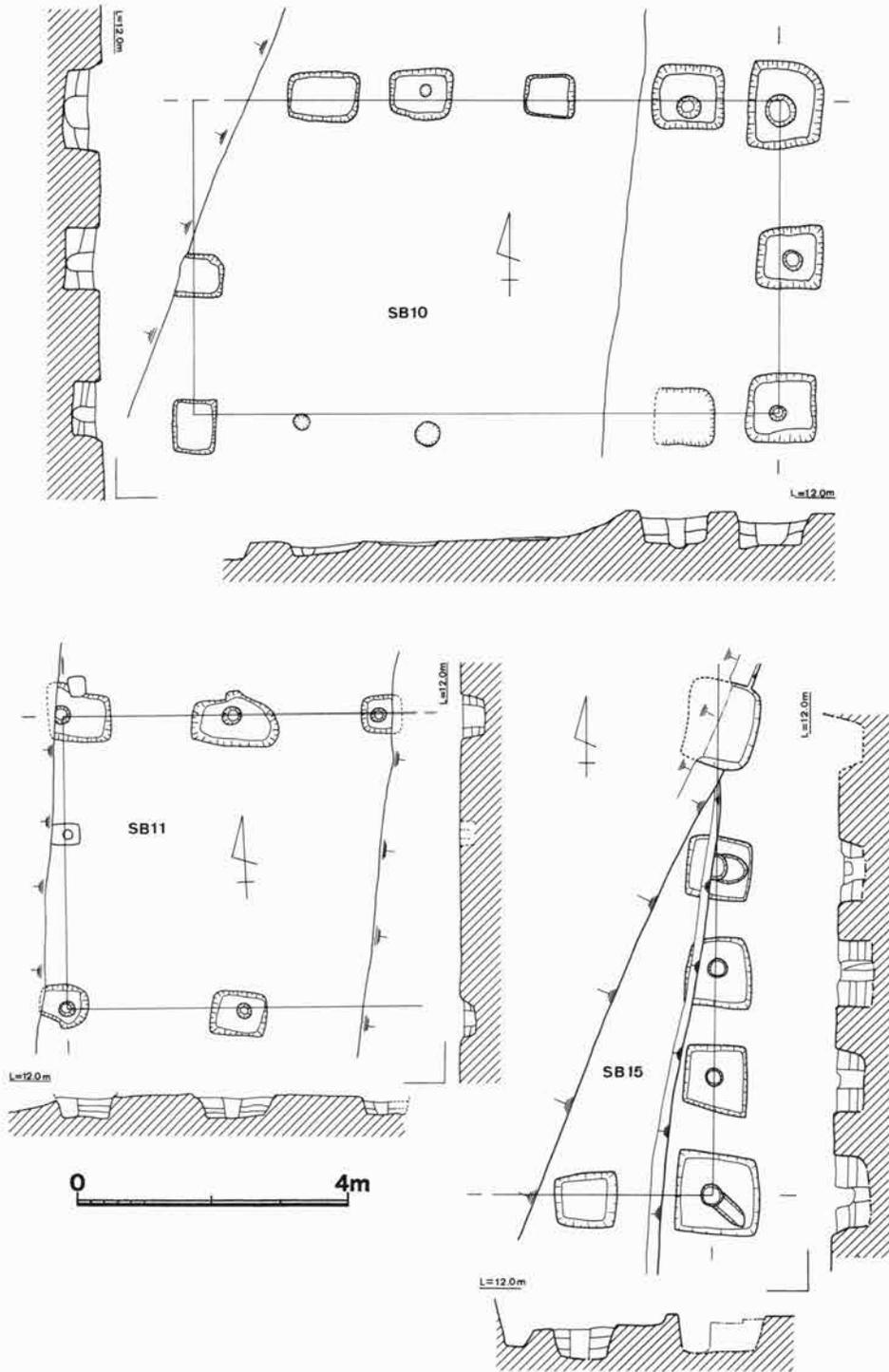
掘立柱建物跡 S B11 S B10の北側約6.5mで検出した建物跡である。南北2間(約4.2m)・東西2間(約4.2m)を測る。柱穴掘形は、一辺約0.8~1.3mの方形または長方形に近い平面形で、深さは約35cmを測る。柱痕は、検出したすべての柱穴で確認した。柱間寸法は、南北1.7ないし2.5m、東西2.1ないし2.5mを測る。建物跡の方位はN3°Eを測る。

掘立柱建物跡 S B14 南側の柱列が S B10の北側柱列と重複して検出された東西棟の建物跡である。南北2間(約4.2m)・東西4間(約6.5m)を検出したが、建物跡の東半部は試掘トレンチによって失われている。柱穴掘形は、方形で一辺1.0mを測る。柱痕は、S D42に削平されている西側柱列を除き確認した。柱間寸法は南北約4.5m・東西約8.8mで、比較的そろっている。建物跡の方位はN2°Wを測る。なお、柱穴の切り合い関係から S B10よりも新しい。

掘立柱建物跡 S B15 S B11の北側約3.3mで検出した建物跡である。建物跡の大半が調査区外にあるため、全体の規模を知ることにはできないが、南北4間(約6.8m)・東西1間(約1.9m)を検出した。柱穴掘形は、一辺1.0m前後を測る方形に近い平面形で、深さは約40cmを測る。柱痕は、東側柱列で検出された5個の柱穴のうち、北端の1個を除く4個で確認した。直径は30cm前後を測る。柱間寸法はほぼそろっており、1.7m前後である。建物跡の主軸はほぼ南北であり、S B10や S D53の主軸に近い。遺物は、各柱穴から比較的多く出土した。

溝 S D53 調査区のほぼ中央にある南北溝である。近世溝 S D41、S D43及び試掘トレンチによって削平されているが、北端を確認した。また、S D53の延長はA地区で検出されていないため、同時期と考えられる東西溝 S D16と直交する可能性が高い。したがって、S D53は全長60m前後と推定される。また、幅3.0m以上・深さ0.5mを測る。溝底の最下層には炭層の堆積が認められ、少なからず遺物を含んでいる。

溝の各層からは、飛鳥時代後半頃の須恵器杯身・杯蓋、土師器杯などが多量に出土した。



第94図 第2遺構面検出建物跡平面図

溝の方位はN1°Eを測り、SB10やSB15の軸に近い。

土器溜まりSX01 調査区中央やや北寄りで検出した深さ30cm前後を測る不整形な落ち込みである。落ち込み内からは、遺物とともに多量の焼土が出土している。火災の後始末をした土坑である可能性がある。出土遺物には、須恵器杯身・短頸壺などがある。なお、検出状況からSD53よりも新しい。

土器溜まりSX02 SB11とSB15の間で検出した土器溜まりである。明確な掘形を持たないが、南北約4.0m・東西約2.8mの範囲に土器が集中してみられた。須恵器・土師器が出土しているが、小片が多い。SX02直上の包含層より、金属製品(托?)を模倣したと思われる須恵器が出土している。

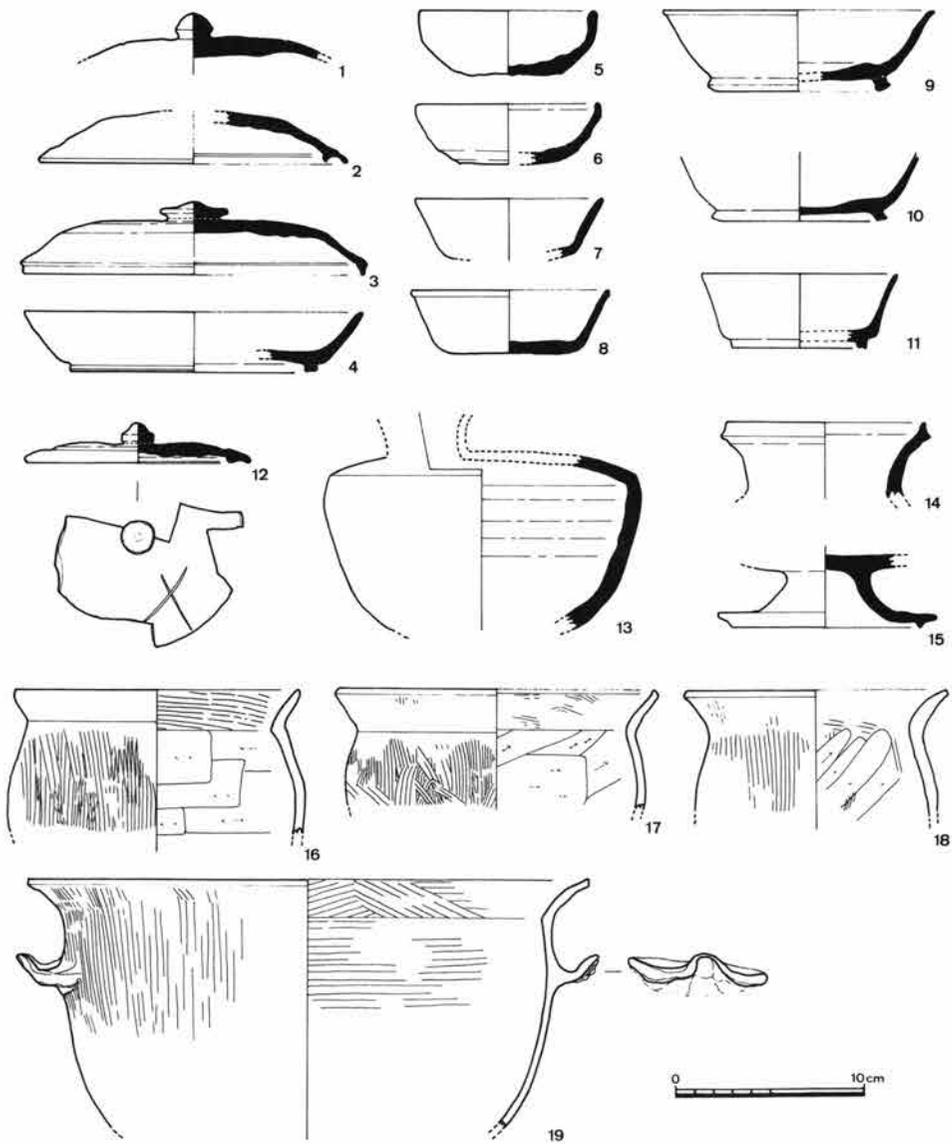
②出土遺物

溝跡や土器溜まりから多数の遺物が出土しており、今回はその一部を図示した。

溝SD53出土遺物(第95図) 1～15は須恵器、16～19は土師器である。1～3・13は、杯蓋である。2・12は、内面にかえりを持つ。1も内面にかえりを持つ杯蓋と考えられる。これらは口径16cmを測る。3は、かえりを持たない杯蓋で、口径18.0cm・器高3.9cmを測る。12は、上外面に「×」印のヘラ記号が線刻されている。4～11は、杯身である。4・9は、高台を持つ杯身で、4は口径17.8cm・器高3.2cmを測る。9は、口径14.4cm・器高4.3cmを測る。口縁端部がわずかに外反する。5・6は、ほぼ同形同大の杯身で、口径9.0～9.6cm・器高3.3cm前後を測る。口縁端部が直立するもの(5)と、やや内湾するもの(6)がある。7・8は、底部に高台を持たないもので、ともに口縁部が直線的にひらく。8は、口径10.6cm・器高3.4cmを測り、口縁端部が外反する。13は、平瓶の体部である。体部最大径16.8cm・残存高9.3cmを測る。内外面ともナデ調整を施す。14は、壺の口縁部である。外反した後、稜をつくり、口縁端部をほぼ真上につまみ上げる。口径10.6cm・残存高4.1cmを測る。16は、高杯の脚部である。底径9.9cm・残存高3.9cmを測る。

16～18は、ゆるやかに「く」の字に外反する甕である。口径13.6～17.2cm・残存高6.2～7.6cmを測る。体部外面は、いずれも縦方向のハケ調整を施すが、内面はケズリ調整を施すもの(16・17)と、ナデ調整を施すもの(18)とがある。また、口縁端部を丸く終わるもの(16)と、面をもつもの(17・18)がある。19は、把手付きの鍋である。外面に縦方向の、また内面に横方向のハケ調整を施す。口径29.6cm・残存高13.2cmを測る。把手を含めた最大径は31.0cmである。

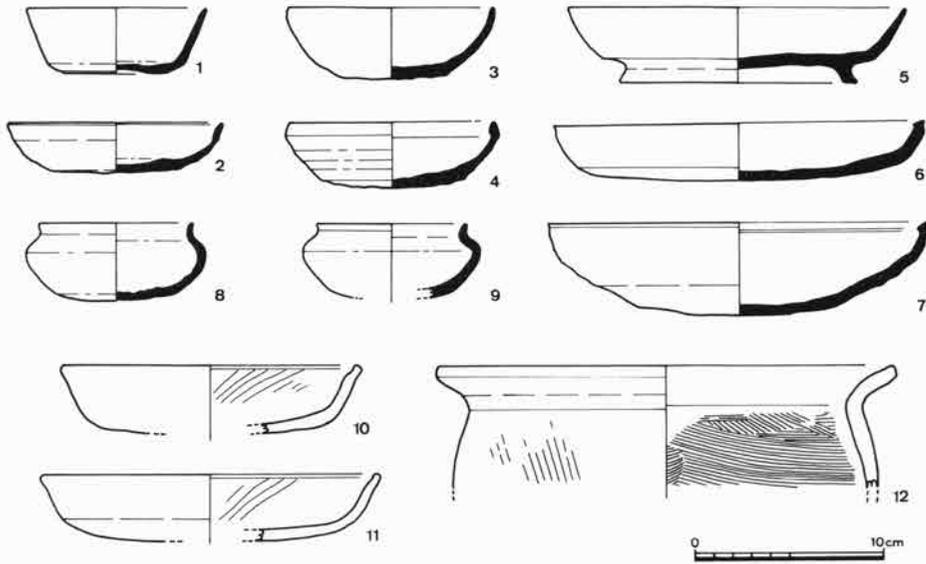
土器溜まりSX01出土遺物(第96図1～9) 図示した遺物は、いずれも須恵器である。1～4は、杯身である。1は、平坦な底部と斜め上方に直線的にのびる口縁部を持つ。口径9.6cm・器高3.5cmを測る。2～4は、ヘラキリ未調整の底部に、内湾気味の体部を持つ。



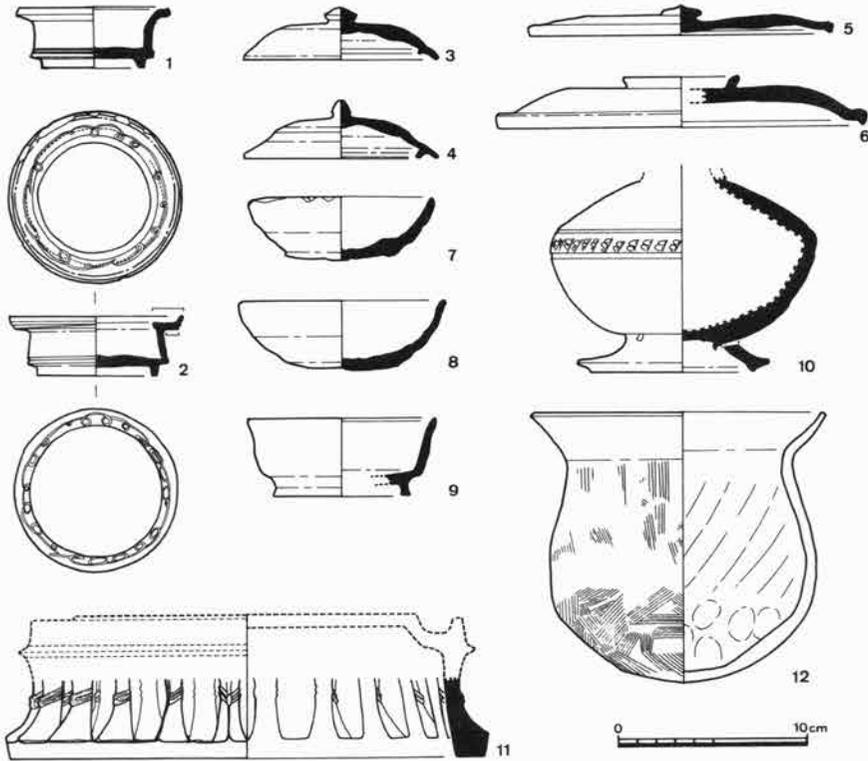
第95図 S D53出土遺物実測図

口縁部は外反するもの(2)と、ほぼ真上にのびるもの(3・4)がある。4は、口径10.8cm・器高3.5cmを測る。5～7は皿である。5は、直線的にのびる口縁部と高台を持つ。口径18.0cm・器高4.0cmを測る。6・7は、底部外面にケズリを施し、口縁端部が内傾する皿である。口径は、ほぼ同じで20.0cmを測るが、7は、6に比べて深く、むしろ碗状を呈する。8・9は、ほぼ同形同大の短頸壺である。口径8.0cm・器高4.0cmを測る。

土器溜まり S X 02出土遺物(第96図10～12) 図示した遺物はいずれも土師器である。10・11は、平坦な底部と斜め上方にひらく口縁部をもつ杯である。両者とも内面に放射状



第96図 S X01・S X02出土遺物実測図



第97図 第2遺構面包含層出土遺物実測図

の暗文を施す。11は、口径17.8cm・器高3.6cmを測る。12は、口縁部が強く外反する広口の甕である。体部内外面ともハケを施す。口径24.2cm・残存高6.4cmを測る。

包含層出土遺物(第97図) 1・2は、金属器を模倣したと思われる須恵器である。1は口径7.9cm・器高3.15cmを測り、2は、口径9.15cm・器高3.15cmを測る。両者とも受け口状の口縁や高台を持つ。2は受け部の上下面ともラセン状の暗文を施す。出土状況から、1を2の上に載せた状態で使用していたと考えられる。1・2は、形態的には柄付きの香炉などに類似するが、ここでは托の一変種としておく。

3～6は、須恵器杯蓋である。3・4は、ほぼ同大(口径10.0cm)で、内面にかえりを有する。5は、口径16.0cm・器高2.2cmを測り、3・4よりも偏平な宝珠形つまみをもつ。内面のかえりはすでに消失し、口縁部が屈曲する。6は、輪状のつまみを持ち、金属器を模倣したのと考えられる。口径19.6cm・器高2.7cmを測る。7～9は、須恵器杯身である。7・8は、ヘラキリ未調整の底部と斜め上方にのびる口縁部を持つ。8は、口径11.0cm・器高3.6cmを測る。9は、口径9.8cm・器高4.2cmを測り、高台を有する。口縁端部がわずかに外反する直線的な口縁部を持つ。10は、体部最大径14.1cm・残存高10.6cmを測る須恵器長頸壺の体部である。体部中位に列点文を施し、高台との接合部には焼成前に穿孔を3か所行う。11は、円面硯の脚部である。底径25.0cm・残存高4.2cmを測る。12は、口径15.4cm・器高14.6cmを測る土師器甕である。口縁部はゆるやかに外反し、端部に面を持つ。

C. 第3遺構面(古墳時代初頭、古墳時代後期)

第3遺構面は、第2遺構面下25cmのところにあるが、明確な遺構として認識できるものは少ない。しかし、古墳時代初頭から前期にかけての遺物は、包含層出土遺物も含め、調査地のほぼ全域から出土している。また、近世溝SD41の溝底で検出した焼土坑は、古墳時代後期の竈と考えられ、内里八丁遺跡では当該期の遺構は初めてである。

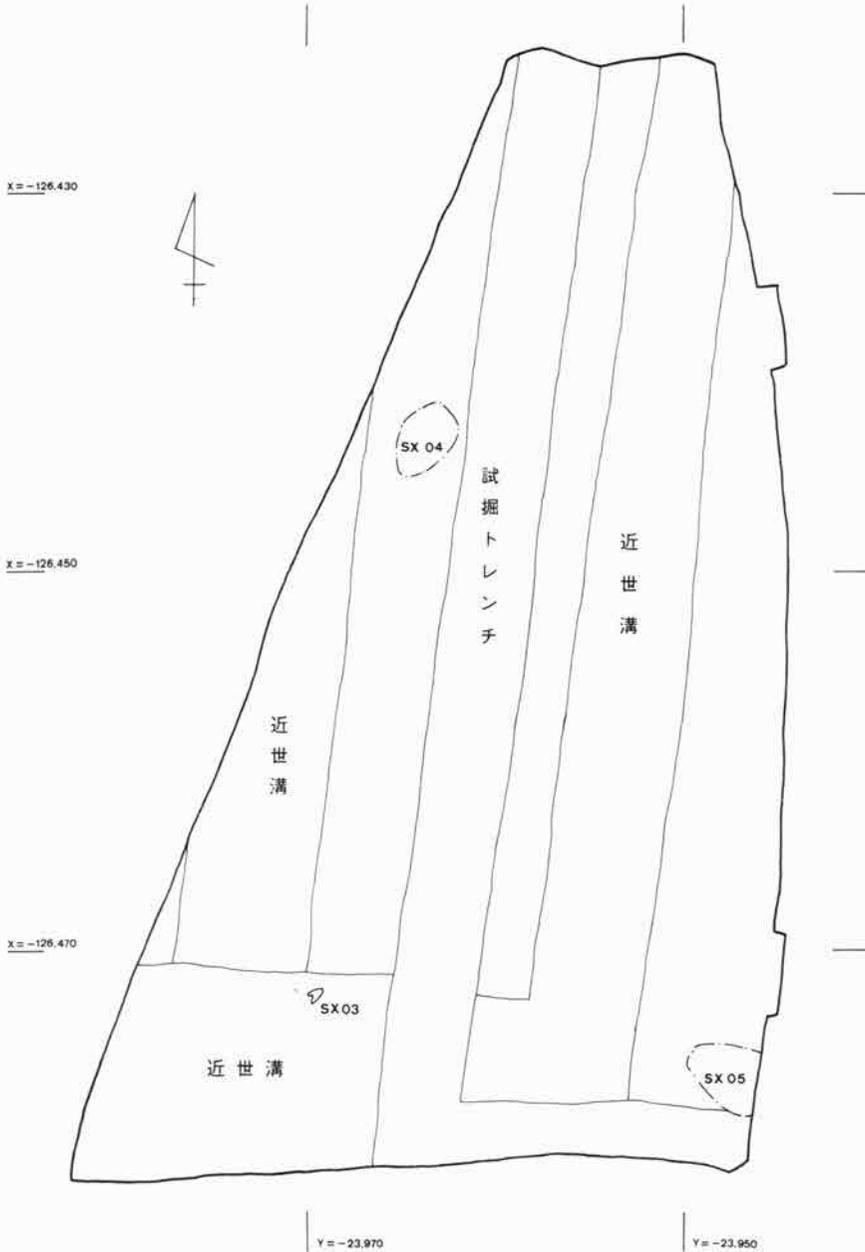
①検出遺構

焼土坑SX03 近世溝SD41の溝底で検出した。長さ0.9m・幅0.7mで、焼土を「U」字形に検出しており、竪穴式住居跡に伴う竈と考えられる。ただし、住居跡本体については、すでに近世溝SD41によって削平されたらしく、検出することはできなかった。竈内からは、須恵器甕片や土師器壺などが出土した。また、SD41の最下層から、MT15型式に属すると思われる須恵器杯身が出土しており、SX03の時期もこのころと思われる。

土器溜まりSX04 調査区西北部で検出したV様式系の土器群を主体とする土器溜まりである。南北約4.0m・東西約3.2mの範囲に土器が集中していたが、遺構として明確な掘形は持たない。出土遺物は細片化しており、全体の形状のわかるものは少ない。また、

器種の組成としても、高杯や器台などはわずかで、大半はV様式系の甕である。なお、生駒西麓産と思われる暗茶褐色を呈する甕が含まれる。

土器溜まりS X 05 井戸跡S E 04に使用されていた井戸枠の部材を取り上げるために、S E 04の南側を掘り下げたところ、多数の土器が出土した。掘り下げ部分を中心に精査を



第98図 第3遺構面遺構配置図

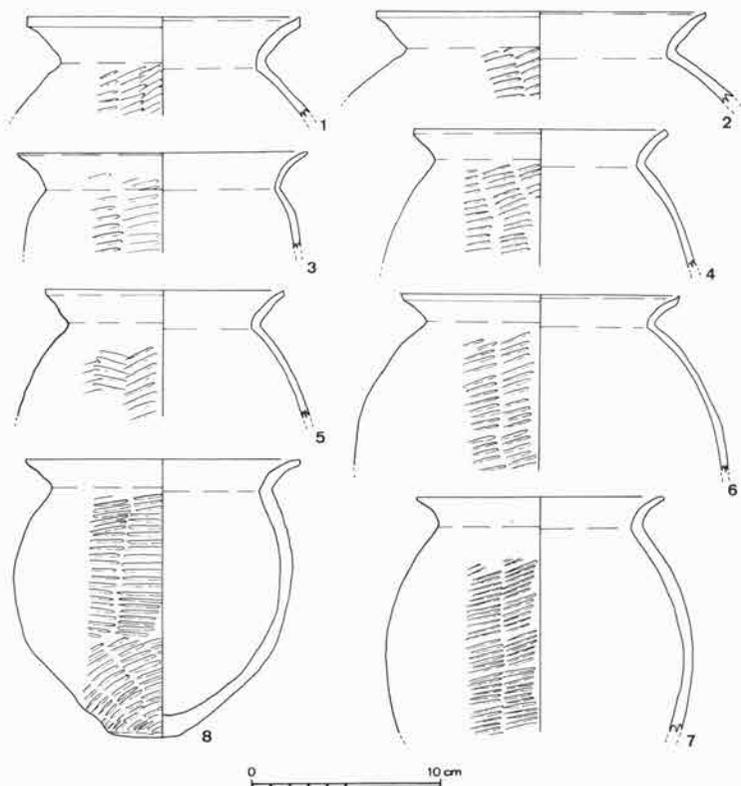
試みたが、明確な掘形を確認することはできなかった。S X05からは、甕・壺・器台などが比較的まとまった状態で出土している。上述のS X04に比べ完形品が多く、丹後・丹波系の土器も含まれるため、その性格については今後検討していきたい。

②出土遺物

出土した遺物は、いずれも庄内式を中心とする時期のものであるが、多数にのぼるため、今回はその一部を図示するとどめた。

土器溜まりS X04出土遺物(第99図) 図示した土器はいずれもV様式系の甕で、出土遺物の大半を占める。このほか高杯や器台が少量出土している。

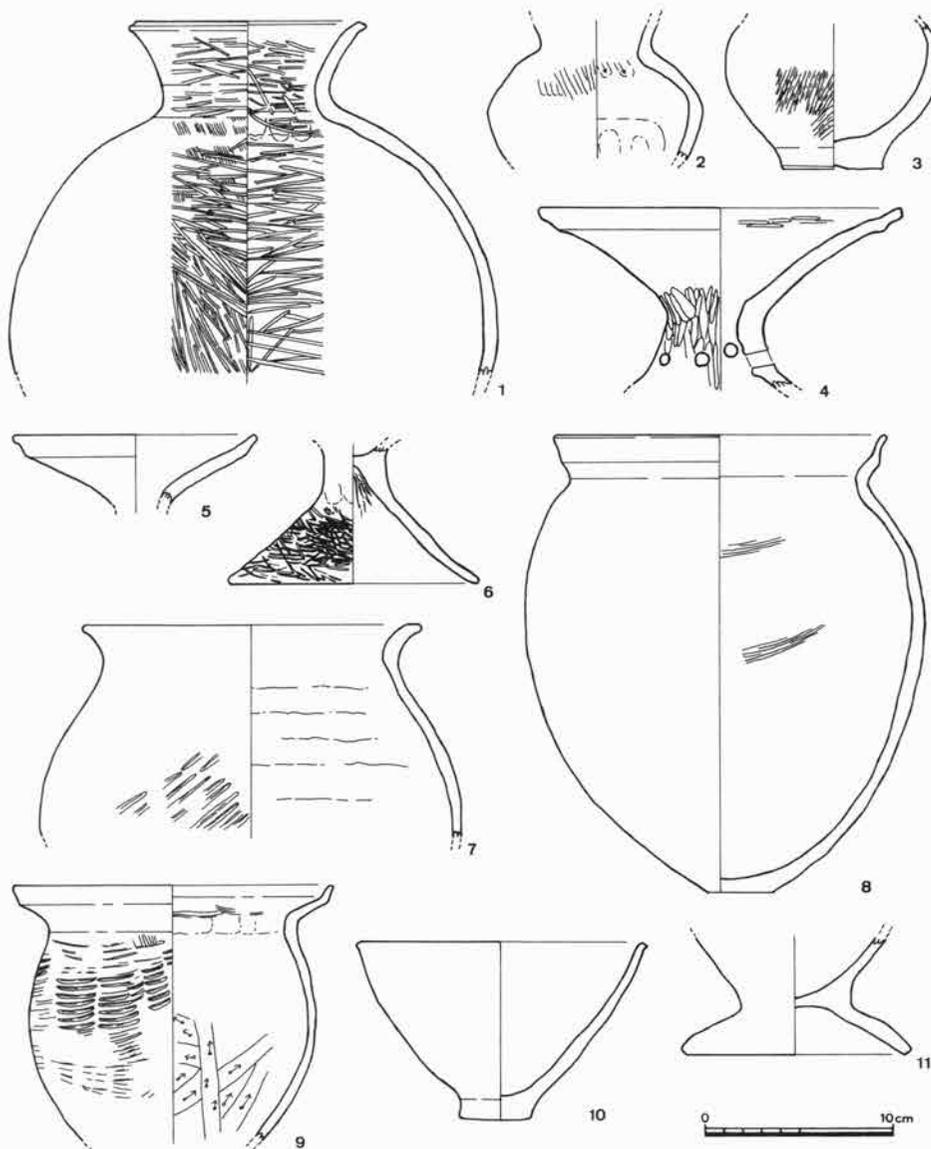
図示した甕の特徴を列挙していくと、口縁端部では丸く終わらせるもの(3・7)と、わずかにつまみ上げ外面に面をつくるもの(1・2・4～6)とがある。また、口縁部はするどく「く」の字に屈曲するもの(1・6～8)と、ゆるやかに外反するもの(7)とがある。いずれの甕も体部外面にタタキ調整が施されている。また、内面にはナデ調整を施し、ケズリ調整を加えるものはない。3は、口縁部外面下半にもタタキ目がみられる。7は、肩部があまり張らず、体部最大形が中位もしくはそれよりも下にくる、いわゆる下ぶくれの



第99図 S X04出土遺物実測図

甕と考えられる。類似品は北鳥池下層などにみられ、庄内甕の影響下に成立した甕とされる。8は、S X 04出土遺物のうち全体の形状がわかる数少ない土器である。口径14.5cm・器高14.8cmを測り、口縁部の形状をやや異にするほかは、第101図7の甕に類似する。

土器溜まり S X 05出土遺物(第100図) 1は、球形上の体部に外反する口縁をもつ直口壺である。体部下半を失うが、口径11.85cm・体部最大径24.9cm・残存高18.9cmを測る。内外面ともミガキ調整を施す。2・3は、小型の壺と思われ、ほぼ同形同大である。2は、頸部から体部中位まで残存し、体部最大径11.4cm・残存高7.4cmを測る。3は、体部中位か



第100図 S X 05出土遺物実測図

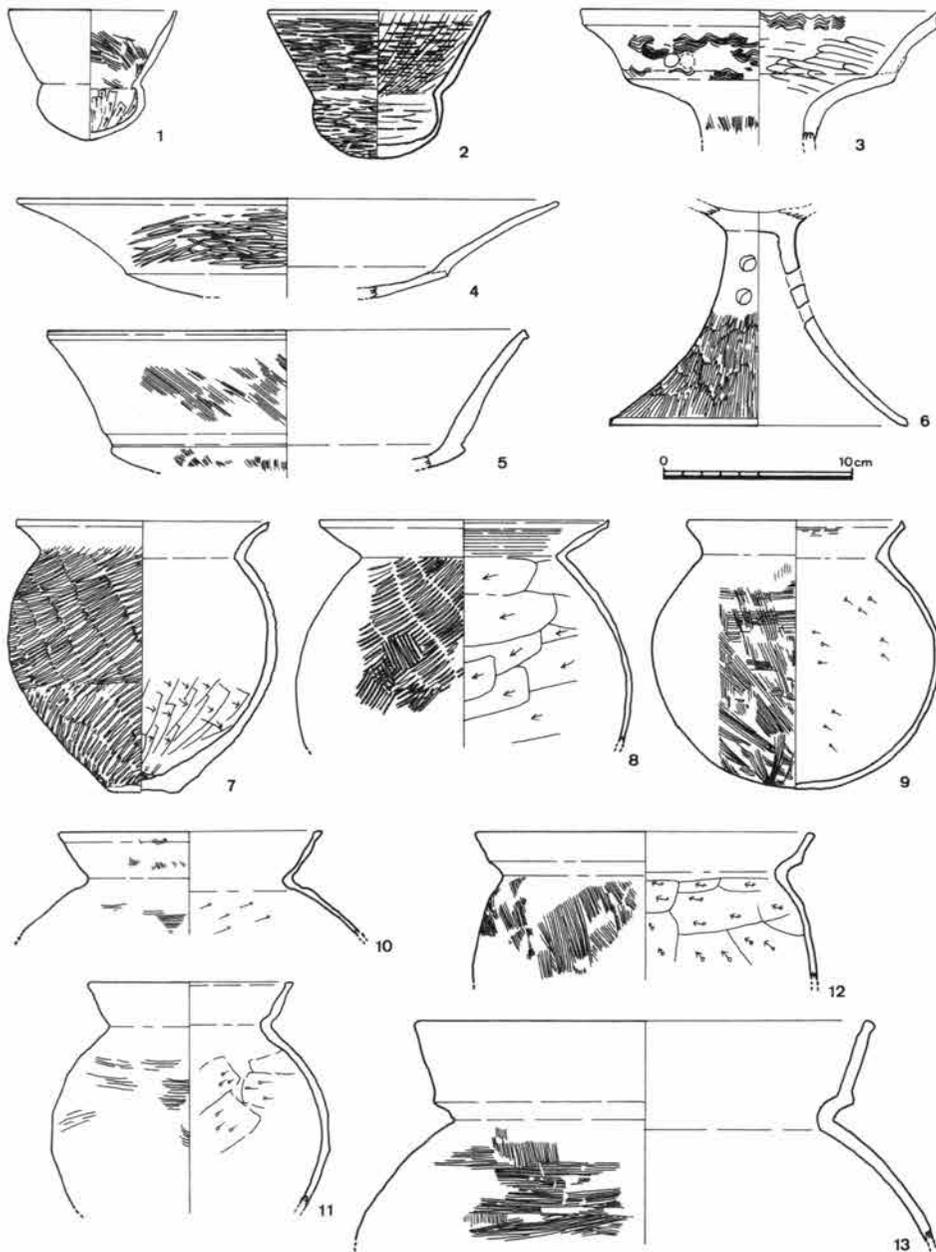
ら底部までが残存する。底部は底径5.1cmの平底で中央がややくぼむ。4・5は、ほぼ同形の器台である。外上方にのびる体部から稜をなしてさらに外反ぎみに開く受け部を持つ。4は、受け部径19.2cm・残存高9.5cmを測る。5は、受け部径12.8cm・残存高3.8cmを測る。類例は中丹地域にみられ、口縁部外面に擬凹線を施すものが多い。6は、やや外反ぎみに「ハ」字形に開く高杯の脚部で、底径13.4cm・残存高7.35cmを測る。脚部内面にシボリ痕がみられる。

7～9は、甕である。7は、口径18.0cm・残存高11.5cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、体部内面には粘土紐の接合痕がみられる。8・9は、口縁部が受け口状の複合口縁をなす。8は、口径17.7cm・器高24.5cmを測り、倒卵形を呈する。体部外面はナデで仕上げる。9は、口径17.0cm・残存高13.7cmを測る。体部外面にはタタキ調整、内面にはケズリ調整を施す。8・9とも丹後・丹波系の甕であるが、口縁部外面に擬凹線を施さない。10は、口径15.4cm・器高9.6cmを測る鉢である。内外面ともナデで仕上げる。11は、底径11.6cm・残存高6.2cmを測り、台付鉢の脚部と思われる。

SX05出土の遺物は、丹後・丹波系の土器を多く含む点で注目される。

包含層出土遺物(第101図) 1・2は、小型丸底土器である。1は、口径9.0cm・器高5.9cmを測る。体部内面にケズリ、口縁部内面にハケ調整を施す。また、外面にははいねいなミガキ調整を施し、非常に精選された胎土を持つ。2は、1に比べやや大きく、口径11.7cm・器高7.85cmを測る。内外面ともはいねいな横方向のミガキ調整を施す。1同様、精選された胎土を持つ。両個体とも完形品である。なお、2は、SD42の最下層より出土している。3は、二重口縁壺の口縁部分である。口径19.0cm・残存高6.7cmを測り、外面に波状文や円形浮文を施した、いわゆる装飾壺である。4・5は、高杯の杯部である。4は、口縁部が外反気味に大きく開き、外面にミガキ調整を施す。口径28.8cm・残存高5.3cmを測る。5は、4ほど口縁部が開かない。口径28.0cm・残存高7.3cmを測る。口縁端部に面をもつ。4・5とも杯部の屈曲点に明瞭な稜を持つ。6は、高杯脚部である。底径16.0cm・残存高11.7cmを測る。脚部は屈曲せず、杯部からそのまま「ハ」字形に大きく開く。外面には細かなミガキ調整を施す。内面はナデ調整を施す。また、上下2段、3方向に穿孔する。同様の個体がもう1点出土している。

7～13は、甕である。7は、いわゆるV様式系甕で、口径13.2cm・器高14.8cmを測る。口縁部内外面をヨコナデで調整し、体部外面にはタタキ調整を施す。タタキ目の方向は右上がりであるが、体部下半と上半ではその傾斜角度が異なる。これは分割成形によるものと考えられる。体部内面は、下半にヘラ状工具によるヨコナデが施されるが、上半はナデ調整である。8は、暗茶褐色を呈する生駒西麓産の典型的な庄内甕である。口径15.4cm・



第101図 第3遺構面包含層出土遺物実測図

残存高11.9cmを測る。体部外面には細筋のタタキ調整を施し、内面は頸部までケズリ調整を施して薄く仕上げる。9～11は、体部が球形を呈する甕で、10・11は、典型的な布留甕である。9は、口縁端部をつまみ上げるなどの特徴がみられ、いわゆる布留傾向甕である。12・13は、複合口縁をもつ甕で、12は、丹後・丹波系の、13は、山陰系の甕と思われる。

3. 小結

今年度は、前年度に引き続き、B地区の下層遺構の調査を行った。試掘調査の成果から、当調査区が遺跡の中心部であることが想定されたが、今回の調査ではそれを裏付けるのに十分な結果を得た。今回の調査成果をもとに若干の知見を述べてまとめたい。

①中世の遺物としては、井戸跡や近世溝の埋土中から多数が出土した。なかでも井戸跡SE03からは、井戸の放棄にともなって投棄されたと思われる遺物が出土した。出土遺物は、底部を穿孔された土師皿など30点余りで、少なくとも2回に分けて投棄されていることが確認できた。土師皿は、底部穿孔のほか緑灰色を呈するものもあり、集落で使用されるものとは異なった様相を示すことから、井戸の放棄に伴う祭祀行為に関わる遺物群と判断される。

②平安時代の遺構として注目されるのは、木枠組みの井戸跡SE04である。その構造や出土遺物、また建築部材の転用である可能性などについてすでに述べた。このような建物の建築部材を転用した井戸跡は、藤原京内などで検出例が知られる^(注5)。これらは、柱や床板などに使用されていた部材を転用していることが多く、SE04のそれと比べても遜色のないものが多い。SE04に使用された部材は、製材のための加工痕以外は確認できないため、建物のどの部分に使用されていたかは、現時点では特定できない。今後、詳細に検討していきたい。

③飛鳥・奈良時代の遺構は、掘立柱建物跡4棟、溝1条、土器溜まり2基などを検出した。また、溝跡や土器溜まりを中心にこの時期の遺物も多数出土した。この時期の遺構・遺物は南に隣接するA地区でも検出されており、B地区で検出された遺構・遺物と有機的な関係にあると思われる。両地区で検出された掘立柱建物跡は9棟を数え、調査の終了したA地区の建物跡群については、すでに方位から先後関係にある2グループに分けられるとされている^(注6)。今回検出した建物跡群もこれにもとづいて検討していく。

まず、先行するグループに属すると思われる遺構に、SB10、SB15、SD53などがある。これらは主軸方向がN-SないしN2°Eとなるグループで、A地区検出の建物跡群と主軸方位をほぼそろえる。また、SD53はA地区北端で検出しているSD16と直交すると考えられる。したがって、SD53とSD16に区画されるSB10・SB15と、その南側に位置する倉庫風のSB03・SB05という建物配置を想定することができる。この遺構群は、SD16・SD53から出土した遺物から飛鳥Ⅲ～Ⅴ期と考えられる。

ところで、SD16は条里制の名残りと思われる現農道にほぼ重なって検出されており、条里制遺構との関わりが注目される。また、これに直交するSD53についても、その可能性を捨てきれない。ただ、これらの溝が飛鳥時代後半であることは、条里制の施行時期の

問題とも関わるため、現時点では即断を避け、C地区や周辺地で調査が進んだ段階で再考したい。

次に、後のグループに属すると思われる主軸方位を持つ遺構は、B地区では検出されていない。しかし包含層中からは、奈良時代の土器も少なからず出土しており、同時期の遺構が周辺地域にあったことを示唆している。

なお、SB14の主軸方位は、先行するグループに近いが、SB10と切り合い関係にあり、先行するグループと後のグループの中間期に位置づけられると考えられる。

④焼土坑SX03は、堅穴式住居に伴う竈跡と考えられる。すでに述べたように住居跡は削平されていて検出できなかったが、出土した遺物から古墳時代後期前半ごろの時期と考えられる。当該期の遺構は、内里八丁遺跡でははじめての検出であり、調査地周辺に集落があったことを示す資料である。

⑤古墳時代初頭から前期にかけては、検出された遺構はわずかであったが、包含層出土遺物も含め、当該期の遺物が多数出土した。A地区における当該期の遺構は、方形周溝墓や溝跡などであるのに対して、B地区では土器溜まりを中心とする遺構であった。SX04は、破片化した土器が多数出土したが、その大半は甕であり、SX04の性格をこれらの廃棄土坑として捉えることができる。また、出土遺物の大半が甕であることからB地区周辺に当該期の集落のあった可能性が高い。

一方、SX05は完形個体が多く、また外来系土器(丹後・丹波系)も多く出土した土器溜まりであり、遺物の出土状況からみて、何らかの祭祀遺構と現時点では考えたい。このように考えるならば、SX04とSX05の間に存在する空閑地は、居住域と祭祀場(墓域?)を区画しているのではないだろうか。また、SX04が居住域の縁辺部に位置づけられるならば、居住域はB地区北半からC地区にかけて所在すると考えられる。

また、内里八丁遺跡で庄内式併行期の遺物が多数出土したことは、南山城地域における古墳出現前夜の様相を考えていく上で重要な資料を提供するものである。今後に予定されるC地区の調査成果に期待したい。

⑥調査区の一部を断ち割って、A地区第3遺構面に対応する水田跡を検出している。水田跡の調査は、来年度に継続して行う予定であるが、その成果を待ってB地区の総括を行うことにしたい。

(筒井崇史)

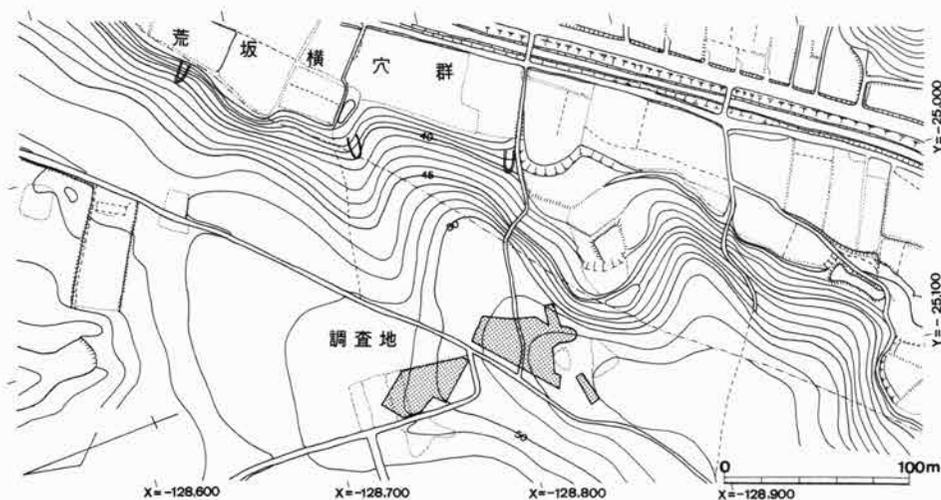
(2) 荒坂遺跡

1. 調査の経過

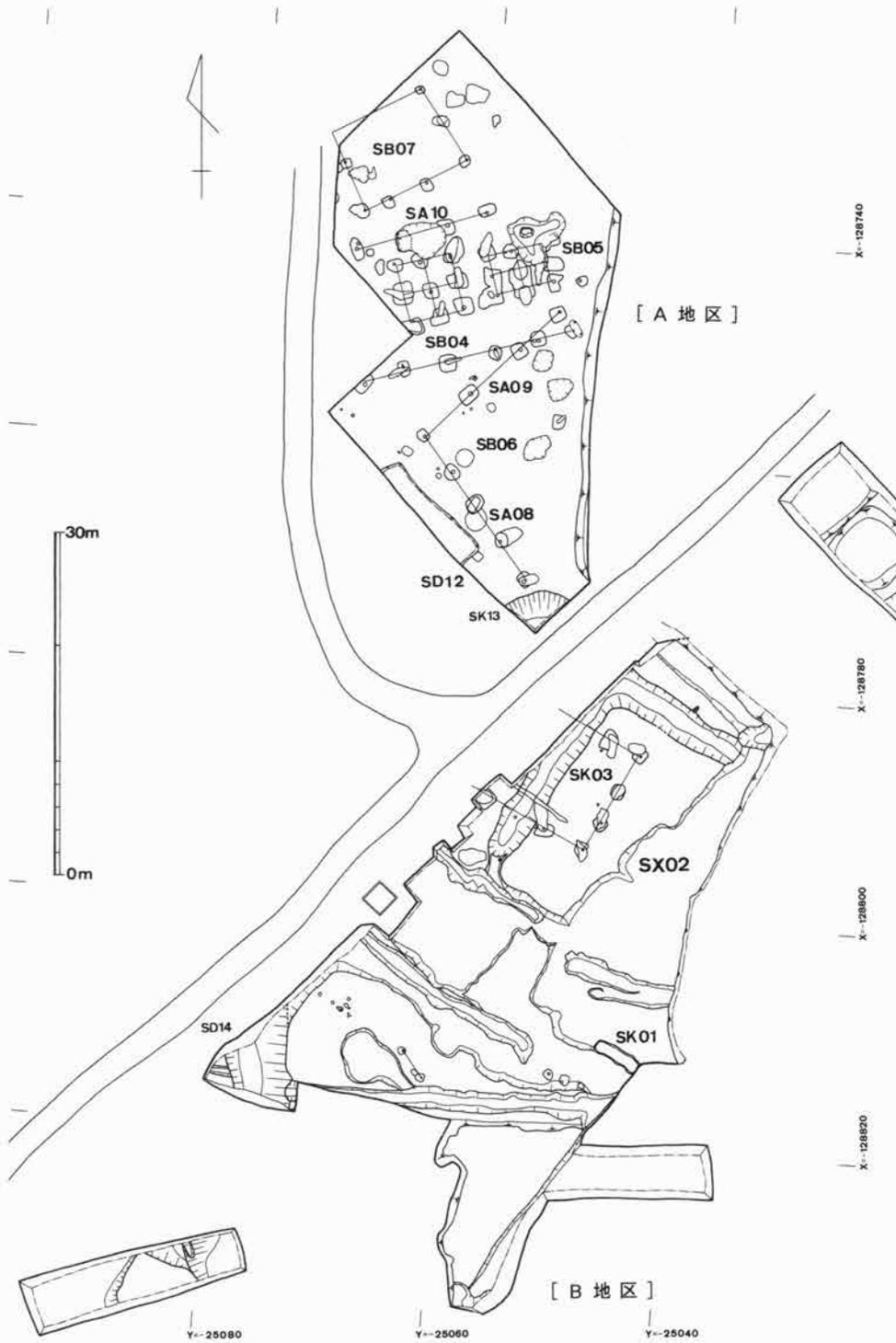
荒坂遺跡は、八幡市の南郊で、著名な石清水八幡宮を擁する男山丘陵が甘南備丘陵に移行するほぼ中間地点に位置する。この丘陵には北面する木津川の沖積低地(山城盆地)に向けて、その支流による幾筋もの開析谷が開かれており、遺跡は、比較的規模の大きな大谷川河谷の西側に接する尾根状地形の頂部に位置する。また、現在の行政境界は、この谷地形にはほぼ沿っており、遺跡地の所在は、隣接する田辺町側にほとんど接する八幡市美濃山荒坂・御毛通にある。

この荒坂遺跡は、近年、旧石器や土器片が採取されたことから新たに遺跡に登録されたものである。このため、過去に発掘調査の事例はなく、遺跡の拡がりや実態について不明な点が多かった。しかし、周辺の遺跡密度の高さなどに示される良好な人文的環境から、それ相応の成果が期待された。

今回は、こうした点を解明する目的で、遺物が採取された地点を中心に、開発対象地内に調査区を設定した。調査区は、便宜上、北北東～南南西に走る尾根筋を縦走する林道を境に北西側をA地区、対する南東側をB地区とした。両地区の現況は顕著に異なり、A地区は、平坦な地形で畑地として利用され、B地区は、竹藪として人工的に改変されて起伏に富んだ地形を呈していた。調査は、総面積を1,000m²として各地区に試掘トレンチを数



第102図 荒坂遺跡 周辺地形図



第103図 荒坂遺跡 遺構平面図

か所設けて行ったが、B地区では竹藪の土入れ部分を設定の基準とした。

その結果、このような地勢の違いにもかかわらず、A・B両地区で遺構の拡がり認められた。このため、遺構の顕著な部分を中心にトレンチを拡張し、最終的には調査面積は、2,700㎡に達した。調査は、平成4年10月12日から平成5年2月25日にかけて実施した。

2. 検出遺構

調査によって検出された主な遺構は、弥生期の土坑・古墳各1基と、多数の規模の大きな柱穴である。柱穴は、数棟の掘立柱建物跡と柵列に復原できる。

以下、各遺構についてその概要を記す。

①弥生期の土坑(S K01)

B地区の調査区北東辺のほぼ中央に接して検出された主軸を北西～南東にとる長方形プランを呈する土坑である(長軸4.1m・短軸=幅1.2m)。底部は、いく分凹凸があるもの、おおむね平坦でその断面形は浅い台形状を呈する。竹藪の土取りが深く及んだ地点で検出されたため、検出面(風化があまり進行していない灰白色粘質土)からの深さは約0.05mを測るにすぎない。旧状は四壁がさらに高くたち上がっていたものと推定される。

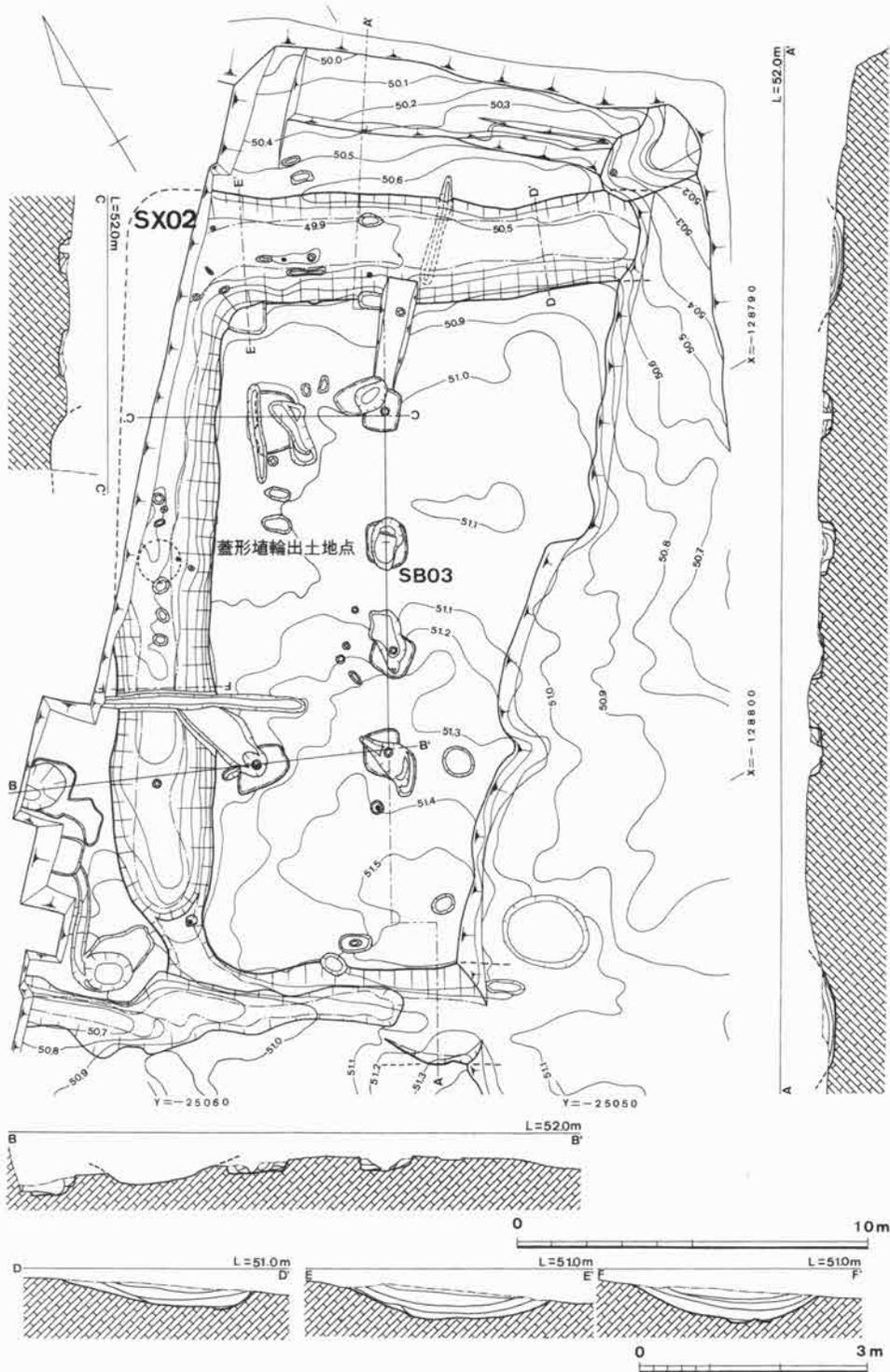
土坑の主軸上南西小口寄り、坑底に接して広口壺1個体が倒立した状態で出土した(体部下半は削平により失われていたものの、それ以上の部分はほぼ完存)。

遺構の形状や出土遺物から、土壙墓の可能性も捨象できない。

②古墳(S X02)

A地区のほぼ中心に位置する小規模な方墳である。本古墳は、現地表上にその痕跡を示さない、いわゆる「埋没古墳」であり、今回の調査以前には周知されていなかった。このため、これを、古墳が立地する小字名を採って「御毛通古墳(御毛通1号墳)」と命名することとする。

古墳を検出した地点は、大正期に始まる竹藪による地形の改作が著しく、林道に面したその北西側半部は、厚さ約1.0mの20数次にわたる土入れの盛り土により隆起した地形を呈し、その周囲と、特に古墳の南東側半部は、逆にこれらの盛り土を供出するための土取り場として掘り下げられ陥没地形となっていた。このため、古墳の南東側の約50%にあたる部分は、削平されて周溝の痕跡すら残さない。また、土入れによる盛り土に被覆されるかたちで周溝が遺存していた北西側も、完存していたわけではなく、墳丘面が周溝外縁の検出面(地山面)と同一レベルにまで削平されていた。この墳丘の削平は、少なくとも、後述するS B03建設の際の造成の時期までさかのぼる可能性があり、S B03柱穴掘形自体、遺存度が低いことから、その後の削平も相当進行したものと考えられる。



第104図 荒坂遺跡 B地区遺構実測図

周溝は、遺存部分では逆「コ」字形プランを示し、この古墳が方墳であることを示している。周溝の上縁幅は、南隅角部分を除き、ほぼ一定しており約3.0mを測る。南コーナー部分の周溝は、途切れないものの、極端に浅くかつ狭く変形しており、陸橋状の施設を意図して造作したものとみられる。この陸橋状に浅く掘り残された部分の底面の墳丘寄りに径0.1mの柱痕跡を残す柱穴(掘形は径0.4m)が1基存在するが、古墳に関連するものかどうか確証はない。周溝の断面形状は、現状では内外両斜面がゆるく内湾するように立ち上がるが、底面は比較的平坦な面をなし、斜面との境界は比較的明瞭に屈折して基本的には逆台形断面を呈する。特に、外傾斜面には、下縁ラインに沿って浅いピット状の掘り込みを連続的に穿っている部分(北西辺に顕著に認められた)があり、墳丘の基底を明示している。周溝内埋土は、基本的には4層に区分できる。上層は、混じり気の少ない黄茶褐色土でほとんど遺物を包含しない。中層は、腐植土混じりの暗灰色土で埴輪片が多く出土する。下層は、淡い色調の淡黄灰色粘質土で若干の埴輪資料を含む。以上の3層は、周溝軸線を対称にレンズ状に堆積している。最下層は、粗砂混じりの灰褐色土で墳丘側に偏って堆積し、早い時期の墳丘流土と考えられる。

墳丘は、上記のように削平を受けて、周溝により内方に掘り残された基台の下半部をどめるにすぎず、地山面が直接露呈している。その規模は、対向する辺が残る北東辺～南西辺の墳丘基底(周溝外傾斜面の下縁)間で求めると21.5mを測る。主軸の示す方位は、磁北に対して約30°振れているが、この方位は古墳が築かれている尾根の稜線の方向とほぼ一致する。

墳丘の外部施設としては、周溝各所から出土する埴輪片から、墳丘上に埴輪をめぐらしていたと想定できるが、すべて原位置を失っており、本来の樹立形態を知ることはできない。葺石は、転落石すら全く認められず、敷設されていなかったものとみられる。

内部施設は削平のためその痕跡すら残らない。

周溝内から、多くの埴輪類に混じって、若干の土器資料も出土している。このうち、北東辺では、周溝外縁に近い埋土下層から土師器1個体分(第108図-16=布留式併行期)が出土し、その時期的な対応関係が注目される。また、北西辺の南寄りの周溝のほぼ中央に穿たれた小規模なピット状遺構の底面から、須恵器甕の口縁部(第108図-17=T K 216併行期)が出土したが、このピットは周溝がある程度埋没した時点で掘り込まれた遺構であり、古墳よりも新しい。

③掘立柱建物跡

A・B両地区で検出された。複数の建物跡と柵列に復原できる。いずれも、柱掘形が大規模で、柱間寸法を広くとることを特徴とする。主軸方位を基準に、真北に対しておよそ



第105図 荒坂遺跡 A地区遺構実測図

17°西に振る一群(a群)と、方位にa群ほどの厳密性はないものの、北に対して大きく東に振る一群(b群)に分離できる。両者は一部重複関係にあるが、a群が北に、b群が南寄りに占地する傾向がある。以下、各遺構について説明を加える。

S B 03 削平を受け平坦面となった古墳の墳丘の北西半部に複数の柱穴が存在し、現状では、「コ」字形に閉塞するプランの柱筋に復原できる。北西の延長部が調査区外のため、全容をつかめないが尾根筋と直交する方向に棟筋をとる建物跡となる可能性がある。

それによると、梁間総間2間(9.8m以上)で、主軸はN(真北、以下方位を示す場合真北を標準とする)30°Eを測る(以下便宜上、東西棟とみなして記述を進める)。柱間寸法は、妻柱筋で南2間を2.97m(和銅6年格制の大尺すなわち天平尺で10尺)等間とし、残る北1間を3.56m(令制大尺の10尺)と広くとる。桁行柱間は、東第3柱の柱当たりが確定できないため正確な数値を求められないが、東2間を5.34(天平尺の18尺)~5.94m(同20尺)と非常に長くとる一方、東1間(端間)は、相対する柱間はそろわないものの、北側で2.97m・南入側で3.86m(天平尺の13尺)とする。柱の掘形は、一辺1.2~1.8mの隅丸方形プランで、検出面からの深さは0.3~0.55m前後を測る。すべての柱に長楕円形プランの抜き取り痕跡が認められ、その長軸(抜き取り方向)は多くが南北方向にそろっている。複数の掘形内から埴輪の小片が出土しているが、古墳からの混入品である。

S B 04 B地区のほぼ中央で検出された2間(5.2m)×2間(4.8m)の南北棟の総柱建物跡である。主軸はN16°30'Wを測る。

柱間寸法は、桁行2.6m(天平尺の9尺)等間、梁間2.4m(同8尺)等間を測る。掘形は、一辺1.05~1.9mの隅丸方形プランを呈し、現状では検出面から約0.4~0.6mの深さを残す。過半数の柱が抜き取られており、その痕跡から北方向に抜き取られたものと、西方向に抜き取り痕の長軸をとるものがある。直径約30cmの柱痕跡をとどめるものがある。

S B 05 S B 04と方位をそろえ、隣棟間隔を3.3m(天平尺の11尺)をとって東に位置する2間(4.8m)×2間(3.5m)の総柱構造をとる建物跡である。棟筋は、S B 04とは直角方向に違え東西にとるが、棟通りの柱筋の延長ラインがS B 04の北第2柱通りの柱筋に一致する。柱間寸法は、桁行2.37m(天平尺の8尺)等間、梁間1.76m(同6尺)等間に復原できる。掘形は一辺1.0m前後の隅丸方形プランを基本とするが、柱間に対して掘形規模が大きいこともあって、西第1及び第2柱通りの南2柱穴分の掘形が南北方向に連繫している。検出面からの深さは0.15~0.35mを測る。複数の柱に抜き取り痕跡が認められるが、いずれも南北方向に抜き取られている。

S B 06 上記2棟の総柱建物跡の南側にあつて、これらと方位をそろえ、S B 04との隣棟間隔を4.0m(天平尺の13.5尺)とって配された東西棟の側柱建物跡である。建物跡の

平面規模は、桁行総間3間(11.6m)・梁間総間2間(7.3m)を測る。柱間寸法は、桁行方向は3.86m(天平尺の13尺)の等間隔柱間となるが、梁間は相対する両妻間で柱筋が通らず不等長に割り付けられている。掘形は、一辺1.0~1.4mの隅丸方形プランで深さは検出面から約0.2~0.5mを測る。柱抜き取り痕を有するものもあるが、多くは径30cm前後の柱痕跡を残す。なお、北入側柱筋の東西両延長線上でこの建物跡の柱穴と同規模の柱穴をそれぞれ1基検出している。建物隅柱との間隔は、S B06の桁行柱間と同一数値を示し、密接な関連性をうかがわせるが、調査区の関係で、さらにのびるものかどうか不明である。建物跡に取り付き、北側の倉庫風建物跡との間をさえぎる柵列の可能性もある。

S B07 2棟の総柱建物跡の北側に「コ」字形に通る柱列がある。北側が調査区外にはずれるため全容を明らかにし得ないが、3間×2間の側柱建物跡に復原した。

ただ、柱間寸法が2.4~4.0mと不等長である点や、各辺の交角が90°に満たないやや鋭角をなす点などから、矩形に閉塞する柵列の可能性も指摘できる。掘形は、一辺0.7~1.05mの平面隅丸方形を呈し、他の建物跡に比べ小規模である。

S A08 B地区の東半部で検出した柱列である。調査区外において4間相当(14.8m)を確認したが、南東側は更にのびる可能性がある。主軸方位はN38°Wを示す。北端1間分が先のS B06と重複するが、掘形同志の重複はなく、その先後関係は不明である。

柱間構成は、3.7mの等間隔柱間をとる。掘形は、一辺1.0~1.8mの隅丸方形あるいは隅丸長方形プランを呈し、多くが柱筋に直交する方向に抜き取り痕跡を残す。

S A09 S A08北西端の隅柱を起点に北東方向にのびる一本柱列である。大半がS B06と重複するが、柱穴同志の切り合いはない。調査区外で3間(約16m)分を検出したが、4間目以降は近年の掘り込みによる段差により失われているようである。柱筋の示す方位はN44°Eを示し、S A08との交角は98°を測る。柱間寸法は、不ぞろいで南西隅から順次5.4・5.8・4.8mを測る。掘形は、S A08とほぼ同形・同規模であるが、抜き取り痕はなく、径30cm前後の柱痕跡を残す。S A08とともに方形区画(院)を囲む柵列とみられるが、今回の検出部分が西隅部であることもあってか、内部に顕著な遺構はみいだせなかった。

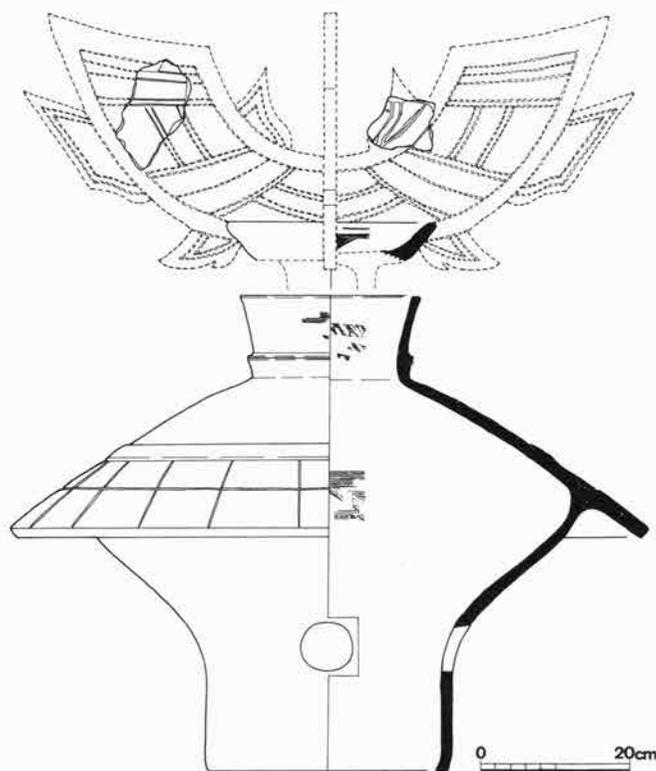
S A10 2棟の総柱建物跡とS B07との間にあって両者を区画するように設けられた東西方向の柱列(柵)である。調査区内では折れることもなく3間相当(約12m)を確認したが、西側にのびる可能性はある。柱筋の示す方位はN71°E(N19°W)で、S B04・05・06の柱筋に対してわずかに振れる。柱間寸法は、西隅から2間は4.15m(天平尺の14尺)等間、東端間は3.56m(天平尺の12尺)を測る。掘形は、一辺あるいは長辺1.0~1.8mを測り、いずれも30cm前後の柱痕跡をとどめる。柱材が抜き取られた形跡はない。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、埴輪・土器類・石器であるが、量的には前者が大半を占め、コンテナバットに6箱相当を測る。以下、埴輪類を中心にその内容を紹介する。

①埴輪類

蓋形埴輪(第106図・第108図-18・19)は、古墳S X02の北東辺周溝中～下層から1か所にまとまって出土したものである。残存状態は、軸受け部以下、円筒形台部下端にいたるまで図上復原が可能な程度残っていたのに対し、立ち飾り部は断片資料のみで残存率も^(注8)低い。笠部は、復原口径(笠部下端部の示す直径)約87.0cm、軸受け部口縁上端から円筒形台部基底までの長さ(笠部全体の高さ)64.0cmを測る蓋形埴輪の中では大型の部類に属する。笠部本体の形状は、わずかに肩(笠部上半)に丸味を残すものの、全体として直線的に外下方に広がる側面形を呈する。笠部外面中位には幅の広い低平な突帯を1条横位にめぐらせ、笠部を上下に二分する。突帯より上位は素文(無文)であるのに対し、下位(笠縁部)にはヘラ描き沈線を施す。この笠縁部の沈線による文様構成は、通有にみられるものと同じ原理で、単線による放射状の表現をほぼ等間隔に施した後、笠縁部を二分する位置に1条の沈



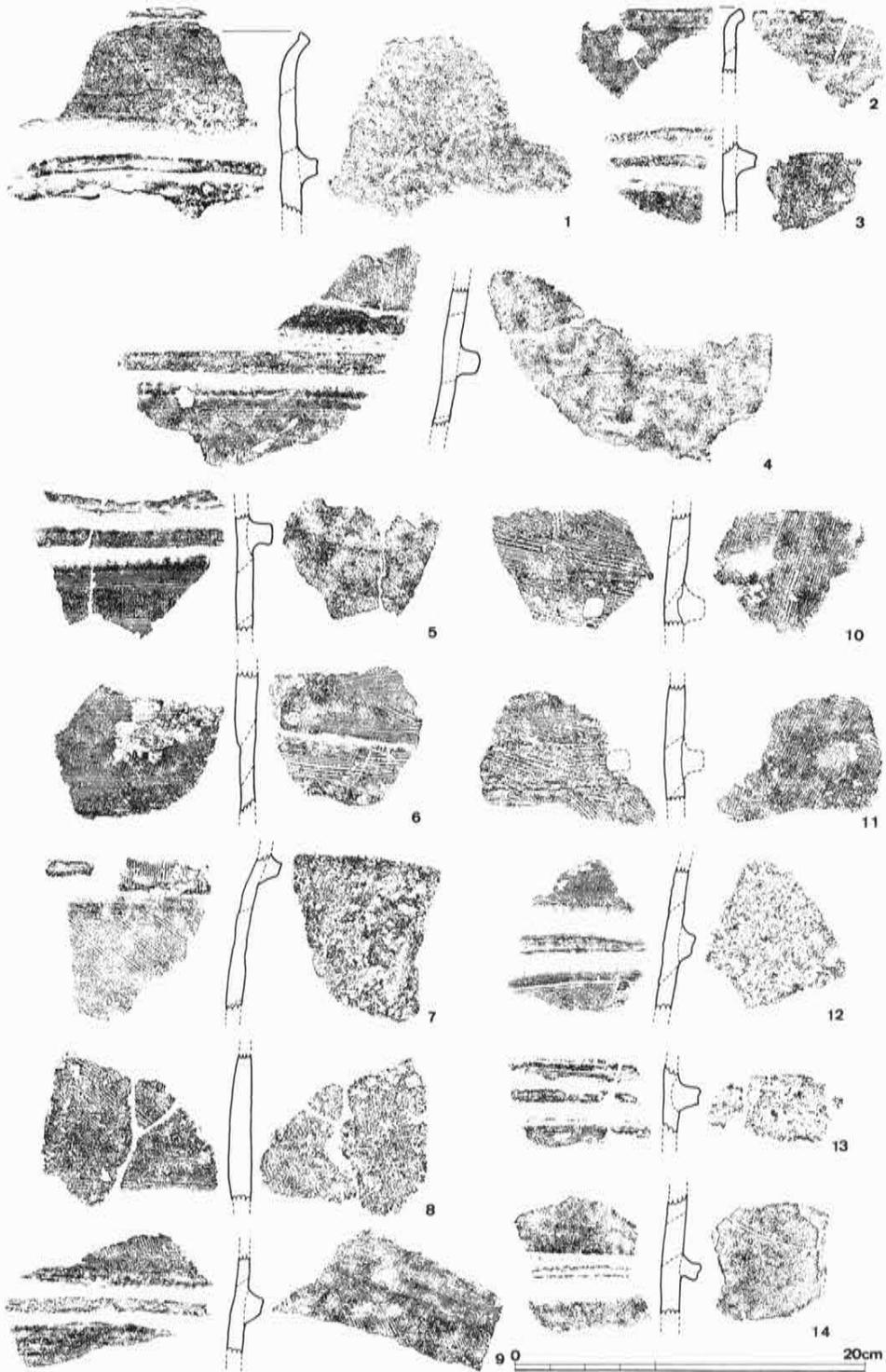
第106図 荒坂遺跡 出土遺物実測図(1) 蓋形埴輪

線を横位にめぐらせる。こうした施文順位から、必然的に放射状線は、中位横線を境に上下段でずれない表現(古相)となっている。笠縁部下端は、軸受け部上端と同様に外面に突帯を付加することなく端部に面をもたせるように直口状に納める。全円周の1/4以上を残す破片の存在から、肋木状造形が笠部外面に造形された形跡はない。軸受け部は、わずかに外上方に直線的に立ち上がり、口径

24.0cm・高さ11.0cmを測る。軸受け部下端突帯は、軸受け部側の下端に位置し、断面が三角形を呈する粘土帯の貼り付けによって見かけ上、幅の広い段状に作る。円筒形台部は、基底から台部高(38.0cm)の中位付近まではほぼ垂直に立ち上がった後、大きく屈曲して外反する特異な側面形を呈する。この屈曲点を上縁とする円形透孔が対向する位置に2孔穿たれる。台部も含めた笠部の製作は、いわゆる笠部分割成形法(註9)を採る。すなわち、外反した円筒形台部上端の内面を基礎として、ここに順次粘土帯を積み上げることで笠部の上半約2/3と軸受け部を連続的に製作し、一定の乾燥工程を経た後、残る笠縁部を付加するように粘土帯を積み重ねて製作する。なお、笠縁下端部は、現状より短い位置で一端ナデ調整を加えて仕上げているが、笠縁長が短すぎたのか、さらに粘土帯を追加してこれを延長させている。器面の調整は、全体に器表の磨耗が進行しており充分観察し得ないが、少なくとも笠部外面は、最終でいねいなナデ調整を施して文様面を平滑に仕上げる。そのほかの部位は、先行する調整が部分的に残り、主として、ハケ目が確認できる。例えば、円筒形台部の外面には、上位ほど左傾する円弧状のタテハケの後ヨコハケ(上位はナナメハケに移行)がみられ、軸受け部内外と円筒形台部上端にも同様のハケ目(タテハケまたはナナメハケの後ヨコハケ)が断続的に観察できる。立ち飾り部は、飾り板と受け皿(飾り板受け部)の小片が存在するが、出土量(残存率)が少なく(低く)全体形を復原することは困難である。ただ、こうした断片的資料から、およその要素を抽出することは可能で、これをもとに図上復原を試みた。それによると、飾り板に施された線刻による文様は、初源形態にみられる交互に重なる帯状表現(複線縁と中心線からなる「五線帯」の原理)を基本的には踏襲しているものの、飾り板の軸線に添った方向の縦列する五線帯表現が中心線の消失にみられるように形骸化している。鱗は、飾り板の内側に付く鱗の断片資料があり、その外縁線がゆるやかな「S」字状のカーブを描く点と、その外縁に沿った二重の線刻によって鱗内部が充填されていることが判明した。受け皿は、軸部を欠くが、底部には棒状工具の刺突による複数の穿孔を有し、口縁は底部から屈曲して外上方に立ち上がる。飾り板の接合部には、接合傷が顕著にみられ、飾り板と受け皿が別個に製作されたことがうかがわれる。

家形埴輪 第108図-20は、平板な板状部の一側面に低平な突帯を貼り付けた小片資料である。突帯が段差を設けずに直角方向に派生させる造形から、屋根の可能性があり、この場合突帯は縦・横押縁を表現したものであろう。第108図-21は、断面が鈍く「く」字状に折れ曲がるもので、先端が外下方に垂下する裾廻台かもしれない。

円筒埴輪(第107図・第108図-22・24) すべてが周溝内に転落した状態で出土したため、小片化したものが多く、周溝各所から一律に出土したものの、その量は決して多くない。このため、互いに接合する個体は少なく、全体形を復原できるものはない。



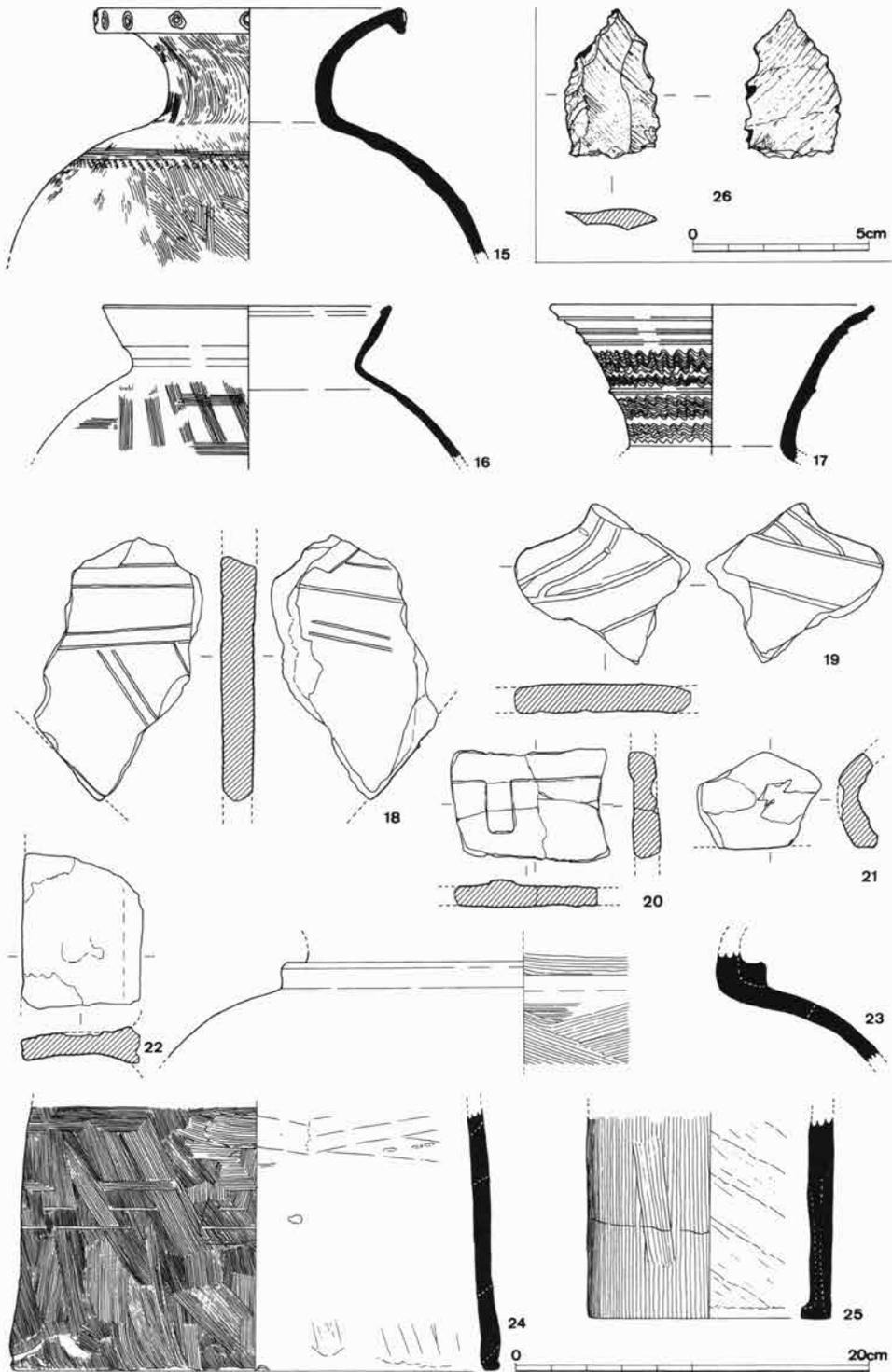
第107図 荒坂遺跡 出土遺物実測図(2) 埴輪類

普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪が確認できる。鱗の破片が存在することから、円筒の多くは鱗付であった可能性がある(ただし、器表面に鱗の剝離痕を残す個体はない)。形態は、全体が何段構成(タガの条数)であるか知ることができないが、24(底径27cm)及び朝顔形の23の肩部径から推して、底径と口径があまり変わらない正円筒形を示すものも存在したであろう。25は、底径13.8cmとかなり小規模であるが、特異な調整技法(外面タテハケのみ)から、形象埴輪の基台に相当するものと見られる。口縁の形状は、残存する個体のいずれもが外反口縁を示し、口唇端は外傾する面をなす。器面の調整は、ハケ目を多用する。ただし、内面はそれを省略する個体も見られる(24の基底段)。外面調整は、多回起的にしていねいに行うのを通例とし、タガを有する個体でみる限り、すべて2次調整を行っている。1次調整は、タテハケを基本とし、底端部から開始して施行方向(上からみて右周りが多い)に重複するように間断なく施す。また、1次調整のうちで複次調整を加えるものも少なからずあり、その場合、断続的なナナメハケを用いるものが多い。外面2次調整には、ヨコハケとタテハケ(ナナメハケも含む)がみられ、前者が後者を凌駕する。中には、2次調整のうちでナナメハケ→ヨコハケと複次施行するものもある。ヨコハケは断続的なもので静止痕をとどめない(いわゆるA種ヨコハケ^(注10))。内面調整は、2次調整を加えるものと、1次で完結するものがある。いずれもハケ目を主体とするが、条線をもたないミガキ様板ナデやユビナデなどのスリナデ技法を用いる個体も少量存在する。1次・2次を問わずタテハケ・ナナメハケ・ヨコハケが用いられ、各次調整に施すいねいな調整がみられ、かつ特定の手法がみだし得ないという特徴が指摘できる。透孔は、円形と方形が確認できるが、その穿孔方式や位置を知ることができない。タガは、高さ1.0cm前後の各面があまりくぼまない台形断面を呈し、その剝離面に方形刺突(一辺0.9cm前後)を残す個体が複数見られる(10・11)。焼成は、硬質の土師質で、黒斑を有するものが多い。

②その他の遺物

弥生式土器 広口壺(第108図-15)は、SK01から出土したもので、胴部上半部以上がほぼ完存する。保存状態は良好とはいえず、器表の磨耗はかなり進行している。円弧を描く胴部上半から口頸部が「く」字状に折れて直立し、その上半部はさらに外上方に大きく開く形態を示す。口縁部は、下方に肥厚させその拡張面(端面)に弱い1条の擬凹線をめぐらしたのち、竹管円形浮文で加飾する。胴部上半にも幅の狭い櫛描き直線文と連続刺突文による文様帯を施すが、施文方法が大雑把でかなり形骸化している。器表面には、外面に限りハケ目が観察でき、胴部は左上がりを中心とする重複する断続ハケ、頸部はタテ方向のハケを間断なく施して最終調整する。胎土は白色砂粒をやや多く含み、精良なものではない。

布留式土器 甕(第108図-16)は、古墳の周溝最下層から出土した。肩部以上の全周の約



第108図 荒坂遺跡 出土遺物実測図(3)

1/3相当を残すにすぎない。口縁・体部間の屈曲は強いヨコナデによってゆるやかなカーブを呈し、口縁部は、やや内湾ぎみに外上方に立ち上がる。口縁端部は、口唇部が内側に肥厚し、端面は内傾する面となる。器面調整は、体部外面をタテハケした後、ヨコハケ(肩部のみか)調整し、内面は頸部屈曲点直下より下位をヨコ方向に削っている。口縁部は内外とも布を介したヨコナデで最終整形する。

須恵器 甕(第108図-17)は、口径18.8cmを測る小型甕の口頸部の小片である。形態は、外湾ぎみに上外方にのび、口唇部は丸く仕上げる。外面には4条の削り出しによるやや鈍い三角形断面を呈する突線をめぐらせる。突線のうち上位3条は、端部付近に狭い間隔で配され、端部の1条の突線(端部突線)が分化したものである。突線によって界される下位2面には櫛描き波状文による文様帯を各面2段にわたって施す。焼成は堅緻で、断面が暗紫灰色を呈する。胎土中には最大1mm程度の暗褐色砂粒がやや目立つ程度含まれる。

4. 小結

今回の調査成果をまとめると以下の諸点に要約できる。

(1)今回検出された古墳は、墳丘面が、古くは掘立柱建物の敷地造成に始まり、以後数次にわたる人為的改作を受けて相当削平されたうえ、さらに近年の竹藪への土地転用の際、古墳の約1/2は土取りで完全に失われ、残る古墳の北西側半部が20数次にわたって1m前後の層厚をもつに至る土入れの土盛りに被覆されるといった状態で検出された。したがって、掘削調査を実施するまでは、古墳の存在は全く不明であったわけで、このことは、発掘調査をしない限り竹藪として人為的改作を受けた現状の地形からは、古墳の存在を読み取れないことを意味する。周辺域に未知の古墳が埋没している可能性は充分ある。

ところで、今回の古墳は、周溝内出土資料(埴輪・土師器)から4世紀末～5世紀初頭にその築造時期が求められ、この地域においては古相の部類に属する。ただ、男山丘陵周辺に点在する古墳時代前半期の他の古墳が、前方後円(方)墳を主体として50mを越える規模を有して、この地域の盟主墳的様相を示すのに対し、荒坂遺跡のそれは、一辺20m前後の方墳であり、墳形及び規模の点でこれらの地域首長墓とは隔絶した感がある。

一方、近年調査例が急増している一辺10m内外の小方墳と比較した場合、規模がやや大きい点と周溝の横断面形が逆台形状に掘り込まれるという形態上の相違点を見出しうる。特に、周濠断面は、小方墳が「U」字形を基本とし、弥生期の方形周溝墓の系譜をひく、すなわち墳丘が段築成されないのに対し、墳丘が段築成される古墳の場合、最下段の墳丘は、周濠の掘削によって内側に掘り残された基台をそのまま利用するため、墳丘裾を明示する目的で断面を逆台形状に掘り込む場合が多い。荒坂遺跡の古墳の場合、こうした

周溝の断面形状から推して、墳丘が段築成されていた可能性が指摘できる。したがって、先の「小古墳」と同列に扱うことは適当でない^(注11)と考える。しかし、小古墳が有する「群在性」という属性までは否定しきれない。それは、身分不相応ともいうべき当該期としては、希少例である蓋形埴輪の優品を備えている点に示される。これは、周辺域に50mクラスの盟主墳が存在することを示唆するものである。

(2)古墳から出土した蓋形埴輪は、立ち飾り部を除き、ほぼ全形を知ることでできる程度の残存率があり、当該期の蓋形埴輪を検討していく上で好資料となる。

すなわち、荒坂遺跡出土例(以下「荒坂例」と記す)は、既存の蓋形埴輪の編年案^(注12)に照合すると、古相の属性を多分に備えるが、従来知られていない新出のタイプであることが判明する。つまり、従来から提唱されている蓋形埴輪としては初現形態である「伝日葉酢媛陵タイプ」と、そこから派生し後続する「津堂城山タイプ」との間を埋める資料ということが出来る。以前からこの両タイプの間には型式学的な断絶が指摘されており、その中間の仮想型式の存在が指摘されていたが、「荒坂例」がその一つの候補になり得る。そこで、この「荒坂例」に関し、まず「伝日葉酢媛陵タイプ」に共通し、津堂城山古墳出土例に代表される「津堂城山タイプ」の古相にない要素を示すと、①笠部外面下半部に施される放射状沈線が、この文様区を上下に分割する横位の線の上下で交互配列とならず、同じ位置に通して一条ずつ一直線に通っていること、②立ち飾りの飾り板表面に施文される直弧文(五線帯による交互配列)及び鱗の形状と内部の充填文が「伝日葉酢媛陵タイプ」と近似し、津堂城山古墳出土例ほど形骸化していないこと、などが挙げられる。

一方、「伝日葉酢媛陵タイプ」との相違点も以下のように多分に抽出できる。①全体に規模が縮小していること、②笠部外面の放射状表現が段差でなく沈線であらわしていること、③四方に展開する蕨手状の装飾(「肋木」)がないこと、④笠部と台部の製作に新しい技法(笠部分割成形)が採用されていること、⑤笠部本体と立ち飾り部が別作りであること、以上の諸点から判断すると、「荒坂例」は、器財形埴輪の中の蓋形として最初に案出された「伝日葉酢媛陵タイプ」と、そこから分化した津堂城山古墳出土例の中間に位置するもので、肋木の消失を重視すれば、それを残存させる「庵寺山タイプ」と併行する時期の、広義の「津堂城山タイプ」の最古相を示す資料ということが出来るかもしれない。

(3)掘立柱遺構については、建物跡方位の違い及びその占地により、大きくa・b両群に別けて事実報告した。ただ、それらの機能時期に関しては、年代特定に耐え得る出土遺物が皆無で、その先後関係はおろか、具体的な年代観を知ることができない。ただ、以下の理由で中世以降には下らないもの^(注13)と考える。それは、①柱穴掘形が一辺1m前後の大規模な方形プランを呈すること、②それぞれの建物跡、特にa群は、群内において造営方位

をほぼ南北方向にそろえ、建物配置に一定の計画性が看取できること、③柱間寸法が全体に長く、多くが令尺あるいは天平尺を用いた完数尺で設計されていること、などを根拠とする。おそらく、奈良時代を中心とする時期にこれらの遺構が造営された可能性が高い。

それでは、こうした遺構の性格についてはどうか、この点に関しても考察に耐える情報は決して多くない。しかし、以下の点において官衙としての可能性を指摘できると思う。

第一に、先の年代決定の要素に加え、個々の建物跡が一般集落のものより大型であること、及び建物跡配置が、とくにa群の場合、ある一定の企画のもとに整然と配されていることが挙げられる。もっとも、識字層の存在を示す文字資料はおろか、宮廷様式というべき精製土器が全く出土していない点は否定要因となろう。

第二に、当地がかつて官衙が設置される条件の一つである交通の要衝に位置していたことである。つまり、遺跡地内を縦貫する尾根筋づたいの道は、大正年間に東側の大谷川筋に府道が開通するまでの本通りとして利用されており、おそらく、これが古代以来の河内方面と山城地域を結ぶ幹道で、大きく経路を変えることなく近年まで道として残ったものと考えられる。調査で検出されたSD12は、古い時期の道の西側溝の可能性がある。

第三に、遺跡の周辺に官衙を彷彿させる地名が残されていることである。それは、「御毛通」「御毛谷」「家前」「古寺」などで、なかでもここで注意したいのは「御毛」と記して「ごけ」と訓じる地名の存在である(ちなみにA地区は字「御毛通」に所在する)。

律令制下における地方行政組織として、国一郡一郷(・里)制があり、上位二者、すなわち郡レベルにいたるまでの官衙については、その存在は自明のこととして、それぞれ国衙・郡衙遺構としての数多くの調査例がある。ところが、人為的行政区画の末端である郷・里(ともに「サト」)は、その官衙の存在が主として文献史家の立場では懐疑的であった。しかし、近年の調査により「サト」レベルの官衙とみられる遺構が全国的に知られるようになり、平城宮下層の下ッ道西側溝SD1900A出土の「五十戸家」墨書土器や儀制令集解春時祭田条古記にみえる「郷家」史料などからも、「サト」レベルの官衙が延暦14年太政官符にみえる「郷倉」をまたず、制度化された当初から存在し、それが「五十戸家」「郷家」(ともに「サトノミヤケ」あるいは「サトノヤケ」と訓ずる)と記されたものに相当することが提唱されている⁽¹¹³⁾。荒坂遺跡の場合、この郷(里)の官衙ともいふべき「郷家」の文字が音読されて「ごうけ」→「ごけ」と転訛し、「御毛」の文字が当てられて地名として伝えられた可能性がある。現在「サトノヤケ」と推定される遺跡の多くが柵や塀に囲まれた一画に、倉庫や官舎が整然と配され、荒坂遺跡と共通する部分も多い。

上記の解釈に大過ないものとするれば、荒坂遺跡の建物遺構群は『和名類聚抄』の「綴喜郡大住郷」あるいは「綴喜郡有智郷」の郷家に相当することになる。(伊賀高弘)

(3) 新田遺跡

1. はじめに

新田遺跡は、八幡市と田辺町にまたがる広大な遺跡である。新田遺跡の調査は、これまで八幡市域で、ほ場整備と京都南道路建設に伴う試掘・発掘調査が行われたことがあるが、田辺町域での調査はなく、今年度がはじめてである。これまでの調査成果によって、新田遺跡は、その大半が厚い砂層と粘土層の堆積からなる木津川の旧河道に相当することが判明している。顕著な遺構としては、ほ場整備に伴う調査の際に確認された5世紀代の堅穴式住居跡1棟があるのみである。

今年度の調査は、平成元年度の調査地に接する八幡市境から府道交野・久御山線までの約43,000㎡を対象とした。対象地の北半部が水田の畦畔などから復原される旧河道に相当するため、調査の重点を南半部におくことにした。南半部は、沖積平野部から丘陵へ続く扇状地にあたり、特に丘陵に近い部分では、集落などの存在が予想された。

2. 調査の経過

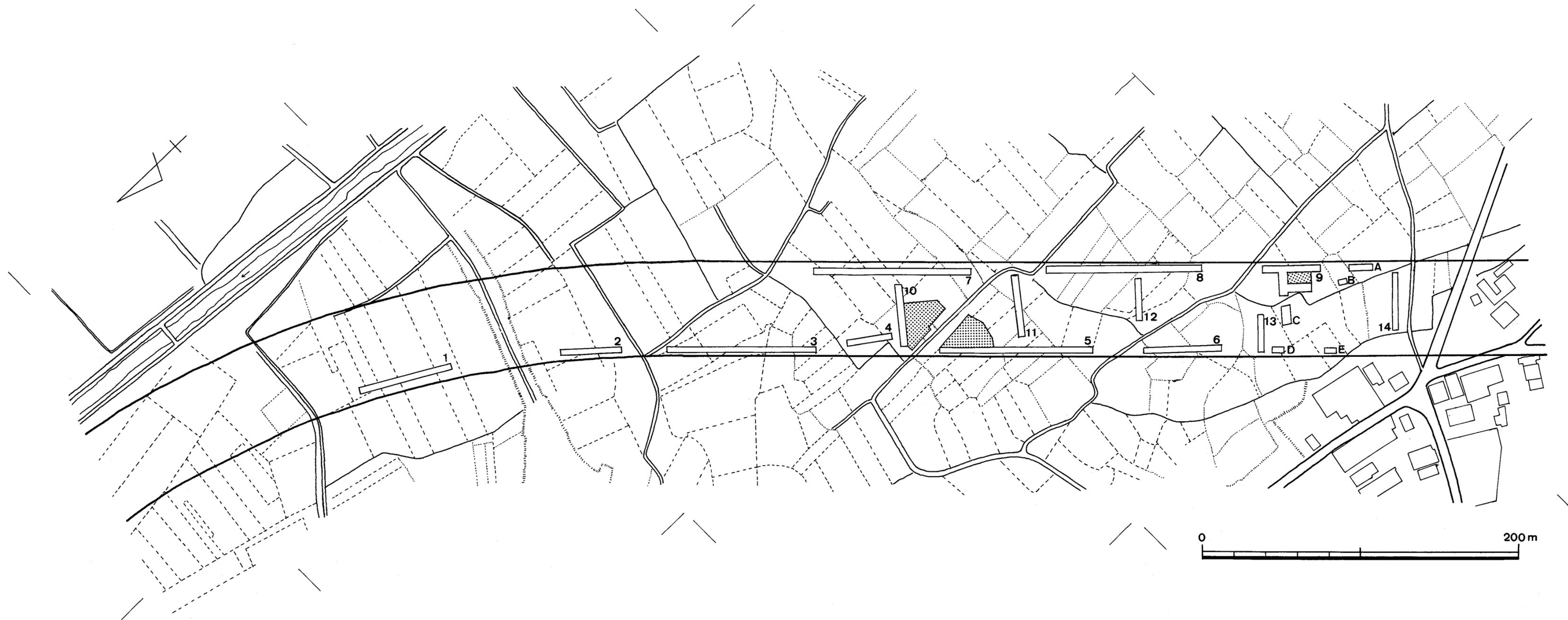
調査はまず、調査対象地内に19か所のトレンチまたはグリッドを設定して試掘調査を行った。その結果、当初の予想に反して大半のトレンチで、砂質土層・粗砂層・シルト層の堆積を確認し、調査地の大部分が旧河道に相当することが判明した。一方、遺物包含層は一部のトレンチにしか存在しないことが確認された。そこで、遺物包含層が確認されたトレンチを拡張し、遺構の検出・遺物の採取を行うこととした。

以下、拡張したトレンチを中心にその概要を述べる。

①5トレンチ 調査対象地のほぼ中間地点に位置する。全長約94mのトレンチを設定し重機掘削を開始したが、地表下約60cm付近で遺物包含層を確認した。この遺物包含層は、トレンチの北東側のみに認められたため、トレンチと農道に囲まれた三角地帯を拡張した。なお、この遺物包含層は隣接する11トレンチでは確認されていない。

遺構面は、黒灰色砂質土をベースとするが、顕著な遺構は検出されなかった。遺物は、包含層や遺構面直上から多数出土したが、細片が多い。遺物に瓦器碗片が含まれるので、中世の耕作地であったと考えられる。

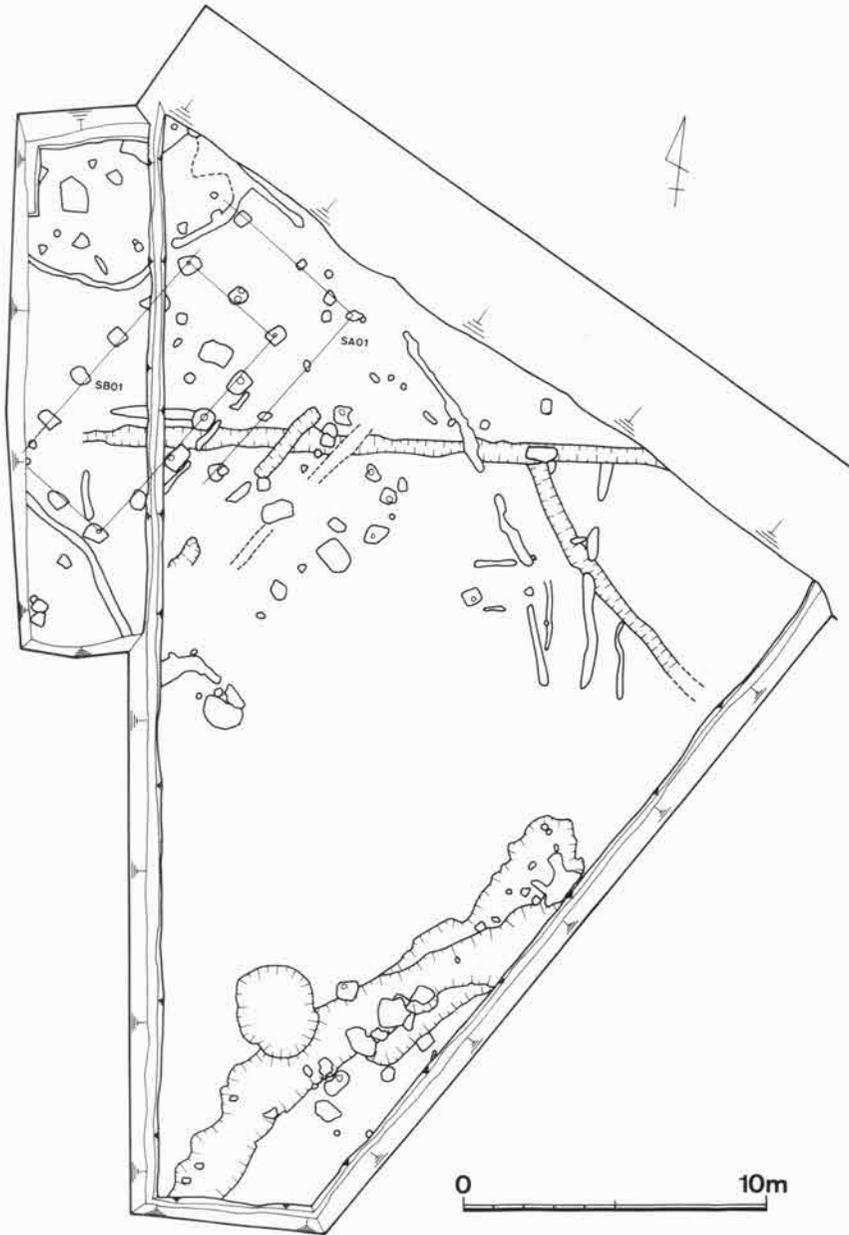
②9トレンチ 調査対象地の南端に位置するトレンチである。重機掘削開始後、地表下1.2m付近で遺物包含層を確認したため、「コ」の字形にトレンチを拡張して遺構の検出作



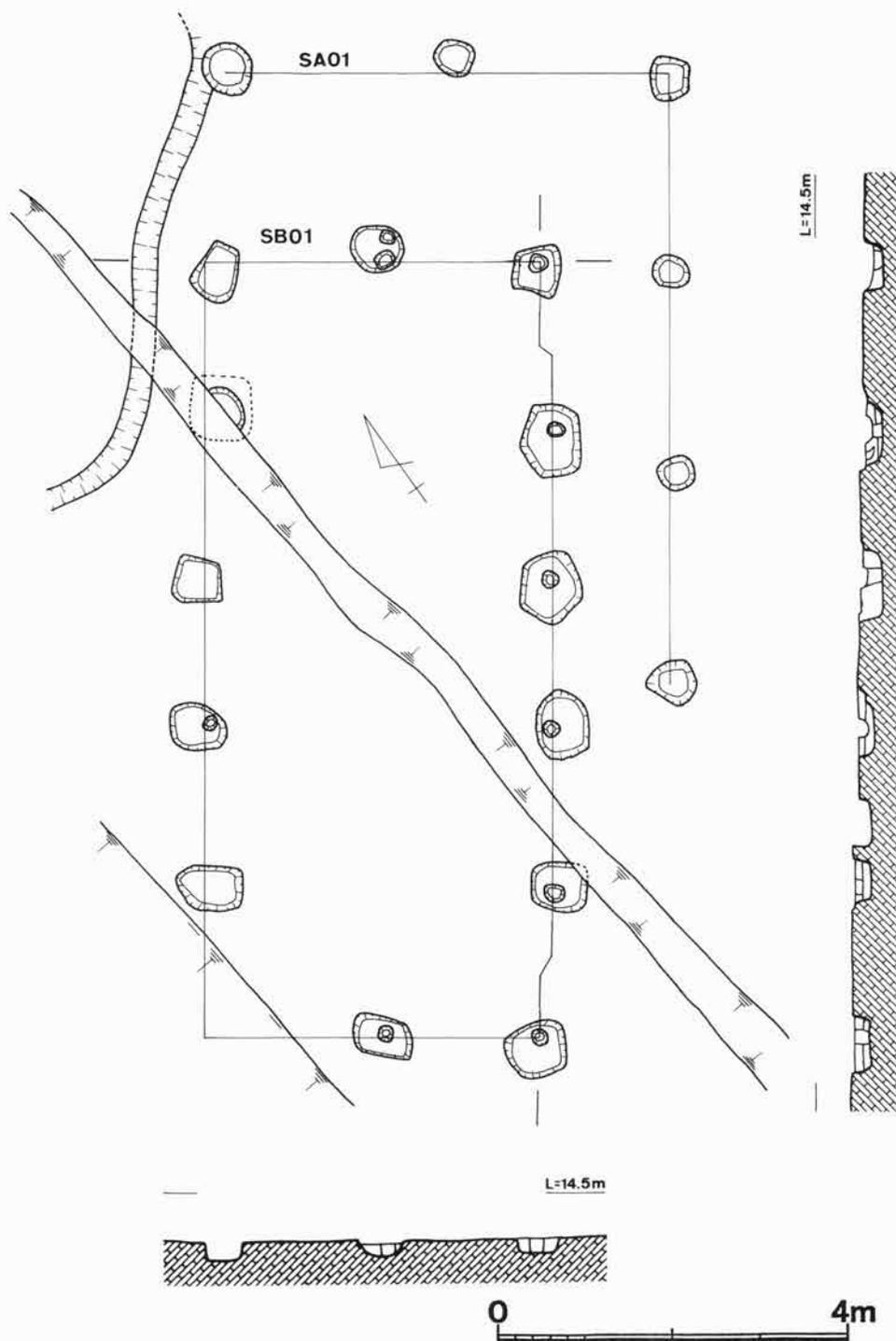
第109図 新田遺跡トレンチ配置図

業を行った。その結果、溝跡を確認したため、突起状に残っていた部分も拡張した。このトレンチで確認された遺物包含層も周辺のトレンチやグリッドでは確認されていない。

遺構面は、淡青灰色または淡黒灰色砂質土をベースとする。遺構は耕作に伴うと思われる南北方向の溝跡10数条を確認した。遺物は細片が多いが、5トレンチ同様、瓦器碗片が



第110図 10トレンチ拡張区遺構配置図



第111図 SB01・SA01平面図

含まれ、中世の耕作地であったと考えらる。

また、遺構面の下層では、旧河道と思われる堆積を確認したが、ここから飛鳥時代後半頃の須恵器などが出土している。調査地周辺に関連遺構の存在が想定される。

③10トレンチ 農道をはさんで5トレンチの東側に位置する。遺物包含層は、地表下約60cmに存在し、南東部分を除くほぼ全面で確認された。周辺のトレンチのうち、7トレンチでは確認されなかったが、4トレンチでは10トレンチに近い南西側に認められた。このことから、遺物包含層は10トレンチの南西側に広がると考えられたため、5トレンチ同様、トレンチと農道にはさまれた三角地帯を拡張し、精査を行った。その結果、黄褐色または淡青灰色粗砂をベースとする遺構面上で掘立柱建物跡、柵列跡、溝跡などを検出した。

掘立柱建物跡S B01(第111図)は、拡張部分の北西部で検出した南北5間(8.8m)・東西2間(3.9m)の建物跡である。柱穴は、隅丸方形または円形を呈するものが多く、深さは20cmを測る。柱間寸法は比較的そろっており、約1.8mを測る。直径20cm前後の柱痕を南東側の柱列などで確認した。主軸方位はN35°Eを測る。柱穴からの遺物はなく、建物跡の時期を決定するにはいたらない。このS B01の北東側を取り囲むように柵列跡S A01を検出した。柱穴は直径40cmを測る。柱間寸法はS B01よりも広く、ほぼ2.4m間隔である。このほか、S B01に平行する溝跡などを検出した。

出土遺物には、須恵器・土師器・瓦器などが細片化した状態で出土している。

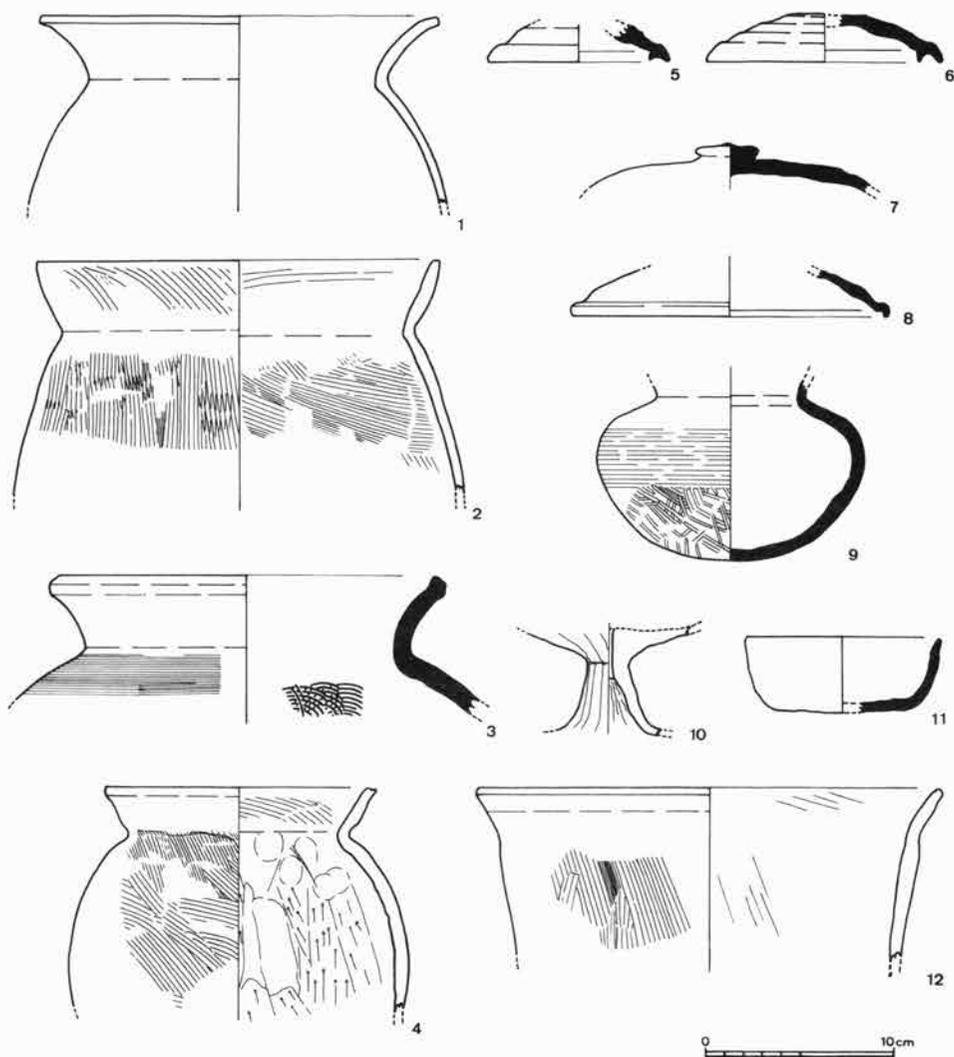
(筒井崇史)

3. 出土遺物

出土した遺物には須恵器・土師器・瓦器などがあるが、全体に摩滅が激しく形態の不明なものが多い。また、成形・調整技法まで言及できる遺物はごくわずかである。ここでは、旧河道の堆積層から出土した飛鳥・奈良時代の遺物を図示した。

1は、口縁が「く」の字に大きく外反し丸味を帯びた体部を持つ甕である。摩滅が激しいため調整技法などは不明である。2は、土師器甕である。長い胴部に短い口縁がつく。外面に縦方向、内面に横方向のハケ調整を施す。口縁部に横方向のハケ目がみられる。色調は、淡灰褐色を呈する。5トレンチ拡張区出土。3は、須恵器甕である。体部から口縁が「く」の字に外反する。口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部外面にカキ目調整、体部内面に青海波文の当て具痕がある。5トレンチ拡張区黒灰色砂質土出土。4は、土師器甕である。体部は丸みを帯びており、口縁部内外面にハケ調整を施す。また、体部内面にヘラケズリ調整を施し、体部内面上部には指頭圧痕がある。2次焼成のため、外面は赤褐色を呈する。また、黒色の使用痕がみられる。内面は淡褐色である。9トレンチ青灰色砂

層出土。5は、杯蓋である。天井部外面の1/2以上に回転ヘラケズリがなされ、端部にかけてナデ調整が施されている。内面はナデ調整である。口縁端部はオリコミ手法で整形されている。色調は、灰色を呈する。5トレンチ暗灰色泥質土出土。6は、天井部外面の1/4以上に回転ヘラケズリされており、端部にかけてと内面にはヨコナデ調整が施されている。口縁端部のかえりはヒネリダシである。色調は、灰色を呈する。5トレンチ出土。7は、杯蓋である。外面の約1/2にヘラケズリ調整を施す。端部にヨコナデ調整を施す。つまみのあたりに自然釉が付着する。内面はヨコナデ調整を施す。なお、焼成時に生じた



第112図 新田遺跡出土遺物実測図

重ね焼き痕がみられる。色調は、淡青灰色である(自然釉部分は暗緑色を呈する)。9トレンチ淡青灰色砂質土出土。8は、杯蓋である。天井部に偏平な擬宝珠つまみを持つと考えられる。端部で屈曲させ段をなす。内外面ともヨコナデ調整である。色調は、灰色である。5トレンチ暗灰色泥質土出土。9は、須恵器短頸壺である。底部はタタキ成形で、外面は平行タタキ目、内面は当て具の痕跡がみられる。体部中央にはカキ目調整を施しており、体部上部から頸部にかけてヨコナデ調整が施されている。色調は、暗灰色である。9トレンチ青灰色砂質土出土。10は、土師器高杯である。杯部及び脚部の端部が欠落する。杯部と脚部の外面にはやや幅の広いヘラミガキ調整を施す。杯部内面は摩滅している。脚部の内面にシボリ痕がみられる。色調は、茶褐色を呈する。1トレンチ砂礫層出土。11は、杯身である。内外面ともヨコナデ調整をしているが、底部は未調整である。立ち上がり部分には自然釉がみられる。色調は、淡灰色を呈する。9トレンチ出土。12は、土師器甔である。内外面ともハケ調整を施す。口縁部外面は、ヨコナデ調整を施す。色調は、淡黄灰色を呈する。9トレンチ青灰色砂質土出土。

(森正哲次)

4. 小 結

今回の調査は、田辺町域における新田遺跡の最初の調査であったが、既述のように、調査地の大半が木津川または大谷川の旧河道であることが判明した。遺構が検出された地点は、これら旧河道によって埋没させられた自然堤防上に存在していたと考えられる。また、これらの地点が陸地化され耕作地として利用されるようになるのは中世であり、少なくとも飛鳥・奈良時代にはまだ河道であったことが下層の調査で判明している。

また、中世の耕作溝がほぼ南北方位に一致することは、調査地周辺に遺存する条里制の整備が遅くともこの段階までには終了していたことを示唆する。ただこのことは、条里制の施行がこの段階まで遅れることを意味するとはいえず、調査地周辺の環境(河道の影響をうけやすい土地)を考えるならば、条里制の施行が他地域にくらべ遅れたとも考えられ、条里制の施行を一概に新しくみること⁽¹¹⁵⁾はできない。

このほか、飛鳥・奈良時代の遺物が比較的多数出土したことは、調査地周辺にこの時期の遺構群が存在する可能性を示しており、注目される。

(筒井崇史)

注1 ①三好博喜・荒川 史「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・新田遺跡)昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究セン

ター) 1990

②荒川 史・竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡)平成2年度発掘調査概要」

(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

③竹原一彦「第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡・口仲谷古墳群)平成3年度発掘調査概要」

(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 ①杉原和雄・山下 正「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982)』 京都府教育委員会) 1982

②奥村清一郎・伊辻忠司「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和57年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1983)』 京都府教育委員会) 1983

③奥村清一郎・伊辻忠司「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』 京都府教育委員会) 1984

注3 平松久和・本田 香・山岡邦章・榛村昌樹・前田暁宏・北村伊佐子・小谷哲也・伊藤こず江・久保田琢磨・伊藤規子・市原智徳・山内基弘・坂東哲弥・真弓拓也・永澤拓志・古城悟志・今芳也・野中邦生・井澤知徳・富安容子・朝倉千尋・熊沢千帆・岡本健資・有働一哉・中岡和男・栃木道代・与十田節子・福田玲子・森田千代子・奥平廣子・平井真由美

注4 嶋村友子「河内における庄内式の甕形土器」『古代』第82号 1986

注5 藤原宮S E 1205・1160・1150などがある。『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書』Ⅱ 奈良国立文化財研究所 1978

注6 注1②に同じ。

注7 『八幡市遺跡地図』 八幡市教育委員会 1990

注8 蓋形埴輪の各部名称については、松木武彦氏の名称案による(松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期一畿内を中心に」大阪大学文学部考古学研究報告 第1冊 『鳥居前古墳』一総括編一 大阪大学文学部考古学研究室 1990)。

注9 筆者は、蓋形埴輪の笠部の製作技法について、それを大きく「笠部一括成形」と「笠部分割成形」に二分した(拙稿「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪-14号墳出土の蓋形埴輪を中心に」『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989)。

注10 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会) 1978

注11 筆者は、「小方墳」の群在性をその普遍的なあり方と考えている(拙稿「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991)。

注12 最近の蓋形埴輪の編年案については、先の注8の松木氏によるもののほか、高橋克壽・田中秀和氏の研究がある(高橋克壽「器形埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 史学研究会 1988、田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号 大阪歴史学会 1988)。

注13 考古資料を操作してこれを論証したものとして、田中勝弘「古代郷倉について-滋賀県高島郡今津町弘川遺跡の検討-」(『史想』第18号 京都教育大学考古学研究会) 1979や、阿部義平『官衙』(考古学ライブラリー50、ニューサイエンス社) 1990、井上尚明「郷家に関する一試論」(『埼玉考古学論集』設立10周年記念論文集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団) 1991などがある。

注14 注1の①に同じ。

注15 全国レベルでの条里制の施行を新しくみる(12世紀以降)立場に石野博信氏がいる。

4. 木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、住宅・都市整備公団の依頼を受け、関西文化学術研究都市の開発区域内に所在する遺跡群の調査である。平成4年度は、京都府相楽郡木津町大字市坂にある西山塚古墳・西山遺跡・瓦谷古墳群の発掘調査を行った。

西山塚古墳は、平成3年度に外表施設である墳丘の形態・規模・葺石及び埴輪列の調査とともに、墳頂部中央の第2主体(組合式木棺)の調査を実施していた^(注1)。今年度は第2主体を切って構築された第3主体(東棺)と第2主体の下層にある第1主体(西棺)の調査を実施した。また、第1主体の調査と併行して西山塚古墳の墳丘の構築方法を検討するため、一部墳丘の断ち割りを実施した。

西山遺跡は、平成3年度に丘陵先端のA地点の調査とともにA地点の南西約100mのB地点で、方形土坑(S H9201)を検出していたが、同土坑を中心に遺跡が広がる可能性が高いため、平成3年度のB地点の調査地を新たに拡張(拡張面積1,700m²)して調査を実施した。その結果、平成3年度に検出した方形土坑が竪穴式住居跡であること、竪穴式住居跡の北東で、掘立柱建物跡2棟と新たに1基の竪穴式住居跡を確認した。

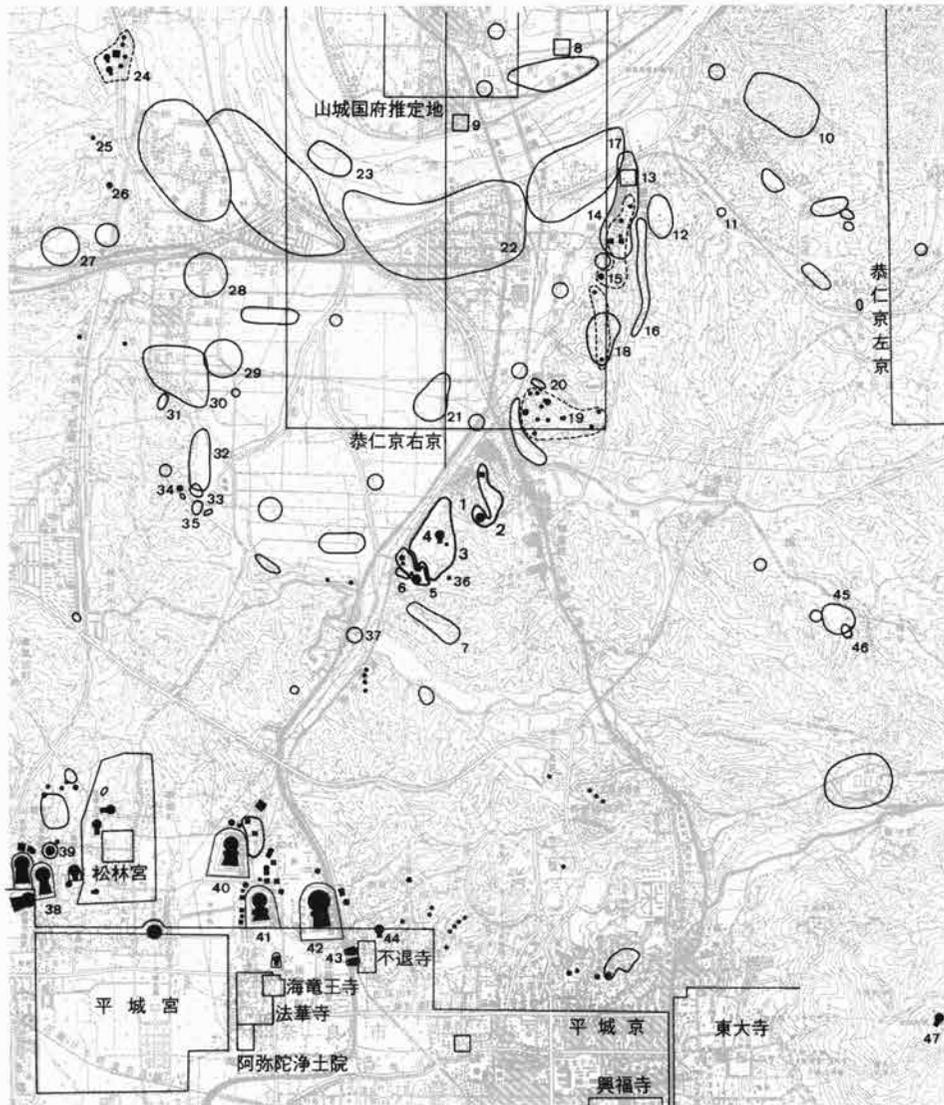
瓦谷古墳群は、平成2年度に発掘調査を実施した瓦谷古墳の南側斜面の調査とともに、昭和61年度に実施した20bt地区の方墳・埴輪棺の広がりを明らかにするため、西側に張り出した尾根の先端部分(3,000m²)の発掘調査を実施した。その結果、瓦谷古墳は、後述するように、全長約48mの前方後円墳であること、瓦谷古墳の南側台地上に7基の方墳と1基の円墳、各古墳のまわりには総数25基の埴輪棺が伴うことが明らかとなった。

以上の3遺跡についてその概要報告を行うが、瓦谷古墳群については、平成5年3月上旬まで現地調査を実施していた関係上、その詳細は次年度以降に報告する。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員石井清司、同調査員森正哲次・伊賀高弘・有井広幸が担当し、多くの補助員・整理員の協力^(注3)を得た。

なお、本調査に係わる経費は、住宅・都市整備公団(関西文化学術研究都市整備局)が負担した。

(石井清司)



第113図 調査地位位置図(周辺遺跡配置図 1/50,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-------------|-----------|
| 1：西山塚古墳 | 2：西山遺跡 | 3：瓦谷遺跡 | 4：瓦谷古墳群 | 5：上人ヶ平遺跡 |
| 6：市坂瓦窯跡 | 7：瀬後谷遺跡 | 8：高麗寺跡 | 9：泉橋寺跡 | 10：鹿背山城跡 |
| 11：鹿背山瓦窯跡 | 12：赤ヶ平遺跡 | 13：燈籠寺廃寺跡 | 14：燈籠寺遺跡 | 15：内田山古墳群 |
| 16：釜ヶ谷遺跡 | 17：上津遺跡 | 18：木津城跡 | 19：天神山古墳群 | 20：大谷窯跡 |
| 21：八後遺跡 | 22：木津遺跡 | 23：木津北遺跡 | 24：土師七ツ塚古墳群 | 25：坊谷古墳 |
| 26：白山古墳 | 27：樋ノ口遺跡 | 28：相楽遺跡 | 29：八ヶ坪遺跡 | 30：曾根山遺跡 |
| 31：大仙堂遺跡 | 32：大島遺跡 | 33：音如ヶ谷瓦窯跡 | 34：音乗谷古墳 | 35：歌姫西瓦窯跡 |
| 36：幣羅坂古墳 | 37：歌姫瓦窯跡 | 38：佐紀陵山古墳 | 39：マエ塚古墳 | 40：ヒシアゲ古墳 |
| 41：コナベ古墳 | 42：ウワナベ古墳 | 43：平塚1・2号墳 | 44：不退寺裏山古墳 | |
| 45：中ノ島遺跡 | 46：梅谷瓦窯跡 | 47：鶯塚古墳 | | |

(1) 西山塚古墳

1. 調査の経過

西山塚古墳は、京都府の南端で、平城山(奈良山)丘陵を挟んで大規模な古墳群や平城京を擁する奈良市と境界を接する相楽郡木津町に所在する。

この古墳の発掘調査は、古墳全体を対象とし、内部施設も含めた古墳の形態や構造を知る目的で、平成3年度事業として開始した。その結果、墳丘の構造や、外部施設の内容、周濠の存在、内部施設の構造などが判明した。

ところが、この調査のなかで、墳丘築成状態を知るために設定した断ち割り部において、墳頂面で検出した埋葬施設と上下に重層するかたちの新たな埋葬施設の存在を確認した。

そこで、この下部の埋葬施設の調査を翌平成4年度に実施することとなった。その成果については、すでに昨年度報告で概略を紹介し、当センター発行の刊行物にも若干の考察を加えて掲載している^(if5)。本章は、後者の報文を一部修正したうえで再度掲載し、これに簡単な出土遺物の観察記録を加えたものである。

2. 調査概要

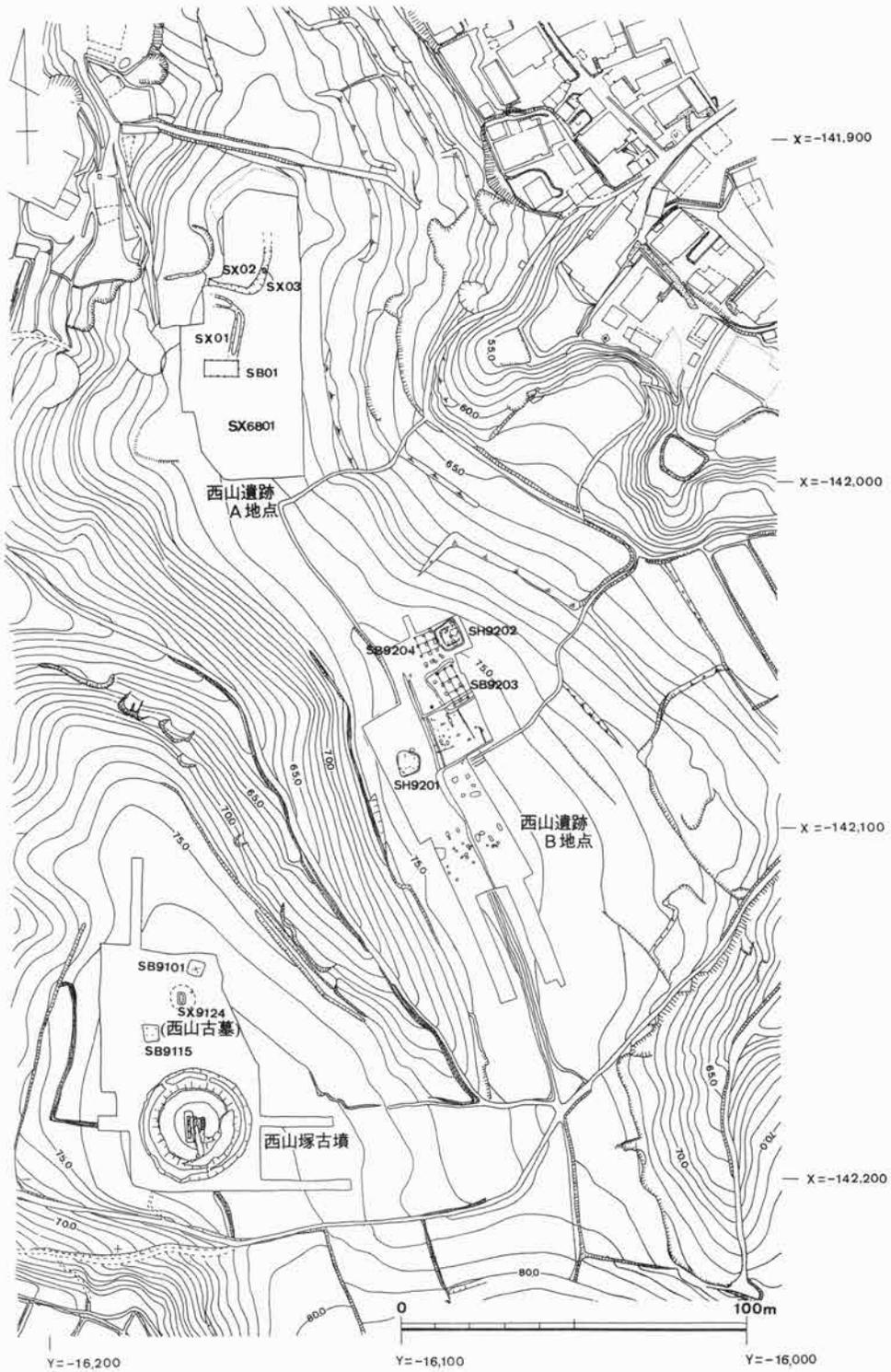
(1) 古墳の立地

西山塚古墳は、木津川水系の河谷盆地である山城盆地の南端を馬蹄形に取り囲む丘陵(平城山丘陵)上に立地する。すなわち、標高100m前後の山塊から派生する尾根の鞍部の比較的高い場所(標高77m前後)に位置するが、古墳が立地する地点は、尾根筋といっても幅約100m・長さ約170mにわたって平坦な地形であり(西側の沖積平地との比高差は約40m)、古墳は、その平地部の南寄りに占地している。このため、丘陵尾根部に通有にみられる古墳とは異なり、平地部に築造される古墳の築造技法、すなわち周濠を完周させ、その排土を利用して墳丘盛り土とする方法で築かれている。

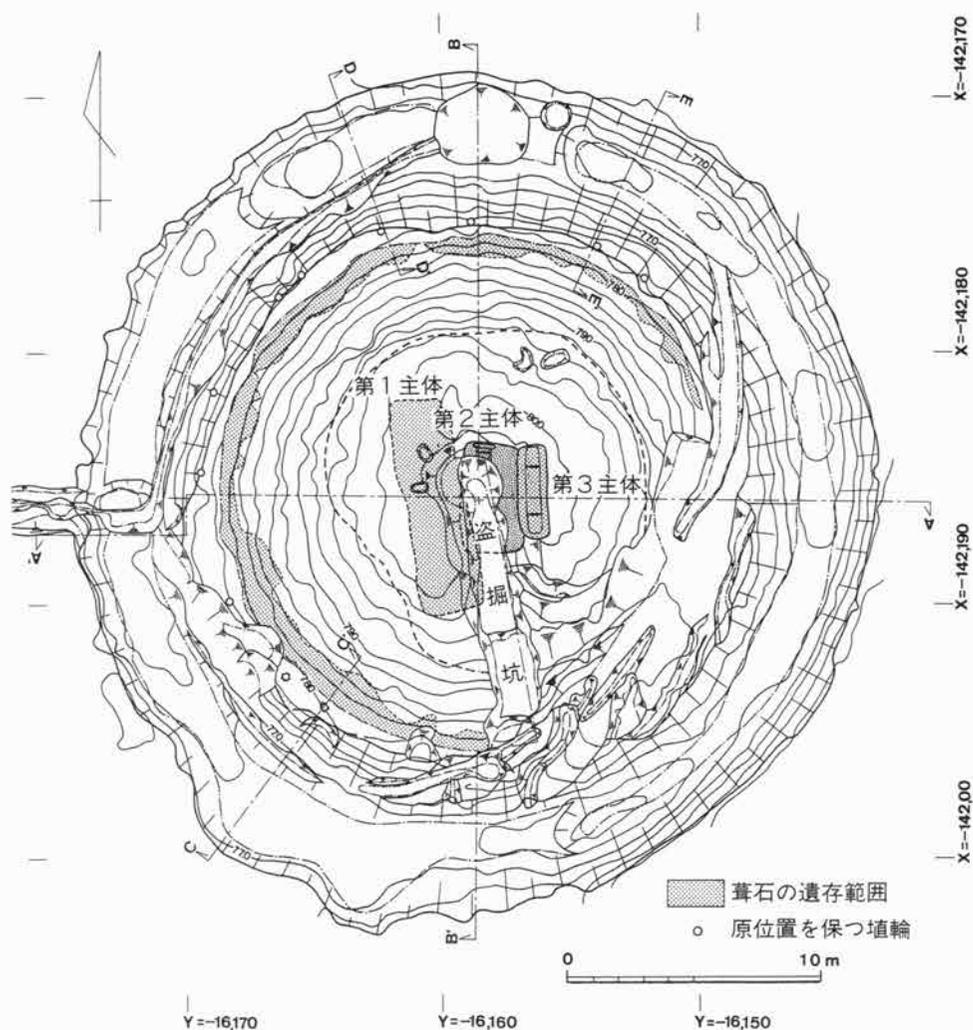
(2) 墳丘と外部施設

墳形は円墳で、墳丘の基底径(対向する周濠外傾斜面の下縁間の規模)は、26.0mを測る。

墳丘は2段築成で、1段目墳丘上面テラス(現状で約0.3~1.3mを測るが、外縁は旧状が失われている)の内方に2段目墳丘(基底径約20.0m)をすべて盛り土で築く。周濠は、底面に幾分起伏があるが、基本的には逆台形状の断面形を呈しており、1段目墳丘の基底ラインを明示している。上縁幅は現状では約5.0~7.0mを測るが、墳丘内に保存されてい



第114図 西山塚古墳・西山遺跡 調査区配置図



第115図 西山塚古墳平面図

る旧表土面の高さから推定すると、本来は幅7.5m・深さ1.5m前後の規模であったことが復原できる。

外部施設として、葺石(2段目墳丘斜面)と埴輪列(1段目墳丘テラス)を確認したが、残存状態は、墳丘面の流失などで良好とはいえず、その多くが周濠内に転落していた。総出土量から判断して、葺石は2段目墳丘斜面全面に、テラスの埴輪列については、比較的長い間隔(2.0m程度)で一重に樹立されていたものと考えられる。また、その出土位置などから、墳頂部に埴輪がめぐっていたことも想定できるが、現位置を保つものはなく、本来の墳頂面は削平されて失われているものとみられる。

(3) 墳頂部の埋葬施設(内部主体)

墳丘中央部(墳頂部は現状で直径約12.0mを測る)において、主軸を南北にとり、東西に並列する大小の埋葬施設を3基確認した。いずれも木棺直葬形式で、その位置は、平面的にみれば、中央棺を中心にして、その東西に一部墓壙を重複するように各1棺を配するが、西棺は、後述するように構築面が他とは異なり、より下位に位置する。

構築面の相違及び墓壙の重複関係より、西棺→中央棺→東棺の先後関係が確認できるが、3者の配置が墳頂部において均等に割り付けられていることからすると、当初から3棺並葬を意図していた可能性がある。

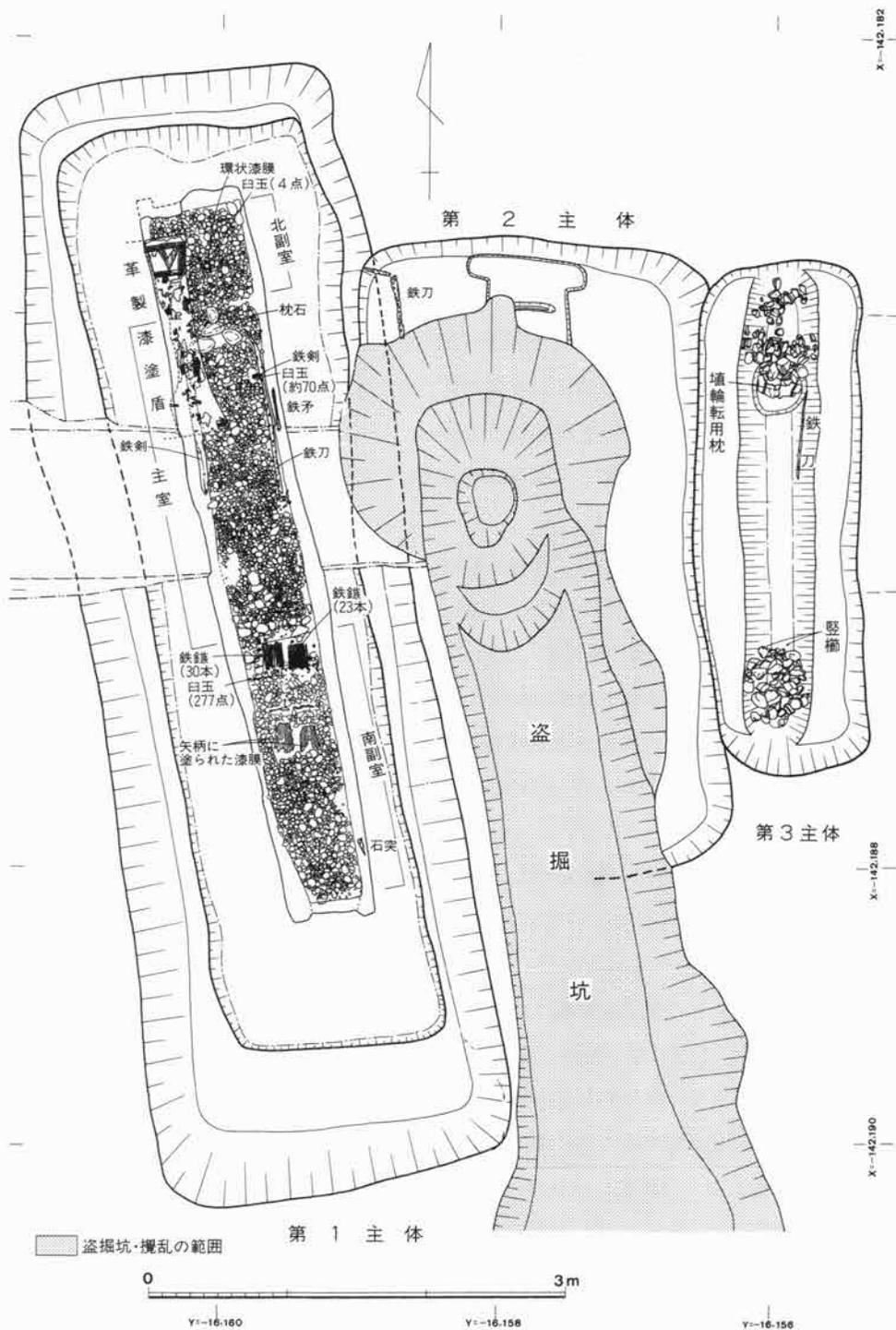
そこで、これらを構築順に第1～3主体と呼称することとする。以下、各主体部ごとにその概要を説明する。

a. 第1主体(西棺) 現存墳頂面を約0.6m掘り下げて初めて検出され、後述するように構築面が他の2主体とは異なってより下位にある。こうした事情に加え、古墳の中心よりやや西に偏って位置することから、盗掘や攪乱を受けていない。

墓壙は、横断面形が基本的には2段構造を呈する。上段墓壙は、土盛りして構築したものの(構築墓壙^(注6))で、棺の長辺側(東西側)にのみ土堤(土壘)状に存在する(土堤の南北長約8.5m・高さ0.6～0.8m・基底幅約2.0m、東西の土堤間の距離＝上段墓壙の上幅約2.5m)。

この土堤は、棺の短辺側には周り込まず、両小口は上段墓壙が存在せず側方に開放されていた可能性がある。下段墓壙は、上段墓壙底の縁辺にわずかに平坦面を残してその内方に長方形プランに掘り込まれる(長辺5.8m・幅約1.5m・深さ0.3～0.5m)。

木棺は、板材(厚さ0.05～0.09m)を組み合わせて箱形に構成したもので、内法長4.9m・同幅0.45～0.6m(北側ほど広い)を測る。両小口の棺材の組み合わせ方式は、長辺の側板が小口板を挟んで棺の主軸方向に突出するタイプ(A型)を採る。長側辺の側は、通例の組合式木棺と異なり、複数の板材(各辺宛2～3枚)を継ぎ足して構成しており、平面的にみると、各材の接合部を境に側のラインが屈折している。棺底は小礫敷きで、底板は痕跡すらなく当初から設けていなかったものと考えられる。棺内は、2枚の仕切り板で3空間に分割し(内法長は北から0.6m・2.5m・1.8m)、中央の空間に1体の遺骸が頭位を北にして埋葬されていた(枕石と頭骨の遺存による)。棺の設置は、下段墓壙底に直接長側板と小口板・北仕切り板を据え置き、周囲に土を裏込めするように充填して棺材を固定する。ただし、墓壙の北端部は、棺の主軸に沿って1.0mの範囲が1段深く掘り込まれており(排水の機能をはたしたものかもしれない)、ここに砂質土を入れた上に棺材が置かれている。棺内(四辺の側板で箱形に組まれた内部)には粗砂混じりの土が0.10～0.15mの厚さで充填され、その上面に直径およそ1～5cm程度の円礫(チャートが主体)が上下方向に重層する



第116図 西山塚古墳 内部主体実測図副葬品配置図

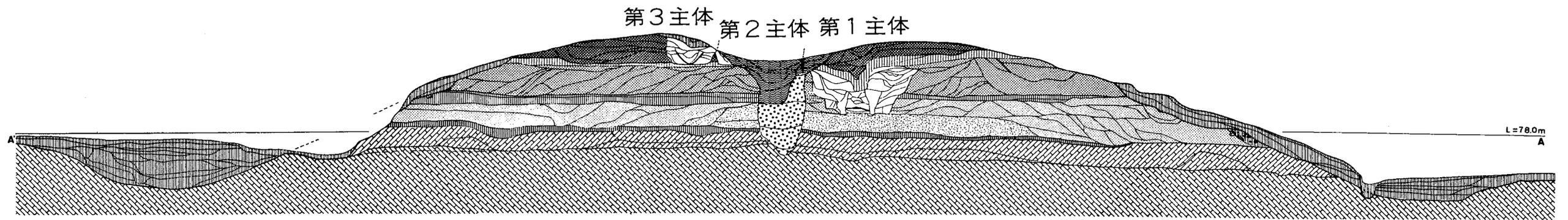
ことなく1重に敷設される。この棺底礫敷面は、中央の空間(主室)は長軸方向でほとんど高低差を示さないのに対し、南北の空間(副室)では、いずれも北側ほど高く傾斜させている(充填土の厚さで調整している)。仕切り板は、北側では側板と同一面に設置されるが、南仕切り板は、棺内にある程度充填土を入れた後、これを溝状に掘り込み、底に扁平な石を並べてこの上に設置する。棺底礫及び四辺の側板の内面・仕切り板の両面と底面に赤色顔料がみられるが、いずれも棺として構成する以前の段階で塗抹されていたものと考えられる。

副葬品は、棺内外から出土した。その配置を示すと、棺外では革製漆塗盾^(注8)1張(棺北端から主室の北半の棺蓋上)、鉄矛と石突が1対(棺外東側全長3.5m)が供献されていた。盾は、棺の西半に偏って頭部を南にして置かれていたが(全長=高さ約145cm)、棺材の腐朽による棺蓋の陥没に伴って、その東半部(向かって左半部)が棺内に落ち込み、図上復原の根拠は残していたものの、概して遺存状態は悪い(最大60cmの幅で残っていたが、棺西側の部分は消失していた)。

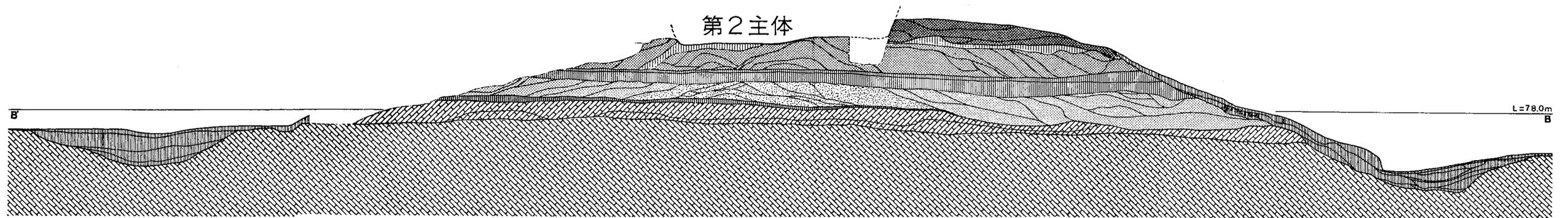
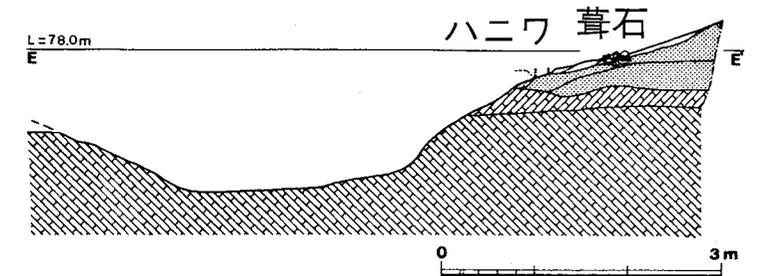
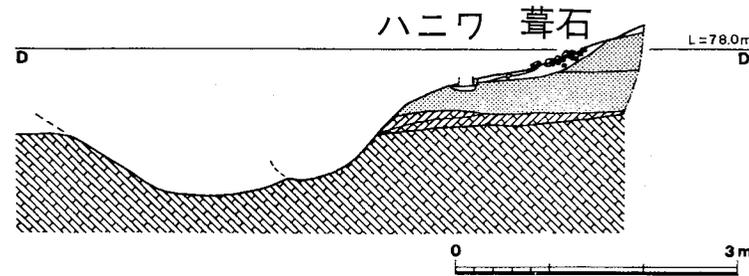
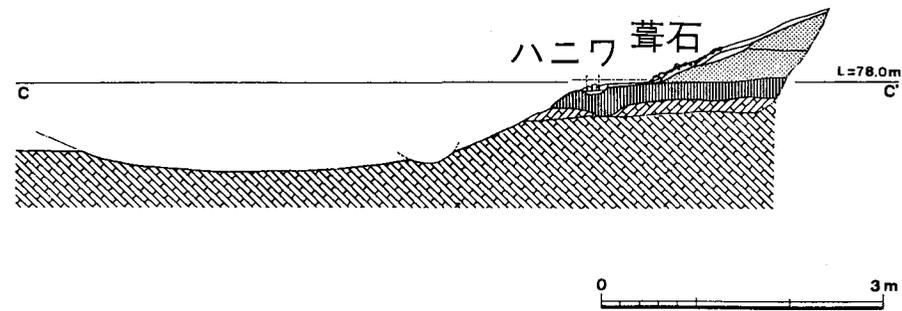
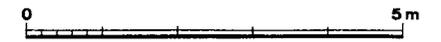
棺内遺物は、主室では、北枕で埋葬された1体の遺骸の上半身の両側に鉄製利器類(遺骸の左側に鉄剣・鉄刀各1口、右側に鉄剣1口)が鋒を南にして(刀は刃先を外側に向けて)置かれていた。枕石は、長径15~20cm大の自然石(円礫)を3個用いて山形プランに設置したもので、付近に頭骨や歯牙が散乱していた^(注9)。西側の剣と東側の刀には、把部分に漆膜の広がりが見られ、黒漆塗木製把装具の痕跡とみられる^(注10)(素地の木質は腐朽して残っていない)。さらに、東側の刀の把縁突起部の周辺には滑石製白玉が70点余り点在し、把部に付装されていたものかもしれない。

南副室には、北半部に矢鏃が集中して埋納されていた。このうち、仕切り板に接するように鋒を北に向けた鉄鏃は、いずれも全長約18cm前後を測る長頸鏃で、東西2群(東23本・西30本)に分割して束ねられていた^(注11)。矢柄は腐朽して残らないが、その下端の矢羽根の装着部に塗布された黒漆膜が長さ9.5cmにわたって良好に遺存しており(東群の漆膜は遺存状態が悪い)、その下端を矢頭とみた場合、矢の全長は約80cmに算定できる。また、矢筒(鞆か?)の存在をうかがわせる赤黒それぞれ3単位を縞状に交互に塗り分けた帯状漆膜(幅3cm)が、矢と直交する方向に間隔をおいて4条確認された。鉄鏃の周囲には堅櫛7点が鏃を取り巻くように散在し、東西の鉄鏃群の間隙には白玉が277点集中していた。これら矢鏃の南方には、なお1m余りの空間が残されるが、ここには実態を残す遺物は副葬されていなかった。

北副室内は、副葬遺物が乏しく、わずかに用途不明の環状漆膜(外径約8.0cm)と白玉4点が出土したにすぎない。



(東西断割断面)



(南北断割断面)



- | | | | |
|---------------------|----------------|----------------|------------------------|
| ■ 表層と炭化物を含む灰色土(旧表土) | ■ 第1次整地土(赤色土) | ■ 第3次盛り土(黄色系土) | ■ 土坑(中世?)内埋土(礫を多く混入する) |
| ■ 灰色系粘質土(土壇) | ■ 第2次盛り土(黄色系土) | ■ 流土・2次堆積土 | ■ 風化の進行した地山層(灰色系粘質土) |
| ■ 第1次盛り土(灰色系土) | ■ 第2次整地土(灰色土) | ■ 盗掘坑内埋土 | ■ 堅固な地山層(黄色~淡灰白色砂質粘土) |

南北断割断面図は異なったラインの断面図を合成したものである

b. 第2主体(中央棺) 墳丘のほぼ中央に位置するため、棺の長軸方向にそった溝状の盗掘を受け、大半が破壊されて残らない。

墓壙は、やや幅広の長方形プラン(長軸約4.8m・幅約2.7m)を呈し、その中央に組合式木棺(外寸幅0.6m)を直葬するが、大半が失われている。わずかに残った北小口の状況から、小口板が長側板を挟んで棺に直交する方向に突出する組合方式(B型)^(注13)を採ることがわかる。

伴出遺物は、墓壙北東部で折損して鋒部を失う鉄刀1口が残されていたにすぎないが、ほかに盗掘坑埋土中や、墳丘2次堆積土(流土)中から出土した長頸鎌や須恵器の小片(TK47型式前後の杯・器台・壺・甕)がこの埋葬施設からの出土品であった可能性がある。

c. 第3主体(東棺) 第2主体と同一面(=墳頂面)から掘り込まれ(掘込墓壙a類)、隣接する西側が重複してより新しい。盗掘は受けていない。

隅丸長方形プラン(長軸3.7m・幅1.2m)を呈する1段墓壙(現状での深さ0.65m)底に、割竹形木棺(身の長さ3.4m・同幅0.6m・同高さ0.25m)を直葬したものである。棺は、平坦な墓壙底に直接埋置させ、身の高さまでその周囲を裏込め状に埋め戻して棺を固定する。両小口は、拳大の礫塊(自然石を使用)で閉塞する(両小口の礫塊に挟まれた空間の内法長約2.0m)。木棺内面及び棺内に面する側の閉塞石に赤色顔料が塗布されている。棺内の北側閉塞石に接して普通円筒埴輪を縦に半截したものを棺の主軸に直交させて設置しているが、これは枕の機能を果たしていたものと考えられる(埴輪転用枕)^(注15)。

副葬遺物は、棺内に限られ、遺骸の上半身左側(東側)に鋒を南に向けた鉄刀1口が、また南側の閉塞石に接する位置で竪櫛数点が出土した。

(4)古墳の構築方法(墳丘築成と内部主体の構築との関係)

この古墳については、現状保存は困難と評価されたので、墳丘の構築方法を探る目的で、内部主体の主軸に合わせて墳丘を縦横に基盤層まで断ち割り、断面観察を行った。その結果、先に記した墳丘内の深層位に構築された第1主体を確認するとともに、古墳の構築方法の概要を知ることができた。以下、これらの観察記録にもとづいて復原される古墳の構築過程を順を追って説明する(第117図参照)。

①まず、古墳築造予定地の中央部西寄りに、東西の基底幅7.7m(おそらく短径)・高さ約0.5mの低平な土壇を築く。この土壇は、隣接する北西側の旧表土層あるいは地山の表層部(風化が進行して灰色を帯びた粘質土)を若干掘り下げてその排土をかき寄せるように形成したものである。

②次に、この土壇を基礎に、その斜面に寄りかけるように小単位の土を連続的に土盛りして(厚さ約0.5m)、一定の高さを保つように周囲に拡幅していく[第1次盛り土]。この

土盛りに用いられた土は、周濠掘開の排土が利用されたと推測され、掘り込まれた土が比較的表層に近い土のため、風化を受けた灰色系の土が主体を占める。1段目の墳丘は、周濠掘開で内方に掘り残された基台をそのまま利用するため、基本的にはその上面は旧表土面と一致する。ただ、西～北側は、旧表面がすでに掘り込まれているため、第1次盛り土以前に盛り土(最大厚0.5m)で同一レベルになるように調整している。

③第1次盛り土の上面を水平にならし、赤色系土を薄く敷いて(厚さ0.05～0.25m)、圧を加えて整地する〔第1次整地土〕。

④第1次整地土を基礎にして、第1主体を構築する。つまり、この整地土を掘り込んで下段墓壇とし、その内部に棺を造り付ける。そして、その長側辺側に土堤状の高まりを築いて、基本的にはその内傾斜面を上段墓壇壁とする(既述)。さらにこの土堤を核にして第1次盛り土と同じ手順で周囲に土盛り作業を行う(厚さは土堤の高さと一致し0.6～0.8mを測る)〔第2次盛り土〕。この土盛りに用いた土も周濠の排土であるが、この段階では周濠掘削がより深く進行して堅固な地山層に達していたため、黄灰色系の土が主に使用されている。

⑤第1主体の埋葬行為終了後、墓壇内を埋め、さらに第2次盛り土の上面をならして、精選された灰色土を薄く敷き詰め(厚さ0.05～0.2m)整地する〔第2次整地土〕。この整地層は、調査時点では棺の腐朽に伴う陥没で棺上部分が「U」字形に大きく乱れていた。

⑥第2次整地土の上に再び黄色系の周濠掘削排土を用いて土盛りし、一旦墳丘を完成させる(現状での最大厚さ0.65m)〔第3次盛り土〕。この盛り土作業は、比較的水平基調に行われ、そこに土壇や堤状の高まりは認められない。墳頂における整地層も想定されるが、削平されて残存しない。第2・3主体は、すでに述べたとおり、この墳頂部を掘り込んで営まれる。

このようにして完成した墳丘は、基本的には1段目墳丘は、周濠掘削で内方に掘り残された円形基台を特に整形することなくそのまま利用し(高さ1.5m)、2段目墳丘はすべて盛り土で築成され(現存高さ2.0m)、墳丘の総高は周濠底から現存3.5mを測ることとなる。

3. 出土遺物

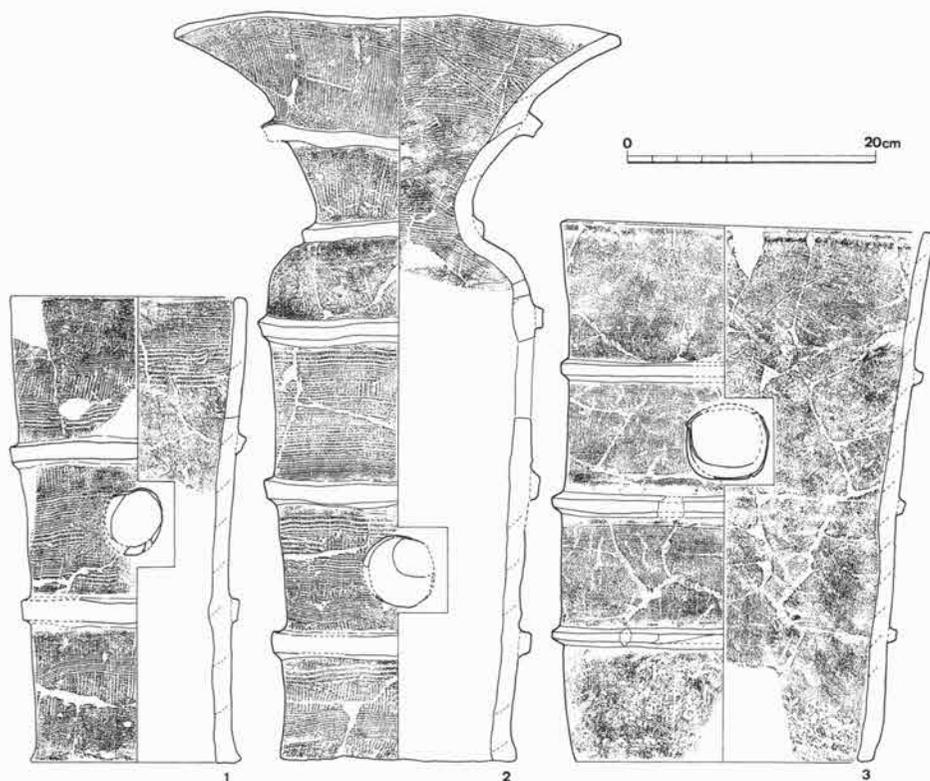
今回の調査によって出土した遺物は、その種類や素材の点多種多様にわたる。これらは主として墳丘の外部施設として用いられた埴輪類、あるいは墓前祭祀に用いられたかともみられる若干の土器類(土師器直口壺)、及び墳頂部の埋葬施設(内部主体)の副葬品に大別できる。これらの遺物は、現在、理化学的な処理も含めた整理の段階にあるため、その詳細については正報告に譲るとして、ここではその概要を紹介するにとどめる。

(1) 埴輪類

円筒埴輪が出土量の大半を占めるが、家・鶏・馬形などの形象埴輪も少量ながら存在する。ここでは、整理が進んでいる円筒埴輪についてその様相を概観する。

これらは大きく普通円筒と朝顔形円筒に分類でき、前者が圧倒的に多い。両者の樹立位置関係については、1段目墳丘テラス面に残された埴輪の基底部と、周濠内出土資料との対応関係が明確でなく、その詳細を知ることは困難であるが、普通円筒埴輪数本おきに朝顔形円筒埴輪が立てられていたことが、出土位置からおおよそ想定できる。

普通円筒埴輪(第118図-1・3) 形態及び規模の点で大きく二類に分類できる。一つは、器高37.0cm前後で2条のタガ状突帯(以下「タガ」と記す)をめぐらせたもの(A類、第118図-1)。他の一つは、規模が一回り大きく(器高約44.0cm)、3条タガによって外面を4段構成にしたものである(B類、第118図-3)。出土量からみればA類がB類を圧倒し(後者は図示した個体1点のみ)、A類がこの古墳の一般的な埴輪相を示すものとみられ



第118図 西山塚古墳 出土遺物実測図(1) 埴輪類

る。形態的な特徴は、A・B類ともに、底径に対し口径がやや大きく、底部から口縁にかけて直線的に開くものが多い。口縁端部は、外反するものはなく、すべて直口口縁である。タガで画された各段の幅は、最上段を一般段よりやや広くとるものが多い。これに対して、最下段は、一般段と同じ、あるいはやや広くとるもの、逆に狭くつくるものなどがあって一定しない。タガは、各面があまりくぼまない台形断面を基本とし、側面が外下方に傾くものが多い。透孔は、すべて円形で、A類の場合2段目に、B類では3段目に、対向するように2孔穿孔する。段間の穿孔位置は、段の中央または上段タガに偏するものが多い。A類では、こうした通常の透孔以外に、最上段の下位に径2.0cm内外の棒状工具の刺突による小円孔(いわゆる「副次的穿孔」)を1か所、下段の透孔の対向軸線に対して直角あるいは45°振れた位置に穿つものが多い(観察対象8個体のうち5例に認められる)。

埴輪の製作技法については、さまざまな手順を組み合わせたいくつかの手法をみいだすことができる。A類の場合、底径が15cm前後と小規模なため、最下部の粘土帯は「一帯造り」で製作する。各粘土紐(帯)の接合を目的とした成形には例外なく縦方向のナデを用いる(内面のみ観察可能)。調整技法は、外面では、タテハケ(1次)→B種ヨコハケ(2次)を基本とするが、1次のタテハケ調整のみで完結するものも少量存在する。通常の調整手法を用いる場合、図示した個体のように最下段の2次調整を完全に省略するものと、全面に2次調整を加えるものがある。後者の場合、最下段のヨコハケは、段幅に満たない工具原体による1周限りの施行で未調整部分を残すものが大半である。これに対して、2段目以上の2次調整は、段間をくまなく調整するものが多い。その方法として、段間を上下2段にわたってヨコハケ調整を加えるものが多い。ただ、それを詳細にみた場合、別個のヨコハケを上下2段に重ねたものと、下段と上段のヨコハケを連続的に繋げ、いわばヨコハケを「螺旋状」に施したもの(下段のヨコハケの末端をナナメ上方に上げ、以降ハケの施行方向に向かってナナメハケを連続的に充填する)がある。後者の技法は、観察対象の8割弱を占め、本資料群の定型化した手法の一つと捉え得る(「螺旋状」B種ヨコハケ)。

内面調整は、器体上半にハケ目を多用するが、それを全く省略するものもある。ハケ目を加える場合、大半が最上段を中心にヨコまたはナナメ方向に施すが、なかには、1段目タガ位付近から口縁端にかけて左上がりヨコハケを用いるものや、最上段に条痕をとどめないヨコ方向の板ナデを加えるものが散見される。なお、A類の外面2次調整省略の資料のうちの1点は、内面調整も全く省略しており、タガも断面が丸みを帯びた長三角形を呈する。この個体に限り外面の2段目に1か所、3段目に4か所絵画風の線刻がみられる。

B類は、底径が約24.0cmと大きく、ために底部輪台は「二帯造り」となる。器面の調整は、外面は、タテハケ(1次)→B種ヨコハケ(2次)で、最下段の2次調整は省略する。1

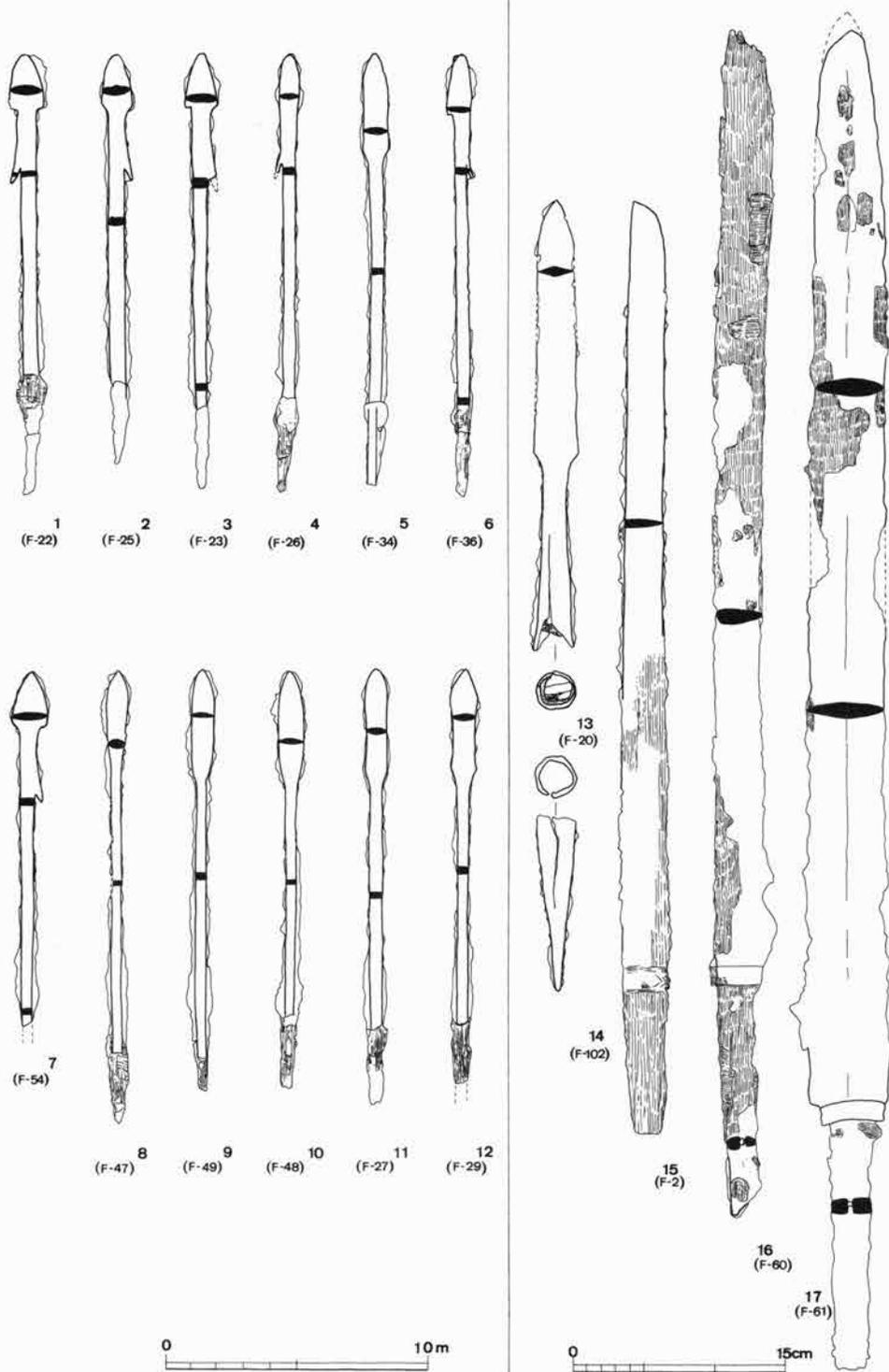
次調整のタテハケは、底部から口縁にかけて、上下3段に分けて円弧を描くように施行しており、小工程(乾燥工程)を反映するものとみられる。2次のB種ヨコハケは、段幅に近い工具を用いて、各段あて1周の施行で段間をくまなく調整する。内面調整は、下端から透孔の位置付近までやや右傾するタテハケを施した後、全面にわたって左傾するナナメハケ(上位ほど傾度を強め、口縁段ではヨコハケに移行する)を加える。これらは、タガ貼り付けの際の内面ユビナデによって消されているので、1次調整である。

朝顔形円筒埴輪は、完形の2個体を観察対象にした(第118図-2)。いずれもA類の円筒部に朝顔形の肩・口縁部を付加したものである。口縁部は、口縁部中位突帯を境に小工程に分割され(口縁部分割成形)、1次口縁上端内面を基礎に2次口縁を付加して製作する。両者の接合部外面は、擬口縁とならず平滑で、中位突帯はすべて粘土帯の貼り付けにより作る。円筒部の成形・調整手法は、A類の典型例(特に外面2次調整に「螺旋状」B種ヨコハケを用いる)と変わるところはないが、内面は、成形段階のタテナデのみでハケなどの調整は加えられていない。肩部の外面には、ていねいな指頭によるヨコナデが施され、先行するタテハケ(あるいはナナメハケ)を消している。口縁部の調整は、各小工程(1次・2次口縁の境)間で別個に行われ、1次口縁外面はタテハケ(上からみて正放射状)、同内面は横方向の静止痕をとどめる継続的なヨコハケ(他の1個体はさらに上半に断続的なナナメハケを加える)を施す。2次口縁外面は、左傾するタテハケ(上からみて斜放射状)の後、上半をヨコハケ、同じく内面は1次口縁との接合部付近を指頭ヨコナデした後、静止痕をとどめる継続的なヨコハケと断続的なヨコハケを上下に重ねて調整する。口縁端部(口唇部)の成形は指頭ヨコナデによるが、このナデは内面側にはほとんど及ばない。朝顔形円筒埴輪の透孔の形態は円形で、その穿孔方式は、2段目と3段目に、段を違えて交互になるように、段あて対向する位置に2孔ずつ配する。また、図示した個体には肩部に「副次的穿孔」が1孔、2段目タガと同じ立面位置に刺突されている。

これら円筒埴輪の焼成は、いわゆる須恵質で、朝顔形円筒も含めてA類は、淡茶褐色～暗灰色を呈するのに対して、B類は、やや軟質で淡黄灰色に発色している。いずれも黒斑はなく、また、高温による焼き歪みで変形した個体もみられない。

(2) 第1主体部出土の副葬品

鉄鏃(第119図-1~12) 棺内南副室に埋納されていた矢鏃の鏃部分の一部を図示した。上段(1~6)が矢鏃西群、下段(7~12)が東群である。いずれも尖根系の典型的な長頸鏃で、収束された鏃群の中には平根系鏃を全く混じえない組成を示す。これらの長頸鏃は、茎尻を折損するものもあるが、およそ全長17.0~19.0cmに統一されている。これらは、その形態から鏃身部の直下の頸部片側に逆刺をつくるもの(「有片逆刺式」)と、頸部片逆刺



第119図 西山塚古墳 出土遺物実測図(2) 鉄器類

をもたず鍔身部を柳葉形につくるもの(「柳葉式」)^(I16)に大別できる。

長頸有片逆刺式は、鍔身部が長三角形を呈し、鍔身関部が比較的明瞭で両角関あるいは斜め関を呈するもので、鍔身長が概して短く(約2.2~2.5cm)、その分、頸部長が大きい(約12.0cm)。ただ、4は、鍔身幅が狭く、鍔身関部も不明瞭で、頸部にゆるやかに移行する特異な形態を示す。片逆刺は、すべて鍔身部とは分離して独立している。

後者の長頸柳葉式は、鍔身長が有片逆刺式に比して長く(4.0~5.0cm)、逆に頸部長を相対的に縮小(10.0cm前後)して、全長としては有片逆刺式とほぼ同じ長さにそろえている。これらは、鍔身部の形態からさらに二類に分離できる。一つは、刃部先端から「ふくら」を有して、鍔身関部に至るラインが内湾し、「ふくら」幅とほぼ同じ規模の「山形関」を経て頸部に至る線も内湾するもの(5・11・12)で、典型的な柳葉形を示すもの。他の一つは、鍔身部側線がくびれず、鍔身関部を設けることなく鍔身から頸部へゆるやかに移行する、いわゆる「椿葉形」に近い形状を示すもの(8~10)である。

いずれも、錆や矢柄の根太巻に覆われ断面形状を正確に観察し得ないが、鍔身は鑄をもたない両丸造り、頸部は長方形、茎部は円形に近い方形断面を呈するようである。

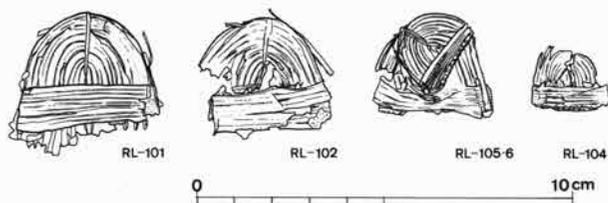
なお、本資料群には「長頸片刃箭式」^(I17)が1点も含まれない。

鉄銚・石突(第119図-13・14) 棺外の東長側板に近接するように鉄銚先と鉄石突が対をなして副葬されていたもので、木柄部は腐朽して失われていたが、両者が元位置を動いていないものと仮定すれば、全長約3.5mを測る長柄の銚となる。

銚先(13)は、白杵氏分類の「山形抉円筒袋有関広鋒鑄造り」に該当する。^(I18)袋部長(13.2cm)に対して身部長(18.9cm)が1:1.4の割合で長く、銚身の造りも断面が鑄の不明瞭な両丸造りに近い菱形断面を呈し、身厚も薄い点は古色を示す要素である。

石突(14)は、鉄製で、板状部材を折り曲げて先端の尖った細長い円錐形につくったものである。ほぼ完存しており、全長12.5cmを測り、基部(木柄装着部)は断面が正円形(直径2.8cm)で袋部の左右はよく密着している。

鉄刀(第119図-16) 棺内遺骸の左腕側部に鉄剣(図示していない)とともに置かれていたものである。鞘装具と把間の木質が良好に遺存しているため、鉄刀本体の形状は詳らかでないが、片関の平造り鉄刀とみられる。茎の形態は、胴部が茎尻にかけてやや幅を狭め、刃側の一端を弧状に抉り落した茎尻を呈する(白杵氏分類の「隅抉中細茎」)^(I19)。刃長66.5cm・茎長17.9cmを測る。なお、実測図には図示していないが、把縁の腹側に柱状に延びる黒漆膜があり、周囲に滑石製白玉73点が連珠状に連なった状態で出土している。これは、把頭部に黒漆を塗った、置田氏分類の木製把装具B類^(I20)に白玉による玉纏が付装されていたものであろうか。



第120図 西山塚古墳 出土遺物実測図(3) 豎櫛

鉄剣(第119図-17) 右腕側部に鋒を南にして埋納されていたもので、刃部長76.0cm・茎長18.9cm(ただし、これに連続する位置に同じ幅をもつ茎状鉄製品があり、図示していないが、これも含め

ると茎長は31.9cmとなる)・身幅6.0cmの長大な規模を測る(全長107.9cm)。剣身の断面は、両丸に近い菱形で、わずかに鎬の痕跡を残す。茎は、関からはほぼ直角に切れ込んで(直角関)、茎元から茎尻にかけて一定の幅を保つ。茎尻は直線状に切れ込む(一文字尻)^(注21)。なお、関部に鉄製の鍔が元位置をとどめていた。また、把縁・鞘口・把頭の各部分に黒漆の被膜が面的に広く残され、土圧で変形して旧状を知ることは困難であるが、漆塗りの木製装具が付装されていたものと考えられる。

豎櫛(第120図) 棺内南副室の鉄鏃の周辺で、櫛歯の方向を特にそろえずに、ばらまかれた状態で出土したものである。総数7点を数えるが、いずれも歯の部分に、薄く漆が塗ってあったものの、極めて脆弱であるため、ムネ部しか取り上げることができなかった。これらは、ムネ部の規模から、大(幅3.5cm・高さ3.0cm)、中(幅3.2cm・高さ2.5cm前後)、小(幅2.1cm前後・高さ1.7cm前後)の三者に分類できる。規模の大小を問わず、いずれも同工であるようで、幅1.5mm前後の竹ヒゴ(大で10本前後)を幅のある縦糸で緊縛し逆「U」字形に折り曲げてムネの下部を巻き縛る。ムネの巻き縛りには、非常に細かい横方向の条痕が観察できるが、その素材が糸であるのか樹皮状のものであるのかは肉眼では判断できない。巻き縛りの下縁に沿って横棒がわたされ、細目の糸で歯をかがっている。^(注22)

4. 小 結

今回の調査成果及び若干の問題点を列挙すると、以下の諸点に要約できる。

- (1)古墳は、丘陵尾根上に立地するが、その環境が平坦地形のため、平地部の古墳と同じ原理で築造される。すなわち、完周する周濠を有し、基底径26mを測る墳丘(円墳)は2段築成で、多く(墳丘総高の約2/3)が周濠掘削の際の排土を利用した盛り土で構築される。
- (2)外部施設として1段目墳丘テラスに1重の埴輪列、2段目墳丘斜面上に葺石が施されるが、墳丘面の流出によりその遺存状態はよくない。
- (3)墳頂部(墳丘中央部)に主軸を南北にそろえた埋葬施設が面的にみると、東西に3基並列する。いずれも木棺直葬形式の竪穴系埋葬施設で、西棺→中央棺→東棺の先後関係が判

明した。

(4)墳丘の断面観察によると、土塁や土壇を核としてそれに寄りかけるように小単位の土を重ね置きして順次周辺域に拡幅し、一定量に達するとその上面を水平にならすことで完結する工程(作業単位)が認められる。そして、この手順を上方に3回繰り返すことで墳丘(2段目墳丘)が構築されていることがわかった。また、内部主体は、異なった高さに重層的に設けられ、その構築面は、上記の墳丘土盛り工程面に対応することが判明した。すなわち、第1主体と第2・3主体の構築面には約1mの高低差があり、前者が第1次盛り土工程面を基礎に構築された後(構築墓壇)、上位に2単位相当の土盛り工程が付加され、完成した墳丘頂部に後二者が掘り込まれる(掘込墓壇a類)という関係が明らかとなった。

(5)埋葬施設の構造やその付属施設(枕状施設の使用)に非畿内の要素が散見される。具体的には、第1・3主体の棺の構造と枕状施設に認められる。すなわち、前者(第1主体)の場合、棺が底板の省略や長側の複数板の使用に示されるように、外部で組み上げることが不可能な構造を採り、かつ自然石による枕石を使用している点に顕著に認められる。また、第3主体では、棺の両小口を磔塊で閉塞し、円筒埴輪を枕に転用している点が畿内中枢部においては稀有な構造と捉えることができる。とりわけ、第1主体の木棺は、容器として機能する「棺」というよりは、むしろ遺骸を取り囲んで保護し、副葬品などを収容する空間を確保する「囲い」というべきもので、あえて構造的な類例を求めると、板状石材を用いて箱(室)状に組み付ける「箱式石棺」に近似する。ところで、古墳時代における箱式石棺の分布域の一つとして、山陰地方東部が挙げられる。この地においては、こうした石棺に他ではみられない枕状施設(自然石や土師器を転用したもの)^(E23)を敷設する例が多く、両者が密接不可分に結び付いた葬制における一つの文化圏を形成している。さらにこの地域の東部に位置する兵庫県豊岡市を中心とした地域では、箱式石棺の系譜をひく木棺がみられる。このような「箱式木棺」とでも呼ぶべき埋葬施設は、棺材の変化に呼応するように、小口側に副室を敷設するかたちで長大化^(E24)する。こうした形態の木棺の分布はまた、隣接する丹後・丹波地域に散在的に拡大するが、結果として、より広範な地域にまでは波及しないようである。このような中で、西山塚古墳の場合、畿内中枢部にあっては異質ともいべきこうした山陰東部系の埋葬施設構造の影響を多分に受けている。一般に棺の構造がヤマト王権の葬制規制の対象外であり、かつ出自集団の伝統的葬法を反映しているとするなら、あるいは、西山塚古墳の被葬者の出自が彼地に求められるのかもしれない。

(6)古墳の築造時期に関しては、各埋葬施設の時期差も考慮しなければならないが、副葬品の内容やその組成、豊富な埴輪資料などから、総じて5世紀の後半代に納まるものと考えられる。

(伊賀高弘)

(2) 西山遺跡

1. 調査の経過

西山遺跡は、平城山丘陵の北側で、木津川の形成した沖積低地を馬蹄形に取り囲む丘陵の縁辺に位置する。

この地は、古代における官道(北陸・東山・東海各道)に近く、遺跡から西側を見下ろすと平城宮に向かう道(コナベ越え)が、東に転じると平城京外京に通ずる道(奈良坂越え)が丘陵裾を通過しており、この両道は、現在では遺跡地のすぐ北側で合流してさらに北上している。このような交通の要衝にあつて、付近には古い神社や古墳などが多く知られ、これまでに上人ヶ平遺跡や瓦谷古墳などの発掘によって注目される成果が得られている。

このような環境にある西山遺跡については、『京都府遺跡地図』には散布地として登録され、土師器・須恵器・サヌカイト剥片が採取されたとある。この遺跡の発掘調査は、関西文化学術研究都市の開発に伴い、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、昭和62年度から継続的に実施しており、今回で3度を数えるにいたる。

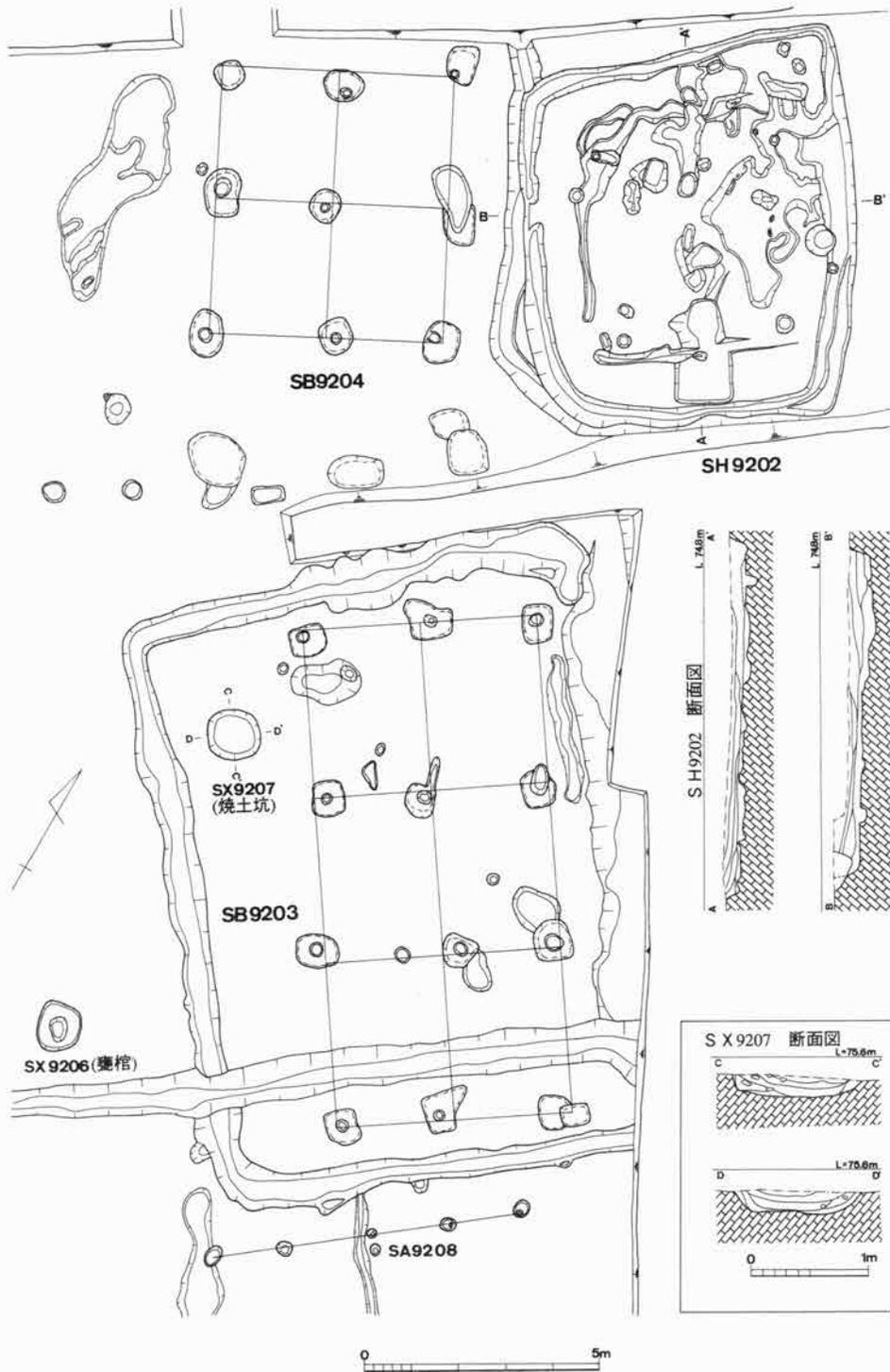
過去の調査を簡単に振り返ると、昭和62年度は、遺跡の範囲確認に主眼を置いて試掘トレンチを各所に配した。その結果、遺跡の範囲を概ねおさえる成果が得られたほか、ほぼ完存する古墳時代終末期の甕棺墓(S X 6801)を1基検出した(1次調査)。つづく2次調査は、平成3年度に実施し、先の調査で甕棺が検出された遺跡の北寄りに面的な調査区を設けて調査にあつた。その結果、方墳2基と奈良時代の掘立柱建物跡1棟を検出した。このうち、北端で検出された古墳(S X 02)は、東辺の周溝内に陸橋状の張り出しを有し、これに接して玉類などが出土する祭祀遺構が付随していた。

こうした成果を受けて、今回は遺跡の南半部分に広範なトレンチを設定して発掘調査にあつた。

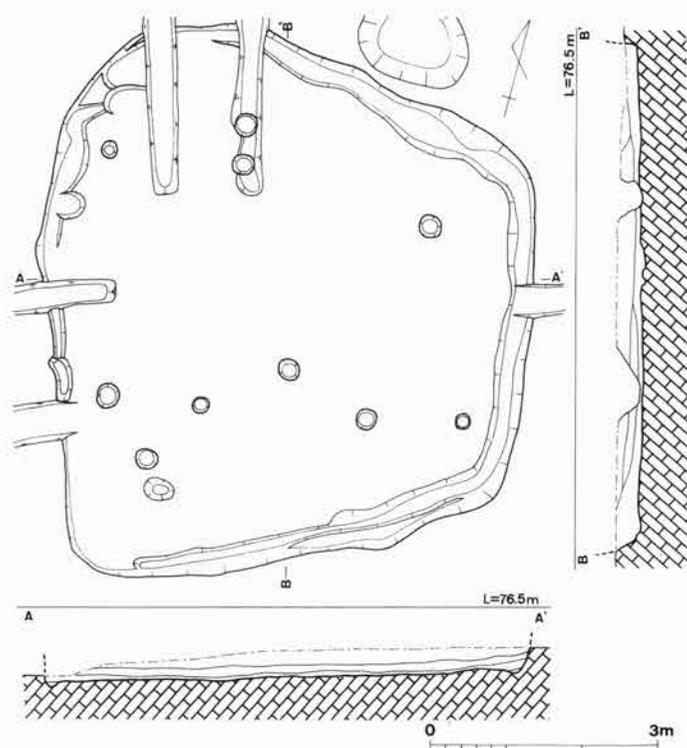
2. 検出遺構

調査によって検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居跡2基、7世紀代の甕棺墓1基、奈良時代と推定される掘立柱建物跡2棟で、すべて調査区の北半部にある。南半部では、不定形土坑・溝などが検出されたが、これらは地境溝など近世以降に下るものと考えられる。

S H 9201 中央西寄りで検出した竪穴式住居跡で、平面プランは不定形な隅丸台形を



第121図 西山遺跡 遺構実測図(調査区北半)



第122図 西山遺跡 SH9201実測図

呈する。周壁溝は東半部を「コ」字形にめぐるが、西半(西辺部)は断続的で四周をめぐらない。床面は硬く締まり、炉の痕跡を示すものはない。小規模(径20~30cm)なピットを床面で複数検出したが、いずれも浅く支柱穴の区別は容易でない。床面直上で甕2個体が出土した。なお、埋土は多量に炭を含んだ黒色土で、この住居が焼失したことを示すものかもしれない。

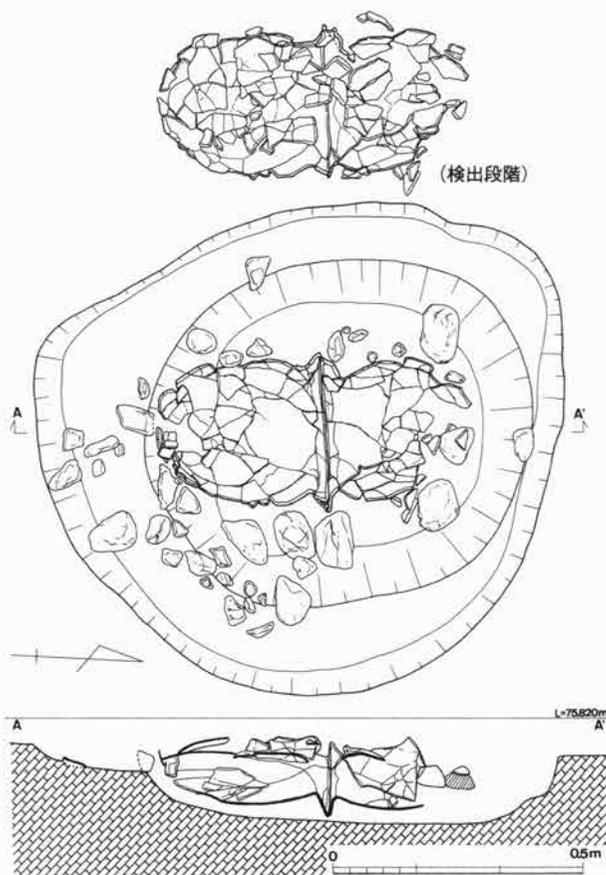
SH9202 SH9201と約30mの間隔において北北東に位置する正方形プラン(一辺8.0m前後)の竪穴式住居跡である。周壁溝が二重にめぐり(内側の周壁溝で囲まれた範囲は一辺約5.5m)、拡張を伴う建て替えが行われたものと考えられる。床面は、大小のピットや不整形土坑で乱れるが、地山の礫層面を床面として利用している。深く掘り込まれたピットから、4支柱構造に復元でき、建て替えの前後を問わず南壁中央に方形土坑を敷設する。この浅い皿状の土坑から完形に近い甕形土器(第124図-6)が据えられた状態で出土しており、この住居跡の機能時期を示す資料になり得る。

SX9206 両住居跡のほぼ中間に位置する土器(甕)を転用した埋葬施設である。ほぼ同形同大の土師器長胴甕形土器を合わせ口にして、横位に据え付けて棺本体としたものである。棺内外ともに副葬品はない。その構造や規模は、北西に約110mの地点で検出された甕棺墓(1次調査のSX6801)と同類で、ともに7世紀代に営まれたものと考えられる。

SB9204 SH9202に西接する3間(7.8m)×2間(4.8m)の南北棟の総柱建物跡である。柱痕跡(径20~30cm)を残すものは少ないが、柱間寸法は、桁行中間10尺・同端間8尺等間(造営尺0.297m=天平大尺)に復元できる。掘形は、一辺0.6~1.2mの方形を基本とするが、崩れて不整形のものも多い。全体に浅く、本来の造営面は削平が相当進行してい

るものと思われる。柱穴内に遺物はないが、隣接するSH9202上層埋土(造成土の可能性ある)中から須恵器長頸壺が出土したことから、奈良時代(8世紀代)とみてよい。

S B 9205 S B 9204の南に縦列する3間(10.7m)×2間(4.8m)の南北棟総柱建物跡である。柱間寸法は、桁行柱間12尺・梁間8尺(造営尺はS B 9204と同じ)を測る。掘形は一辺0.7~1.0mで、径25cm前後の柱痕跡をとどめるものもある。また、北方向への抜き取り痕を有する掘形もある。なお、この建物跡の周囲には、現状での上縁幅0.4~1.0m・深さ約0.3mの素掘り溝が建物跡の側筋に沿って



第123図 西山遺跡 S X 9206実測図

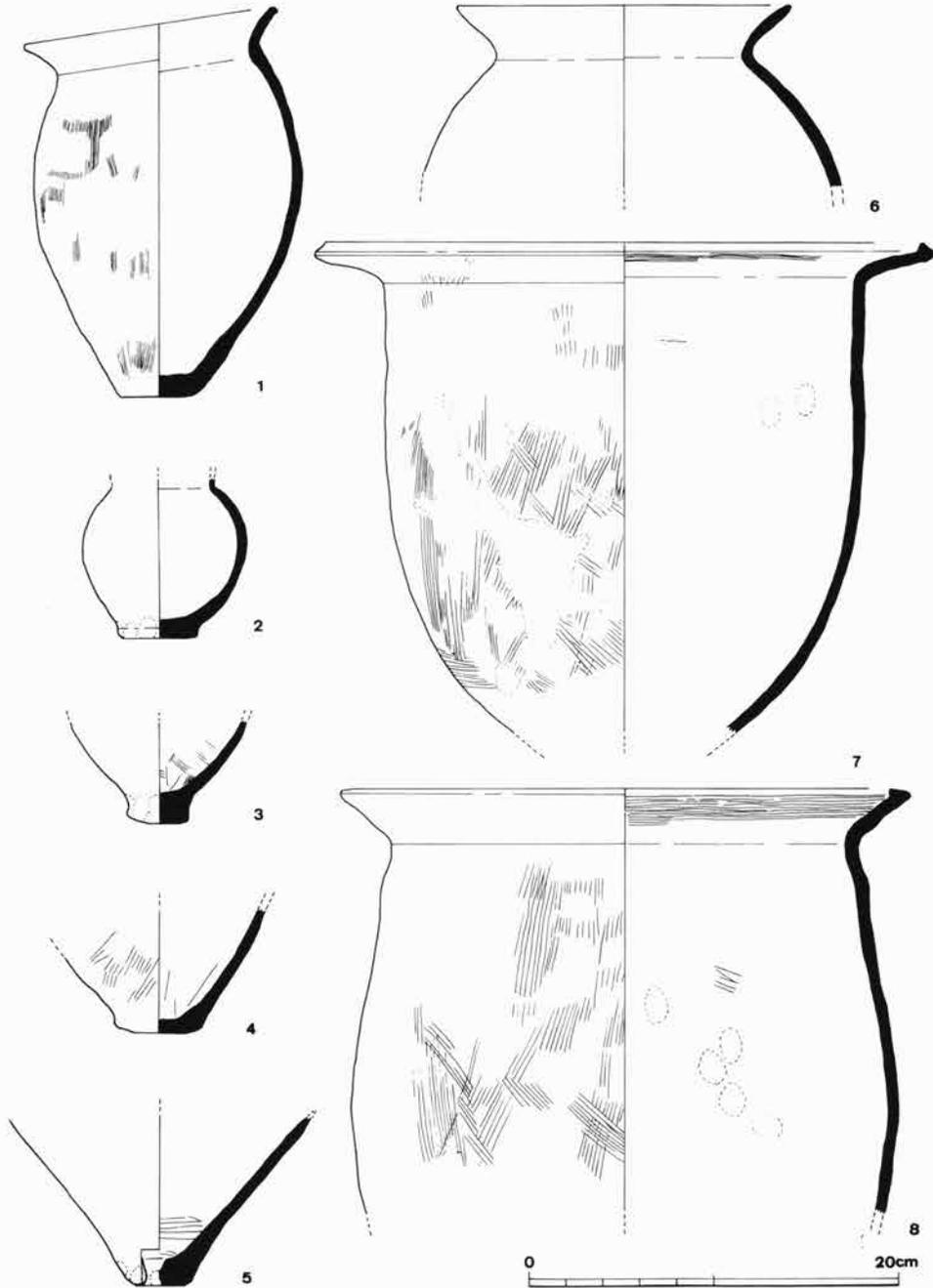
めぐっている(東側は調査区外のため四周をめぐっていたかどうかは不明)。建物入側柱列との間隔が3.0m近くあり、雨落ち溝とは考えられない。悪水処理あるいは倉戸令の規定にみえる防火用の施設であろうか。

この溝による方形区画内で建物跡の西に接して、径1.1mの円形プランを呈する焼土坑が1基検出された(S X 9207)。断面形は2段に掘り込まれ、垂直面をなす下段壁のみ熱を受けて硬く赤変している。埋土に多量の炭を含むが、出土遺物はなく、詳細は明らかでない。同種の遺構が周辺の遺跡(上人ヶ平遺跡など)で複数検出されている。

3. 出土遺物(第124図、図版第78)

出土遺物は、数量的には多くはないが、2棟の竪穴式住居跡からその帰属時期のわかる程度みられ、また、甕棺に転用された土器も底部を欠損するが、観察対象としては良好な資料である。1~5はSH9201、6はSH9202、7・8はSX9206からそれぞれ出土した。

1は、最大径が上半にあり、やや長胴ぎみの体部を有する「く」字状口縁の甕である。口縁はなだらかに外半し、その屈曲部は内外ともに明瞭な稜を残さない。口唇部は丸くまとめるが、部分的に外傾する端面をもつか所がある。底部は体部から突出しない平底で、



第124図 西山遺跡 出土遺物実測図

環状粘土を基礎に体部を巻き上げ成形した後に残された空隙を粘土で埋める成形法(充填法)を採る。体部の器面調整は、内外とも縦基調の布を介在させたユビナデで仕上げしており、先行する調整を完全に消す。胎土は、細かく精良で、暗灰色～茶褐色を呈する。

2は、口縁部を失うが、体部が球形に近い平底の小形壺である(最大腹径9.0cm・体部高8.0cm)。わずかに残る口縁の屈曲から小形長頸壺の可能性もある。底部は体部に比して大振りで(径4.0cm)、やや下方に突出する。いわゆるドーナツ底を呈し、「円盤すえおき法」で成形したものと考えられる。体部の調整は、内外ともにていねいなユビナデで最終調整するが、外面には先行するタテハケがわずかに残される。

3は、体部が内湾しながら立ち上がって半球状を呈する小形鉢である。底部は、体部から大きく突出する径の小さな(3.0～3.2cm)平底で、「円盤すえおき法」で成形する。器表磨耗のため調整は不詳ながら、体部内面(底部付近)に上からみて斜放射状のハケが観察できる。

5は、体部が直線的に外傾する有孔の小形鉢である。突出しない小さな平底底部には、中軸からややずれた位置に内側からの円棒状工具の刺突による穿孔(直径0.8～1.0cm)がある。体部の器表は、最終ユビナデで仕上げるが、外面ではナナメハケ、内面は底部付近にヨコハケが先行調整として残る。

6は、半球形の体部にわずかに外半する口縁を備えた「く」字状口縁の甕形土器である。口縁の接合部は、内外ともやや鋭く屈曲して明瞭な稜線をもつ。口唇部は、上方にやや外傾する端面を意図するが、全体としては丸味を帯びている。器面調整は、磨耗が著しく観察困難であるが、外面にわずかに横方向の粗い条痕(ハケ目あるいはタタキ)がみられ、内面は平滑でナデ仕上げとみられる。器厚は、体部中位で0.5～0.7cmと厚い。胎土に砂粒をやや多く含み、淡黄褐色を呈する。

7・8は、長胴球形の体部に大きく直線的に外半する口縁を備える。いずれも口径が体部最大径を凌駕している。体部は、4が最大径をその上端に位置させ砲弾形を呈するのに対し、8はやや下部(体部の中位付近)に最大腹径をもつ。口唇部は内側に肥厚し、その端面はやや外傾した面をなす。器面の調整に関しては、体部の場合、外面全面をくまなく縦基調のハケメ調整の後(このタテハケ調整は一部口縁部外面にも残される)、体部の下位2/3の範囲にナナメハケ・ヨコハケを加える。内面は、指頭によるオサエとナデを併用して平滑に仕上げるが、一部先行するハケが観察できる。口縁部は、内面に顕著なヨコハケを施し、外面は指頭による横位の粗いユビナデで成形する(8ではこのナデが体部上半にまで及ぶ)。器厚は、体部中位で0.4cmと薄く仕上げる。胎土は、精良で砂粒は含まず、器面は淡黄褐～淡黄灰色を呈する。

4. 小 結

はじめにも記したように、西山遺跡の所在する丘陵を東に降った谷筋には古代からの官道＝駅路であり、大和における上ツ道の北延長にあたる旧奈良街道(奈良坂道)が通じている。この街道筋に近年形成された村落を市坂村(一ノ坂とも記す)と言い、この遺跡地は現在この字「市坂」に含まれる。また、市坂区内の小字名として「幣羅坂(へらさか)」があり、そこに幣羅坂神社が鎮座している。当社は、『延喜式』にはみえず、明治期に天津少女命と大毘古命を祭神として奉祀するようになった。そのため、神社の裏山に当たる西山塚古墳が大毘古命の墓であるという伝承が生じた。それはともかく、当地が少なくとも記紀編纂時にさかのぼって「山背の幣羅坂(平坂)⁽¹³²⁷⁾」と呼ばれていた可能性は高い。このヘラサカの地は、記紀の編者によって、崇神記・紀にみえる山背の武植安彦の反乱伝承の舞台に比定されたことに示されるように、古来から軍事・交通上の要衝と認識されていたようで、地理的にみても奈良朝以前の王都の所在地である大和盆地の北の玄関口に相当する。

こうした人文的・地理的環境の「ヘラサカ」の地であって、官道を見下ろす小高い丘陵上に西山遺跡は立地する。これを発掘調査することによって、種々の遺構が検出されたことは重要であろう。以下、今回の調査で検出された各遺構について、若干の評価を加え、まとめとしたい。

まず、2基の竪穴式住居跡は、出土遺物から弥生時代後期後半(畿内第V様式)に営まれたものであるが、丘陵上の限られた空間に2基のみ散在的に分布し、またその立地環境は、生産基盤である沖積低地と隔絶した感がある。むしろ、そこには一般集落としての性格はよみとれず、有事の際の臨時の施設(いわゆる高地性集落)とみるのがふさわしい。南西約1.5kmに位置する上人ヶ平遺跡で、これとほぼ同時期の焼失家屋が1軒のみ検出されており、西山遺跡と互に見通せる位置関係にあることは、これを傍証するものである。

次に、甕棺墓については、今回の調査例に加え、かつて北西約110mの地点で同種の遺構(S X 6801)を検出しており、西山遺跡地内の同一尾根筋稜線上において長胴甕を合わせ口にして棺本体とした埋葬施設が2基存在することが明らかとなった。両者の存在形態は、尾根の先端に5世紀代の古墳(S X 02)が立地するが、位置的にはこれとは離れており、古墳に依存することなく単独で営まれた観が強い。時期的に見ても、棺本体に転用された甕形土器は7世紀代のもので、先の古墳とは直接つながらない。ところで、今回の検出例の甕形土器が有する属性のうち、長胴タイプのものとしては器高が低く砲弾形を呈する点や、口縁部整形の際その内面をハケ調整する技法上の特徴は、いわゆる山城地域でも木津川流域(南山城地域)の様相を色濃く示すものである。⁽¹³²⁹⁾山城と大和の国境を限る平城山丘陵上にあって、この地域が「山城型」甕形土器を普遍的に用いる地域の南限と理解することがで

きよう。

最後に、2棟の掘立柱建物跡に関しては、直接遺構に伴う遺物はみられなかったが、近在の土坑状遺構(竪穴式住居跡上層埋土)や、包含層中から少なからず奈良時代の遺物が出土しており、当該期(8世紀)に造営された可能性が高い。さらに、建物跡の掘形が比較的大規模であることや、造営尺に天平尺が用いられている点は、これを補強する要素となろう。これらの建物跡の性格については、ともに総柱構造を採ることから、床束をもつ高床式構造の建物であり、倉庫(「倉」)としての機能を有したと考えられる。また、当時の一般集落の「倉」に比して床面積(S B9204=約37.4㎡、S B9205=約51.4㎡)、及び柱規模・柱間寸法が相対的に大きく、特定の一般集落に帰属する「倉」とはみなしがたい。

平面形式が2間×2間・3間×2間を採り、2棟が棟方向に縦列に並んで小群を構成する点は、むしろ官衙の「正倉」の要素といえる。しかし、その具体的な内容については、これ以上の考察の余地がなく不明といわざるをえない。ただ、はじめにも記したように、その立地環境からして地方行政機構としての官衙(郡衙・郷家など)や寺院・荘園・居館付属の私倉とみるよりは、むしろ一過性の高い軍事的な施設(たとえば山城など)に付属する「倉」とみた方がふさわしいかもしれない。

(伊賀高弘)

(3) ^{KARABA DANI}瓦谷遺跡・瓦谷古墳群

1. 調査の経過(第125図)

瓦谷古墳を含めた周辺部(瓦谷遺跡)の調査は、昭和61年度から始まる。昭和61年度は、今回調査地の南側谷部の試掘調査を実施し、布留式土器とともに木棺の小口板が出土する旧流路を確認した。^(E30)平成2年度の発掘調査の結果、この流路は、2方向からきた流路が一本に合流する「Y」字形を呈し、流路?から多量の布留式土器のほか、埴輪片や奈良時代の土器も比較的まとまって出土した。また、この谷部の北側に広がる台地上でも試掘調査(20btトレンチ)を実施し、方墳(一辺6~7m)とその周辺から土器棺・埴輪棺を5基検出し、後述する瓦谷古墳との関連が指摘された。平成2年度には瓦谷古墳の墳丘及び埋葬施設の有無を確認するために、古墳の北半部の調査を実施した。その結果、瓦谷古墳は、直径約30mを測る円墳で、墳頂部には2基の埋葬施設(第1主体:粘土槨、第2主体:木棺直葬)があり、棺内及びその周辺から多量の副葬品が出土した。^(E31)

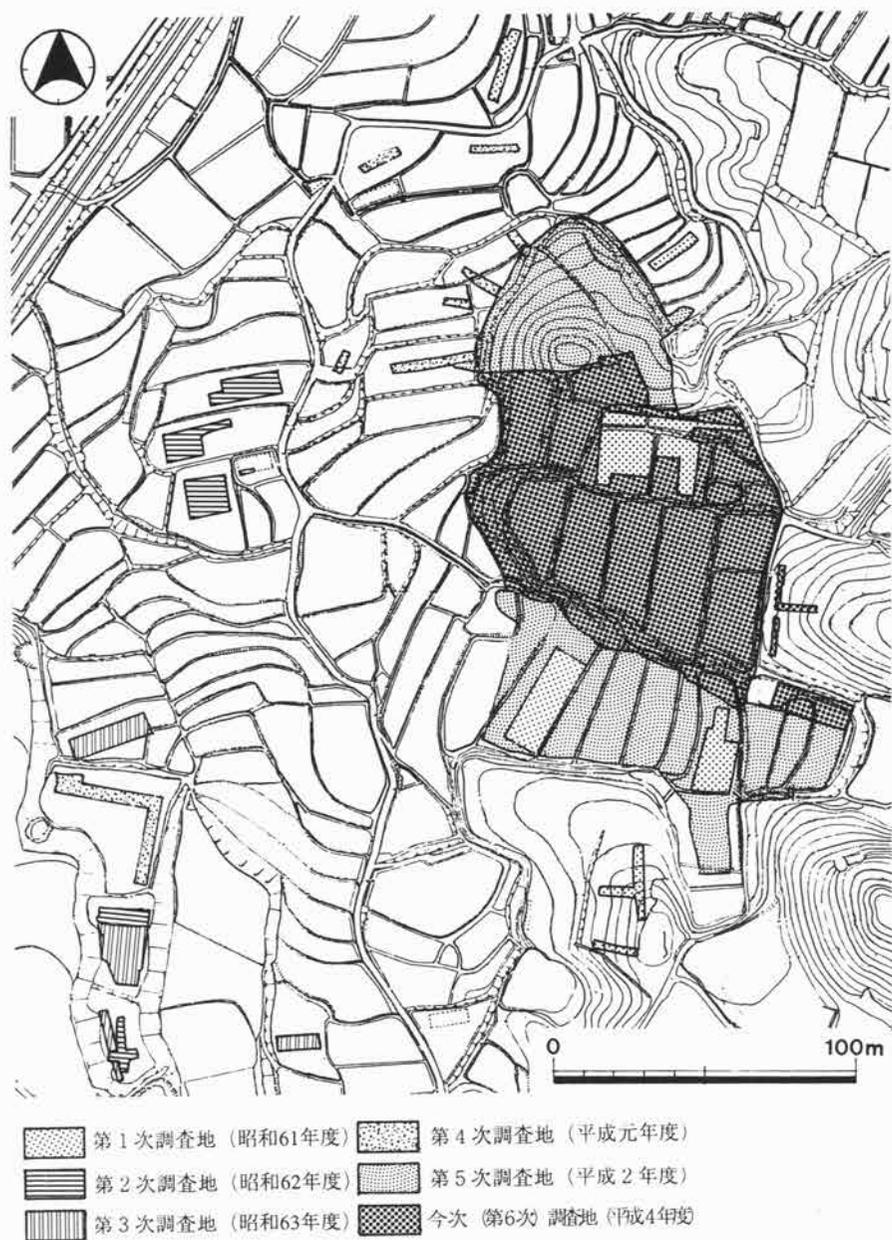
今回は、瓦谷古墳の南半分の発掘調査を実施し、墳形の規模を確定するとともに、20btトレンチで検出した古墳及び埴輪棺の広がりの確認、瓦谷古墳と方墳及び埴輪棺の関連を明らかにするため、瓦谷古墳が立地する台地部の未調製部分の全域で発掘調査を実施した。調査は平成4年7月~平成5年3月にかけて実施した。調査面積は約6,900m²である。

調査の結果、後述するように、瓦谷古墳は全長約48mを測る前方後円墳であり、これまでの調査成果を含め、周辺には方墳8基・円墳1基と埴輪棺25基が点在し、前方後円墳をトップとして方・円墳、埴輪棺という当時の階層分化を如実にあらわす遺跡であることが明らかとなった。また、古墳時代以降には奈良時代の掘立柱建物跡のほか、中世には城館を思わせる堀の跡もみつかった。

以下、検出した遺跡について略述するが、現地調査が平成5年の3月上旬まで実施していた関係上、各埴輪棺及び出土遺物の詳細については次年度以降に報告する。また、新たに古墳がみつかったため、瓦谷古墳を含め「瓦谷古墳群」として位置づけ、前方後円墳であることが明らかとなった瓦谷古墳を瓦谷1号墳と改名し、順次2号墳とつけていった。

2. 調査概要

今回の調査地は、東から西に向かって盆地方向に張り出している丘陵の先端付近にあたる。現況としては、ほとんどの部分が明治以降の新田開発によると考えられる水田耕作地



第125図 瓦谷遺跡 トレンチ配置図(1/25,000)

及び畑地であった。丘陵斜面を水田にするために、丘陵の尾根筋は階段状にカットされ、斜面下手に盛り土されていた。このため、調査地内は削平された部分が多く、一部を除き、耕作土・床土を除去すると地山面が現われる状況であった。

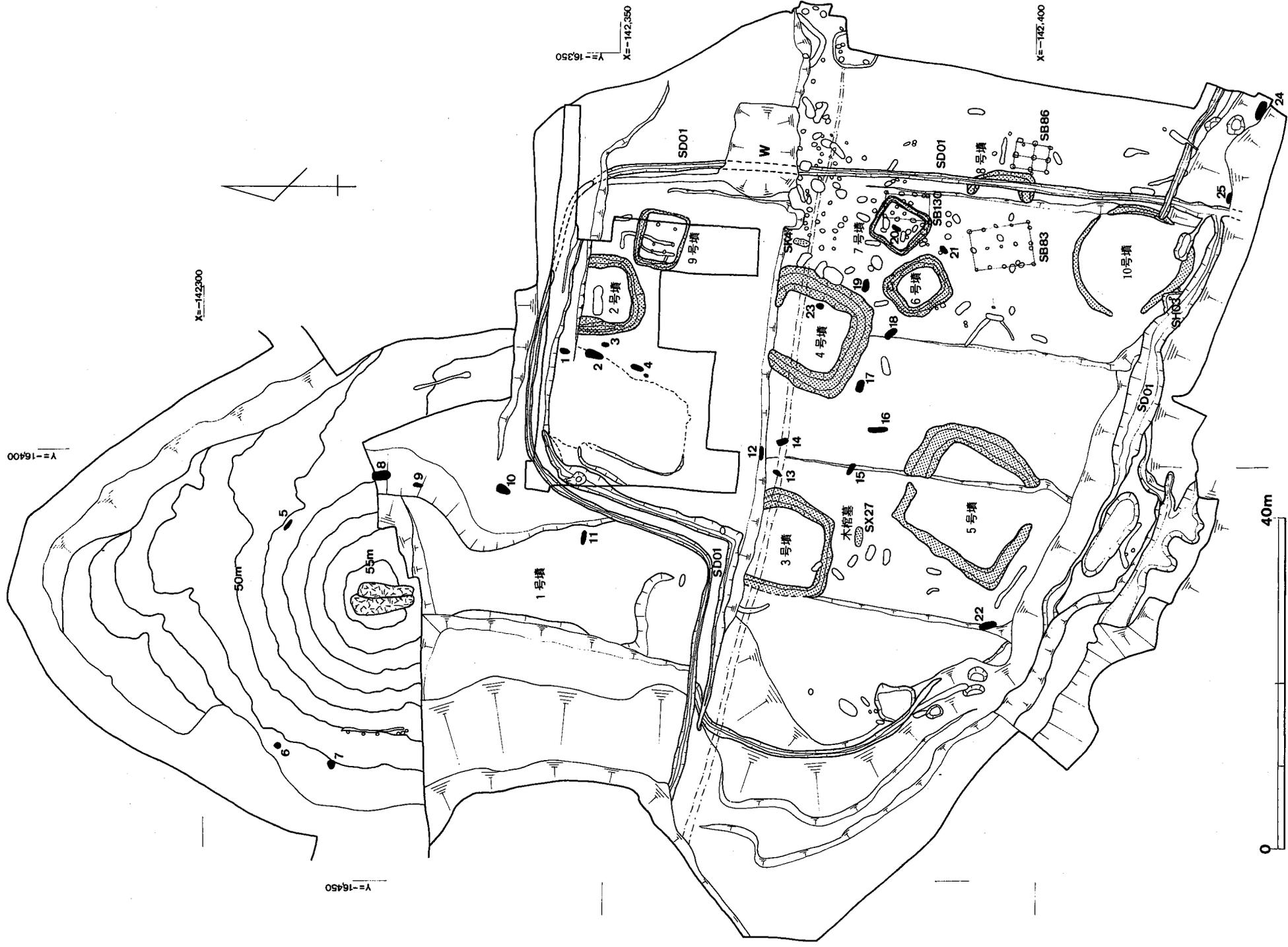
(1)古墳(第126図、図版第79～82)

瓦谷古墳群は、前方後円墳1基・方墳8基・円墳1基からなる。そのうち、前方後円墳の後円部の北半部と中心埋葬施設、方墳の一部(2号墳)は以前に調査を終了している^(注32)。

瓦谷1号墳 瓦谷1号墳は、古墳群が立地する丘陵端部平坦面の北西端に位置し、主軸をほぼ真南北に向けた前方後円墳である。今回調査した後円部の南半分と前方部の大半は後世に大きく削り取られており、調査前の地形からは前方後円墳とは想像できなかった。調査は、重機掘削により畑地及び水田部の耕作土を除去することから始め、表土下約10～20cmの耕作土を除去すると地山土が現われた。この地山土を順次検出しながら、調査範囲を広げていくと1号墳の東側で埴輪片が散在し、一部地山土がゆるやかな傾斜をもって掘り込まれているところを確認するとともに、前方部と後円部のくびれ部分が認められた。その結果、瓦谷1号墳(旧瓦谷古墳)は、平成2年度の概報で報告したような直径25～30mを測る円墳ではなく、墳丘の大半が削り取られていたが、全長約48m・前方部長さ約20m・幅(推定)約18m・後円部径約28mを測る前方後円墳であることが明らかとなった。なお、今回の調査では、大きく墳丘が削り取られていたため前方部での盛り土の有無は明らかではないが、平成2年度の後円部の調査では盛り土の厚さは約1m^(注33)を測る。また、前方部は南側及び東側で丘陵から切り離されており、自然地形を利用して築造している。前方部の築造時の形状及び規模については不明な点が多い。墳丘の削平の時期は明白ではないが、今回調査した丘陵をめぐる中世頃の溝(S D01)が、1号墳の前方部を避けて掘られていることから、中世頃までは墳形をとどめていたと考える。

付表5 古墳群一覧表

	形態	規模	埋葬施設	出土遺物
1号墳	前方後円墳	全長48m	木棺直葬・粘土槨	主体部より鏡・漆塗製品・多くの鉄器、墳丘周辺に埴輪棺数基
2号墳	方墳	一辺7.9m	木棺直葬?	埴輪片(周溝)
3号墳	方墳	一辺10m	削平	土師器片
4号墳	方墳	一辺10.5m	削平	須恵器壺(周溝北東隅)
5号墳	方墳	一辺13.9m	削平	長頸壺・高杯(東周溝)、壺(周溝南西隅)
6号墳	方墳	一辺5.5m	削平	壺(南周溝)、石鏃(縄文?、墳丘より)
7号墳	方墳	一辺5.2m	中心に埴輪棺	土師器片
8号墳	方墳	一辺7m	削平	家形埴輪(北周溝)
9号墳	方墳	一辺7m	削平	土師器壺埋納土坑、土師器片
10号墳	円墳	径14m	削平	なし



第126図 瓦谷遺跡 遺構全体図(1/600)

前方部中央では後円部中央でみつかったような中心埋葬施設はなかったが、主軸より東寄りの墳丘内の地点で埴輪棺11を検出した。ただ、埴輪棺11は想定できる前方部の盛り土の高さから考えても、棺の底が想定墳頂部の上面より1m以上低いレベルに位置するため、1号墳の墳丘構築以前に埴輪棺11が造られていた可能性も考えられる。

後円部の墳丘斜面に、埴輪棺5など3基の埴輪棺が構築されていることはこれまでの調査で知られていたが、今回の調査でも後円部の墳丘内で新たに埴輪棺2基(8・9)を検出した。埴輪棺8は、鱗付き円筒埴輪を半截あるいは破碎して利用した埴輪棺、埴輪棺9は小型の円筒埴輪を組み合わせたものである。なお、埴輪棺8からは、副葬品として白玉2個が出土している。

今回調査した中で、1号墳に伴う遺物は埴輪のみで、前方部と後円部の境にある東くびれ部と前方部東側の地山を掘り込んだ溝状に残る基底部近くに比較的まとまって出土したほか、西側の丘陵斜面からの出土が目立った程度である。埴輪は、円筒埴輪(鱗付きを含む)のほか、直弧文や鋸歯文を施した2タイプの盾形埴輪、佐紀陵山古墳タイプの蓋形埴輪などの形象埴輪片も出土している。

2号墳 2号墳は、昭和61年度の概報で報告(S X2001)したとおり、東西7m・南北6m以上(上縁部の規模、以下同じ)を測る方墳で、墳頂部中央の西寄りで組合式木棺の痕跡を確認している^(E35)。

3号墳 1号墳の前方部端から南に約10mの位置にある一辺約10mの方墳である。3号墳の墳丘の大半は後世に大きく削り取られ、周溝が遺存するのみである。周溝は、上面の幅約1.9m、検出面からの深さ約0.15mを測る浅い「U」字形の断面を呈する。周溝は、北辺のすべてと西辺の一部も削平されて残らない。溝内の埋土は、灰黒色細砂質土・灰黄色細砂質土で南周溝内の底よりも高いところで土師器片が少量出土したのみである。

4号墳 4号墳は、1号墳の前方部端から南東方向に約30mの位置にある一辺約10.5mの方墳である。4号墳も3号墳と同様、墳丘の大半が削り取られおり、周溝が遺存するのみである。周溝は、上面幅約2.4m、検出面からの深さ約0.3mを測り、浅い「U」字形の断面をしている。周溝の北辺部分は、一部削平により残っていない。周溝内の埋土は、暗黄褐色細砂質土・茶褐色粘質土で、溝底のやや上面の茶褐色粘質土内から壺形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪などが細片となって出土した。また、北東端では奈良時代の須恵器・長頸壺片が出土している。4号墳の周溝から出土した埴輪の特徴は、普通円筒埴輪がほとんどなく、埴輪の大半が壺形埴輪で占められている。また、周溝内から出土した蓋形埴輪(佐紀陵山古墳タイプ)と同一個体のものが、4号墳の南に隣接してある埴輪棺17からも出土しており、4号墳の埴輪の一部を利用して埴輪棺に使用している例として注目できる。4

号墳の東周溝に隣接した墳丘内に埴輪棺23がある。この埴輪棺も1号墳の前方部で検出した埴輪棺11と同様、想定墳丘高よりかなり下に位置するため、4号墳の墳丘築造以前に造られた可能性も考えられる。

5号墳 5号墳は、4号墳の南西約12mで、4号墳の周溝辺とほぼ同じ主軸をなす一辺約13.9mの方墳である。5号墳も墳丘の大半が削り取られおり、周溝が遺存するのみである。東半の周溝は、比較的遺存状態がよく、上面幅約3.6m、検出面からの深さ約0.5mを測るが、西半は後世の田畑により大きく削り取られており遺存状態は悪く、遺構検出面からの深さ約5cmと浅く残るのみである。周溝は、ゆるやかな逆台形断面を呈し、その埋土は上層から茶褐色系粘質土・黒灰色粘質土の2層に大別でき、下層の黒灰色粘質土内から土師器片や埴輪片が比較的まとまって出土した。周溝内からは古墳に伴う遺物以外に奈良時代の須恵器片が北東コーナーの上層から出土している。5号墳の墳丘及び埋葬施設は4号墳と同様、後世の削平により遺存していない。

6号墳 6号墳は、4号墳の南東約2.5mに隣接してある一辺約5.5mの方墳である。6号墳も他の古墳と同様、墳丘の大半は削り取られており、周溝のみ遺存する。周溝は、上面幅約0.9m、検出面からの深さ約0.2mを測り、浅い「U」字形の断面を呈する。周溝内の埋土は淡茶褐色細砂質土で、南東辺周溝内から土師器壺がほぼ完形で出土したが、非常に脆くなっていた。また、周溝内北端部に、長さ1.4m・幅約0.6m・深さ約0.2m、埋土は暗灰色粘質土の長楕円形の土坑状の掘り込みがあったが、遺物は出土していない。

7号墳 7号墳は、6号墳の北東約1mにある一辺約5.2mの小方墳である。7号墳も、上面幅約0.8m、検出面からの深さ0.2m、ゆるい逆台形の断面の周溝のみ遺存している。周溝内埋土は、暗灰黄色細砂質土・暗灰色粘質土で、周溝内から土師器片が出土した。7号墳の墳丘内中央付近から埴輪棺20を検出したが、この埴輪棺も7号墳に伴う埋葬施設(埴輪棺)なのか、7号墳の墳丘構築以前の埴輪棺なのかどうかは明らかでない。

8号墳 8号墳は、7号墳の南東約5mにある一辺約7mの方墳である。8号墳は墳丘及び周溝の西半部が大きく削り取られており、わずかに東辺の周溝が遺存しているのみである。しかも東辺はSD01によって切られており、残りは悪い。東辺周溝は、上面幅約1.5m、検出面からの深さ約0.2mを測り、断面は浅い逆台形を呈する。周溝内埋土は暗茶褐色細砂質土で、北辺の周溝底からやや上面で家形埴輪(屋蓋部のみ)が反転した状態で1点出土した。

9号墳 9号墳は、2号墳の南東約1mと隣接して存在する東西約7m・南北約4.5mの方墳である。墳丘及び埋葬施設は遺存せず、上面幅約0.8m、検出面からの深さ約0.2mの浅い「U」字形断面の周溝のみが遺存しており、周溝の規模や墳丘側にある6か所のピ

ットの存在から、当初は竪穴式住居跡であると考えた古墳である。周溝内の埋土は、灰黄褐色細砂質土及びにぶい黄褐色粘質土で、溝底から浮いた状態で土師器の細片が出土した。また、周溝の西側で周溝をさらに掘り拡げた土坑(周溝内土坑)があり、この中から布留式土器(甕)が正位に据えられおり、口縁部には壺の体部片を利用した蓋が置かれていた。土坑の規模は、径約0.9m×0.45mの楕円形をしており、深さは約0.25mである。壺内は空洞で遺物は出土していない。この周溝内土坑は、溝内埋葬施設あるいは古墳に伴う土器供献土坑と思われる。

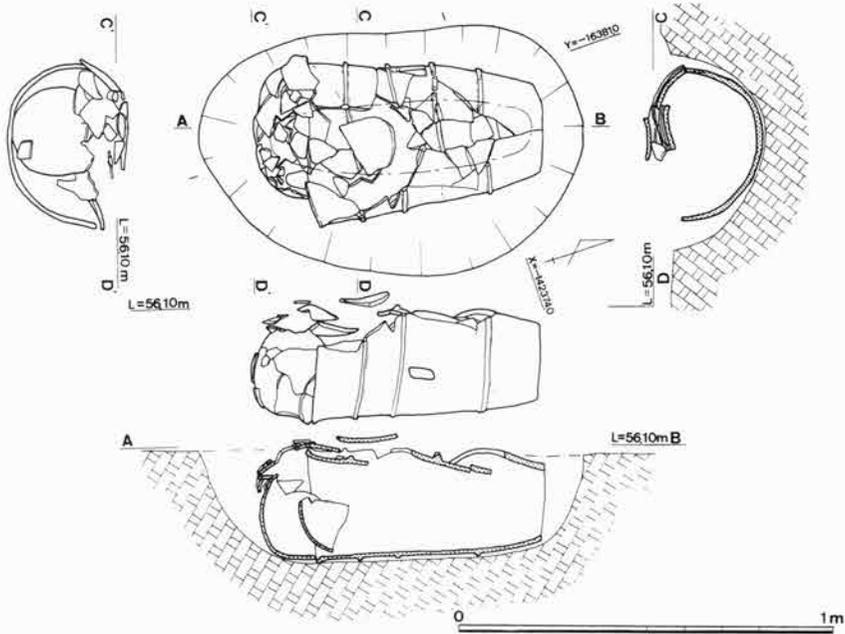
10号墳 10号墳は、8号墳の南約5mにある直径約14mの円墳である。10号墳はわずかに周溝の底部近くが遺存するのみで遺存状態が悪い。東側の比較的残りのよい部分で、わずかに検出面からの深さ約0.5mを測るのみである。周溝内埋土は暗茶褐色細砂質土で、周溝内からは遺物は皆無であった。しかし、南側の丘陵斜面からは朝顔形埴輪や蓋形埴輪片などが出土しており、10号墳との関連が考えられる。

(2)埴輪棺(第127～130図、図版第83・84)

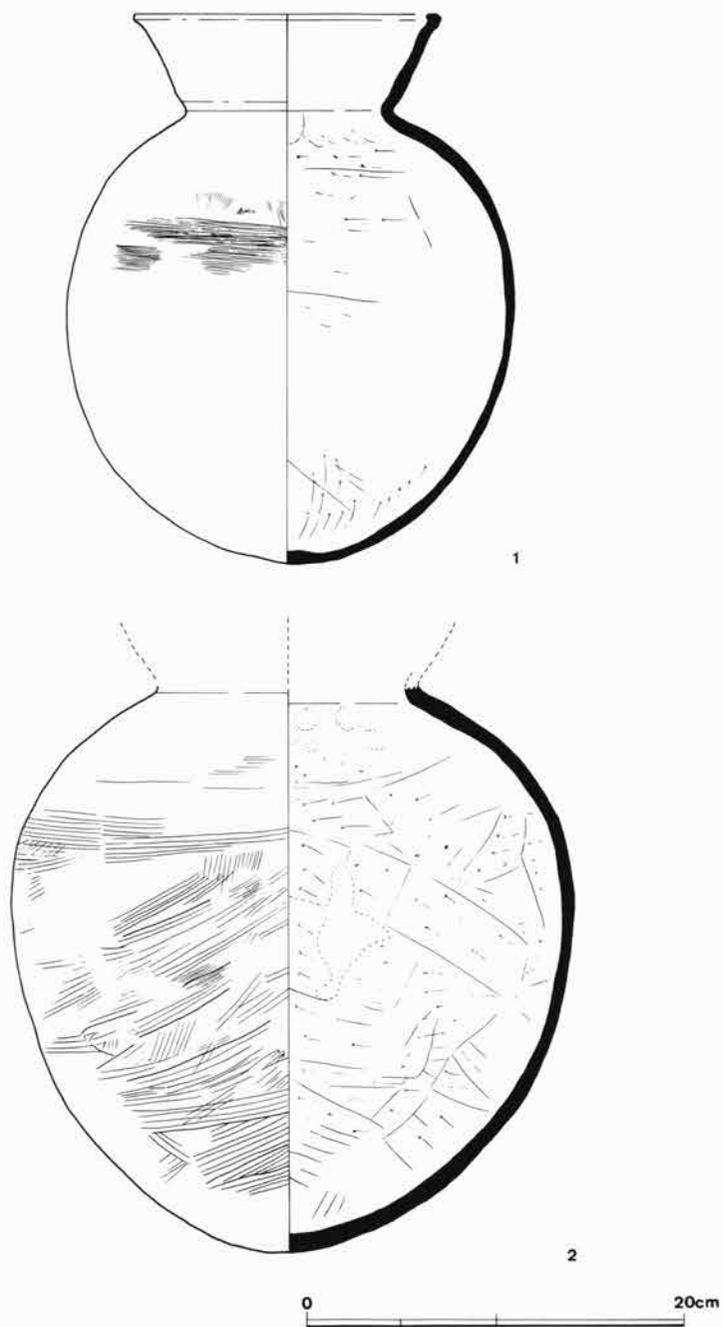
埴輪棺群は、これまでの調査分を含めると25基(今回18基)^(E36)を確認した。埴輪棺は、先述した4号墳と埴輪棺17出土の蓋形埴輪の例のように、本来古墳の周囲に立て並べられていたものを転用したと判断しており、特製棺は確認していない。各埴輪棺は、2～3個体の円筒形埴輪を組み合わせて棺としており、一部形象埴輪(蓋・盾など)をつなぎ目や蓋として利用している例が多いほか、埴輪棺18・24のように棺身に盾形埴輪を使用しているものもある。また、埴輪棺23では、片方の小口に土師器壺を蓋として利用していた。埴輪は、1号墳に近い地点では鱗付円筒埴輪を使い、遠ざかるにつれて普通円筒埴輪を使う傾向がある。埴輪の時期も、1号墳から遠ざかるにつれて新しくなる傾向がある。

埴輪棺11・20・23は、各古墳の墳丘内部に造られており、各古墳との新旧関係が注目される。先述したように、今回の調査では古墳の墳丘の削平が激しく、各古墳と埴輪棺との切り合い関係は確認できないが、各古墳の築造以前に埴輪棺が設けられていた可能性も考えられる。副葬品は、今次調査分では埴輪棺8の白玉以外は、埴輪棺22で鉄斧が掘形から出土しているのみである。以下に2例の出土状況を報告する。

埴輪棺23 埴輪棺23は、4号墳の周溝の内側で、周溝の東辺に隣接した墳丘内の位置にある。この埴輪棺は、4号墳の築造に伴う可能性が高いが、墳丘内における埴輪棺の位置から中央埋葬のものとは考えがたい。埴輪棺23の墓壇は、長軸約1.05m・短軸約0.63mの楕円形を呈し、墓壇底は検出面から約0.35mを測る。棺本体は、1個体の円筒埴輪を使用した単棺で、棺本体の円筒埴輪の口縁部分(南側)には、口頸部を打ち欠いた土師器壺と、口縁部を含む1個体分の土師器壺で小口部を塞いでいる。棺本体の円筒埴輪の底部側(北



第127図 瓦谷遺跡 埴輪埴輪23実測図(1/20) 出土遺物実測図(1)(1/8)



第128図 瓦谷遺跡 埴輪棺23出土遺物実測図(2)(1/4)

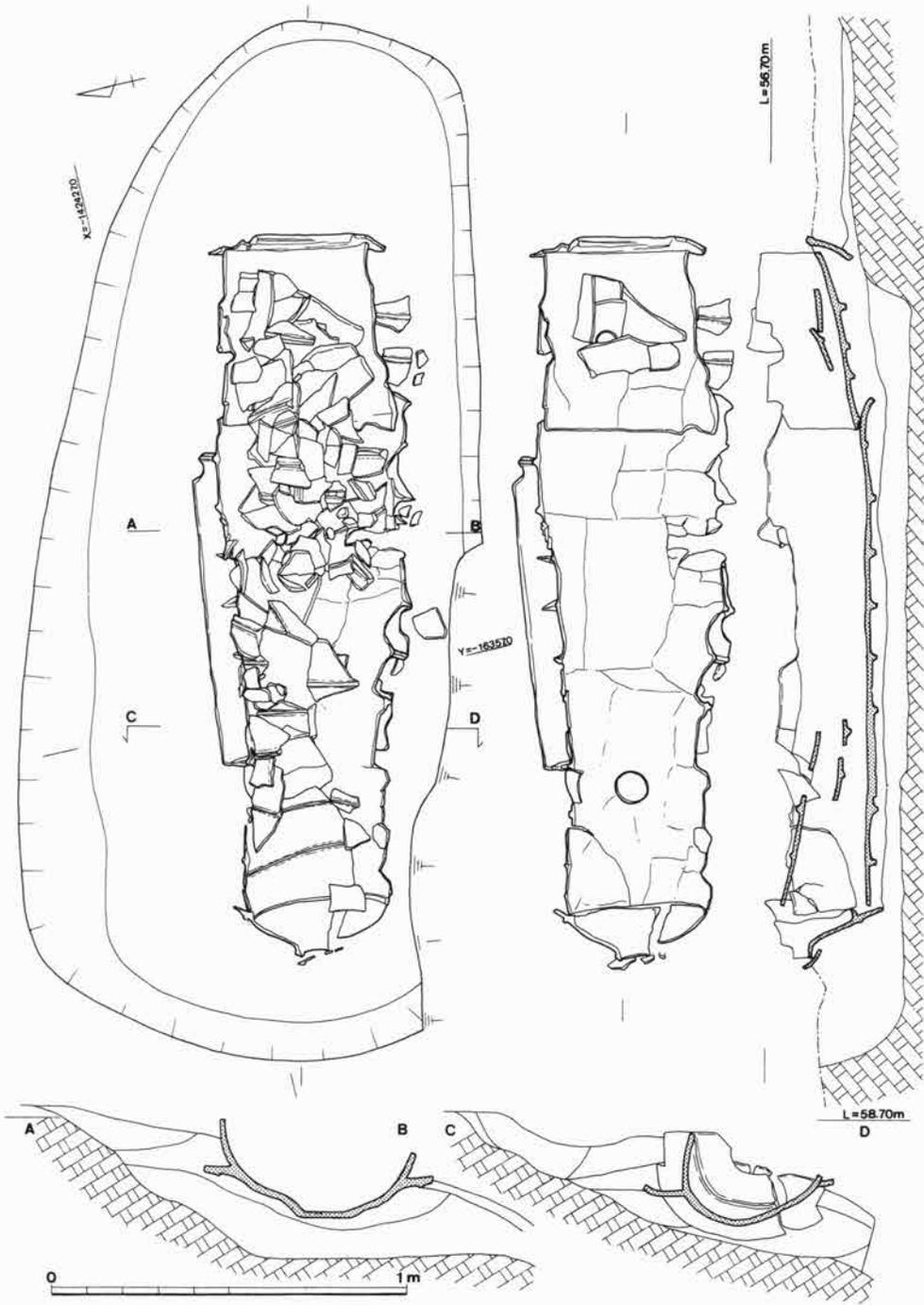
側)には埴輪片などで塞いだ痕跡はない。棺本体は、全長約0.90mで、調査時には棺内(円筒埴輪の内側)は空洞で、円筒埴輪は完形のまま埋められていた。遺体の埋置方向を示す枕などがなく、その方向は不明である。副葬品は出土していない。

第127図は、埴輪棺23出土の円筒埴輪である。大きさは、高さ62cm・口縁径41cm・底部径24cmである。全体に器壁の剝離が著しい。外面の調整は、器壁の残っていた部分の観察では、底部付近にタテハケが見えるが、他のほとんどの部分はヨコハケを施している。黒斑は、透孔のある側に底部から口縁付近まで点在する。内面の調整は、口縁付近はヨコハケ、下に降りるにつれて左上がりのナナメハケとなり、中央付近からはタテハケとなる。中央部より上では部分的に粘土のつなぎ目が観察できる。タガの形状は台形で、稜線ははっきりしている。透孔は長方形で下から3段目に2方向から開けている。色調は淡黄褐色、胎土にやや砂粒が見えるが比較的強く焼けている。

第128図は、埴輪棺23出土の土師器壺である。1は、ほぼ完形である。器高は約29cm・口径約16.5cmで、口縁端部は丸くおさめ、内側に段を付けている。調整は外面がハケ目調整を行い、内面はケズリを行っている。2は、口縁部を欠き、体部もほぼ半分のみのものである。残存高は約30cm、胴部最大幅は約30cmである。調整は、外面がハケ目調整を行い、内面はケズリを行っている。

埴輪棺24 埴輪棺24は、調査地の南東端で、丘陵部から谷部に向かう南向き斜面中段の傾斜変換点にある埴輪棺で、瓦谷1号墳の中心埋葬施設からは約120m離れた位置にあり、埴輪棺の分布では南東端にあたる。

墓壙は、長軸約2.93m・短軸約1.23m、検出面からの深さ約0.40mを測り、西側が広い卵倒形を呈する。棺本体は盾面を下にした盾形埴輪1個体に、長さ約50cmに打ち欠いた円筒埴輪を組み合わせた複棺で、両小口部は蓋形埴輪の笠部を使用している。棺本体は、全長約18.4m、遺存する棺の最大幅約0.50mを測る。棺底の東側には打ち欠いた円筒埴輪が主軸に直交する形で据えられており、枕に使用したものと思われる(丘陵上位に頭?を置いた東枕)。棺本体と小口部の設置は、西小口部の蓋形埴輪の笠部が棺本体よりも深く据えられていることから、西小口部の蓋形埴輪の笠部を設置したのち、棺本体の盾形埴輪を次に設置し、その後に長さを調整した円筒埴輪を据えたものと考えている。棺本体、特に盾形埴輪は、円筒状態(完形の状態)で被葬者を入れたものか、半截したのち被葬者を入れ、その後残り半分の円筒部破片を被葬者の上面に覆ったかどうかは判然としない。棺本体の設置に際して、棺の安定を考慮してか、盾面を上下から挟むように黄色粘土を敷いている。副葬品は出土していない。上面の埴輪片の中には円筒埴輪のほか、家形埴輪が棺本体の中央部に細片となって置かれていた。



第129図 瓦谷遺跡 埴輪墓24実測図(1/20)

付表6 埴輪棺一覧表

埴輪棺名	取り上げ番号	墓壙規模 (m)	棺規模 (m)	本体・棺蓋	小口部分	つなぎ部 その他	時期	出土位置	その他
01	SX2002	0.96×0.70 一段墓壙	最大長0.7 幅0.32	普通円筒埴輪(単棺)	普通円筒埴輪		Ⅱ期	2号墳西辺	棺本体と同一の埴輪を閉塞埴輪に使用一辺10cm前後の埴輪片を枕に利用墓壙内埋土中から菅玉1点出土
02	SX2004	2.20×1.0 一段墓壙	最大長1.25 幅0.49	普通円筒埴輪(複棺)	鱗付き円筒埴輪	普通円筒埴輪	Ⅱ期	2号墳西辺	
03	SX2005	1.60×0.45 一段墓壙	最大長1.35 幅0.25	普通円筒埴輪(複棺)	有機材?		Ⅱ期	2号墳西辺	
04	SX2007	1.05×0.6 一段墓壙	最大長0.65 幅0.24	普通円筒埴輪	普通円筒埴輪		Ⅱ期	2号墳西辺	本体の埋置に先行し閉塞埴輪を設置
05		1.64×0.52	残存長1.3 最大幅0.35	棺蓋のみ 鱗付き円筒埴輪	盾形埴輪(I類)を含む	普通円筒を破碎して隙間を閉塞	Ⅱ期	1号墳後円部北東裾部	正確な方位不明
06		0.94×0.78	最大長0.76 幅0.37	蓋形埴輪I類			Ⅱ期	1号墳後円部北西、墳丘外	正確な方位不明
07				土師器二重口縁	有機材?		Ⅱ期	1号墳後円部	
08	SX51	2.38×0.88	最大長16.3 幅0.62	鱗付き円筒埴輪	鱗付き円筒埴輪		Ⅱ期	1号墳後円部東、墳丘裾部	
09	SX50	1.14×0.5	最大長0.7 幅0.38	普通円筒埴輪			Ⅱ期?	1号墳後円部東、墳丘裾部	
10	SX62	1.64×0.93 ~0.6	最大長1.15 幅0.315	鱗付き円筒埴輪	朝顔形埴輪		Ⅱ期	1号墳東くびれ付近墳丘外	
11	SX25	1.70×0.54	最大長1.50 幅0.33	鱗付き円筒埴輪	盾形埴輪I類		Ⅱ期	1号墳前方部東	埴輪棺を設置する以前に、埴輪を粉碎し、棺の下に敷きつめている。
12	SX18	1.54×0.4 以上	最大長1.44 幅0.3	鱗付き円筒埴輪			Ⅱ期	3号墳東辺	

13	SX21	残存長1.03 ×幅0.4	残存長0.6 幅0.27	普通円筒埴 輪(単棺)			Ⅲ期 ?	3号墳 東辺	棺底のみ遺存
14	SX13	残存長1.22 ×幅0.57	残存長1.05 幅0.31	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪		Ⅱ期	3号墳 東辺	棺底のみ遺存
15	SX20	1.31×0.46	残存長0.9 幅0.25	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪		Ⅲ期	5号墳 北辺	棺底のみ遺存
16	SX14	23.5×6.3	最大長1.43 幅0.43	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪			5号墳 北辺	埴輪片を枕に転用
17	SX15	1.50×0.79 二段墓壇	最大長0.71	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪	蓋形埴輪 Ⅰ類	Ⅱ～ Ⅲ期	4号墳 南辺	
18	SX24	1.69×0.84 二段墓壇	残存長1.05 幅0.37	普通円筒埴 輪、盾形 埴輪Ⅱ類 (複棺)	朝顔形 埴輪+ 盾形埴 輪Ⅱ類		Ⅲ期	4号墳 南辺	拳大の河原石で枕 に転用
19	SX26	1.60×0.69	残存長0.75 幅0.32	普通円筒埴 輪(単棺)			Ⅲ期	4号墳 西辺	細破が多く棺の遺 存状態は悪い
20	SX11	1.14×0.55	最大長0.67 幅0.33	普通円筒埴 輪(単棺)	普通円 筒埴輪 (横位 で使用)		Ⅲ期	7号墳 墳丘内 中央	棺本体の上部(蓋 部)は細片で出土
21	SX12	1.29×0.55	最大長0.74 幅0.3	普通円筒埴 輪(単棺)	朝顔形 埴輪		Ⅱ期	7号墳 南辺	
22	SX22	2.00×0.95	残存長1.20 幅0.45	普通円筒埴 輪(複棺)	朝顔形 埴輪		Ⅲ期	尾根の 南端	小口部の埴輪上部 に鉄斧出土、棺本 体は完形に近い状 態で出土
23	SX23	1.03×0.62	最大長0.63 幅0.43	普通円筒埴 輪(単棺)	土師器 壺(片面 のみふ さぐ)		Ⅲ期	4号墳 墳丘内	棺本体は完形の状 態で出土
24	SX19	2.20×1.35	最大長1.85 幅0.55	盾形埴輪+ 普通円筒埴 輪	蓋形埴 輪	蓋部に普 通円筒埴 輪ととも に家形埴 輪の細片 出土		尾根の 南端	棺本体は盾面を下 にし、その後、一 部白色粘土で、盾 形埴輪を固定して いる。本体の埋置 に先行して閉塞埴 輪を設置
25	SX66	1.00×0.58		蓋形埴輪片					埴輪棺ではなく、 墓壇内に埴輪を入 れた可能性あり。 埴輪の下に青灰色 粘質土混礫を敷い ている。

備考、蓋形埴輪 Ⅰ類 佐紀陵山古墳タイプ 盾形埴輪 Ⅰ類 直弧文(忍ヶ岡系対象文) 時期
Ⅱ類 その他 Ⅱ類 川西編年

第130図は、埴輪棺24出土の盾形埴輪である。大きさは、高さ約142cm・口縁径約65cm・底部径約42cm・盾部長約86cm・同上部幅推定約65cm・同下部幅推定約60cmである。外面の調整は、器壁の残っていた部分の観察では、タテハケの後ヨコハケを施している。内面の調整は、口縁付近はヨコハケ、下に降りるにつれて左上がりの斜めハケとなり、中央付近から下はタテハケとなる。中央部より上では部分的に粘土のつなぎ目が観察できる。円筒部にはタガが9条めぐっている。タガの形状は台形で、口縁部は幅約3cmと広く張り付けている。透孔は、すべて円形で、下から3段目に正面とその対象の位置に当たる部分に計2か所と、下から5段目と8段目の向かって右側面に各1か所確認した。左側面は残りが悪いため、透孔の位置は確認できなかったが、おそらく対象の位置に各1か所設けられていたと考えて図上復原を行った。透孔の総計は6か所と考えている。全体の色調は淡黄褐色、胎土にやや砂粒が見えるが比較的堅く焼けている。盾面とその反対側に黒斑が広がっている。

盾面には線刻による装飾はなく、円筒部分のタガと同じ位置にタガ状の突帯が5本施され、6区画に水平等分している。上から2～4区画にわたって中央に長方形の窪みが表現されている。盾面の左右端は円筒部が作られた後、追加形成されたようで、盾面に接合の痕跡が縦方向に帯状に観察できるとともに、接合部付近からタガが太くなる。

(3) その他の遺構について(第126図)

木棺墓(S X 27) 3号墳の南側で木製板を組み合わせて棺にしたと考えられる土坑S X 27を検出した。東西方向に長側板を置き、東西両小口に板を深く掘り込むとともに、長側板で挟むように固定した状況が観察でき、棺底には卵大の礫を敷いていた。墓壇の規模は、長さ2.3m・幅0.8mの隅丸長方形で、小口板を固定した掘り込みの検出面からの深さは東側部分で約0.35m、中央部の墓壇の深さは検出面から約0.1mと浅く、棺底が残っていた程度である。長側板は、長さ約2m・厚さ約0.07m、小口板は、西側が幅約0.35m、東側が幅約0.3m・厚さ約0.05mである。棺内の規模は、長さ約1.65m・幅約0.3mで、西側が若干広く、棺底のレベルもやや高い状況である。礫敷の厚みは約0.05m程度である。遺構内からは少量の土師器の破片が出土している。

建物跡 建物跡では10号墳の南で竪穴式住居跡を1基、方墳群の東側で掘立柱建物跡3棟を検出した。

竪穴式住居跡(S H 03) 竪穴式住居跡(S H 03)は、谷部を臨む調査地南斜面にあり、ほとんどの部分がS D 01によって切られているため、全体の約1/4程度が残るのみである。掘形は方形で、約2.5m×約2.5mの直角三角形状に残り、床面までの深さは約0.5mである。壁直下に浅い壁溝がめぐり、直径約0.3m・深さ約0.4mの柱穴1か所を検出した。床



第130图 瓦谷遺跡 埴輪棺24出土遺物実測図(1/8)

面には若干の焼土と炭片の広がりが見られた。床面付近で土師器杯が出土している。

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱建物跡(SB86)1棟と、2間×3間(SB130)、2間×4間(SB83)各1棟の建物跡がある。SB86は、倉庫と考えられ、付近から奈良時代の須恵器片などが出土していることから、その頃の建物跡と判断している。SB83とSB130については時期不明である。

中世の時期の遺構では、溝及び土坑がある。

溝(SD01) 調査地を鉢巻状にめぐり、溝SD01は、各部分で規模がかなり変化する。調査地南側斜面では幅約4m・深さ約2.5mに達し、この溝を堀と考えれば丘陵上に城館があった可能性もある。この溝からは、多数の埴輪片のほか、12世紀頃の土師質の羽釜片や鉄滓などが出土している。

焼土坑(SK47) 4号墳の東側の土坑(SK47)は、長さ約2.5m・幅約0.8m・深さ0.15mの隅丸の長方形の浅いものである。土坑の北・東・西の三辺に焼土壁を持ち、内部に炭や灰がつまり、床面の北側と南側に直径約0.7mの焼けた床面が見られた。出土遺物は、床面付近から土師器の皿と鉄製品がある。遺構の周辺部で出土している鉄滓との関連が考えられる。

このほか、埴輪を含まない土壙墓と考えられる遺構が10数基あり、遺物が少なく時期決定が困難な例が多いが、奈良時代の土師皿と鉄製品が出土した例や、布目瓦片が出土した例、小型丸底壺数個体が出土した例もあり、複数時代にわたると考えられる。

3. 小 結

今回の調査によって瓦谷遺跡・瓦谷古墳群の全ぼうが明らかになった。瓦谷古墳群は、前方後円墳を中心に、円墳・方墳・埴輪棺などで構成され、当時の階層構成が確認できる貴重な遺跡と考えている。古墳群の造営時期は、出土した埴輪などの遺物から4世紀後半で、瓦谷1号墳の造営後短時間で順次造られている。出土した埴輪は、円筒・朝顔形埴輪のほか、蓋・盾・家などの形象埴輪が出土している。特に、盾形埴輪は鋸歯文・直弧文をそれぞれ施したものと、埴輪棺24出土の特殊なタイプのもの3種類が出土しており、この時期の埴輪を考えるうえで良好な資料と言えよう。

他の時期についても、縄文時代の遺構もあり、中世の城館の可能性もある遺構もあり、この遺跡の多様な性格が明らかとなった。

(有井広幸)

注1 石井清司・伊賀高弘・竹井治雄・小山雅人「3. 木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」

(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 注1に同じ。

注3 調査参加者(五十音順・敬称略)

浅野真紀・池田晃仁・五百磐頭一・岩本 貴・小関菜都子・香川知子・鹿島昌也・河野千春・日下隆春・久保田琢磨・下之あゆみ・高橋立彦・武石匡司・谷本美和・塚田 力・辻谷真夕・平松久和・平松弘孝・平井千香子・藤野洋大・堀 優子・宮本浩行・森 光重・青木 卓・有馬三喜子・石崎陽子・大西 都・櫻原清美・坂田千晶・新谷二三代・武田久美子・辻 道子・中西 修・中村久登・林 恵子・林 益美・菱田直美・福永美知代・古川良子・吉永清美

注4 注1に同じ。

注5 伊賀高弘「西山塚古墳の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第46号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注6 和田晴吾氏は、堅穴系埋葬施設を「墓壙あり」と「墓壙なし(無墓壙)」に区分し、前者を構築手法の違いにより「掘込墓壙」と「構築墓壙」に分類した。さらに「掘込墓壙」については、墳丘の築成過程のどの段階で設定したかという基準で、a類(墳丘が完成した段階)、b類(墳丘構築途中)、c類(墳丘構築前)に細分された(和田晴吾「葬制の変遷」都出比呂志編『古代史復元』6 講談社 1989)。

注7 福永伸哉氏は、いわゆる組合式木棺の四辺の側板材の平面的な組み合わせ方式について、以下のように分類されている。A型…両側板が小口板を挟んでさらに棺長軸方向に突出するもの、B型…両小口板が側板を挟んでさらに棺短軸方向に突出するもの、C型…側板と小口板が規則的に組み合わせず井桁状を示すもの、D型…側板も小口板も突出せず箱形になるもの(福永伸哉「木棺墓」金關 恕・佐原 真編『弥生文化の研究』8 雄山閣 1987)。

注8 この盾は、通有にみられる獣革を素地とした置盾で、木柁骨(陥没溝として確認できた)の上に革を張ってその表面を粗い糸で刺繍して黒漆で塗り固めたものである。本例の場合、盾面の縁取りと文様区を画する綾杉文帯の遺存状態が比較的良好であった。現在までに革製漆塗盾の検出例は80例余りを数える。

注9 絹見安明氏は、山陰地方に顕著な枕状施設のうち、石を用いたもの(枕石)を5類に分類されているが、本遺跡のように自然石3個を用いた例は、同氏の類型からはもれる(絹見安明「古墳の埋葬施設における枕の使用について―鳥取県・長瀬高浜古墳群を中心にして―」『史想』第21号 1988)。

注10 刀・剣ともに把縁部分に突出する漆膜(把縁突起・柱状突出部)が認められ、置田雅昭氏分類のA類の把装具の可能性ある(置田雅昭「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学报』第36巻第3号 1985)。

注11 西群は鍔身が小さく片逆刺を有するものが多いのに対し、東群はより鍔身が長く片逆刺をもつものは少ない傾向がある。

注12 矢羽根を篋に装着する場合、その前後を繁巻きして固定するが、古い例は繁巻部分のみ黒漆を塗り(雪野山古墳例・谷内21号墳例など)、古墳時代中期後半以降になると、本例のように本

- 矧・末矧野間も漆で塗りつぶすようになるようである(円照寺墓山1号墳例・七廻鏡塚古墳例)。
- 注13 注7に同じ。
- 注14 注6に同じ。
- 注15 当古墳の南西約600mに位置する上人ヶ平8号墳(一辺13.0mの小方墳)の中心主体でも同形態の枕状施設(埴輪転用枕)が検出されている(石井清司ほか『京都府遺跡調査報告書』第15冊 上人ヶ平遺跡 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991、58~61頁)。
- 注16 長頸鉄の分類名称は、尾上元規氏の案によった(尾上元規「古墳時代鉄の地域性—長頸式鉄の地域性—」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会 1993.6)。
- 注17 尾上元規は、長頸式鉄出現期以降の鉄の地域性を検討する中で、長頸式鉄の組み合わせによる類型を設定し、氏によるⅡ期(5世紀末~6世紀末)において鉄の地域性が顕在化することを論じている。その中で長頸片刃箭式は同期以降、畿内・山口県・岡山平野・島根県地域において普遍的に組成するのに対し、山陰東半部・広島県・岡山県北部地域では見られない点を指摘している(尾上元規・注16論文)。
- 注18 白杵 勲「古墳出土鉄の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 1985。
- 注19 白杵 勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984。
- 注20 注5に同じ。
- 注21 注13に同じ。
- 注22 堅飾の部分名称については、亀田 博氏の案によった(亀田 博「堅飾」『末永先生米壽記念 獻呈論文集』乾 末永先生米壽記念会 1985)
- 注23 瀬戸谷皓「再び土師器転用枕について」(『よみがえる古代の但馬』 但馬考古学研究会) 1981
- 注24 豊岡市の立坂106号、北浦18号墳、和田山町の中山23号墳など。
- 注25 戸原和人・小池 寛・中井栄策・伊賀高弘「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注26 注1に同じ。
- 注27 『古事記』崇神天皇段に「山代之幣羅坂」、『日本書紀』崇神天皇10年9月条の本注に「山背平坂」とみえる。
- 注28 注25に同じ。
- 注29 小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」(『考古学研究』第27巻第2号 考古学研究会) 1980.9
- 注30 戸原和人・荒川 史・伊賀高弘「4. 木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注31 石井清司・伊賀高弘「5. 木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注32 注30に同じ。
- 注33 注31に同じ。

注34 注31に同じ。

注35 注30に同じ。

注36 注30・31に同じ。

※なお、調査中あるいは整理作業中に多くの方々に御教示、御指導をいただいた。以下に記して感謝いたします。

石野博信・植野浩三・堅田 直・鐘方正樹・金子裕之・久保哲正・小林謙一・杉井 健・杉原和雄・高橋克壽・高橋美久二・中島和彦・橋本清一・福永伸哉・町田 章・松本秀人・峰 巍・柳本照男・横山浩一・和田晴吾

圖 版



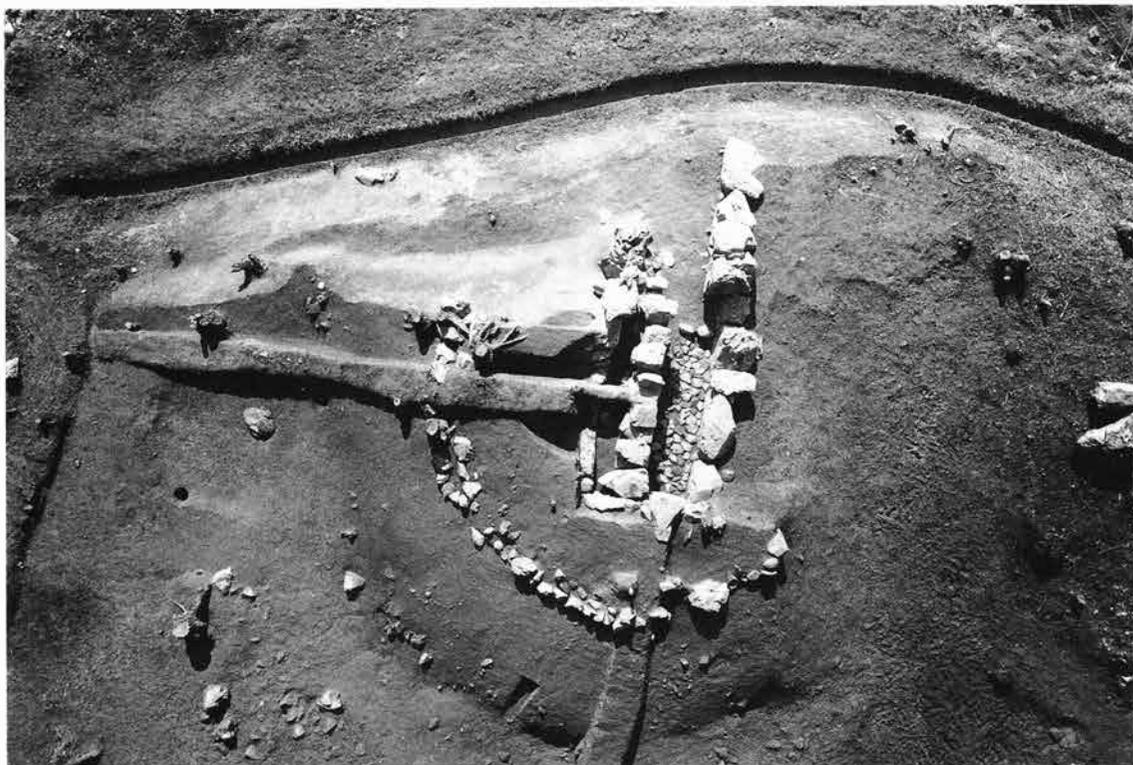


(1) 3号墳調査前遠景（西から）



(2) 3号墳調査前近景（南から）

図版第2 神宮谷古墳群



(1) 神宮谷3号墳全景(北から)



(2) 神宮谷3号墳全景(南東から)



(1) 3号墳石室第二次埋葬施設（北から）



(2) 3号墳石室第二次埋葬施設（南から）



(1) 3号墳石室第二次東壁(1)(西から)



(2) 3号墳石室第二次東壁(2)(西から)



(1) 3号墳石室第二次埋葬施設（北から）



(2) 3号墳石室第二次埋葬施設北東隅部（南西から）



(1) 3号墳石室玄門付近及び羨道部遺物出土状況（北から）



(2) 3号墳石室玄室内袖石付近遺物出土状況（東から）



(1) 3号墳石室第二次東壁基底石検出状況（北から）



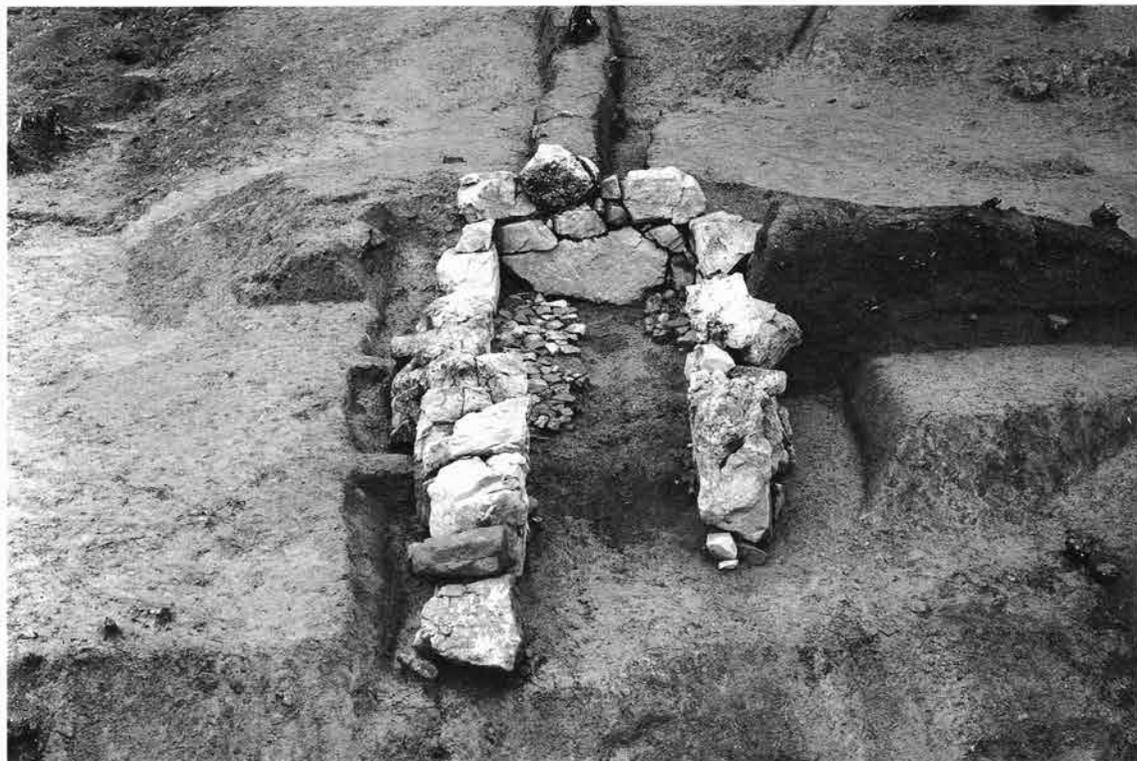
(2) 3号墳石室第二次東壁基底石検出状況（南から）



(1) 3号墳石室第二次東壁除去後床面検出状況(1)(北から)



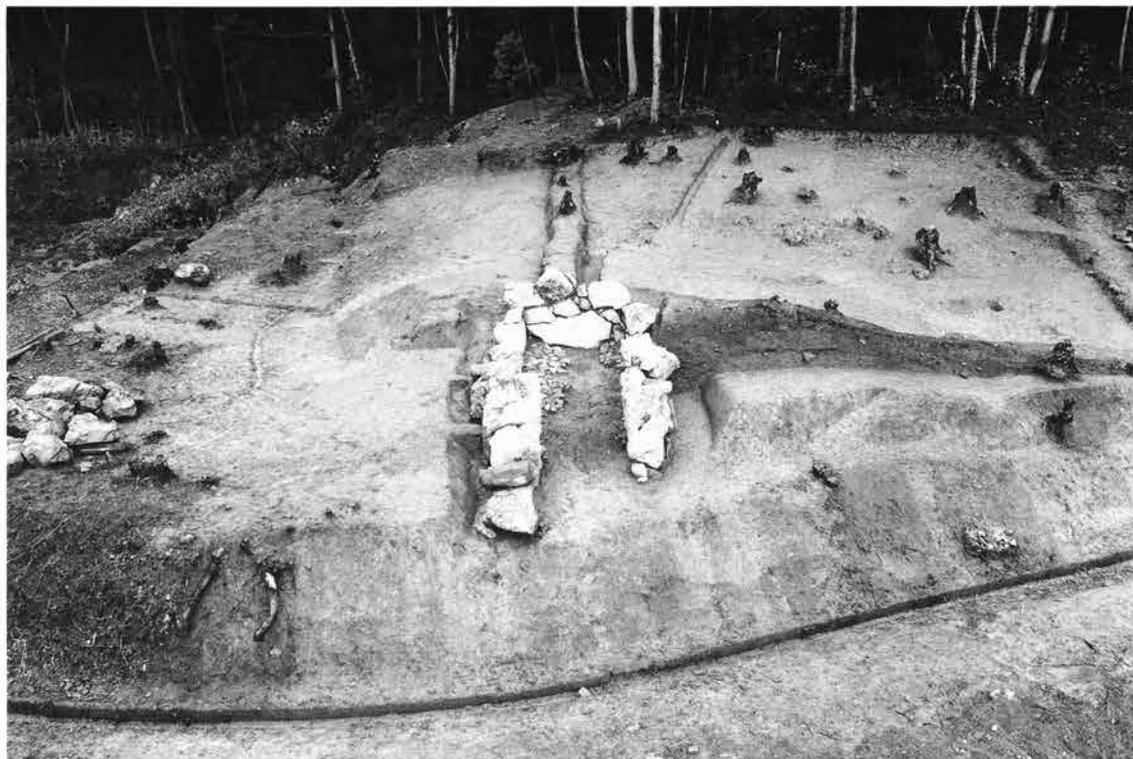
(2) 3号墳石室第二次東壁除去後床面検出状況(2)(北から)



(1) 3号墳石室全景（南から）



(2) 3号墳石室全景（北から）



(1) 3号墳全景及び墓壇検出状況（南から）



(2) 3号墳石室玄室床面検出状況



2



3



5



4



9



8



13



14



15



19・16



23



22



27



31



26



24



25

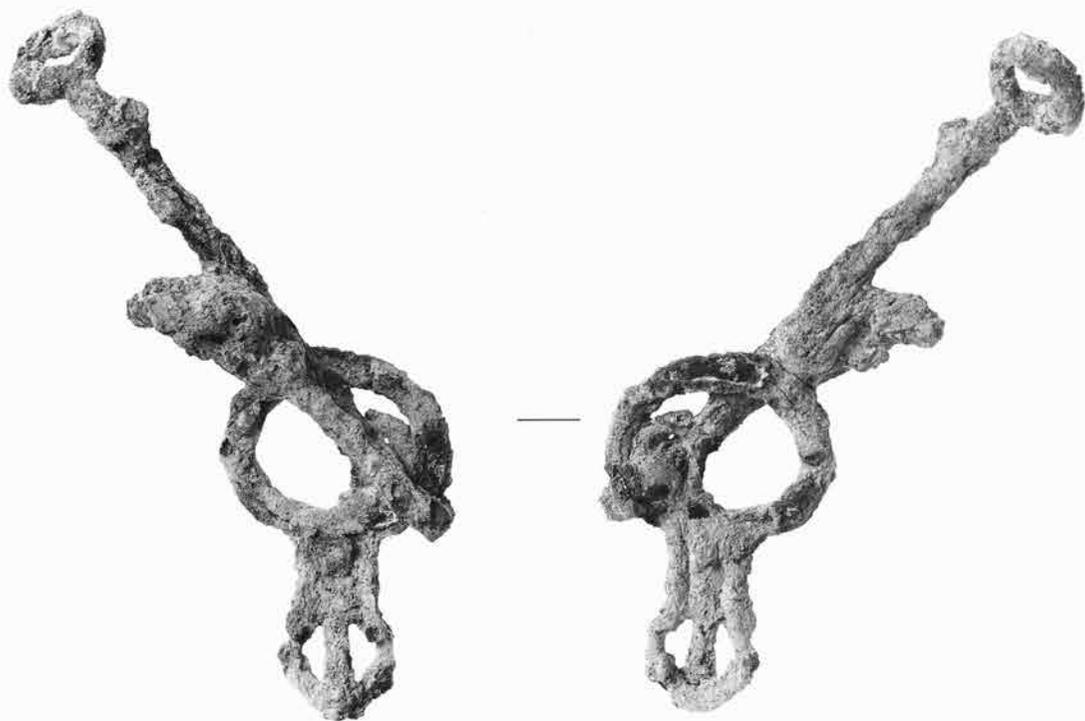


20

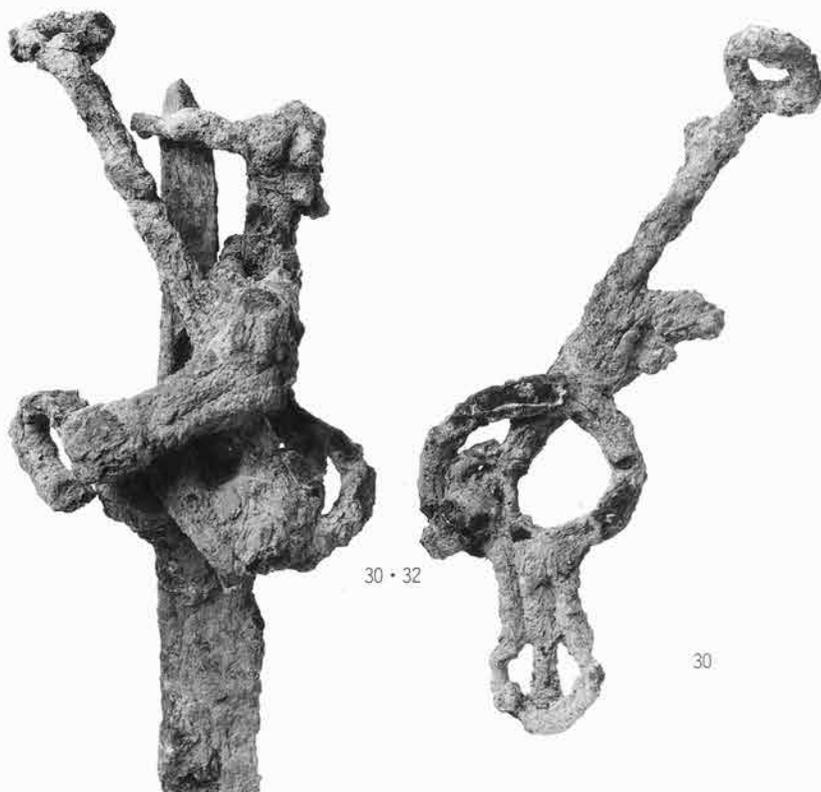


33

a



30



30・32

30



34

35



29



37



28

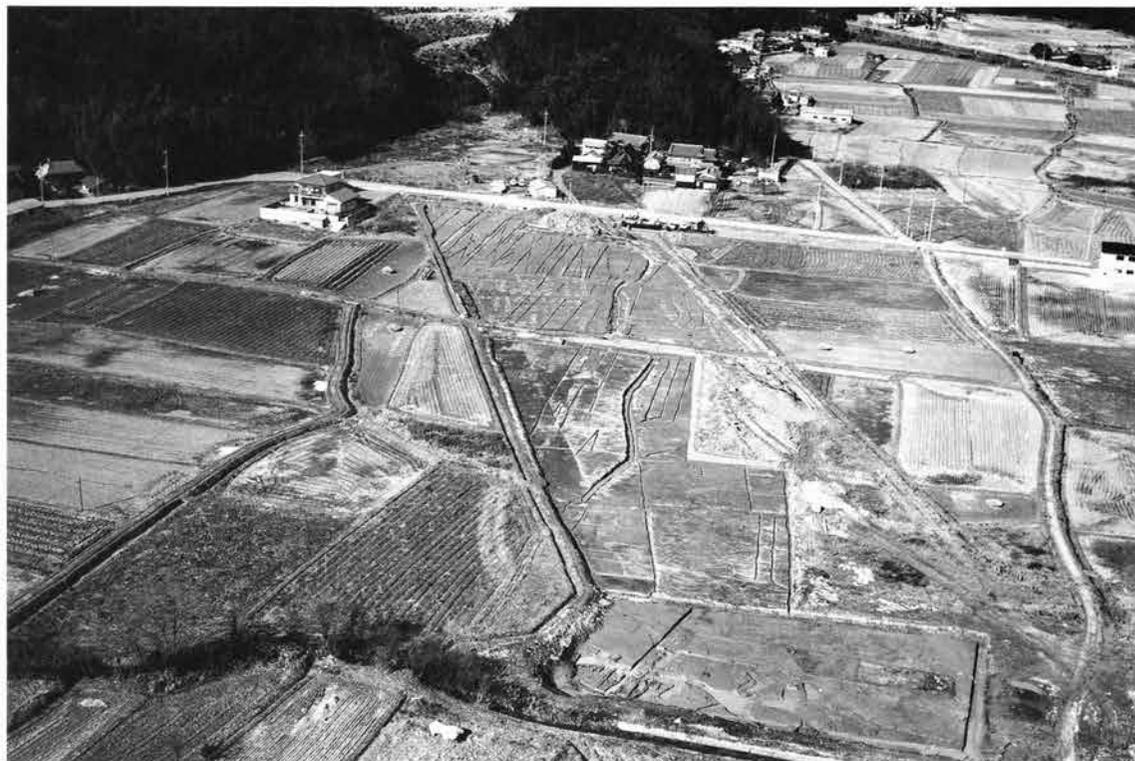
36



(1) 調査地全景 (西から)



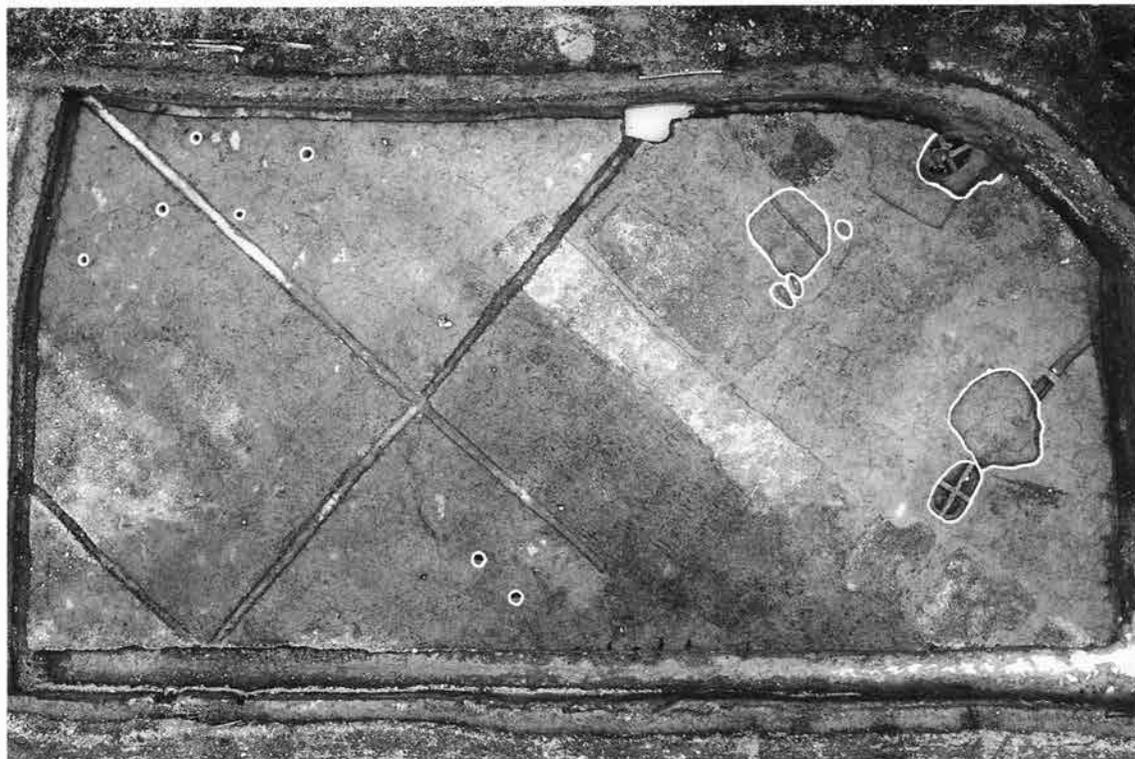
(2) 調査地全景 (北西から)



(1) 調査地 (C~E地区) (南から)



(2) 調査地 (D・E地区) (南から)



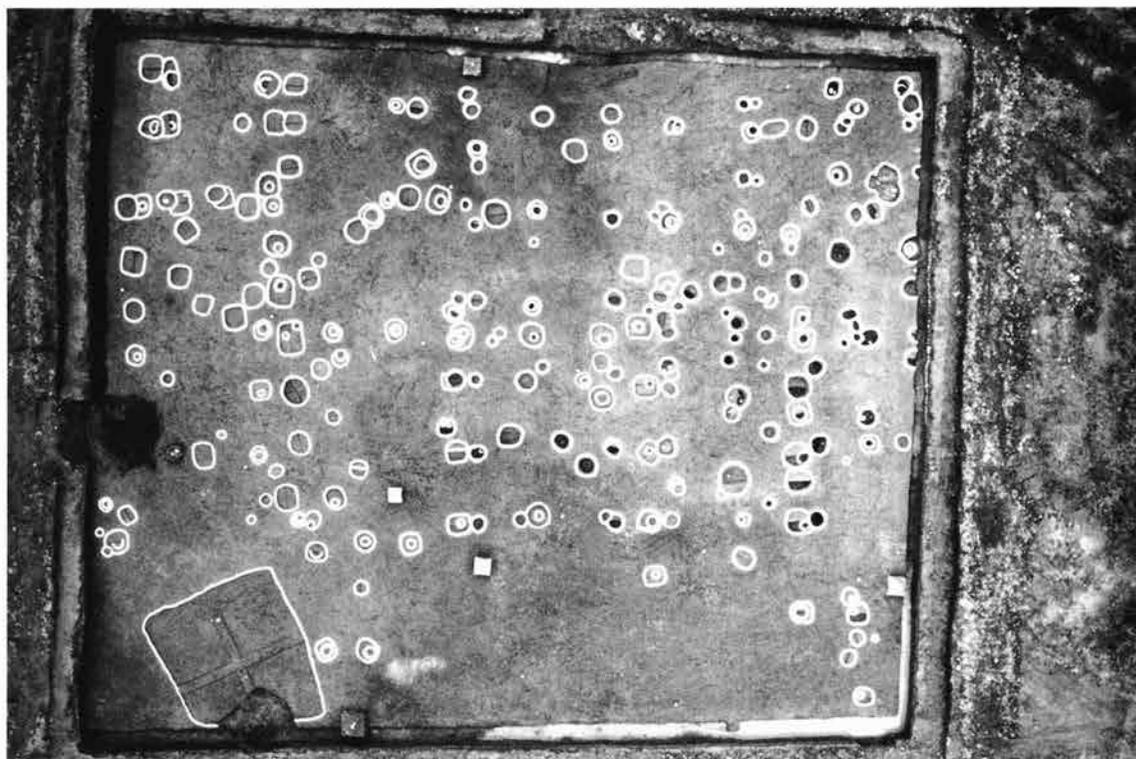
(1) A地区全景（上空から）



(2) A地区遺構検出状況（西から）



(1) A地区土坑3 検出状況 (東から)



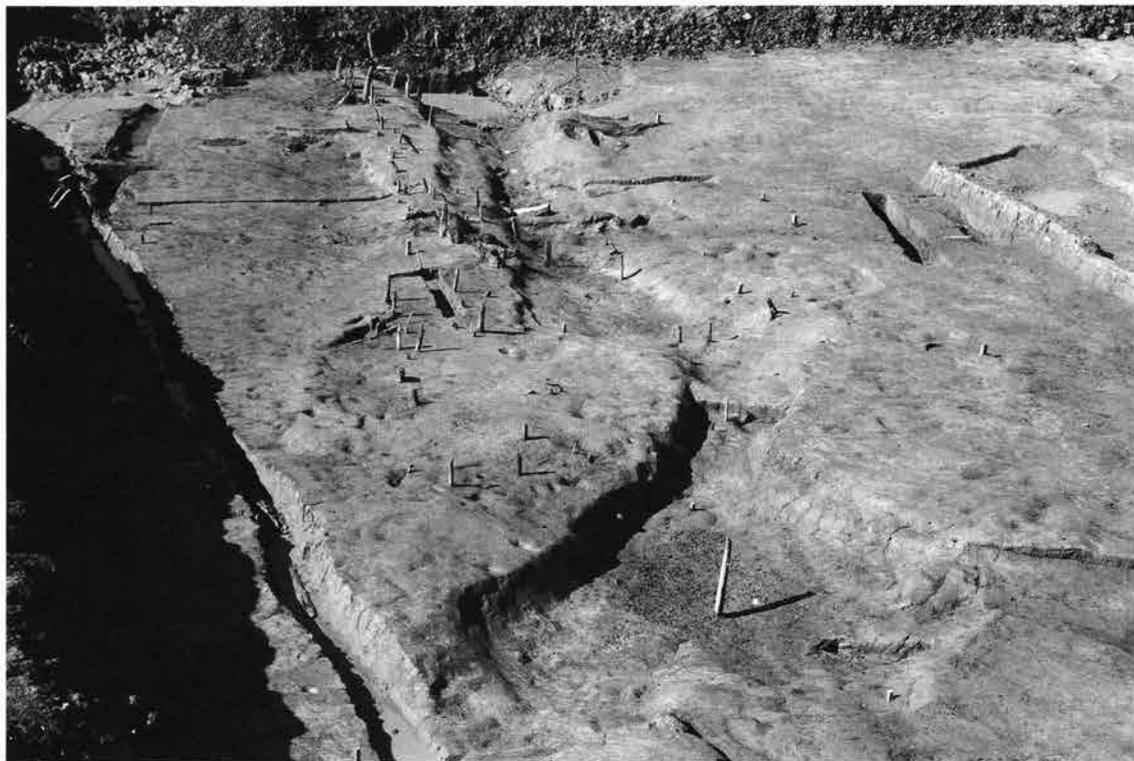
(2) B地区全景 (上空から)



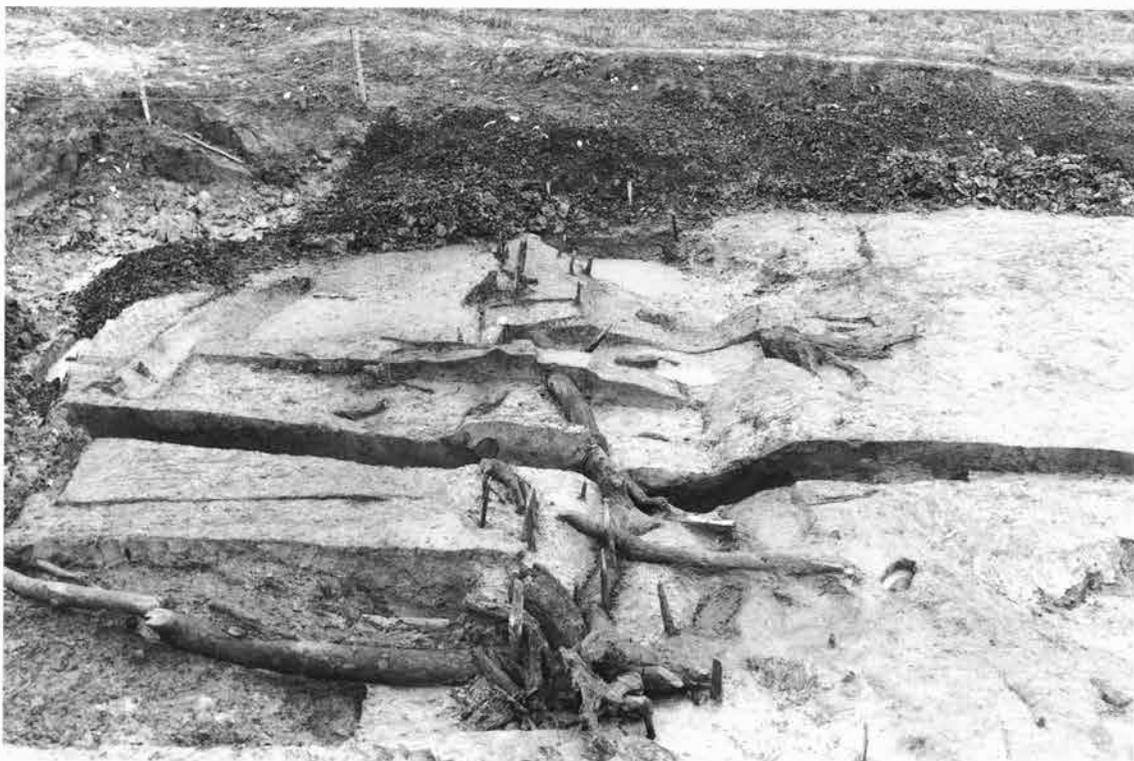
(1) B地区掘立柱建物跡SB05 (東から)



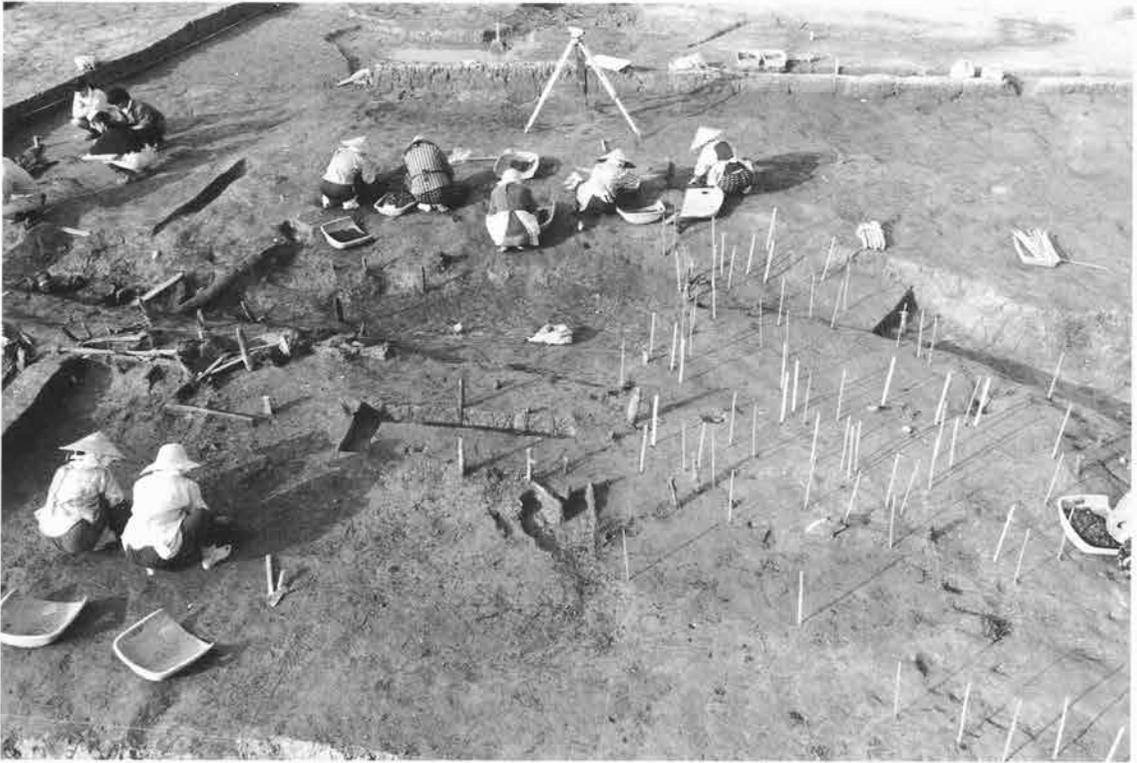
(2) C地区全景 (上空から)



(1) C地区溝跡SD01完掘状況(南東から)



(2) C地区溝跡SD01断ち割り後(東から)



(1) C地区作業風景（竹串は杭の痕跡）（南から）



(2) C地区護岸施設SX02（西から）



(1) C地区遺物出土状況（南東から）



(2) C地区遺物出土状況（南から）



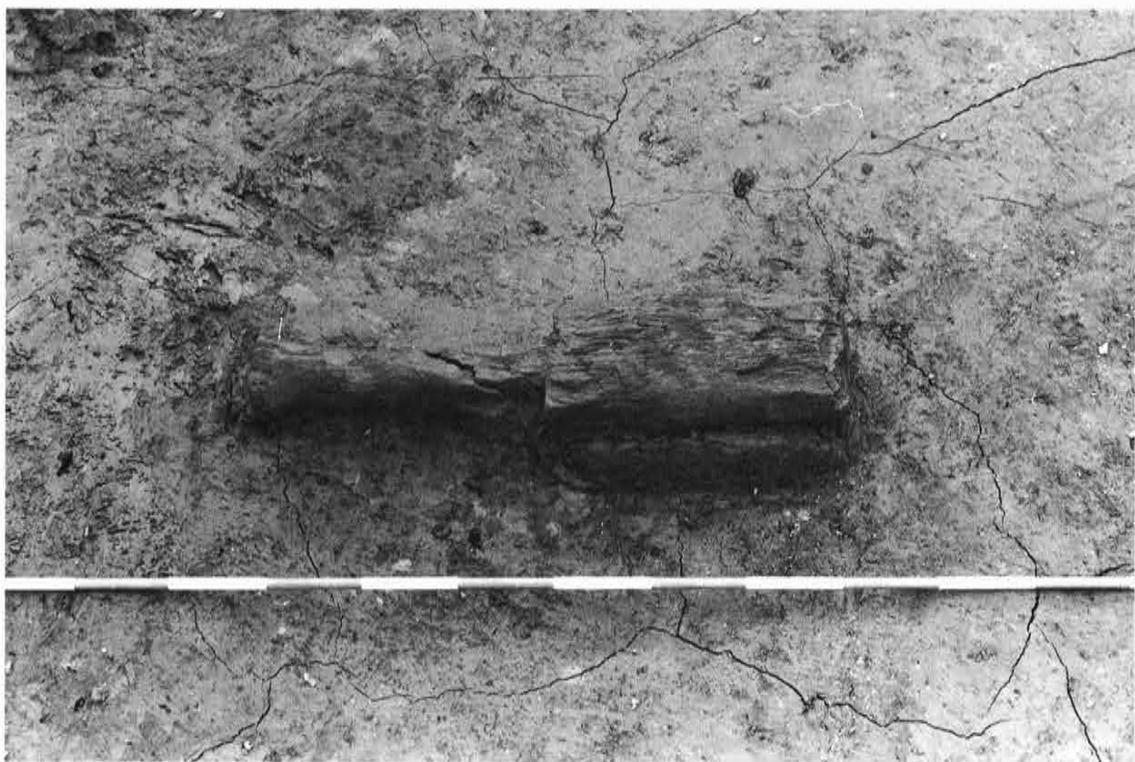
(1) C地区遺物出土状況（北西から）



(2) C地区遺物出土状況（北東から）



(1) C地区曲柄平鍬出土状況（北東から）



(2) C地区横槌出土状況（南から）



(1) C地区溝跡SD01埋土の状況（東から）



(2) C地区溝跡SD01断ち割り状況（西から）



(1) C地区溝跡SD01及び平坦面の下部構造（東から）



(2) C地区平坦面の下部構造（北から）



(1) C地区溝跡SD01埋土堆積状況（東から）



(2) C地区溝跡SD01断ち割り状況（東から）



(1) C地区下部構造 (北から)



(2) C地区下部構造 (西から)



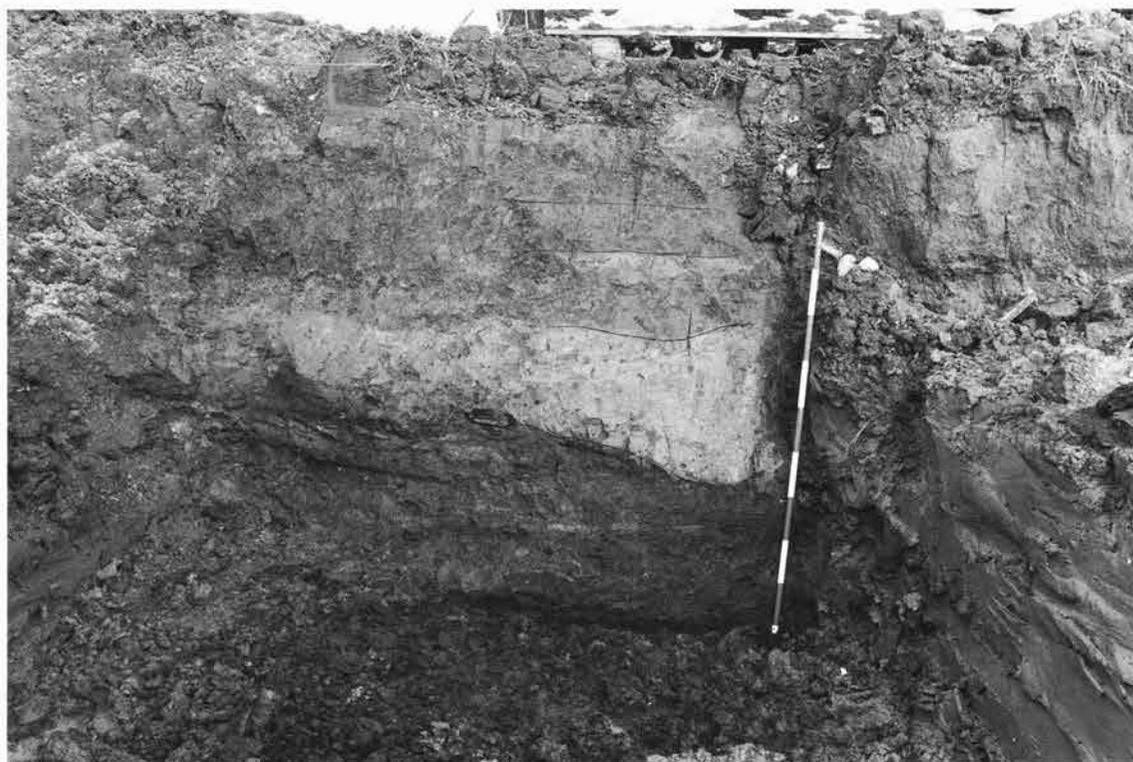
(1) C地区平坦面下部構造 (南から)



(2) C地区平坦面下部構造 (北から)



(1) C地区平坦面の断ち割り状況（東から）



(2) C地区対岸深掘りの状況（西から）



(1) E地区南半掘立柱建物跡SB29検出状況(南から)



(2) E地区掘立柱建物跡SB27及びSB29検出状況(南から)



(1) E地区掘立柱建物跡SB23検出状況(南西から)



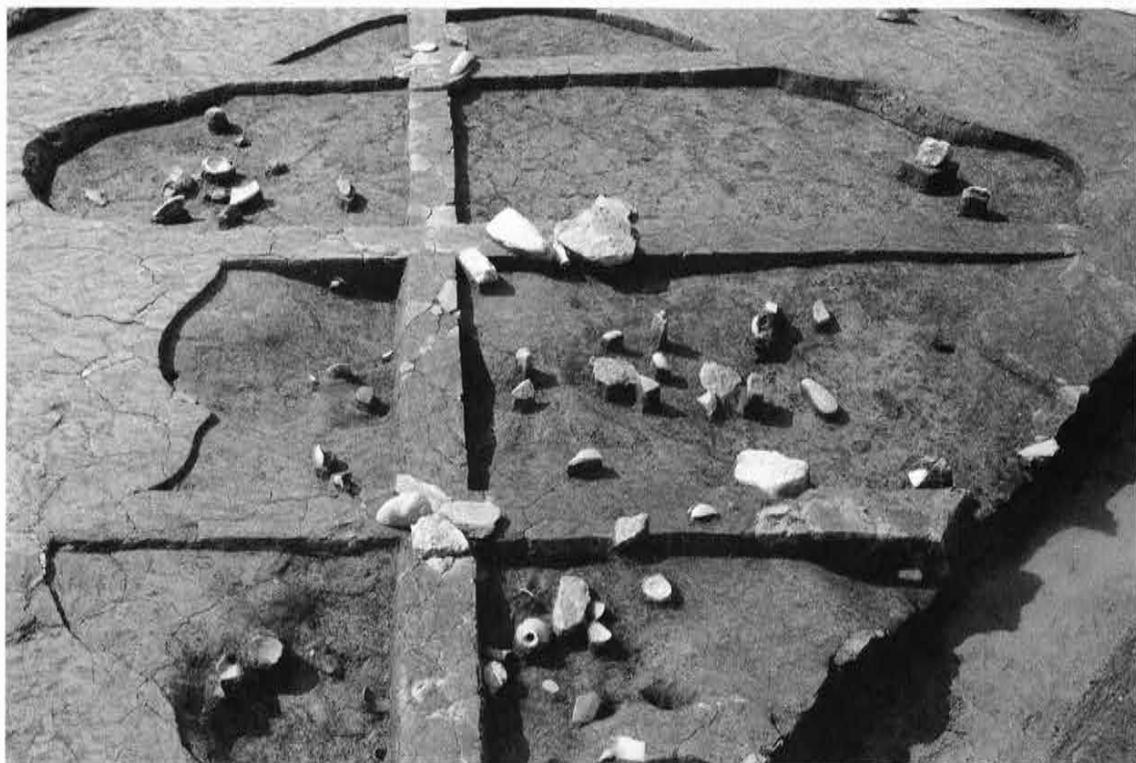
(2) E地区掘立柱建物跡SB23検出状況(西から)



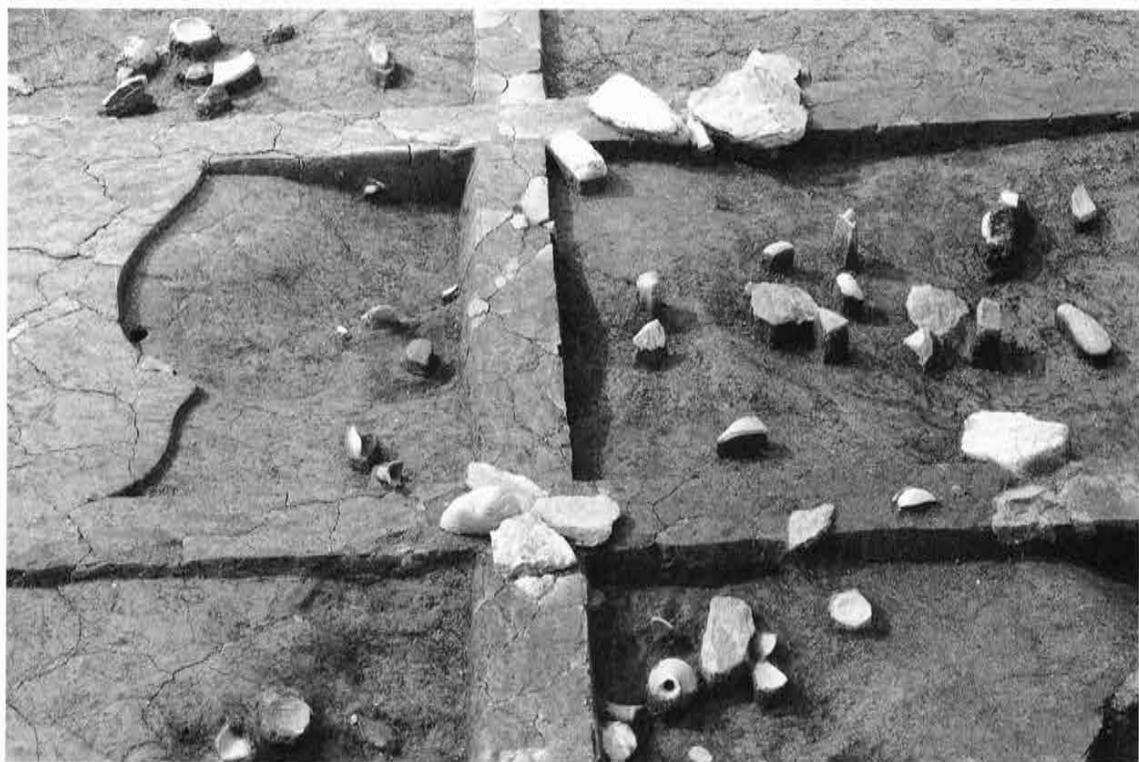
(1) E地区掘立柱建物跡SB18柱穴遺物出土状況



(2) E地区掘立柱建物跡SB23柱穴遺物出土状況



(1) E地区土坑SK44検出状況(南から)



(2) E地区土坑SK44近景(南から)



166



207



168



208



169



215



170



217



172



218



178



200



255



256

出土遺物 (1) C地区流路跡1出土
須恵器 杯身、杯蓋 (番号は実測図番号と一致する)



210



261



252



263



253



265



266



258



273



259



274



291



279

出土遺物(2)

須恵器 杯蓋、杯身、高杯



282



285



283



288



284



289



290



286



291

出土遺物 (3)
須恵器 高杯



294



304



299



305



300



306

出土遺物 (4)

須恵器 高杯、壺、甕



351



358



352



360



362



368



364



366



370



367



369



373



371



378



374



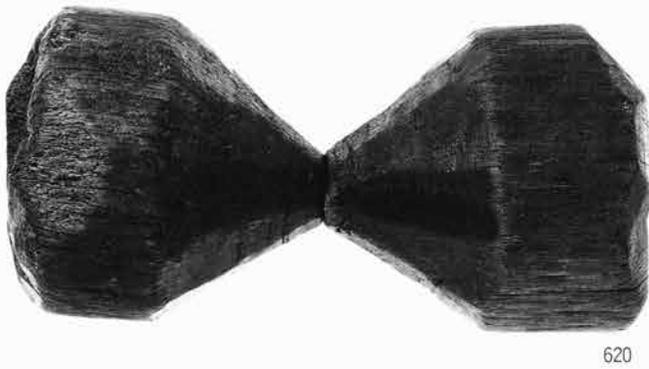
380



375



381





630



618



645



625



619



634



635



636



637



641



638



643



631



632

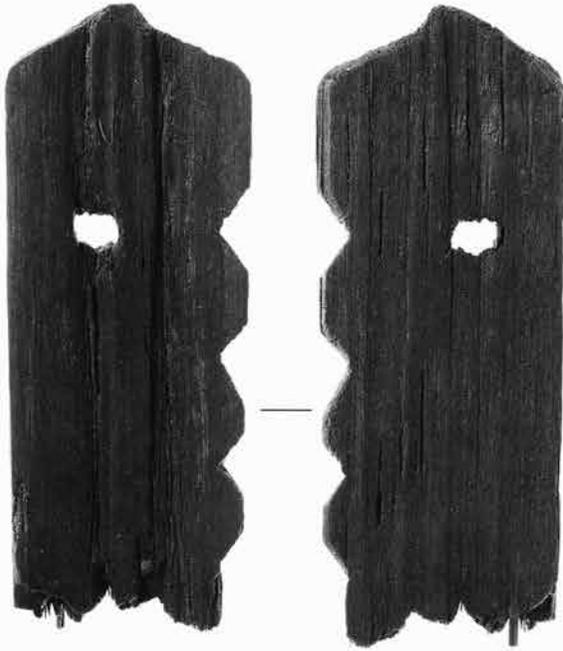


624



617





642



633



650



620



648



489

500



491



493

496



512

505



513



507



516



517



511

515



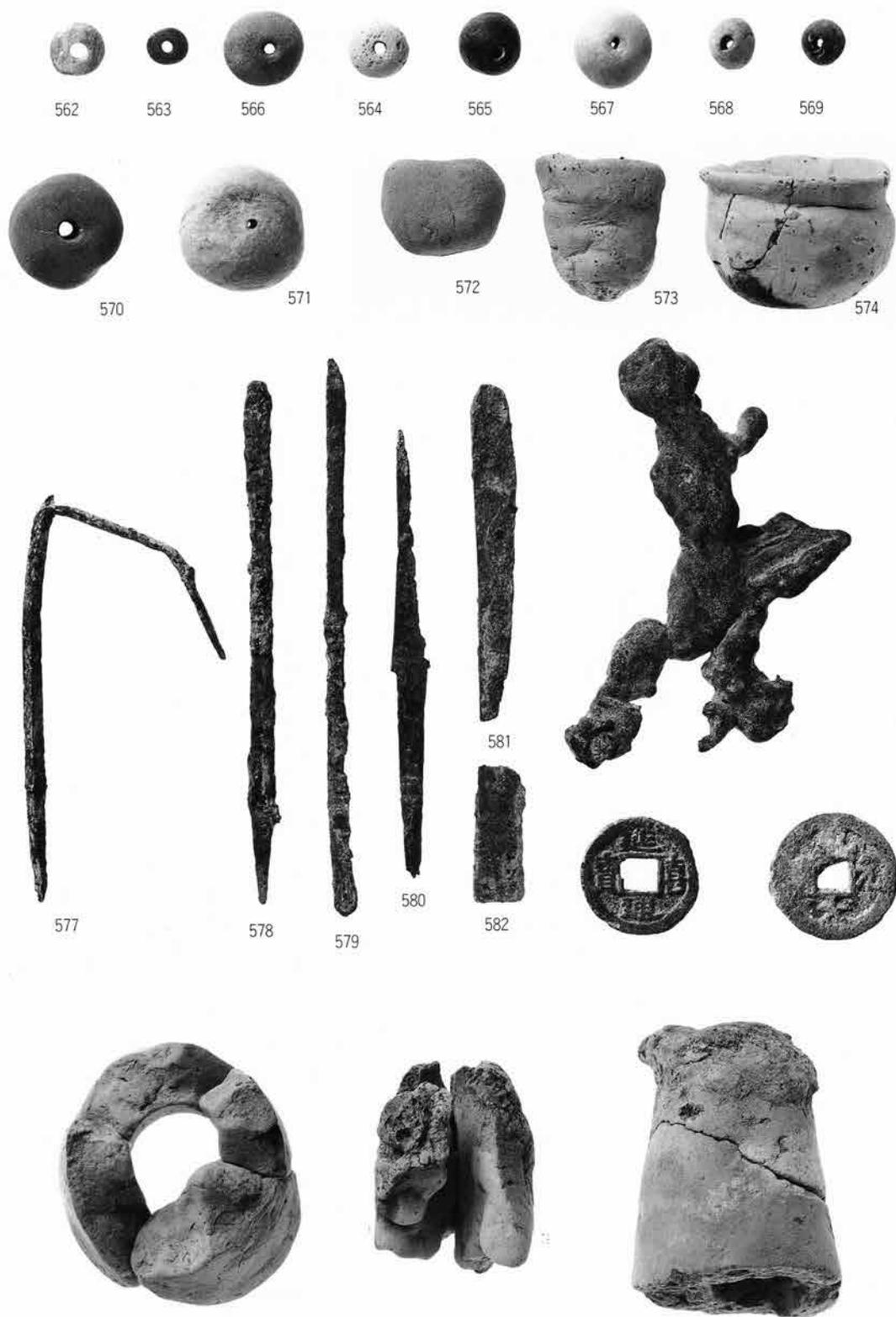
506

521

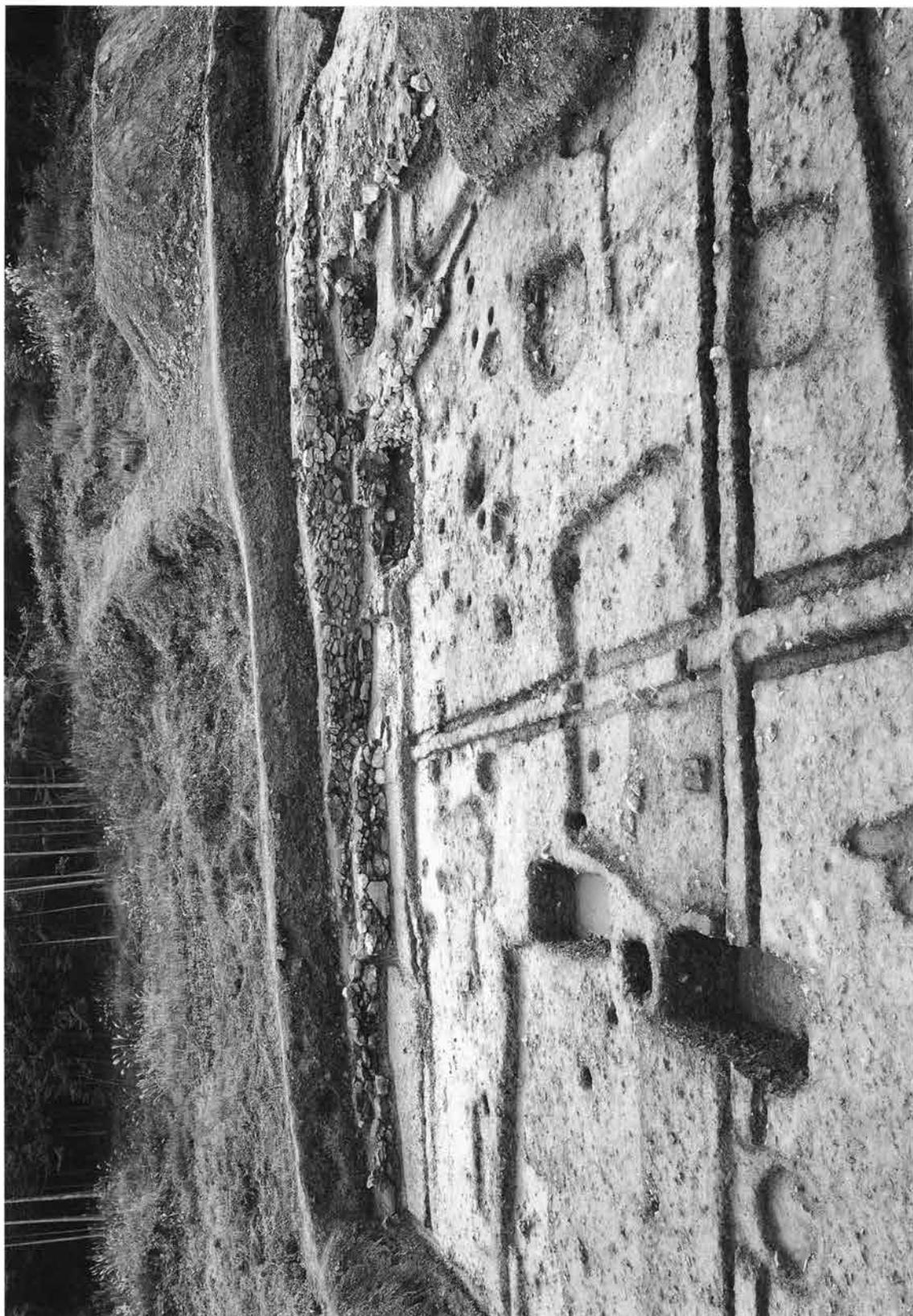


510

図版第48 八木嶋遺跡



出土遺物 (14)
玉類、ミニチュア土器、鉄製品、フイゴの羽口



第6地点（北東から）



(1) 第7地点 (北東から)



10



11



35

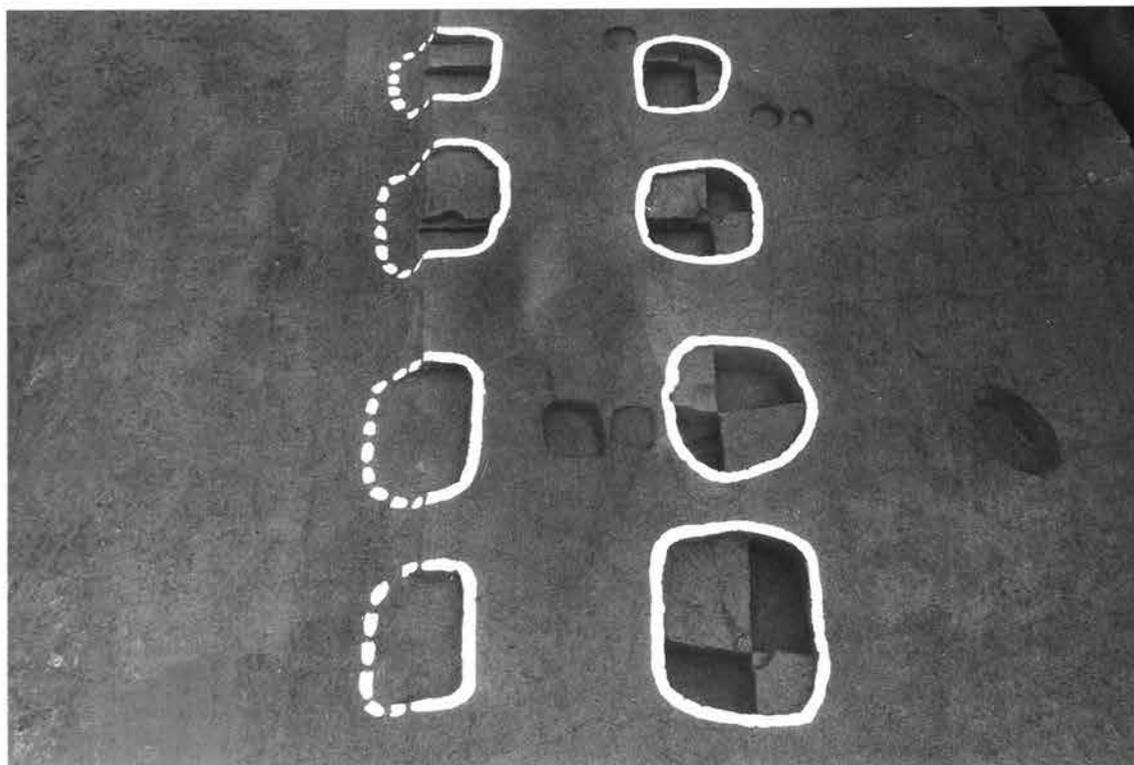
(2) 出土遺物



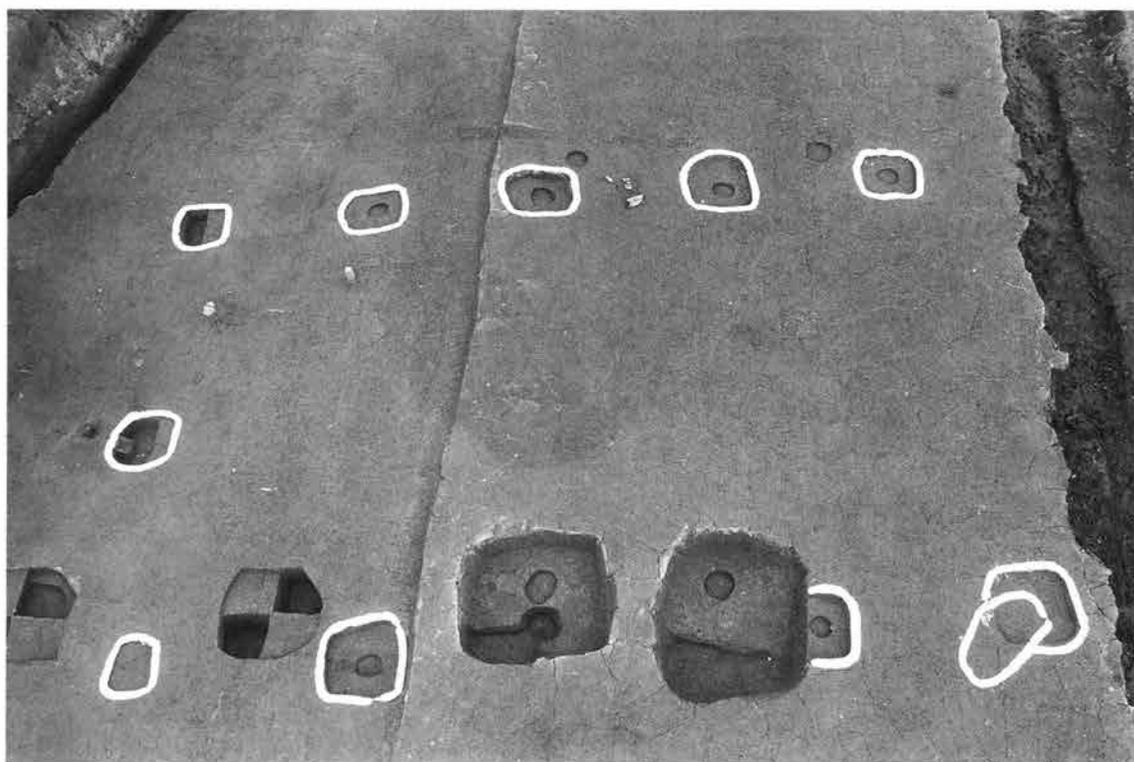
(1) 第1遺構面全景（南から）



(2) SB07・08全景（西から）



(1) SB13全景 (南から)



(2) SB14全景 (南から)



(1) SE03断面 (西から)



(2) SE03土師皿出土状況 (西から)



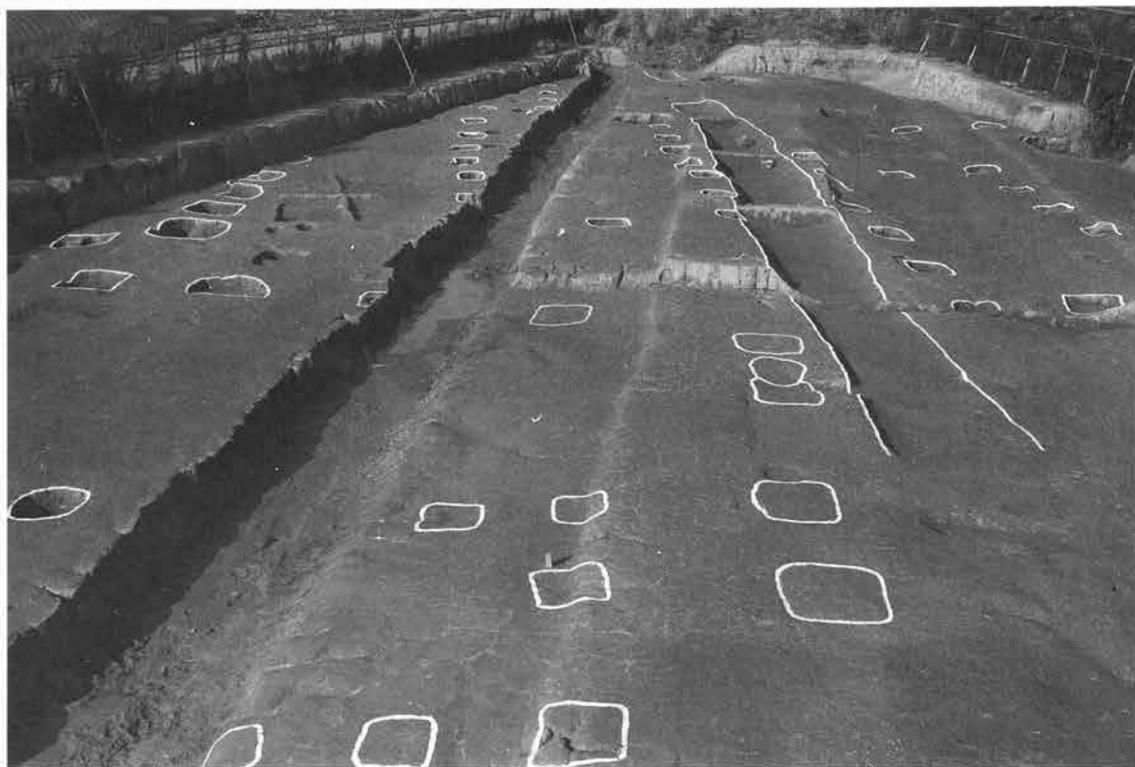
(1) SE04全景 (西から)



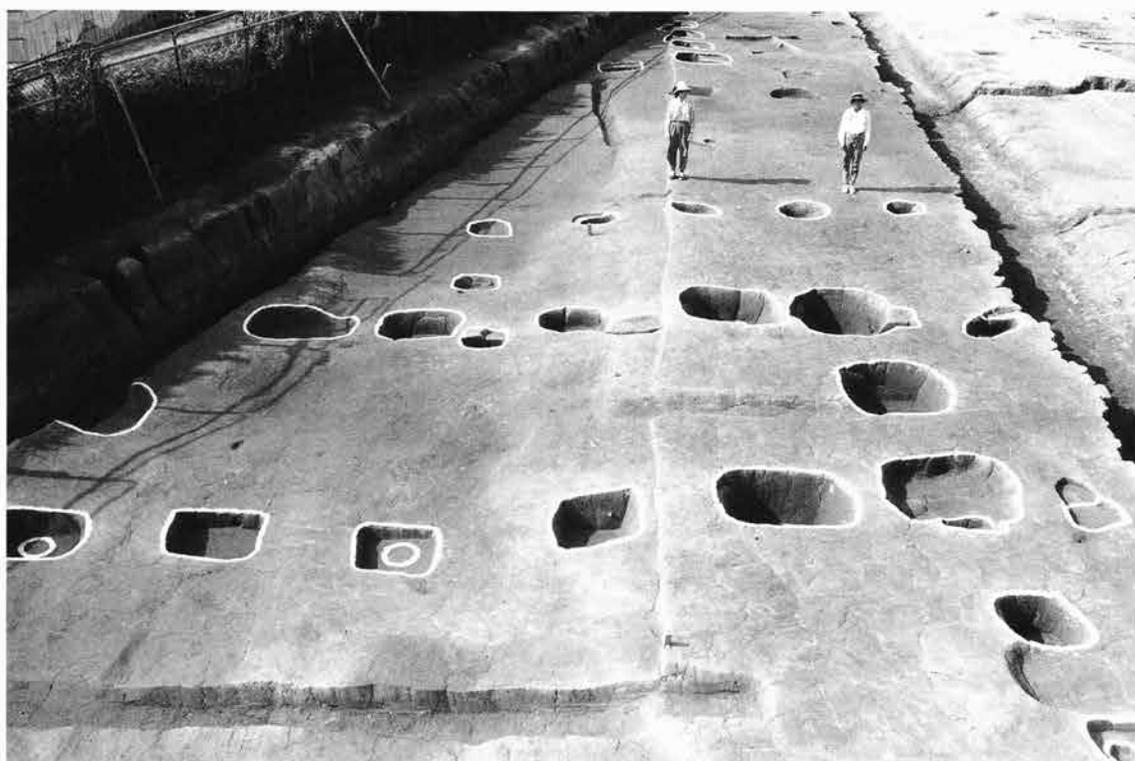
(2) SE04井戸枳材 (北壁)



SE04北壁立面（南から）



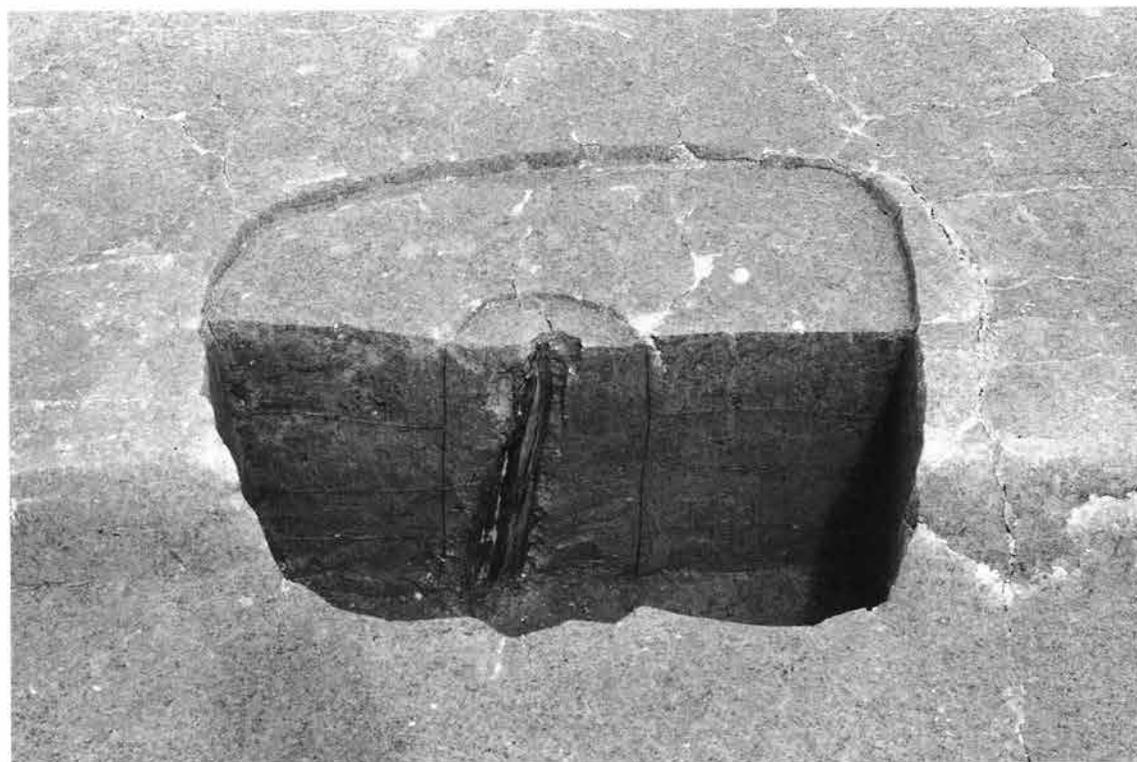
(1) 第2遺構面全景(南から)



(2) SB10全景(南から)



(1) SB15全景（東から）



(2) SB15柱穴断面（西から）



(1) SD53断面 (南から)



(2) SD53遺物出土状況 (南から)



(1) 托形須恵器出土状況（西から）



(2) SX04遺物出土状況（北東から）

図版第60 内里八丁遺跡



内里八丁遺跡主要出土遺物



(1) 調査区遠景 (南東から)



(2) 調査区全景 (南西から)



(1) 調査区全景（北から）



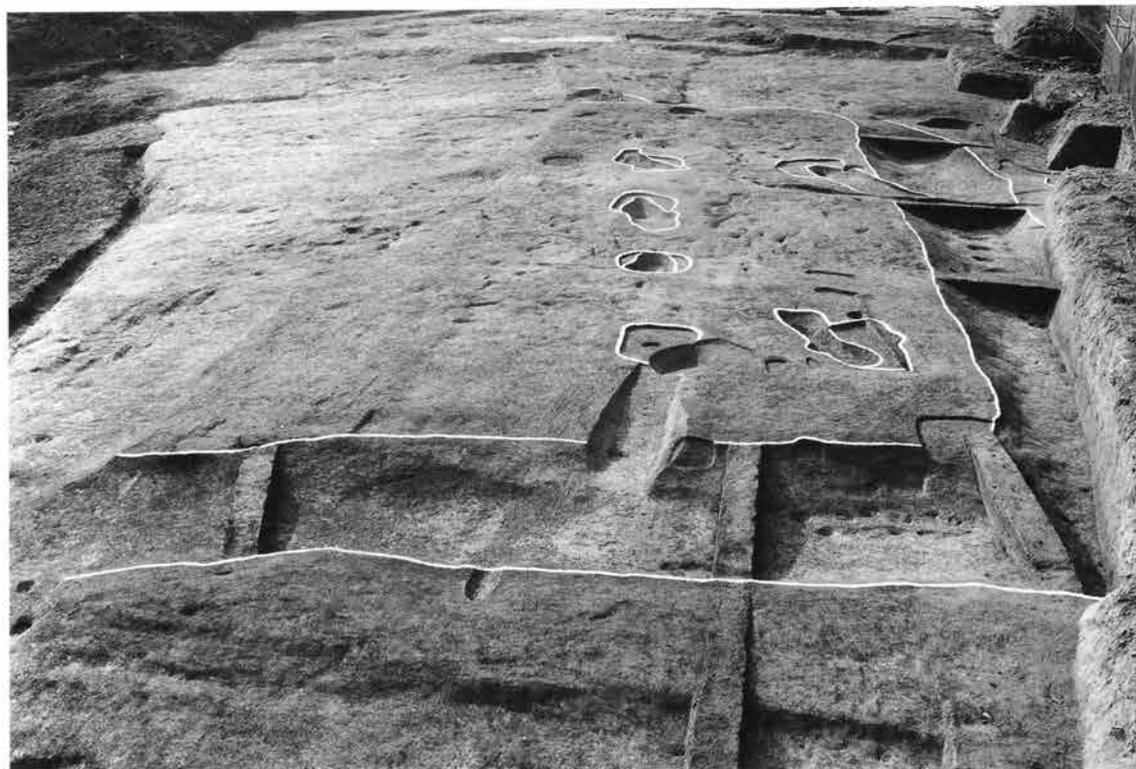
(2) 調査区全景（垂直写真、上が東）



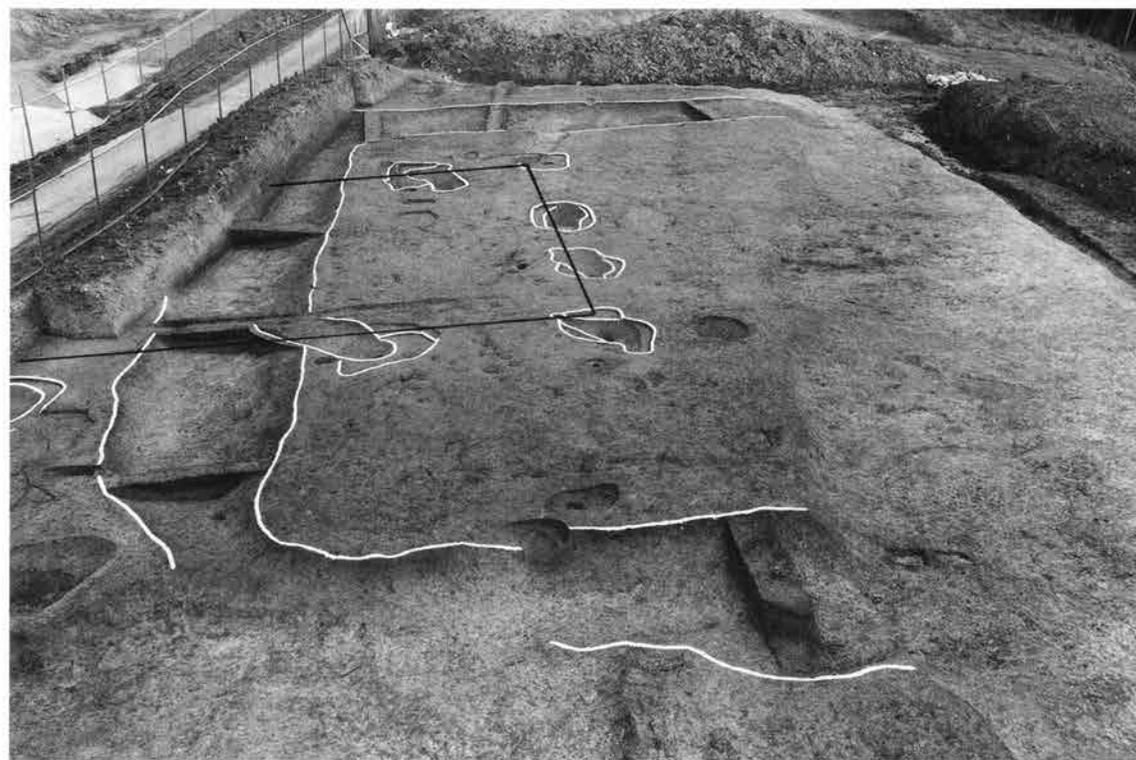
(1) A地区全景 (東から)



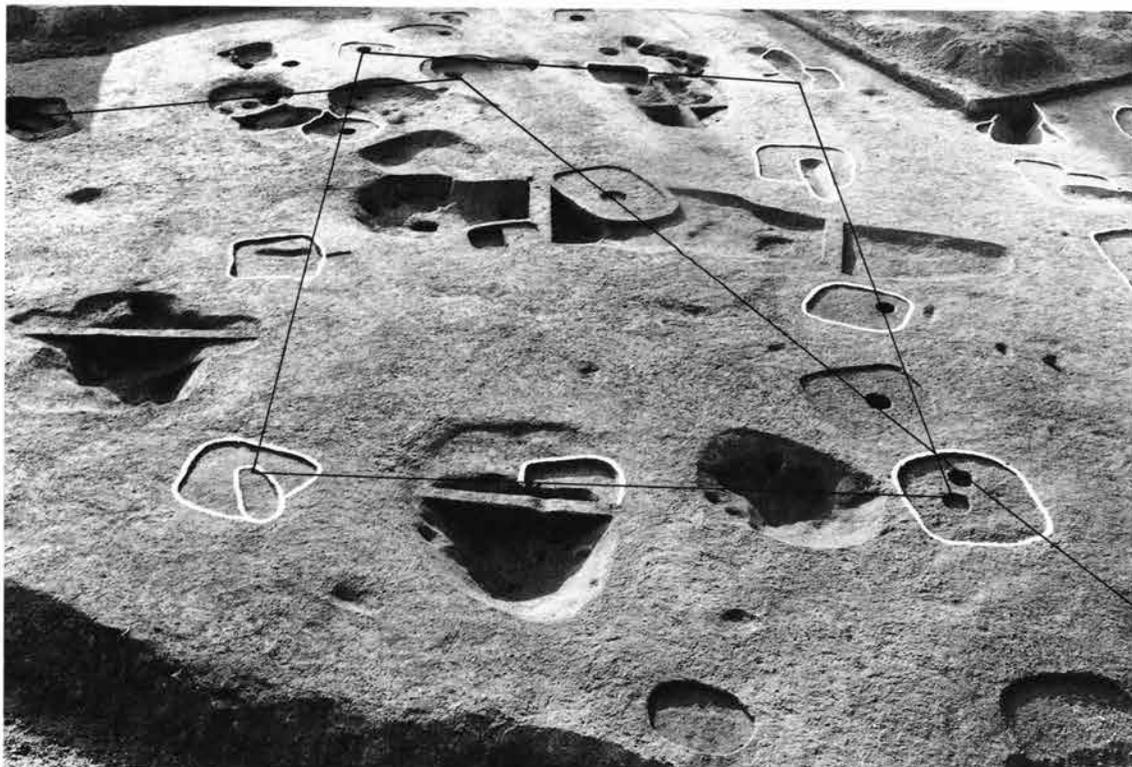
(2) SK01・SX02・SK03検出状態 (垂直写真、上が北西)



(1) 古墳 (SX02)・SB03全景 (北東から)



(2) 古墳 (SX02)・SB03全景 (南東から)



(1) SB06全景（東北東から、白線の建物跡）



(2) a群建物跡全景（北から）



(1) 古墳 (SX02) 周溝内蓋形埴輪出土状態 (南東から)



(2) 弥生期の土坑 (SK01) 遺物出土状態 (南東から)



26



15



19



蓋形埴輪



18



16



17



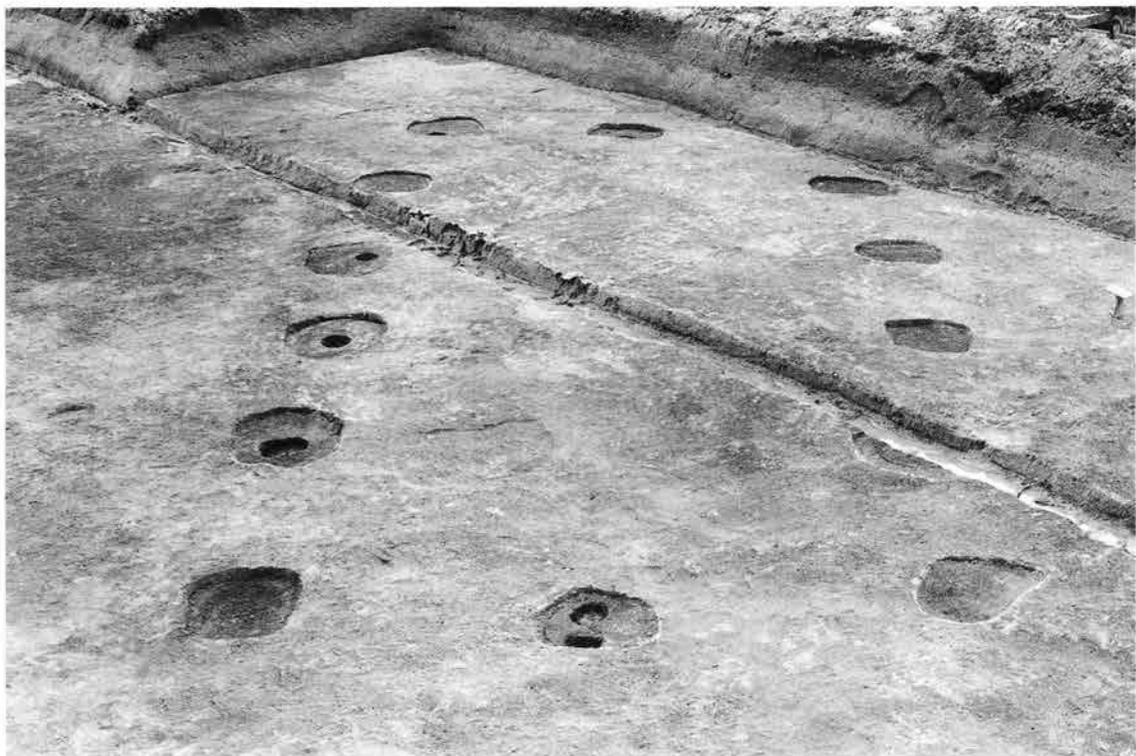
(1) 新田遺跡全景（南西から）



(2) 10トレンチ拡張区全景（北から）



(1) SA01・SB01全景（北東から）



(2) SB01全景（北東から）



(1) 15トレンチ全景 (北西から)



(2) 15トレンチ土層断面



(1) 西山塚古墳内部主体全景（南から）



(2) 西山塚古墳内部主体全景（西から）



(1) 西山塚古墳第1主体棺外 革製漆塗盾出土状況 (左が北)



(2) 西山塚古墳第1主体南副室内 遺物出土状況 (左が北)



(1) 西山塚古墳第1主体作業風景(南から)



(2) 西山塚古墳第1主体主室北半(枕石)完掘状況(南から)



13 (F20)



15 (F2)

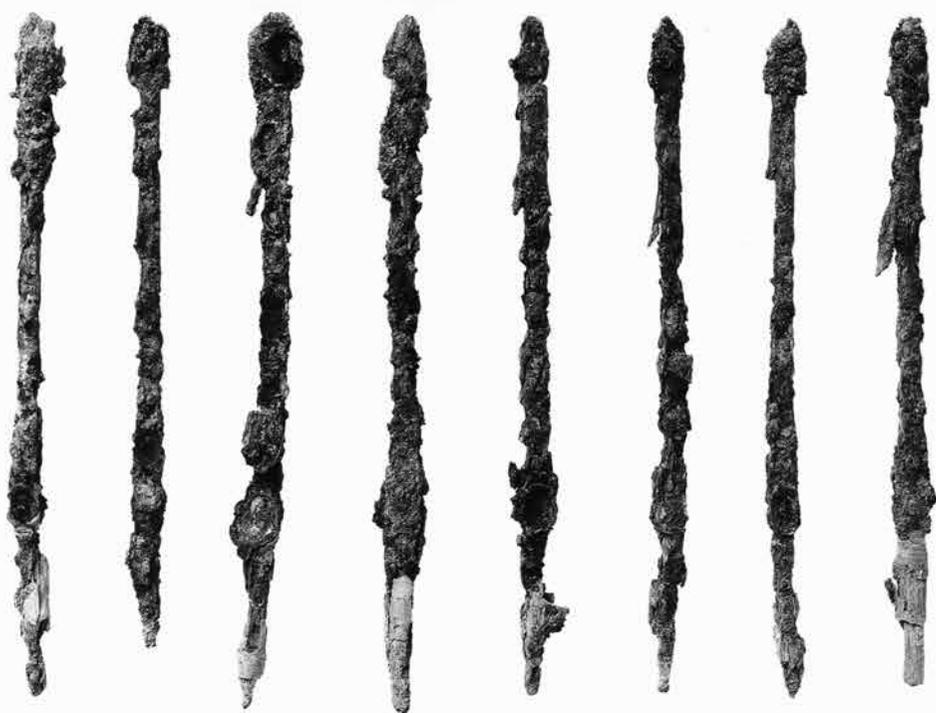


16 (F60)

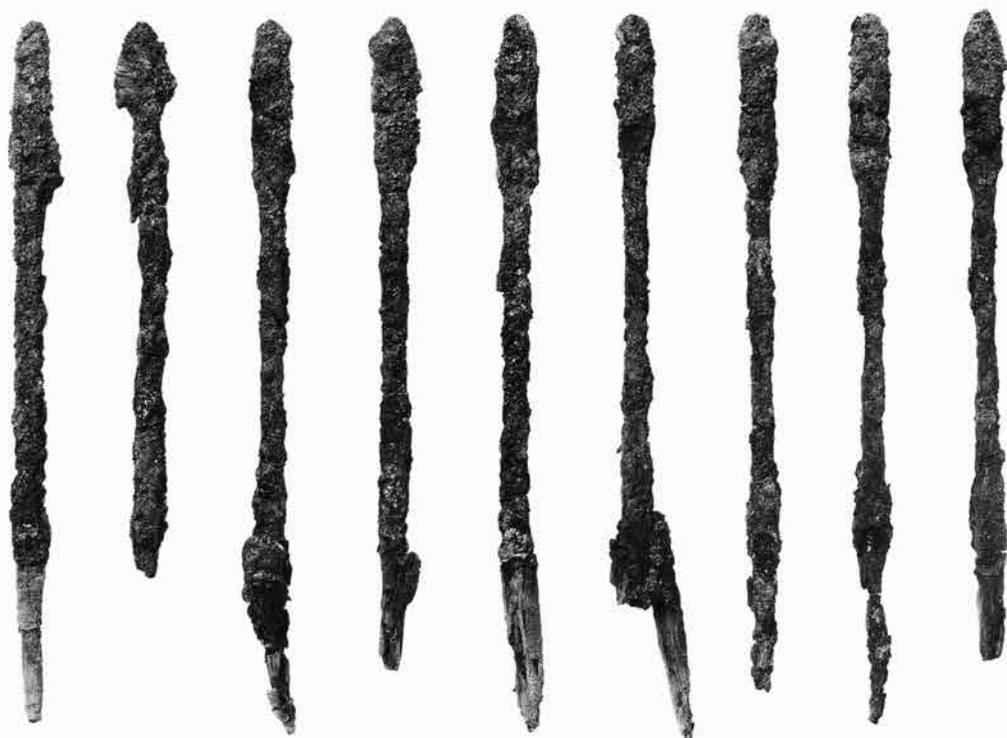


17 (F61)





(1) 第1主体 矢鏃西群 (一部)



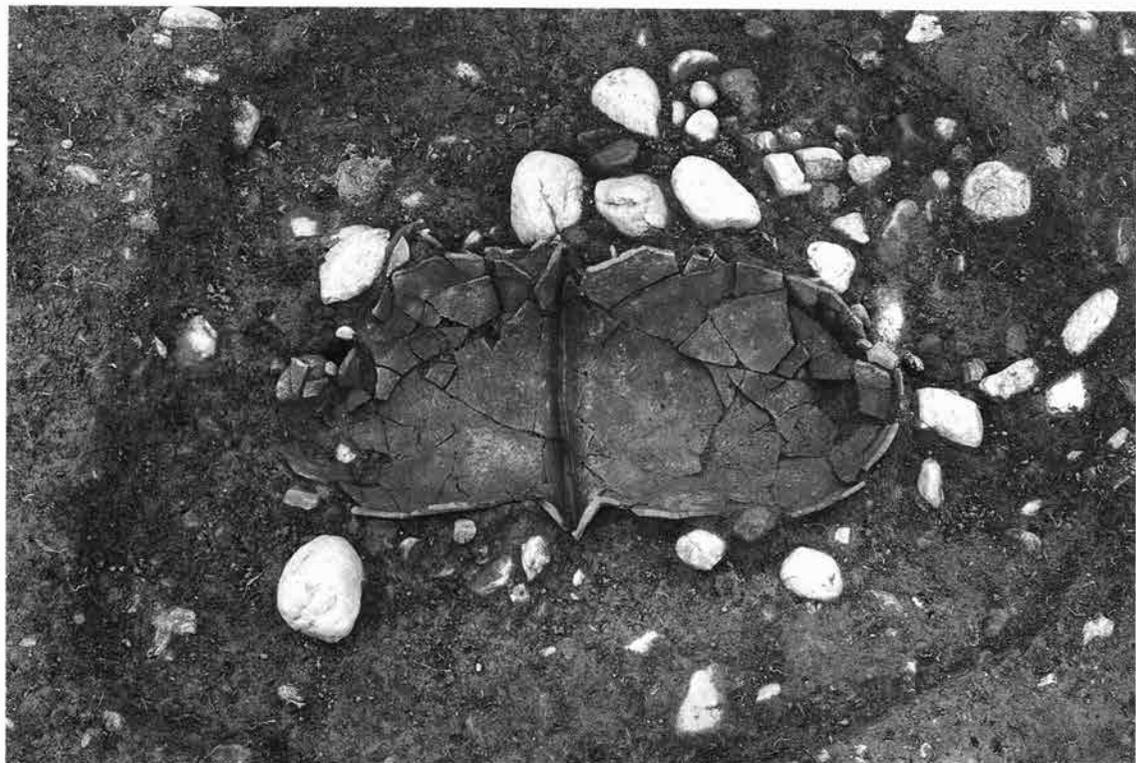
(2) 第1主体 矢鏃東群 (一部)



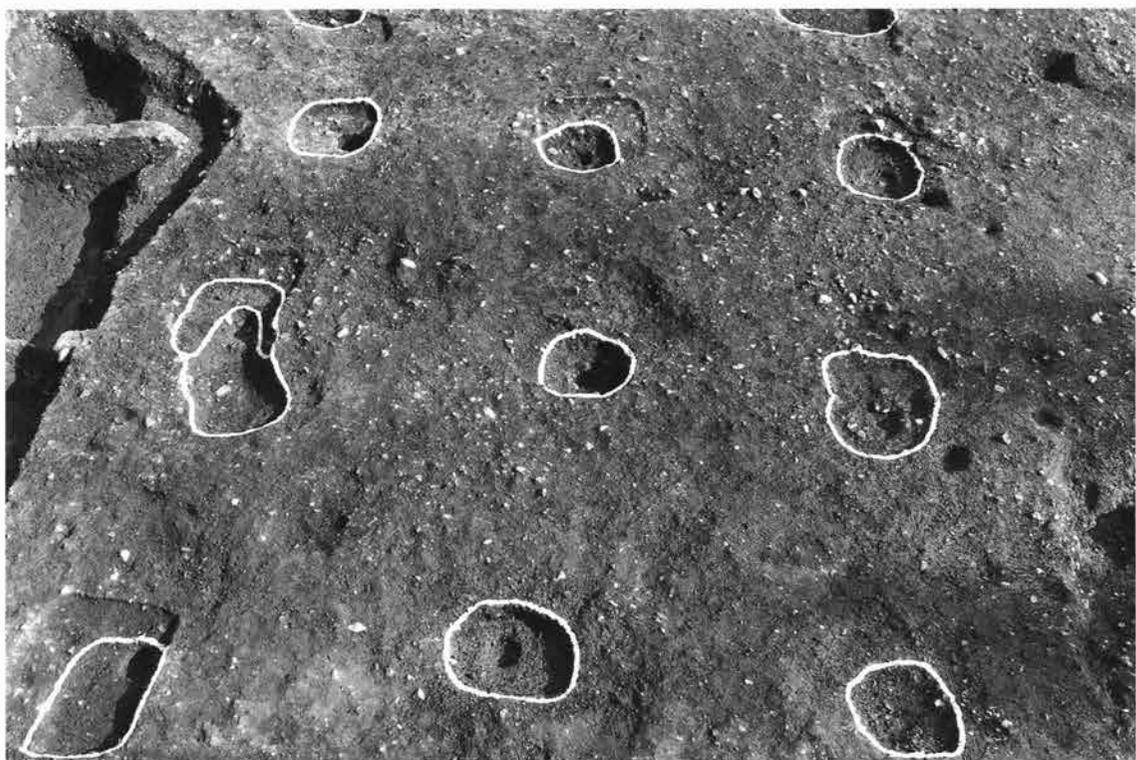
(1) SB9201全景 (南から)



(2) SH9202全景 (西から)

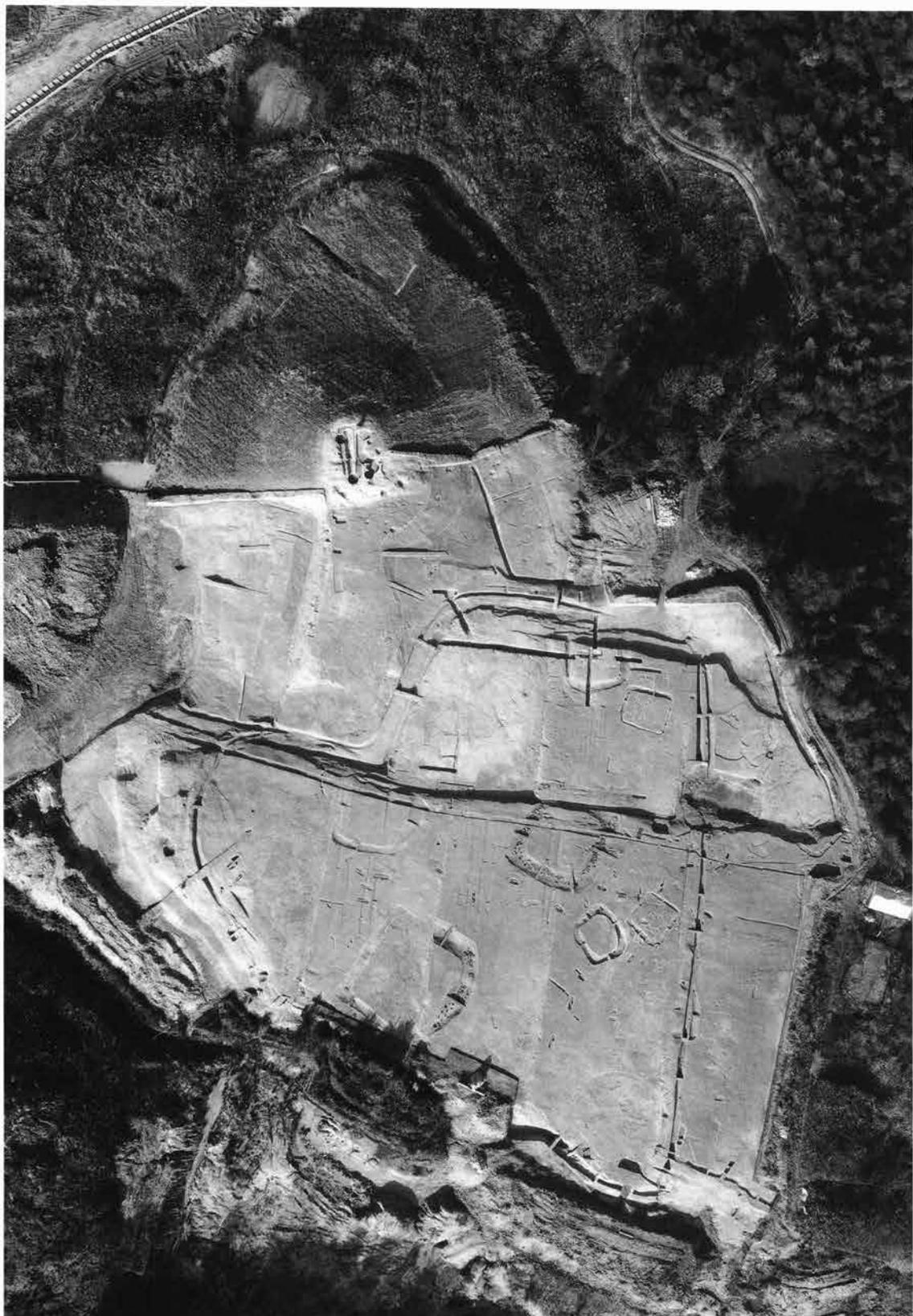


(1) SX9206全景 (西から)



(2) SB9204全景 (北から)





瓦谷遺跡・瓦谷古墳群全景



(1) 瓦谷1号墳全景(南から)



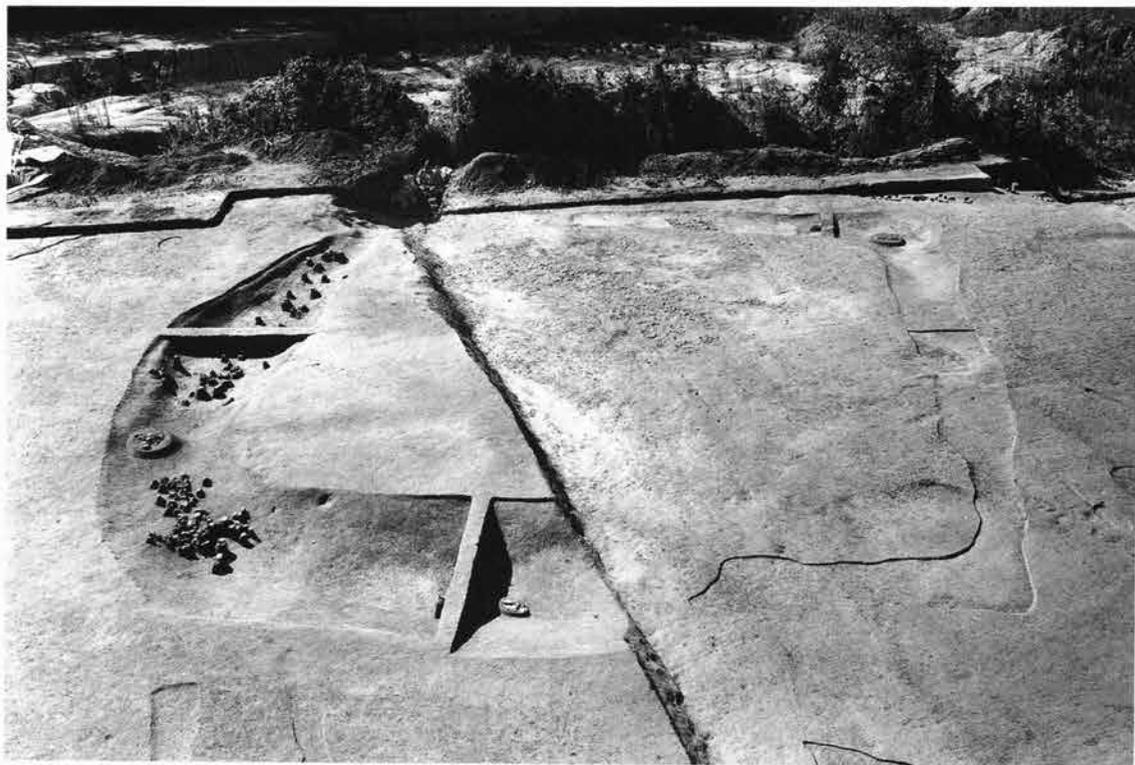
(2) 瓦谷1号墳全景(西から)



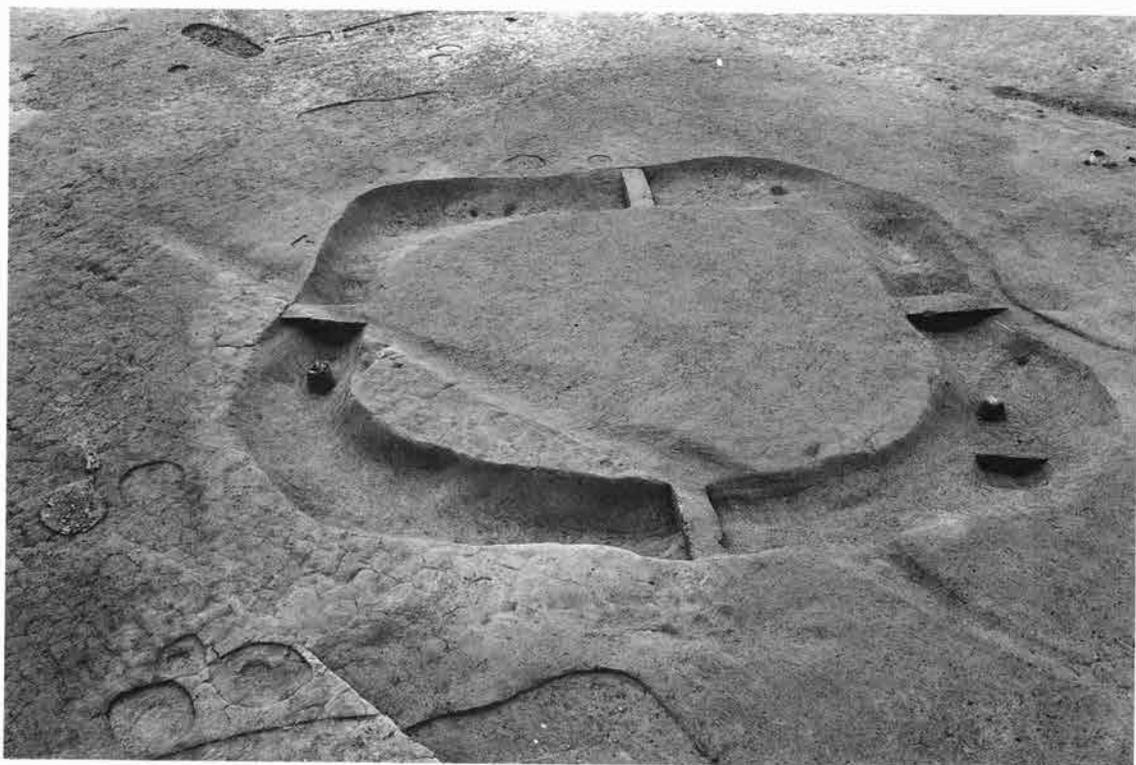
(1) 4号墳全景(西から)



(2) 4号墳遺物出土状況(周溝北西部分 東から)



(1) 5号墳全景(北から)



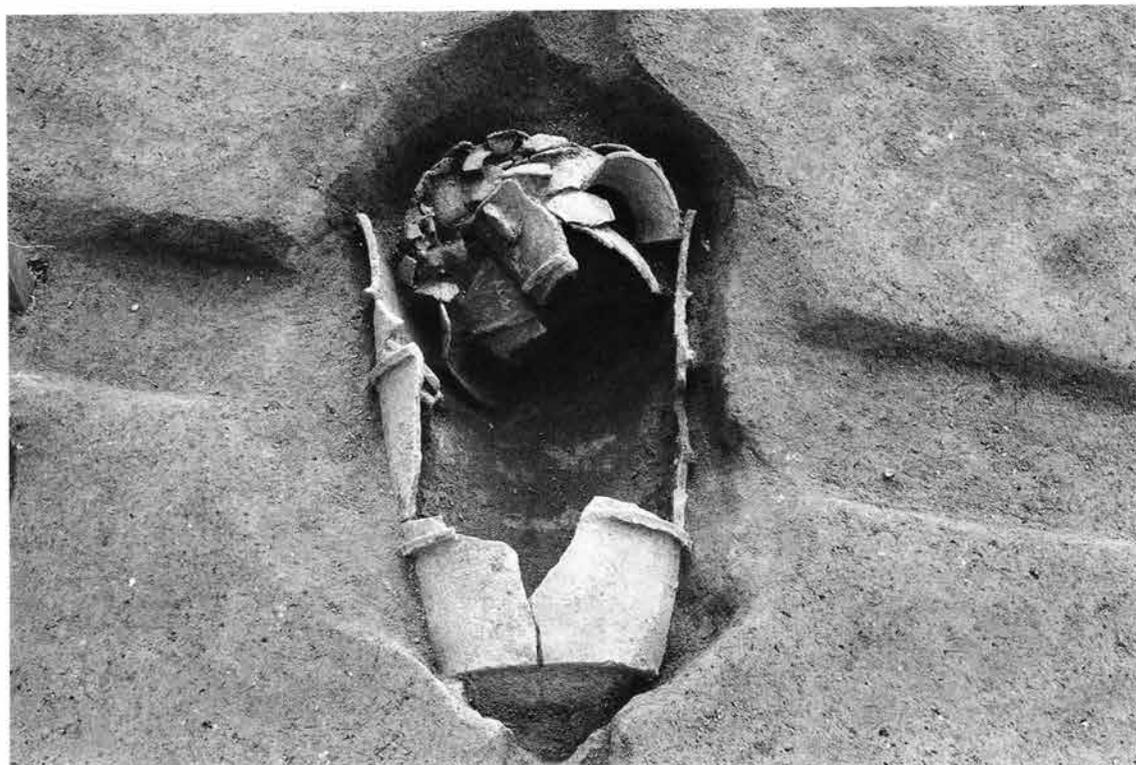
(2) 6号墳全景(北東から)



(1) 埴輪棺24検出状況（北から）



(2) 埴輪棺24棺底出土状況（北から）



(1) 埴輪棺23出土状況（北から）



(2) SD01断面（調査地南斜面部分 東から）

京都府遺跡調査概報 第56冊

平成6年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel(075)441-3155 (代)